明治四十二年五月十五日發行（毎月一回一日）明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇

新作家

五年七號

臨時増刊



東京女子文壇社發兌

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇増刊第二 新作家（第五年第七號）目次

車上の花



（大江三色版製版印刷）

(四の一)

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

聲惡しき人又は聲出ぬ方の新福音

●美き聲の出る新藥

（藥名ウエーヌス）藥價 小包送料共 普劑 壹圓拾五錢 特製 參圓廿五錢

人の美は聲にあり……人の愛は聲にあり

▲聲美しくして—淑女は窈窕たり—▲聲麗しくして—男子は威嚴あり

▲聲は人格を高尙ならしむる要素なり—謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり

發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發すると確證す

「ウエーヌス」有効感謝狀 近着の分二三を左に拔載す

私儀此度當市興行の際非常に音聲を痛め候處貴舖より「ウエーヌス」と申す藥頂戴仕り服藥候處早速全快に至り實に其効神の如きに驚入申候依て玆に御禮及證明仕候也

明治四十一年二月五日　竹本大島太夫㊞

拜啓妾儀時々音聲をいため色々の藥を用ひ居り候處更に効能もなく拾貳時中苦勞致居り候際はからずも當市出勤中貴舖の「ウエーヌス」をいただき候に忽ち音聲も本復仕り難有存じ候眞に其効驗の大なること驚入申候乍失敬以紙上御禮申上候也

明治四十一年壹月　大阪女義太夫　長廣㊞

拜啓小生儀過般咽喉に異狀を生じ從來の美音(?!)は再び小生自身さへも聞く事能はずと存じ營業上頗る困却罷在候處貴製の「ウエーヌス」を服用する僅に二回にして全く本復仕候段偏に貴館の賜に有之候間玆に以書面謝辭申述べ併せて音聲を以て世に立つの大方諸君が必携の良劑たる事を證明致候也

明治四十年三月廿四日　新派俳優　菊池武成㊞

專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　日新館藥房

有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹冊正價郵稅共金拾五錢△郵券代用は月拾五錢封送の事

（[illegible]）新[illegible]發明の新粉法◎陰萎病を必治する新法◎陰○の爛れを治すゝ法◎消渇を必治する法◎頭瘡の必治法◎人造麝香の製法◎上等香水製法◎香袋製法◎美顔クリーム製造法◎音聲を清良にする法◎齒痛即治藥製法◎髪の脱落するを止むる法◎化粧石鹸製法◎西洋白粉製法◎毛髪必生法◎臭汗治法◎白髪を染る法◎毛髪の光澤を美にする新藥◎齒磨粉製法◎西洋梳油製造新法◎にきび即治法◎ほくろを落す法◎ビットル酒製法◎夏日室內を爽涼にする法◎紺紗類を汚せるインキ斑痕を除く法◎白瓜を一年新鮮に貯ふ法◎蚤を驅除する良法◎氷を即時製造する法◎百年長壽の奇法◎生涯病に罹らざる奇法◎人の生死を豫知する法◎船中より海の底を見る法◎百日眠らず疲衰へざる法◎拔毛劑新法◎殿入たる若に答へしむる法◎禿頭病必治法◎疑入りたる男女の心中を知る法◎白なまず即治法◎五十の醜婆を二八の娘に變ずる法◎脚氣病必治法◎妖怪變化を見顯はす神術◎人體不死の奇法◎千里一足飛行の神術◎盗人を見顯はす神術◎女に○れらるゝ藥法◎硬き毛髪を柔軟にする法◎思ふ女をな○○かす藥法◎堅き女の氣を○○す藥法◎陰○を長大にする藥法◎そばかす必治法◎女な○○にて治す神藥◎夢に戀人と語る秘術◎見染し女を手に○れる神法◎待人來る神術◎一生戀中變らぬ秘術◎悋氣深き女を治する藥法◎閨中の秘藥◎即座に男精を增す法◎毒蟲に螫れたる時醒ぬ特効藥◎避食の仙術◎神速に精力を強む法◎即座陰身術◎人を眠らす秘法◎即ち催眠術◎顔赤く吹出物生ずるを治する法◎過房を治する妙法◎多情を抑制する秘法◎色慾なき女に情を○せしむる法◎記憶力を增進する法◎女孕みの仙術◎男女梅毒の有無を知る法◎淫婦觀破の奇術◎黒字夜光の奇術◎老人終身識取りの奇術◎腋臭を治する法◎色を白くする內服劑新法◎贅丹の藥法◎腹痛速治法◎疥癬病の藥法◎生たる鯉を遠國へ送る法◎腹滿を治する法◎黄疸を治する法◎皺肌を直す秘法◎味噌の損じたるを直す法◎脈病の治法◎月經の不順を治する法◎疝氣の妙劑◎齒痛を治する法◎陰部の臭きを治する法◎陰部の虱を去る法◎にきびを去る最新法◎頭髪を長くする法◎毛生藥の最新法◎黴毒必治の新法◎便毒必治の新法◎下疳を治する奇法◎胃病の新劑◎百日咳の妙法◎肺病必治の新藥◎中風豫防の新法◎凍瘡の妙法◎衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法◎火傷即治の秘法◎シャクリ即治法◎聲を能くする秘法◎白髪豫防新法◎土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法◎寢小便を治する秘法◎頭瘡を治する法◎耳だれを治する法◎いぼを取る法◎あざを抜く新法◎乳の出る妙藥◎陰部の諸瘡を治する法◎虎列拉病療治簡易法◎梅毒豫防の奇法◎思ふ時目を覺す法◎年齡により事房の度數◎病氣前知の奇術◎男女全體の色を白くし且つ艶美ならしむる法◎苺酒を製造する法◎富を造るの秘法◎一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法◎夏帽子洗濯新法◎疊の汚染を落す新法◎新しき鍋釜の鐵氣を止る法◎簡易美顔術新法◎衣服に油の付たるを落す良法▲以下數拾法略す（合計壹百四十法あり）着金即刻送本す

專賣元　東京市神田區五軒町拾九番地　日新館商店

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の

ばい毒根治特効

新藥なり故に黴毒及黴毒に誘發して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。痳毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製

誓って根治

するも全治の効なくして困難せる患者は分にて本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。速に

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スヒーゲル氏の發見に係

拾錠入壹劑藥價送料共壹圓九拾錢郵券貳割增

男女

生殖機不能即ち陰萎病。腎虚神經衰弱

遺精。夢精。早漏。遇男。元氣衰弱。老衰無力。生殖虚弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不妊娠。冷症。發育不全等に用ひ輕症は參四劑頑症は五六劑慢性難症は八九劑にて根治の目的を達する天下無比

可驚奇効ある最新精力

發見藥也世にありふを増進し生殖器を強健ならしめんと望む者

如電光

に試よ峻烈偉大なる特効眞に奇言を羅列する內地製無効賣藥と同一視することなかれ本劑の卓効は誇大なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

世界唯一 麻病消渇の根治新藥

麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治療新藥なり、本劑はありふれたる普通の一賣藥と異なり殺菌學上効力顯る峻烈なる一新藥を主劑として

麻病消渇

の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち滅殺する處方に基き製したる是を內服して

滅殺

せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より

根治

確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭

根治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても

誓て根治

し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦腦を脱せよ

價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はえぎわの薄き人、陰部に毛なき人、まゆげ口ひげの薄き人、其他毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮々と發生する特効あること確證す本劑は從來ありふれたる種々雜多の毛はえ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

特別製分 金五圓三拾錢 大瓶貳圓卅錢 中瓶壹圓廿錢

以上六藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新舘藥房（電話下谷五四六番）

新輸入 美容法 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體純白色に變化し艶美の容貌となるを確證す世上種々雑多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を說ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は特製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服劑 サーサパリラ

價壹劑二圓七拾錢△參劑七圓九拾錢△五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる清血劑にして頑強なる慢性梅毒瘡毒リウマチス皮膚病、猛惡等の病毒及び男女體内の惡血毒血惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を純白艶美ならしむる奇効顯著の内服水劑なり（注意）從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり（今回英國より輸入し當舖にて一手專賣致候）色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

色白。特効 ペーアス石鹼

壹個代價送料共八拾五錢△三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹼は世界第一等の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず曾だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質を治するは此石鹼獨特の靈効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉瓦混同視することなかれ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

以上三種專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ふれば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及惡血毒血を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生に無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比 最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日 日に必ず美麗に除去すること保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛に除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へ全治者の感謝状及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）着金即刻小包郵送す

以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

女子文壇

◎第五巻第六號 五月一日發兌 要目

◎毎月一日發行 本文百七十頁 口繪十枚 鮮麗
◎定價 一冊(送共)金拾六錢五厘 半年(八冊)同壹圓參拾四錢

發行所 東京京橋大鋸町 振替壹七貳九番 女子文壇社

◎賣捌所全國雜誌書店

●本社に壹號より取揃あり

（甲の五）

宮中御歌所寄人中邨秋香先生著

古今集詳解

合本 紙數總九百頁總布製優美箱入頗る美製本 **定價金貳圓廿五錢**（小包料拾八錢）

●分册和裝卷一定價四拾五錢卷二、卷三、卷四、定價各五拾五錢 郵税各六錢

明治歌壇のオーソリチーたる中邨秋香先生が多年の研讀の餘に成りたる大著にして、詞に顯れたる一首の心、詞の組合せ風調語勢に依りて生ずる、餘情等を懇切に說き分け一首の妙處を示したる古人未發未曾有の解釋一讀忽ち作家の秘訣を悟るべし而も講義筆記體總振かな附にせられたれば國歌國文初學研究者は勿論我が歌の鑑を味はんとするものは是非精讀すべき也

訂正七版

文鑑 女子草の錦

菊判和裝
三百餘頁
定價七拾錢
郵税拾錢

現代に於ける國文界の泰斗中邨秋香先生が古學復興以來諸名家の文中男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說消息、物語體等無慮數百編を選出せられ、之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ、作習の模範と應用とに供せられしは他に其比を見ざる最良の文鑑なり

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生著
學習院女子部教授 小野鵞堂先生書

新編手紙（男子用）

木版上半紙摺
無類の美本
男女各壹册
定價四拾五錢
郵税各六錢

消息 女子手ほどき

本書は中邨秋香先生の作にして書簡文獨習者の爲めに通俗平易なる實用の文題百餘種を總かな附にせられたるは他に其比を見ざる處特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上なき良書なり

新編書簡文例（男子用）

新編 女子書簡文例

木版上半紙摺
無類の美本
男女各一册
定價六拾錢
郵税各六錢

時文の大家中邨先生の腦漿より迸出せしものなれば一言一句津々たる趣味あり、殊に流れず癖に失せず艱苦に陥らず流俗に同ぜずして實に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は能筆界の巨擘小野鵞堂先生の手腕になりし者なれば習字の龜鑑として上乘の書也特に上欄には類語數千句を掲げ作文の模範と應用とに供せられたる無比の良書也

●發兌元

東京市京橋區中橋廣小路
（振替貯金口座四一〇九番）

前川文榮閣

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

肥滿病新藥
（米國新輸入劑）

小供の折美愛と稱せられし人も年頃になりてよりぶとく肉太りたるため左圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑はバークデビス會社の模範製劑にて脂肪多き人◎ぶと〱ふとり血太り肉太り酒ふとり水太りにきび顏赤き出物多き人◎脹滿◎ぶつ〱逆上腫等輕症は一二劑如何程の惡性も三劑分連服せば艶白となり程よくやせて暂つて色は顏窈窕たる美人となる事を保證す



藥價 一劑一圓五拾錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 送料十錢宛

▲肥藥性に苦む人は他藥に迷はず速に服用あれ

◎世界唯一 月やく下し薬
……見よ……病める婦人 月經なき女子

専門博士賞賛指導の新發見良藥

▲効驗……薬力最強度……其效極て峻烈……有効無害……保險薬



本劑は婦人月經不順月經閉止月經滯りは一二劑にて必ず流下す二三ヶ月の四五月以上又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽まち流經す夙に各婦人病院に於て効力卓絶なりと賞賛せられたるは此の女月丸なり滯り又は不順にて苦む人は速に服用あれ

▲薬價一劑六十錢、二劑一圓十錢、特製二圓廿錢、別製分三圓卅錢、送料四錢

發賣本舖 東京々橋區中橋和泉町 振替口座一〇六七七番 小宮愛生堂

當選作家（一）



朝井千とせ君

佐藤浪子君

山村龍子君

大口巨樹君

當選作家（二）



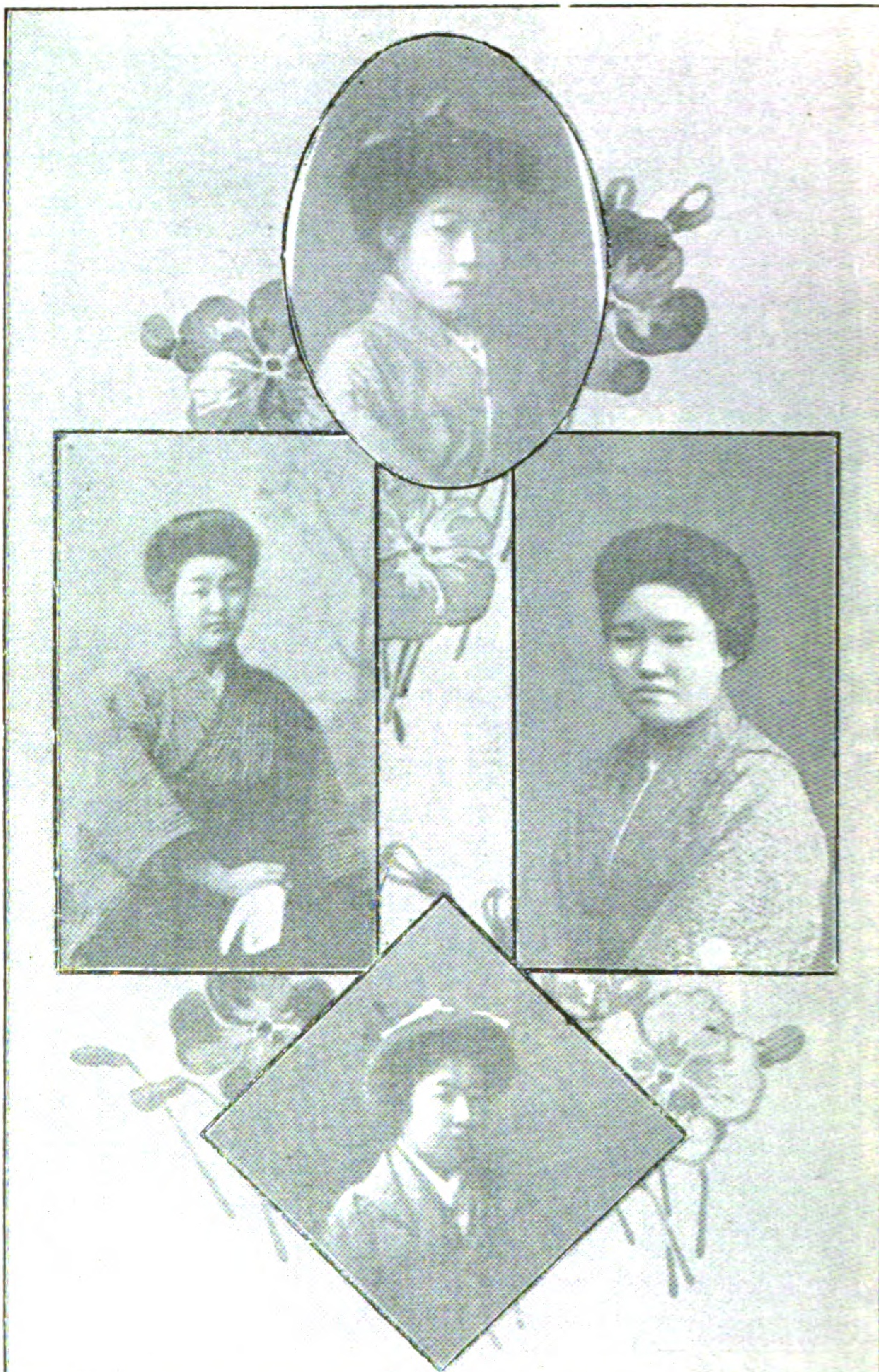
三ケ島よし子君

杉浦さよ子君

月靈子君

柳澤なみ子君

當選作家



細谷鏡子君

しほれ草君

桑本きさ子君

杉山とし子君

當選作家



梅本龍子君

塩見喜代子君

岸初子君

三浦ふみえ君

木村しづゐ君

（乙の三）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

定價各號 金拾五錢 郵税一錢五厘

女子文壇

各號本社に揃あり 至急注文あれ

新年號 要目（二百頁）

◉若き婦人の一人前に成る最初の心懸……羽仁もと子 ◉近代女性の自覺 姉崎博士、新渡戸博士、木下尚江、安部磯雄、成瀬女子大學校長、三輪田元道の六君◎描寫：小杉天外◎新年（英文）河井道子◎あを空：醉茗◎俳句：虚子◎個人の勝利 嘉香◉懸賞文百餘頁充溢

＝小説附録＝眞山青果 縄暖簾 徳田秋聲 牧師 大塚楠緒子 端書 江見水蔭 狂人◎泣菫◎有明◎與謝野寛三君詩歌

口繪 ◎原色名畫快活◎石版着色畫獨奏◎寫眞版：友愛○聲○洋樂合奏○箏三絃合奏○新春○遊樂○誌友面影○親睦の十葉鮮麗

二月號 要目（百七十頁）

◉家事見習の大切なる年頃……羽仁もと子 ◉作家としての女子 文學士 夏目◉見た所の西洋婦人 文學士 上田敏◉米國婦人結婚前 山田静三◎これらを歌へて：泡鳴◎美文の作り方：醉夢◎和歌の趣味：空穂◎群：藤村◎花言葉：葉舟◎新意味の寫生文：虚子◎山桔梗 夜雨◎無題二篇：御風◎文壇時言：嘉香◎作家の住居：紫火◎眠るは醒むため（英文）河井道子◎河岸通り 田中久子◉懸賞文百餘頁……満載

口繪 ◎原色名畫雪女◎石版着色畫雛◎寫眞版：閨秀作家大塚楠緒子、岡田八千代、與謝野晶子の三女史○文士有明、葉舟、御風の三夫人○御題入選二歌人○在米日本婦人○女學生會津落城活人畫○誌友面影○おさな顔の十葉美麗

三月號 要目（百七十頁）

◉學校に通ひつゝ家事を學ぶ工夫……羽仁もと子 ◉言葉遣と態度の注意 山脇房子◉女の心持 田山花袋◉男女交際は冒險 文學士 下田◉芝居好きの婦人に 小山内◎富士裾野 烏水◎丘上の花：柳虹◎ヴェルレーヌの詩：荷風◎和歌は女性に適す：文學士與謝野◎花言葉：葉舟◎若き女の嬌態：東衣◎美文作法：醉夢◎子供の夕の祈（英文）河井道子◎文學に據りて救はれたる一處女の身の上話：わか草◉懸賞文百餘頁……豐富

口繪 ◎原色名畫湖畔の歌◎石版着色畫彼岸櫻◎寫眞版 閨秀作家瀬沼夏葉、小栗籌子、長谷川時雨の三女史○文士小波、泣菫、天外の三夫人○異彩ある三婦人○挿花と造花○新粧二婦人○女學校紀念撮影○半身三姿○誌友面影の十葉優美

四月號 要目（百七十頁）

◉人間一生の大事業、良き頭腦をつくる事……羽仁もと子 ◉作中に現れたる女性 現代文士五十名◉學校を出てからの實行 宮川壽美子◉實業教育を起した動機 嘉悦孝子◉非論理 戸川秋骨◎苦勞性の女：東衣◎和歌の趣味：空穂◎月の婦人：露風◎無垢の處女を陷れんとする恐るべき誘惑：かげろふ◎抒情詩：葵村◎君：躬治◎活動せる婦人界：夢二◎花言葉：葉舟◎嬉しき想出：河井道子◎白い顔：佐久良◉懸賞文百餘頁……豐富

口繪 ◎原色名畫薔薇◎石版着色畫春の雲◎寫眞版：閨秀作家國木田治子、正岡秋子、竹内政子の三女史○文士柴舟、癸山の二夫人○功勞ある外國婦人○西洋日本料理の實習○表情○双蝶○輕裝○誌友の面影十葉

東京京橋大鋸町 女子文壇社發行 （振替壹七貳九） 賣捌 各地雜誌書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

◉大發展紙數增加◉

材料豐富

少年之友

清新記事

五月一日發行　四卷五號　（價）一冊郵稅共金九錢　六冊仝金四十八錢

美麗なる口繪

◎アレキサンダー大王の少年時代（悍馬を乘り慾らす處）石版彩色密畫　◎軍用駱駝の輸送◎初夏の花（庭園の藤、菖蒲、芍藥）◎少年風船乘◎英領コロンビヤに於ける鮭獵

面白きお噺

◎探險船日東丸　長田令二　◎象の鼻の由來　野口米次郎　◎水族館内の戰爭　カアウード氏　◎春の蝶々　深井武司　◎月の話　むらさき　◎初夏　ひでまろ　◎高飛競爭　てる子　◎孝子さんの心配　少女小說　花園波南　◎社前の舞　村田犀川　其他

好きな讀物

△少年十二訓　△五月の花　△米人の見たる日本　△少年日記　△繪さがし　△泣く顏、鼻たらし、怒る顏

◀每號懸賞　少年文壇▶

○長文○短文○日記文○短詩○和歌○俳句○笑ひ話○新考物○少年俱樂部○筆蹟○スケッチ

發行所　東京神田旅籠町一丁目　文光堂　（振替口座一九五五）　賣捌　東京堂◎北隆館◎上田屋　東海堂◎良明堂◎至誠堂

例の如く豫定したる懸賞は正確に勵行す

女子文壇（第三増刊）大懸賞募集

本誌第三增刊として茲に懸賞大募集を行はんとする「短篇小說」は其名の示す如く、短篇小說を主とし、併せて詩歌美文の各種文藝を含有するものなり、今回は文學中の文學、創作中の創作とも云ふべき小說を主位に置き、隱れたる天才を世に紹介せんとす。今や文運天下に普く、多少文學に志あれば小說を讀まざるものなし、讀んで之を作らんと思ふ才人また雲の如く多し。是等の諸君は本社の企に贊同し、平素の修養を傾倒して寄稿せらるべきを信ず。選拔は公平にして且嚴正、批評は親切にして且忌憚なし、寄稿雜誌中の模範たる本誌が最上の努力を此處に注ぐべき證據は、其發表の曉に到りて明かなるべし、多言は要せず、直ちに傑作に着手あれ。

投稿締切六月三十日▲發表八月十五日

短篇小說

懸賞方法

小說 一等 金貳拾圓。 二等 金拾五圓。 三等 金七圓 四等 金五圓 五等 金參圓 （凡て正金を贈呈す。原稿は振假名付廿四字詰二百行限）

美文 天賞 金七圓。 地賞 金四圓。 人賞金貳圓（凡て物品を贈呈す）（原稿は廿四字詰七十行限）

書簡文◎日記文◎新論文◎新體詩◎和歌◎俳句 各天賞 金五圓。地賞金貳圓。人賞金壹圓（凡て物品を贈呈す。原稿は書簡日記論文は廿四字詰四十行限り、新體詩は振假名付三十行限り、和歌俳句は一人十首限り）

圖畫（三寸に二寸五分の大きさにて薄き用紙に描く）別賞十等迄圖書切符にて贈呈す

投稿心得

◎投稿の封筒には東京京橋區大鋸町女子文壇社編輯局御中と書き傍らに「短篇小說原稿」と書くのです◎開封にすれば三十匁まで郵税二錢で參ります但し手紙の文句を入れることは一切無用◎種類を異にする毎に必ず別の用紙を使ふて下さい◎一人で同種の作物を幾篇も出すことは許しません◎用紙は半紙又は原稿用紙が最もよろしい◎字は下手でもよろしいから必ずきれいに分るやうに書いて下さい◎句切り（句讀）は正しく切つて下さい、◎投稿には一々住所姓名を詳しく書いて下さい、紙上に用ゆる名が別にあれば題の下へ書くこと◎入賞者には通知いたしますから寫眞を送つて下さい◎投稿は凡て女子に限るのです◎一旦受附けた原稿はお返し致しません◎當選賞品は發表翌月末に贈呈す

投稿所
發行所 女子文壇社
東京京橋區大鋸町

新作家



一等

藍の葉

木柵に倚りて

長曾我部菊子

其いちぶしじゆふの懊悩を私はつひに胸一つに收めかねた。收めかねて房乃を呼んだ。そして袖をつらねて野は南西に濶き町のはづれにさまよふた。頃は初夏である。森の瑞枝は葉並葉毎に、人のむせるやうな甘い強い青々しい香氣をふいて。チ、チ、と鳴いて小鳥は梢から梢の小枝に。——ひよいと首を傾げていぢらしうまたチ、チと囀つてゐる。森の道をぬけ、麥生に入る。

左を見れば、右を見れば、前後左右に畑に人は働いてゐる。新らしい紺の仕事着にまつ白の手拭——草取の少女の歌は野面涼しう、流れてくる。二人は無言で歩いてゐるのだがお互に、話しするよりまだ〳〵賑やかな床しい考へてゐる。犬がかけてくる。パッパッと麥生の長さをけかへして南へ南へとかけてゆく。ちら〳〵見ゆる白い頭、——點になる。

ああ、夏！活動の夏は來る！と心も、つれてときめきしながら。…… 氣力の神は今世の中の有らゆるものを、風と青い色とをもつて洗禮をさづけた。て、よみがへつた萬象は無限の精力に由てめざましく活動し出したのだ。(ここで)と房乃は袖をひきとめて、お話しませうよつていふらしい眸光をするので我かの憧憬よりさめて周圍に眼をやる。いつのまにか麥畑の端、豆の花の優しう白く咲いてる大きい畑のほとりに出てゐて、前に、木柵——高低のある半ば壞はれて傾いた詩的な、懐かしい木柵の前に來てゐる。——木柵の下に——かげには柔々した夏若草がのびてゐる。て、二人は手を組みあはしてそつと坐つた。——木柵のかげへ。——

(良いとこよね、ここは)房乃はにつこりする。

(ああ、)私は亂れたびんの毛をかかげながら。

今日の散歩は、房乃の純なる美しい清い耳に、口をあてて。私の無上な苦しい懊悩の爲に謀つても見、慰めてもらはふとてである。しかしかうしていきいきした初夏の野中に在りて、宇宙の大氣力！それに酔ふて

は、私の今までの迷と行のあまりに〱小なることを知つた。房乃は首を上げた。
(姉さん、何のおはなし？ 今日は、)と言ふて草を折る
(えー)返事はしたが私の胸は今明るう、暁の如く明けんとしてゐる。——野の清爽たる氣にうたれて。もう何かと暗い事柄を、いとほしき子に、言ふがものでもあるまい。が。ああ話さうか——どうしたもの？ (あのー)と私はためらひながら空を仰いだ。

不言の教

黒き布をかけたる父樣のお棺を正面に、線香のけむり、纏纏として續きては絶え、絶えては續く机の前に悄然と端坐するもの五人——祖母樣は水晶の珠數を双手に、母樣は袖かきあはして私の右に、二人の伯母樣も後前におちつとうつむいて合掌してゐらつしやるのだ。(南無阿彌陀佛——南無阿彌陀佛。)しめやかに稱名を唱へて祖母樣は白髮みだれて悲嘆のあといちじるしきお顏を私の方に傾けて。
(御文章をお讀み！ 花世)
私はすぐ御書をさゝげて聲幽に、顫ふ唇かみしめ〱よみはじめる。白骨の御文章を最後にくりひらいた。ともし火は、じじと燃えて、黒い佗しいあるものの其冷かなる氣は、お棺の上から、人人の心の底の悲しみにまつはるやう。——私はうるむ眼を更に開いて。(おほよそはかなきものはこの世の始中終まぼろしの如くなる一期なり……)息をつくと、
(南無阿彌陀佛——なもわあみだぶつ……)と五人の聲は一所になつて、すうと消えて闇に入る。
(されば朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり——すでに無常の風來りぬればすなはち二つのまなこ忽にとぢ——一つの息長くたえぬれば……)涙がつまつて聲が出ぬ。
ああ、死、常には理性て判斷して嘆くべきものとは思はなかつた、今わが身の上にふりかゝつて、其死の影を目前に睹ると、只痛ましいかなこれより以上思ふことが出來ぬ。——お父樣、なぜ私たちがあるのにお死になされました。ほろりほろり頰にちる涙を拭ひもあへずに(桃李のよそほひを失ひぬれば——、しばらくして六親眷屬あつまりて……)
祖母樣は聲わなゝかせて、其後をつゞけてくださる
(あつまりてなげき悲しむとも、さらにその甲斐あるべからず……
(南無阿彌陀佛——なむあみだ——)とのこりの人が……
夜はいつしか深うなりて二月の寒さが身にしみ入る。
雨戸は風にかた〱鳴る。

私は佛壇の間を退いてから炬燵によつて妹とならんでゐる。父樣の御末期にあふてから、沈痛なる悲しび胸をひたとさして、疲れにつかれた兩眼をとぢても、閉ぢても、狂せる心、激せる心、それは火のやうに熱う／＼たぎり落る涙となつて始終、面を流れる。炬燵のふとんはしつとりとぬれてゆく。濡れし瞳にうつり入るらんぷの光は、ぱち／＼と火花をちらすやうで逆上せて頭も破れさうに感ずる。私は痛む胸をふとんに伏せ(辛い!!)低う叫んだ。目を上げると窓の障子に十六夜の月の光が靑くさしてゐる。

私ははじかれた樣に起ち上つた。戸をひらいて外の方に出て行くと、

圓い光は今半空を少しすべりて庭の木立の頂きにかゝらうとしてゐる、私は亂れ毛を口にふくみ、曇る眼をせいいつぱい見ひらいてとび石を傳ふた。

お離室もからりと四方開放て月の到らぬ室の隅は薄暗い、母家も勿論開いてある。

月光の家、今宵のみは月も一家の中を、光り徹してうなだれた人の横顏をのぞかうとするのだ。

私は葡萄棚の下に入つた時、そと手を組んで胸にすゑた。

ああ父樣もつたいないがお怨み申します、怨んでも花世をおゆるしあそばしませ。父樣、もうどうしても、と枕元にある人が醫師から聞いた時、てはせめて今、子供に父樣を見させてやりたいとさう母樣、子供四人を病室に靜によびいれた。

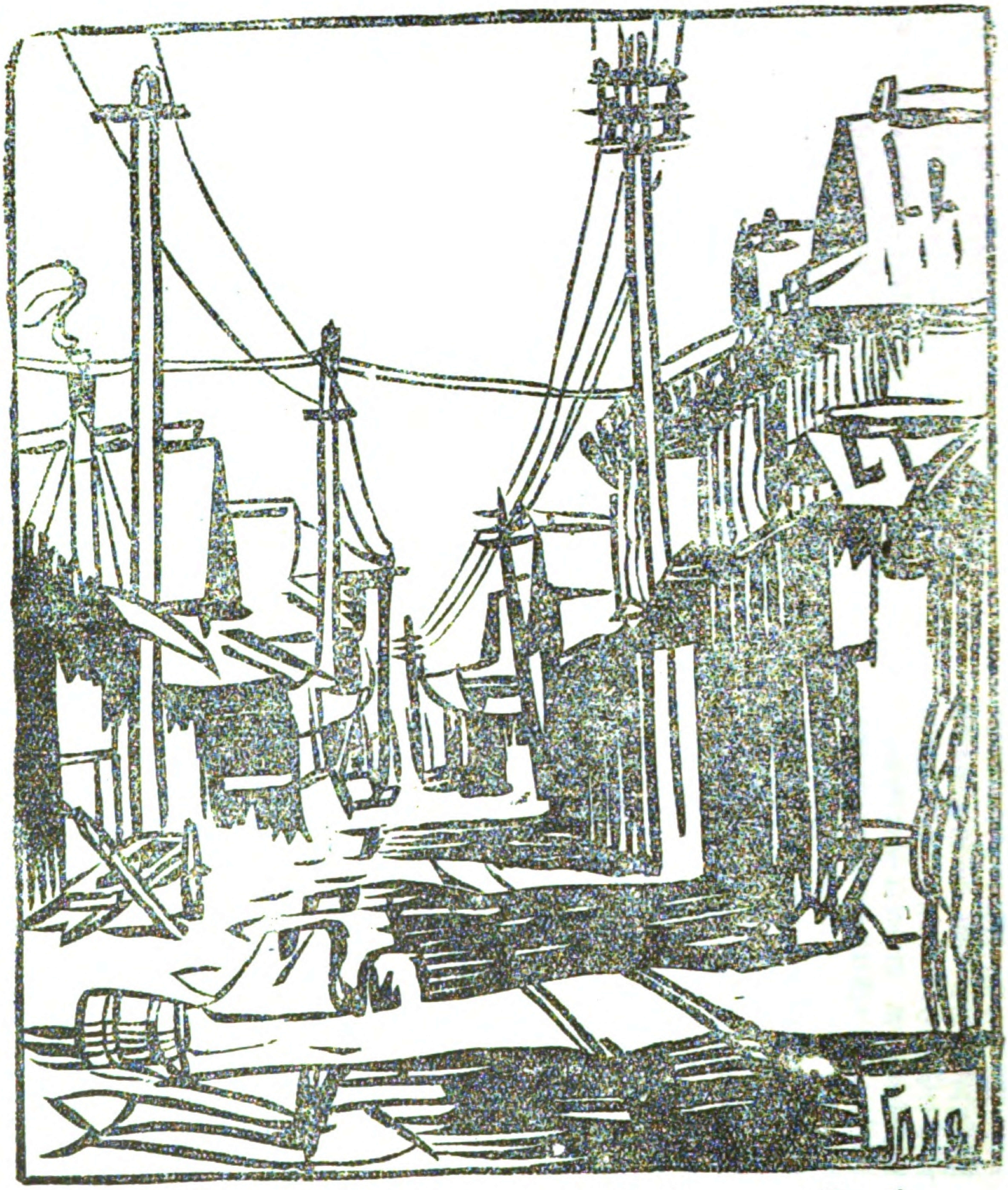
これは去る七日前の事であつた。おど／＼と入つて來た中の一人が思ひせまつたか(父さん……)とよんだ。――と父の痩手は急に動いて、去れ／＼と制するやうなおそぶり、驚いて、あちおゆき、彼方おゆきと四人をのかせてお顏をのぞくと、あれ、ま!お痛はしい。父樣のお顏は大きい露が止度なく、はらはらこぼれてゐるのである。こぼれて落ちる。――

私にその深さと高さとはよう思ひはかれないけれども親が子を思ふ其悶は海よりも深う、子をいたはる慈愛は山よりも高いと聞いてゐる、今、父樣、西も東もまだ知りかねる子供の、それも四人五人といふ澤山そのこしてゆかるゝ御心中。口惜しうおありなさらう。さぞ殘念におわさう。お察し申しまする、父樣。と身をふるはせて私ははんかちを手に父樣の頰を拭ふてあげた。

母はひたとふとんの側にふししづむ忍び音。わたしが拭ふてしまうと私の手をひしとお握んなすつた。昏睡に陷つてからすてに二週日、その意味のあれともこれともわからぬのてはあるけれども、何かしきりにお唇がうごくので、はい、はい、お返事をすると、血走れる御眼、半ひらいて、けいれんする腕をの空べに何か

書いてはものを言ふて、それがすむと、につこりお笑はつて、ひなさつた。何かをいふて下すつたので、あつたらうと私は思ふた。

―お、お、お！うれしい。こんなに不言の教はうけた。なか〳〵千言萬語にもまさる御遺言と私は深く胸に泌みた。お葬式は一日おいてだと言ふ、母様は私に、絹の白無垢をお出し下さる、たんすの前に立ちな



（一等）　靜な町　澁津とよ子

（父を亡くせし子の不行跡見よ等、人にゆめそしられぬやうに、――覺悟をたのみます。花世様）とおつしやつたので相違ないことを、先刻お誓した。神もみそなはせほんとうに、父様、母様、私はよつく御教訓を守ります。

月をあふいて思へば思ふほどせぐりくる悲痛の情、もう、こらへきれず大地に慟哭した。

吊り楓

小晝前、學校から歸つてお離家に入ると、襖に近くヂルの暖かい大座敷の上に、まる〱座んなすつて、なゝめに手を動かせてギーシギーシ眞綿を引張つてゐらした祖母樣が、（お!!菊子かい）と笑聲をかけて、（あれをお見！うつくしかろが！。）ほやほやと福々しい雨頬の長いしの字の皺がのびる。（え）指さされるまゝふりかへると紅い楓の葉が環になつてぶら下つてゐる。

私の机の正面の書院に。——

私は何とはいへず嬉しうて、（あゝ紅葉ね、秋のお姫樣やうに美しいはね）言ふと、（うむ！あんまり木の葉が庭に積んだて、はいてゐたら、あそこのむら（楓の名）が一面紅う散つて居つたから、はきとばせぬので吊つたが、よいかい？）（えい。佳いの！）

近づいて見ると二葉づつ、五分おきに白絲で結んで、五六十枚ほど、糸の長さは二尺ばかしなのを、兩端針で書院の障子にとめたのがまこと虹の橋をひつくらかへしたやう。（お祖母樣、眞實に詩人のやうよ！）ぼんやりして楓を見ながら呟くと、ふとふりむいて、（何かい？）ととふ。（いいえよ、何でもない事！）

去年の冬であつた、ぼか〱暖い日和がつゞくと、あちこちの野蔭に菫の花がよく咲き出す、ある朝、祖母樣私は菫を見たいのよとくりかへし言うて學校へ出て午後にかへると、そら堀つて來たぞよ、さがしまはつて居たら裏の桃の苗畑で見付けたとおつしやつて、菫の花の香り高いのを小鉢に植ゑて私の机上において下さつた。私は幼少い時から祖母樣に一方ならずいつくしまれて來た。祖母樣の子、私や祖母さんのお子よとよく誰彼に言うて羨しがられて來たが——。

祖母樣のお年はことし七十九。千代までもと千代までもと思へども、（私が死んだら東京へでも京都へでもお行き!!祖母樣はもういつおまゐりするか、分らぬから、どうぞそれまでは居ておくれ）とおつしやるのが、私には骨身を徹すほど痛い。ああ、二十二年思ひ出ふかきふるさとよ、阿波はわが終りのすみ所でもないのに。

各形式を通じて若い女の方が作られたものを見ますに、短い散文（所謂美文）が最も結果が好いやうに思ひます、是はつまり、今の若い女の持つてゐる思想を發表するのに此の散文の形式が何よりも適切なからでせう。小説も器用に書いてある、詩歌も上手がある、けれども一種の抒情的散文の獨擅なるに及びませぬ、恐らく同じ若い男子の間にでも、此種の散文は書けますまい、小説は出來ても、詩歌は出來ても、此散文の眞似はむづかしい、是には原因のあることだらうと思ひます。

小説を作るには多少の經驗がなくてはならぬ、詩歌を作るには多少の素養がなくてはならぬ、此が今の若い女の作家に何が缺けてゐるかと云へば此二つが缺けてゐるのです。其代り燃えるやうな感情と、純粹なる思想とを、最も自由な形式で發表しやうとする、勢ひ散文より外はない。それは文學史上に徵しても明かな事實で、女の作物と云へば大概隨筆か日記類に傑作が多い、婦人の文學的能力が今ま

ての點では此方面に一番適切であると云ふことは爭はれません。たゞの散文を一歩進むれば小說になる、今の小說はたゞの散文と接近して來てゐる、けれども材料の取扱ひ方が、散文と小說とはまだ違つてゐるやうに思ふのです、今の若い女の方が書く抒情的の短い散文は寧ろ散文詩に近い方です、大抵は感情ばかりで書いてゐるのですもの、何うしても然うなります、又其處に若い女の生命が動いてゐるのです。

偖て前提は其位にして、本文の批評を一寸簡單に申しませう、撰者が美文を一等に採つたのは右の理由です、それから此作を一等に推奬したのは作物に渾厚な人格の影が洩はれてゐるからです、文章も此れより上手なのが二等以下にいくらもありませう、又現代風にさつぱりとして、氣の利いた作品も多くあるでせう、けれども寸毫も輕浮な態の交らぬ、純朴な自分の思想を言表はして、而かも其思想が感情一方でなく、分別もあり理性もあり、穩健な態度を見せてゐるので選者は歡んで此作者に月桂冠を授けました。

御序だから申しますが此處に拔いた三篇のみでなく作者の平素の態度も少からず選者を動かしてゐます、今度は懸賞が多いから一つ當てゝやらうなど、腹の底の見え透いたやうな人の寄稿は何んなに氣が利いてゐて、うまく作つてあつても首座を與へる氣になりません、諸友諸嬢、平素の心懸も亦大切です、長曾我部さんも幸に健在なれ(評)

二等

爪の痕

秋葉清子

永らく紀州の方へ勞働に行つて居た弟も歸つて居るさうだし、母親も頻りに逢ひたがつて居るといふ事も聞いた。第一自分もいろ〳〵と話したい事は山ほどあるので、お磯は一度生家へ行きたいとは思つて居たのだが、さてその日といふのが中々出て來なかつた。

今日は幸ひ仕事もなし、天氣もよささうなので、愈々歸ると決めた。朝飯の跡片附もそこ〳〵にして、奥の四疊半で髪を梳いてゐると、夫の淸造が傍て、垢染んで、筋目もよれ〳〵になつた茶縞の木綿袴をつけてゐた。

「今夜は泊つてくるぢやらうな?」と言つて、黑い長い髪を眺める。三十五六、鼻の下にショボ〳〵と髭をはやした、骨ばつた大きな躰格の男だ。

「いゝえ、歸りますわ、別に貴方、泊る程の用事があるぢやなし……一寸顏出しするだけですから。」

「いや、何も泊つたつて構やあせんがな、構ひはせんが、その泊るなら泊るて私も意りがあるからぢや。」

「えゝ、歸りませう。日暮れまでには……」

「さうか。」と言つて、勿躰らしう紐を前て十文字に結んだ。

「行つてくる……。忘れんやうに裏へ一寸こたへて行けよ……」と言ひ捨てゝ、辨當の包を小脇へかい込んで、夫はそゝくさ出て行つた。隣村の郡役所へ、もう十何年と言つて勤めてゐるのだ。

彼是一時間もかゝつて、やつと丸髷に結ひ上げた。一寸顔を洗つて、カチャ〳〵簞笥の曳出を拔差してゐたが、さん〴〵迷つた揚句、要るだけのものを出してしまふと、思ひ出したやうに跡の衣服の端をキチンと揃へて、其間へ鼻紙の細かく裂いたのを一枚々々狹んだ。そうしてそつとしめた。

手早く着物を着てしまつて、暫くぢいつと立つてゐたが、別に忘れものもなささうなので、ガタ〳〵とそこいらの戸締をすると、一寸した手土産の風呂敷包を提げて、裏口から出やうとしたが、急に引き返して來て臺所へ上つた。先づ隅の大きな戸棚の前へ中腰になつて、曳出の中の燒麩を數へた。

「三十六か……」と獨語を言つて、今度は湯婆――目刺にも一寸さはつて見た。それから土間へ下りて、竈の下の薪を讀まうとしたが、途中でコヂャ〳〵になつてしまつたので、上に並んでる奴に一寸皆目印をした。後の漬物桶の石の位置も直し、棚の醬油樽は、呑口の栓の上部へギユッと爪で疵をつけた。それで安心したやうに、又一度そこいらを見廻して、今度は本當に裏口から出た。

畑一枚へだてたすぐ裏の家には小姑が住んでゐる。夫の一番の姉で、お磯にとつては姑とちつとも變らないのだ、村の富豪の家に下男をしてゐた男を婿養子にして、夫の親ゆづりの僅かな田地を耕して暮して居る――家も夫のものだ。

お磯がはいつて行くと、小姑は何か竈の下を焚いてゐたが、大變にいぶらしてゐる。もう五十近い、髮が薄いので、頭の地が赤く透いて見える。面長な、眼のギヨロリと剝けた――これは非常な近眼なので、大低のものは目の前一寸位の所まで持つて行かなくては見えないのだ。濛々と煙が上つてるのに平氣なので、お磯は

「ひどい煙ですよ……」と言ひながら覗いてみると、案の如く木葉を一ぱいに奧の方へ詰めてゐる。火箸で一寸下を透かせると、パッと音して燃え出す。

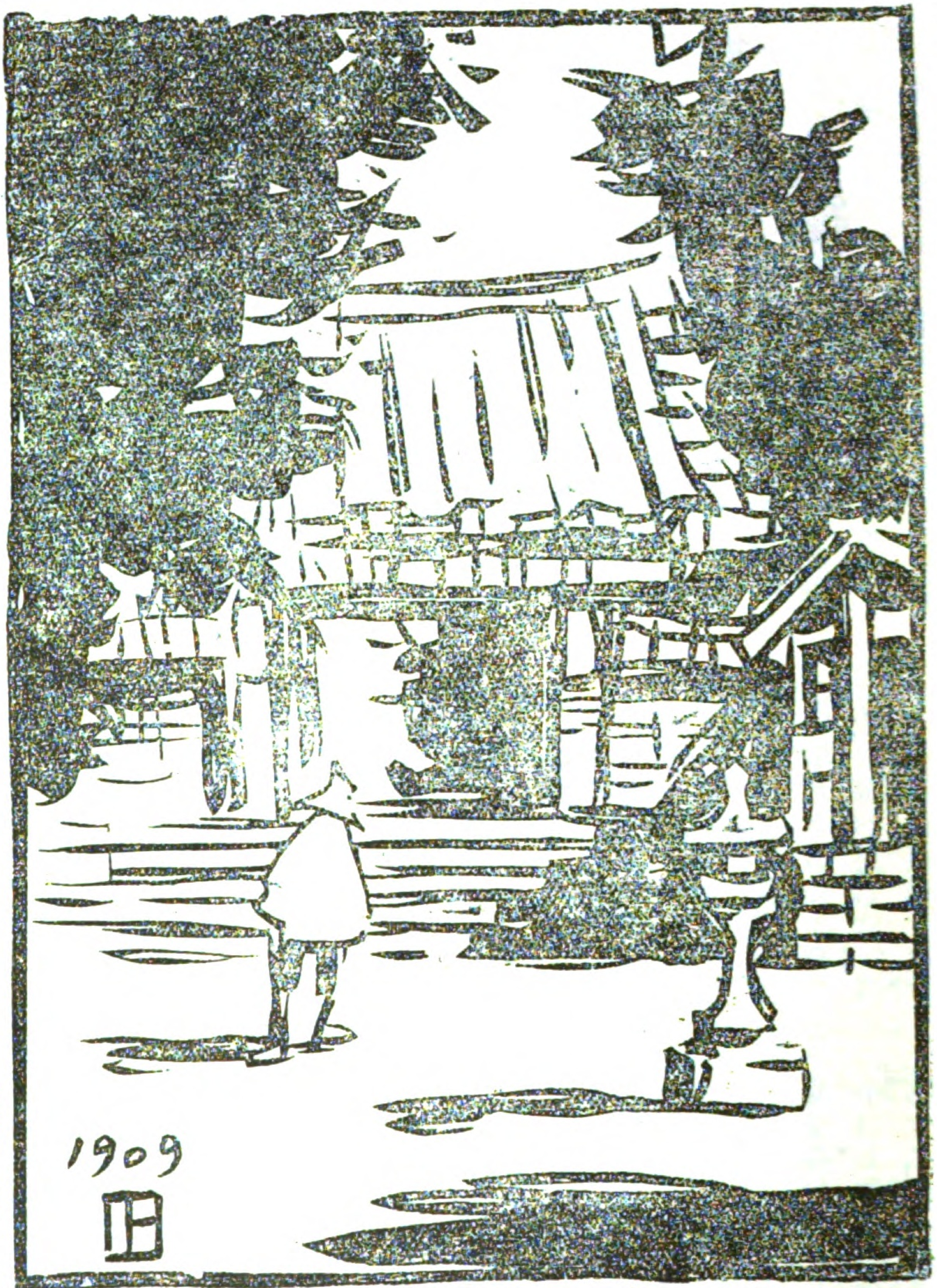
「もう仕度は出來たかや？」

『えゝ、これから‥‥』と素氣ない。

『えらい早かつたな、そいて今夜は泊るのかい。』と目を眇めて、お礒の服装をジロ〳〵見る。

『いゝえ、少々おそうなつても歸る意りです‥‥別に用事もありませんし‥‥‥』

『ふうん、ても泊りたかつたら泊つてもよいぞな、何もたまの事ぢや‥‥』



（二等）　門　青森　立花とも子

『有難う‥‥』とこれも上の空で

『それては跡をお頼み申します‥‥』

『よし〳〵、戸締りはしたかや？』

『えゝ、裏口だけは開けときました‥‥』

パチンと洋傘をひろげて、ホカ〳〵と温い野道を急いで歩き出した。

それから彼是一時間程たつて、小姑はヒヨロリと裏口から弟の家へはいつて來た。短い袖無を着て、煤けた手拭を被つて居る。前掛の下から大きな醬油差を出して、そつと竈の上へ置くと、ノコ／＼と上つた。暫くそこいらを見えぬ目で見廻して居たが、やがて奥の押入をあけた。お磯の平常着が前につくねてある。簞笥の曳出に手をかけて、ぢつと耳を澄ましたが、思ひきつてスル／＼と拔いた。ぷうんと麝香の匂が鼻を打つた。

頭を中へ突込むやうにして、二十分許りもゴソ／＼やつて居たが、やがて何もかも元の通りにして、そつとそこを離れた。

「いつの間にあんな羽織を……」とつぶやいた。

裏口の所へ立つて暫く外を眇めた。が別に人の來るけはひもないので、今度は漬物桶の石に手をかけてみたが、痩腕では到底も動きさうにない。仕方がないので先刻置いた醬油差をとつて棚の樽の下へ受けた。

栓は存外ゆるかつた。暫くどく／＼／＼といふ音を聞いてゐたが、急にピッと止めた。中を覗いてみるとまだ半分ほか出てゐない、またゆるめて、彼是一ぱいになつたと思ふ頃、今度は本當に止めた。そして出るだけの力をしぼつてギユギユとかたく／＼栓をしめつけた。一寸指をなめてみて、薄口の上等だなと思つた。

小姑は袖でそれをかこつて、走るやうに畑を拔けて歸つた。

獨歩と白鳥を綯ひ交ぜにしたやうな描寫のしかただが、摸倣にしても甚だうまい、正しく巧みてある、駈出しの投書家には到底眞似は出來ない、此作者の日課表と對照してみるに恐らく作者であるまい、作者は何處かに隱れてゐるに相違ない（評）

三等

緣

木村しづゐ

「何故私はかう淋しいのだらう」

芳子は會社の門を出るともう、例の妹の緣談の事を

考へ出してから呟いた。
早稲田出身の秀才で某中學の教頭、年こそ少し違ひ過ぎるが、二男の事とて舅姑の世話をするじやなし、唯つた二人きりの氣樂さは、妹には勿體ない位の良緣である。父が亡くなつた後は母子三人が悲慘な生活、それも自分が相續の事とて、家の爲には身を粉にしても働かう、憖ひ氣心の知れない良人を娶るよりは、氣樂な獨身で暮さうと心窃に誓つたもの丶、扨て月日が經つに從つて、今のこの淋しい心細い自分の心持に引較べて、妹だけは一日も早く嫁付けやう、什うか良い緣でもあらばと心待ちに待つてゐた私が、何故この良緣が氣に入らないのだらう、自分乍ら心の中が解らない。
私は決して嫉妬心からして斯麽事を考へるのじやないが、今度の緣談だけは什うしても破談にして貰ひたい、妹だつて是非今結婚しなけりやならないといふ年じやなし、此處一二年の間には曲りなりにも學校だけは卒業も爲せやうし、晴衣の一二枚は何うにか都合も出來やうものを、何だつて伯母樣も母も彼麽に乘氣になつて騒いでゐるのだらう。
ハラッ！と勇ましい聲に驚いて芳子は深い考へから我にかへると、自分はいつの間にか壹岐殿坂の中程まで登つてゐたのである、二頭立の黒塗馬車が蹄の音高らかに驅け拔けた、馬車の中には盛裝の婦人が乘つてる、小さくなつて路の傍へ身を避けた芳子は、羨望の眼を輝かして見送つた。
芳子が片町の家へ着いたのは日の暮方で、盛りすぎた門口の梅はチラ／＼と淋しい肩に散つた、
妹の道子は森川町の伯母の家へ行つたとかで、留守であつた、又例の相談であらうと、芳子は眉を顰めた、
二人は夕の御飯を濟してから、長火鉢を距て丶佗しさうに座ると、母は遠慮するらしい口振でまづ口を切つた、
「今日も森川町の伯母樣の所からね、何うせ極めるなら成るべく早くして頂きたいつて、先方で仰有るからと言つて來たのだがね第一お前さんが乘氣になつて御吳れてないので、ほんとうに困つて了ふよ」
「乘氣にならない事もありませんけれど、そんなに急かなくつてもい丶じやありませんか」
「なあにね、さう急く譯でもないが、斯麽良い緣は又といつても無いだらうと思ふもんだからね」

と母は優しくいふ。

「其麽に良い縁とお思ひなさるなら、早くお極めなすつたら可いじやありませんか、何も私が嫁くのじやなし……」

嫉まし氣に言ひ放つて、芳子は横を向いて了ふ。

「お前さんも隨分變な物の言ひ振りをするね」と母は厭な顔をして、

「それもね、せめて道子でも早く嫁付けたら、少しはお前さんの身體も樂になるだらうと思へばこそ、かうして急ぐんじやないか」と辨解がましく附加へた。

芳子の眼からは今にも涙が溢れさうに見える。そして

「何も道ちやんが、全然私の厄介になつてるといふではなし、一二年のうちには私だつて、一寸した衣類の一枚や、二枚は、拵らへてやれるだらうと思つてゐるのですに、たゞ家の活計の爲にお急ぎなさるなら、ほんとうに道ちやんが可哀想よ」となほ横を向いたまゝいふ。

「其爲に計りといふ譯では……」と母は言ひ詰つて慌てゝ。

「では御前さんは唯早過ぎるといふんだね」

と焦々する。

「それ計りじやないわ、年を考へて御覽なさいな、親子程違ふじやありませんか」

「それや私も考へたのだけれどね、却て年老つてる人の方が親切だらうと思つて……」といふ母の言葉を引奪くるやうにして、

「三十四五になつて初婚だなんて、何をいふんだか解りやしませんわ」

「お前さんのやうに、さう初めから疑つてかゝつちや何も彼も駄目じやないか、唯つた一人の妹の事と思へば、些とは眞面目に相談に乘つてくれたつて好ささうなものだのにね」と母も機嫌が惡い。

「だから相談に乘らないつて何時言ひました。チヤンと下拵へして了つてから、相談に乘るも乘らないもありやしないわ、私なんか口を出さなくつても、もう大略極まつてゐるのじやありませんか」

芳子は口惜しげに、火箸をざく／＼と灰の中へ突きさし乍らいふ。

「いゝえ、そんな事は些ともありやしませんよ、第一お前さんの心が解らないんだもの……」と優しく言つて

お前さんだつてさうだよ、何時までも斯うしてゐられるものじやなし、良い養子でもあつたらばと疾うから心懸けてはゐるものゝ、今の様な活計では望むやうな口もないだらうから、兎も角も道子を嫁けておいて、少しても家の方が樂になつたらばと思ふからぢやないかね」

芳子を慰める爲に言つたのだらうが、これを聞いた芳子は胸も沸えかへるやうになつて

「いゝえ、什うせ私なんか家の爲に毎日齷齪と働いてゐれば可いんですから」

と強く言ひ放つて、ホロリとする。

間もなく道子も歸つて來て、三人は淋しく寐に就いた。

母も妹もスヤ〳〵と能く眠つてゐるに引換へて、芳子の眼はだん〳〵冴えてくる、そして胸は頻りに思ひ亂れる。妹の身分として姉が未だ斯麽境遇に居るのに、自分計り先に結婚するなんて間違つてる、が什うして私はかうそれを不快に感ずるのだらう、其内心は少しも疾しくないだらうか、と思つて芳子は慄然と身顫ひがした、「か弱き者よ汝の名は女なり」とキリストは仰有つた、眞個に女は意氣地のない者である、妹の結婚までが何故妬ましいのだらうと、芳子は考へなほして身を責めた。

が、私は末に何うなるのだらう、斯うして毎日〳〵器械のやうに働いてゐて、孤獨の淋しい生活を送つて了ふのじやあるまいか、といふ考が念頭に浮ぶと、今更のやうに我身の果敢なさが犇々と胸に迫つて、更に新な悲しい涙に枕をぬらした。

芳子も強つて反抗する程の勇氣もなかつたので、其後四五日のうちに道子の縁談は纏つた。伯母も大分に懐を痛めて種々世話をしてゐる、

芳子が毎日會社から歸ると、妹はソワ〳〵しながら一生懸命に縫物をしてゐる、そして姉には氣の毒なやうな一種の恐怖を抱いて、只管機嫌を取るやうに努めてゐた、が芳子はそれを見ると言ふに言はれぬ不快の念が湧くので怏々として樂しまなかつた。

結婚式が濟んでから四五日目の日曜に、芳子は妹の家へ姉として御客に行つた。常には紅白粉の跡もない顏へ念入りのお化粧をして、髮も例より大きな束髮にして派手なリボンさへ挿して出かけた。

途中、妹の良人は嘸かし風采のよい、當世流の紳士であらうと、女心のさま〲に想像し乍ら行つた、が

芳子の想像は全然當らなかつた。老人染みた、輕々しい樣子に、寧ろ驚いた位であつた。

二三時間の後歸宅した芳子の口元には微笑が浮んで眼には安心の新なる輝さへ動いてゐた。

翌日から芳子は見違へる程若々しい扮り方をして、出勤する、そして今迄の芳子とは全然人が變つたやうに快活になつた。

短篇らしくまとまつてゐるのが、此小說の氣持の好い處であらう、大抵の作は何處か缺けた處があつたり、またよけいの處があつたりするものだが、此作はきちんとまとまつて、それて感應力も相當に持つてゐる、佳作の極印を捺すに躊躇しない（評）

三等

朝の海

山村龍子

今日の日を成さむ望のかずひめし胸いだきつゝ朝の海見る。

こは戀し君に小さき缺點を見出てぬかくて戀終るらし。

いざ御足すゝぎ給へな先つより三度わかせし湯をや進ぜむ。

うとましき過去てふものに今日の日もあゝ加るや夕ぐれは來ぬ。

白鳥に似しものあまた青き野のをちにめぐれり水默し行く。

かく迄に胸なやませど御心をなほえ滿たさぬおろかさに泣く。

人々の笑ひ話にかたる戀それすら深くひめ給ふ性。

獸も我れもあやしき光もつ眼を見張り行く午ちかき街。

日と月の未だなかりして云ふ世にて生れたるらし二人が戀は。

惜しかりし夢のつときを見なましと胸に手あてゝ妹は眠りぬ。

語る程の値すらなきなげきにも「死」を口にするやからを憎む。

水かれしかめになえたる紅薔薇戀に病む子の唇に似る。

無地染めの衣に覺えし淋しみを我れのみ思ふ人に覺えぬ。

君と云ふ花の香に添ひ日もすがらよき歌うたふ我れ奏の鳥。

一首毎に姿あり、香あり、力あり、新派和歌の精髓を攫ろもの、既にこれだけの素地を得れば、歌才は容易に動かぬ、幸に今後の努力を俟つ（評）

三等　立ちぎゝ

千とせ

うしと見し世ぞ

たつた一人の倅の嫁ですもの、憎い處かどんなにでも可愛がつて遣り度いのは山々ですが、幾ら大人數いがいゝからつて、こつちから口を開かなけりやあ一日でも二日でも默つて居るんですからね、面白くも可笑しくも有りやあ仕ませんわ、何もお世辭を云へとは云ひませんがちつとはお天氣がいゝとか寒いとか暑いとか云つてたまには世間話でも仕て笑ふやうでしたら嬉樂

みだらうと思ふんですよ、本當に嫁が來たらかうも仕やうあゝも仕やうと樂んで居た事が丸て外れて了つたので何だかガッカリして仕舞いましたよ、それに嫁が开廢風につも沈んだ顔計して居るもんですから、人樣からはさも私が嫁いびりでもするやうに思はれますし、今迄は役所から歸つて來ると、今日はお母さんこんな事が有つたの何のつていろ〳〵話して呉れた悴迄が、何だか妙にくす〳〵してろくに口も聞かなく成つたじやあ有りませんか、私はもう熟々厭に成つちまつて……矢つ張り獨て寂しがつて居た時分の方が餘程よかつたと想ひますよ。



（三等）　お孃さま　田賀とも子

名案

實に僕は困つちやつたのさ、何しろ此の間來た金が下宿屋の拂ひをしてノートの二三册も買つたらもうからつぽなんだぜ、こんない丶時候の日曜を握り潰しにして、二階で呻吟つて居るのも餘り氣がきかな過ぎるからなー、と云つて出るには金が入るし、本當に厭に成

つちまつた……そりやー國へ云つて遣れば送つて呉れない事も無いが、先月もたして貰つたのにそう〱續け玉じやー驚かれて了うからなー……土臺もうねだる口實が無く成つたのだ、ナニ本？　开麼古臭い種はとつくの昔、實際あれを買つといたらモー今頃は立派な藏書家に成つて居らーアハ……病氣か？　ウム病氣と云へば一番世話なしだが……あゝ駄目さ、ほら麹町の伯母に屹と聞き合はせる、と直ぐ見舞に來るね、處がかんじんの御病人様お留守抔と來た日にやー、忽ち化の皮が現れて仕舞ふ……いつその事こん時には此の宿が丸燒に成つて呉れりやあいゝアハ……冗談のけて君何か名案を借し給ひよ、うまく行けば、いろは(牛肉店)位はおごるぜ……。

虚榮心

夫りやあいゝ衣服を着たいのも、自分の夫を偉らく思はれ度いのも、文學技藝に秀てゝ才媛とか秀才とか持囃され度いのも、歸する處は虚榮心に外ならぬのでせうが、何も黒塗の馬車に乘つてダイヤや眞珠で飾り立てやう抔と、身分不相應な事を申すのではなく、只自分のイヤ夫の地位名譽を保つ爲めに恥かしからぬ丈の身なりを致しましたからつて何で虚榮心の誘を受けませう、そして一體私は虚榮心も或る程度迄は決して憎むべき物では無いと思ひ升、自分は虚榮心が無いからと云つて襤褸を纏ふて家の内に計り燻つて居て、夫でよく此社會に立つて行く事が出來ませうか、开麼女を良妻だ抔と譽めた時代は已に過ぎ去つて居り升、ホ……華奢に流れて居るつ……开麼古い御説なら耳に蛸のいる程承つて居り升、が私は決して華美に裝ふとは云ひません、唯久々で母校の友人逹に會ふのに幾度も〱着た然も結婚當時の紋服を着て出るなんて餘り意氣地が無さ過ぎて立派な口も開けや仕ません、イエ私の外見計りでは有りません、詰りあなたの名譽を重んずるからです……。ジヤーどうしても御承知下さいませんの、夫ではもうあなたにはお願ひ申ません、幾ら實家が貧乏して居たつて紋付の一重や帶一本位どうにでも仕て呉れ升、イエ母に頼みますから……決して御心配なさるには及びません。

亡き妻へ對して

もと〱養父は僕に學問させやうなどの考へは毫頭なかつたので、矢張鋤鍬かついで草深い田舍で朽ちさゝる積りだつたのです、處が僕はどうかして人間らしい學問が仕たい、如何に苦學仕ても己の希望を逹したい、と日夜煩悶して居つたので、妻が察して再三再四父に頼んで呉れたですが、頑として應じて呉れませ

ん、其の内に子供が出來る、私の體は一層嚴敷く拘束される、と云ふやうな始末で愈々上京する期が無くなつたです、實際僕は失望しましたね、モウいつその事妻子を捨て、走らうかと考へた事も度々ですが、まさかに开麼薄情な事も出來ず、只悶々の內に月日を送つて居ましたが、遂に或る動機を得て妻に僕の胸中を吐露して最後の相談を仕ました、處が、私はどんな事でもして學費の幾分なりと繋ぐから父に內證で上京しろ、と云ふのです、デ隨分亂暴な話ですが、僅かの旅費と着替の二三枚持つた儘で飛び出したのが丁度‥‥卅八年の春でした、夫からは繊い女の腕で裁ち縫ひ洗ひ濯ぎして得た聊かな金を基にして晝は働き夜は學んで、愈々卒業試驗に差し掛つたら、妻が病氣だと云ふ知らせが來たのです、直ぐ其時歸ればよかつたですがみすく一年後れるのが殘念さに、薄情を云つて容躰を聞きに遣つた處が、左程でも無いから試驗を濟せて來いと云つて來たので、心配し乍らも先無事に試驗を了へて、イザ出立と用意仕て居る其の晩、危篤の電報に接しましたので取る物も取り敢えず直ぐ終列車で立つてあすの午後二時に着いた、時は最早此の世の者ではなかつたです‥‥、其時の僕の胸中は到底お話しする事は出來ません、

尙ほ近所の者から委敷く妻の樣子抔を聞き升と、朝は暗い內から夜の更くる迄も、氣六かしい父の機嫌を取り乍ら子供を負ふて一生懸命に働いて居た相です‥‥‥父ですか、父は妻の實父ですが何しろ頑固なことと云つたら鳥にも白いのが有ると云ひ張るやうな人なんですからな！、増して親に背いて密かに私を出したと云ふのを非常に怒つて居つた相ですから、其間に立つた彼が苦心はどんなで有つたか所詮はたから想像するやうな物では無かつたでせう‥‥。

デ其時、せめては今迄苦しめた罪を詫びん爲め、一生獨身で暮して形見の子供を自分の手で立派に育て上げたら聊か彼の靈を慰める事も出來やうかと考へたので、僕は斷然妻は娶らんと決心したのです、

イヤとんだ詰らん話しをお聞かせ仕ましたが‥‥先づこんな悲慘な經歷を持つて居る男ですから、折角の御厚配を無にするのは甚だ遺憾ですが、どうぞ僕の心中を御推察下さつて、あなたから宜敷お斷りを願ひ升。

こりや好い思ひつきでした、思ひつきが好くても、此れだけ話を活かす手腕がなければ徒勞でしたが、實に聞き上手、否話上手でせう、斯う云ふ方は始終人の言ふ事や爲る事に氣を附けてゐられるのでせう、それでこそ此のやうな妙文が出來上るのです、四篇の中、二、三、は殊に話が自然ですから生氣がある、四は話よりも事柄で一、人を動かすのです（評）

四等 その翌日

しげ子

みね子さん、安心して頂戴、察して頂戴、私喧嘩して了つてよ。あられもない憎まれ口――愛想ずかしをさん〴〵云つて眞青に怒らせて了つた



（四等）めし屋の裏　張津とよ子

の。あゝあなただけは察して下さるだらう：思ふわ。嘘ぢやないのよ、ほんとに喧嘩して別れたの。だけど私家を出る時から喧嘩するつもりぢやなかつたのよ、だからこそ往きがけにお寄り申た時、あなたは泣て下すつたわねえ、私もあんなに泣崩れて了つて、いよく〳〵といふ其塲に望み、其人の顔を見たら、とても〳〵物の一つも云へまい――とあなたも乾度さう思つてゐらしつたでしやう？、實際屠所の歩みて電車の中なんかまるで夢中だつたわ。往つたらもう先へ來て待つてゐたの。顔を見た時は、さあ何と云ひ出したらよからうかと、それを考へる心が忙しくつて涙などは何處かへいつて了つたわ、が――まあ幸にと云ひましやう――向ふから「おめでたう」と切出したぢやありませんか？　いつになく髯のもし〳〵生へた口もとに冷い笑を浮べて。それから後は察して頂戴云へないの、ぢやない覺えてゐないのかもしれない。てどうした動機で喧嘩などしたのだと仰てしやう、それも覺てゐやしないわ、いつもさうなのよ逢つた時は。二三日經つと漸々薄紙を剝ぐ樣に思ひ出せてくるの。あゝ「いつも」などゝいふとまだ後がある樣な氣がしてしやうがないわみね子さん。

何だつてあんなに怒らして了つたんでしやう？、どうしてまああんな憎まれ口がきけたらうと、それはつかり、昨夜は却つて夢中でしたが今朝目が覺ると直ぐもう胸に突き上て、いくら考へても〳〵どうしても解らないの。そりやねえ、例のシニカルで隨分こたへる事も云はれたんですけれども、それは素より覺悟の上だし、何を私が怒る權利があるでしやう？、けれども私――負惜みぢやなくつてよ私ねえ、割合に後悔してゐないのよ、だつて私達の戀はもう三年になる事よ、其間に何の變化したでもなく進歩したでもなく、逢つたり別れたり悦んだり悲しんだり、至つて平凡な單調な足取で三年といふ月日を踏で來たんですもの、私は憊れて了つたわ――戀にぢやなくつてよ――。そして時々緣側の柱などにもたれて、から目を閉つて自分の心を眺めてゐると、二人の――二つの魂が廣い〳〵枯野原に追はれ出て、吹寄せられたり離されたり上つたり下つたり、いろ〳〵な物と戰ひつかれて、遂には意氣地もなくグシャ〳〵ッと萎びて消えて了ふ樣な氣がしてしやうがなかつたの。

今度の樣な問題の起る事も餘期しないぢやなかつたし晩かれ早かれ此はかないナニの解決を迫られるのは知

てゐたけれどまさか——、まさか喧嘩をして別れやうとは思はなかつたわ、噫？

それて——何てしたつけ、さう〳〵、私後悔してゐやしない事よ、グシャ〳〵と萎びて消えるよりはましかと思つて。

かう云つたら、まあ驚いた單純なラブだと人は思ふてしやうさ、彼人もさう思つてゐるかもしれないわ、ねえ、さう思つてゐるわきつと。どうしませう……。もう彼人の瞳底に殘る私の姿は、濃い血を盛つた若い女ではなくつて、汚らはしい恐ろしい憎いとも憎い惡魔てしやうよ、あゝ惡魔、惡魔、己れを窘しめる惡魔なら誰だつて——あなたゞつて憎い！と思ふてしやう、どうしましやう〳〵。

しかたがないわ、いゝわ、憎いとても何とても兎に角彼人の心に印象を殘したのだから。ほゝゝこんな事云ふといよ〳〵ほんとの惡魔みた樣ねえ、てもあなたゞけは同情して下さるてしやうねえ不幸な我々の戀に。ほんとにあなたにも種々御心配かけたわねえ。其不幸な戀は昨日花々しい最後を遂げちまつたのよ。安心して頂戴！。あゝ頭が痛い、今日も雨ねえ。

女も斯う云ふ風に理性が勝つてきて、自分の戀を批評し、判斷するやうになつた、此れが現代の女性の半面てあることは確かだ、それだけ男子から見て神秘的の領分が少くなつてきた、女子の爲に賀すべきことか弔すべきことか知らぬ。但し此文章は評するまでもなく溌溂たる生氣あり、鑑賞を博すべき文（評）

筆子

四等　冷血

新作家

（一）

私が野島さんと連れ立つて、展覽會へ行つたのが恐ろしく栗田の感情を害した相に。一躰栗田は十八の年から私の父の世話になり、某醫學校に通つて居た、父は其無骨な書生氣質を愛して、やがて私と配遇せ、養子にと云はないてもなかつたが、私は其等を殆ど念頭に

置かなかつた。
それて栗田は、むつゝりと、考へ込てばかり居たが、或る日、私は裏の野路を徜徉て居ると、後から栗田が遣つて來てせか〳〵しながら、
「綾さん、貴女は實に冷い人だ」と突然なので、私も迯ひ、「冷い人ても可いんてすよ」と云ふと、
「何に!!」吃と險い眼をしたが、急に冷笑的態度で、
「野島君は僕の樣な、居候の厄介者ぢや無いですからな、金はあるし、スタイルは可し‥‥」
「那麼事を云つて、野島さんは貴方の從兄ぢやありませんか、それが奈何したんです」と唇をそらして突掛ると。「だから綾さんの氣に入ると云ふんです」と向も鋭い聲て云つた。
「さうてすか、ほゝ」私は平然として嘯いた、すると栗田は眞赤になり、口をむづ〳〵さして居たが、
「僕は思つてるてす、伯父樣の仰有つた事を‥‥永い間忘れた事は無いてす」と顏の色を伺ひながら、私の心中の何事をも讀み盡そうの眼付に、轟く胸を殊更冷靜に裝へて、「阿父樣が仰有つた事つて‥‥」然しながら戰いた言葉尻。
「貴女の心に聞いて御覧なさい、僕なぞ奈何せ貴女の眼中にはないのですからな、」
私は嚇と熱つた頰を押へて俯向いた。足下の緑の地面と靑い天とは宛も、遠く接するかの樣、而して何處ともなく花の香が漂ふて來る、非常に長閑な日だつた。
私は思ふ、それが公然の契約ではなし、何故這樣な些細な事を執拗く、栗田は追及するのだらう、而して私が野島さんを戀してゞも居る樣な口吻、單に異性同志の交際をば戀だとばかり、早合點の何といふ劣等な根生だらう、奮然と顏を上る途端、彼の鋭い視線とぴつたり逢ふや思はず逡巡となつて、
「おや奈何するの、私まだ戀なんて知らないのに、强ひたつて無理ぢやありませんか」
「戀を知らない!! ふゝん」と笑ひ、「冷血動物にや解らんてしやうよ」
「えゝ解りませんとも」私は腹立しさに荒々しく歩を移した。と、又栗田は追ひ掛けて、「貴女は奈何しても厭なのですか」脆くも本音を切り出した。
俄然ある誇が、私の心にぐつと擴がつた。て反對に冷笑を浴びせて一瞥すると、
「あゝ詰らん〳〵」と太息吐く栗田に私は遂々一言をだに答へなかつた。折柄白い蝶々が二人の間を飛んで

居る。

（二）

其日の事は誰にも話さなかつた、栗田も無論知らぬ顏、相變らず机の前に座つては居るけれど、敢て其教科書を讀むのでも無い。或る時、春水の梅暦が乘つて居たのは、實に前代未聞の現象で、且又私や野島さんを見る眼が一層嶮はしく成つて來た。

兎角する内、それでも栗田は學校を卒業した。此上の目的は大學の專科へと志したが、何分實家の財政が乏しいので、私の父は其學費を出そうと云ひ出した。彼は非常に喜び、猶今後の方針に就き一先鄕里に歸つた。其跡で父が又養子問題を、復活し始める都度、母と私は厭な顏をして早くも話をそらせて了ふのであつた。其後一月餘を過ぎた夜、突然栗田は歸つて來た、挨拶もそこ〳〵に、「伯父さん」と父を呼びかけ「實は僕の一身上に就いて御相談に上りました」

「ほう、大事件でも起つたかな」と父は串戲らしく云ふと、「え丶何てす、私に國に養子の口が出來ましたのて……」

「馬鹿なッ」と父はさへぎつて「それなら相談には及ばん」「え丶？」と其解し兼た顏に、「ぢや養子に行きたいのか」餘り父の聲が大きかつたので、母も私も凝と栗田を注目した。

窓を洩れ來る薄月夜の、表通りを新内の三味線が遠く近く聞ゆるのみ、春ながら靜かな晩だ、栗田は堅くなつた、洋燈の火影をば見詰て居たが、「僕は何てすけれど、兩親や兄が非常に進めますし……それて伯父さんの御意見は……」

「俺か、俺なら大に不賛成だ、考へても見るが可い、折角茲迄して、今更田舍へ引込むとは何の事だ」

「本當てすねえ、何かえ養子先と云ふのは矢張りお醫者さん？」と母が尋ねると、彼はそれを待つてとも居た樣に、「いえ、長野縣の多額納稅者てして、農家てすが十萬圓以上の財産だ相てす」思ひなしか、得々と私を流眄にして答へた。

果敢ない戀に報ゆるの手段が、萬一此結婚の動機てはあるまいか、忽ち私の胸は騷ぎ初めた、むら〳〵と嫉妬が湧くと、一方から疑念が出る。あの栗田が十萬圓の主人――多額納稅者、本當に栗田か……私は幾度か繰り返した、而して、混亂かつた頭腦から、侮蔑若くは冷笑を以つて、一縷の反抗心を引出そうと惴つたが、最早、私の虛榮心は充分に刺擊された、て弱い心

は既う忿怒と嫉妬が、シナイ山の律法の火よりも強く炎え上つた。

「那麼薄弱な意志で、奈何する！」邪見に煙管を叩き付ける音に、はつと私はシナイ山の火雲を脱すると、父はさん〴〵の不機嫌で、其前に栗田は悄然と俯向て居る。

「父や兄が何と云はふが、自分の主義が立て通せん筈がない、生涯の運命が定まる重大な事を、兄に泣つかれたゞの義理だのと那麼、詰らん條件で目的を捨てゝ養子になる……馬鹿らしい、俺は君を見損なつた、一體此度結婚して見なさい、既う世間に栗田の存在は認められず、永い一生金の番人で終るのだ」と父は猶、滾々と其養子たるの不可能を説くと、栗田は「然し私は金の無い爲に、非常な耻辱を受けたです」這樣な事を云つて、又父に怒鳴られた。

結局不得要領の内に、栗田は暇を告げる、何故泊らぬと聞いたら、連れが旅宿に待てるからと云つた、父はそれて一層厭な顏をした。

（三）

翌日、栗田の連だといふ、立山と名乘る男が尋ねて來た。用件は例の養子の話て、それは栗田の語つたのとは、大分相異して居た。當人が第一進んで居ると云ふし、加之に結納迄取り交してあるのだ相て、栗田は永年世話になつた禮を昨日云ひ、且又別れに來た處があんな具合で遂々歸つたとの事。右の理由だから此方でも當人の爲に、清く承知が願ひたい、全く今日迄の御恩は彼も深く感謝して居るし、今回仲人たる自分も厚く御禮を申上る、又色々お立替へ下すつた入費萬端は、御返却しますからと、くど〳〵云ふのが又しても父の氣に障つて「失敬な事を仰有るな」と先づ一喝し重ねて「俺は恩を着せる爲めに、栗田の世話をしたのぢやない、今更何も云ふ必要も無いのですから、唯栗田の前途を祈りましやう」と云ひきつて、染々歎息を洩した。暫らくして、其男が歸ると入れ違つて野島さんが來た、そして此の話を聞くや小首を傾げて、「へえ、彼村で十萬圓の身代」と打案じたが、うむ元山の娘かと、ポンと膝を打つた。

「君知てるのか」と父は氣の無い聲て云ふ、私はぐつと片唾を呑んで野島さんの顏を見上た。すると薄笑しながら、「知つてますとも、評判の墮落娘でさあ、栗田君も金に眼がくれたかな……」

「へえ、ぢやあ掘物てすか」母は父と顏を見合はせた

野島さんはちらと私の方を見て莞爾とした。

私は一人痛快を覺えたのである。

栗田の憐むべき復讐は、かへつて苦痛となり、彼の生存へてあらん限り、破れたる初戀の印象を止めて居るだらう、

其十萬圓——疵物の娘。

私は滿足な笑を浮べると同時に、吾が穢れなき處女たる事を思ひ至つて、自ら粛然として、形を直した。

題材は甚だ陳いけれど、女主人公として描かれた綾さんと云ふ人は現代的である、書き方が少し荒いやうて、今少し細かい心持を表はしたら好かつた、併し此の君は何より彼より小説がうまい、書ける筆を持つてゐる（評）



（五等）　木のもと　下谷　佐野貞子

四等

離れ行く靈

菊池りう子

兄樣と私とは向ひ合ひに炬燵に入つてる、こういふ異郷の空て而も兄樣は廿一、私は十八の共に青春の血潮湧き返る年頃を、此な憧憬の多い話をし乍ら、一向に互の胸に波もたゝず、二人は別々の考を抱いて、別々の道を歩む樣な、此な寂寞を感じ樣とは思はなかつた。塀の外の直ぐ路地を兵隊さんが 此處は何處ぞあきの國幼き童や老人が船こぎよせて仰ぎ見る、物思はしき其樣は——」と後上りのどら聲を張りあげて、サク〳〵サクと、積

つたらしい雪をける、兵隊さん特有の靴音は漸々遠くなつて了ふ。豆腐屋の鈴がガランガランと師走空の乾いた空身に響く。私はむくむく綿の脹らんだ花模樣の掛蒲團の上に顏を埋めて了つた。凝と頰を摺りつけると緩い溫みが肌に傳つて何だかこう茫々して來て夢の樣に幼い〱昔からの追憶が目の前にちらつき出した。私と兄樣とは四つ五つの時から其は仲のよい兄妹て近所での評判者てあつた。私の幼い時は始終お稚兒に結んで居たので、亂暴な田舍の男の子供はよく目をつけて石をぶつつける、そして私が泣き相になる時いつてもあらい絣の筒袖を召した兄樣の姿が橫町からとんて出て、私を救つて下すつた。そんな事が度重なるので、私はどうして兄樣がいつてもこんなに折よく來て下さるのだらうときいたら、兄樣はいつでも稚兒輪姿の私が校門を出るとみえがくれに後をつけて護衞して下さるのだつて…それをきいた時は幼な心にもしみ〲忘れ得ぬ程謝した。そのころ私の友には丁度兄樣位の兄のある人が澤山あつたけど、其等は皆他の男の子等と一緒になつて妹達の通ふのに、砂をまいたりしていぢめるものだつたのに――。一體兄樣は其頃からごく物優しい質て母樣等のお病い時には御自分が貰つたお菓子も其儘持つて行つてあげる位なお方だつた。其に私といへば女にしてはちと意地張りの頑固な方なので、他の兄弟方ならば頭の一つもはりとばされる所を、只の一度もそんな事はなく、私が母樣から何處へでも行つて了へと、叱られて、お土藏の廂で泣き乍ら、十五夜の月の樺色して大きく〱上りかけるのを、云ふ樣ない寂しい心で眺め乍ら、餘り月が大きいので化けるのじやあるまいか…抔思つては又啜りあげてると、兄樣がお菓子を持つて來て靜に慰めて、母樣に佗て、寢かして下すつた事もあつたつけ。だん〱年を重ねて、物心つきそめてからは、二人は又、今迄にない一種の情愛が胸から胸へと流れて、春は朧なる月下に、秋は星明けき野に歌集抔抱き、手と手を握り合つて語る事が多かつた。そして二人はいつか同じ文藝の道に傾いて居つた。父母樣さへ時折は、何の因緣て此子等はこんなに仲がいゝか――と仰有つたし、近邊の同じ年頃の子等の親達はお前達も少しはあの孃ちやんや坊ちやんの眞似もするんだとさへいはれてた。兄樣が中學に入られる樣になつてからは一週間の別離を悲しみ、相思の歌は絕えなかつた。二年前、兄樣は十九、私は十六の晚夏、兄樣が烈しい脚氣て、暫く山里の湯の宿に日送り遊して、久振りに歸鄕遊した時てある。私は包みきれぬ喜悅を胸に溢らして車の止つたのにかけよつて、兄樣…と見あげた刹那、其頰の餘にやせて靑いのに淚がほろほろと。曇る瞳て見

あげると、兄樣は車からとび下りて、柳ちやんとしつかり握つた手に涙が——。そして二人は父母樣に只今もせず、四疊半の私の室に入つた室の柱にはアラビアンナイトの油繪と、兄樣の御寫眞が。兄樣は其柱にお靠れ遊して私の顏を凝と見つめられる。「あのね兄樣、私ね、淋しかつた、此夏は、だつて兄樣と離れてたんだもの……「ほとゝぎすよう なく里に 住みませる君ぞ戀しき雨そゝぐ日は」拙いけど私兄樣を思つて——。受けて下さいな、ね兄樣」とお膝に兩手を重ねて私もぢいとお瞳を仰いだ。つと人を醉はせる樣な强烈な木犀の香が——。兄樣の瞳は次第に輝いて、御自分の兩の手を私の兩の手に重ねて固く抑へた儘、(譬かの御瞳の中に我あらば戀にも活きじ名譽にも活くまじ)柳ちやん!全く僕はお前とこうして永劫に居られゝば戀!そんな戀なぞも僕は欲せん柳ちやん僕は幸福だ……」「兄樣!有難う、私も、兄樣とさへ……。あの西洋の詩にありましたね、弱い病身の兄樣が失戀して山に入つて創作する時に妹も共に入つて助けたつて……。兄樣私も、どんな事があつても兄樣とは離れませんわね、兄樣と離れるなら何處にも——私いや。一生獨りでこうして兄樣と一緒に——」「あゝ柳ちやん僕も僕も元より生涯獨身で淸く美しき生を保たう、ね、柳ちやん!」「兄樣!」「柳ちやん!」二人は相抱いて純潔なる若き想に耽つたあの時!世も名も何物も二人の前にはなかつた。只無垢淸淨なる可憐の友愛!「あーあ」と叫んだ其聲にふと現在の我心に歸つた。恐ろしい物に向ふ樣な心地して私は顏もあげ得ない。二年振りの對面に然も、眞萩白萩こぼるゝてふ宮城野原で相抱く其際は互の熱情が燃えたつて——いふべき言葉を見出さず只ひた泣きに泣くのであらうと想像しつゝ來た。兄樣だつてそうだつたらうものを——。それに二人の瞳が相合つた時、直に二人の心は遠く別々の道を歩んで接近しない樣な感じがした而して瞳に浮んだ涙も以前の如く、純潔な只相思の涙ではなく何物か交つてる樣な氣がした。こうして炬燵に入つてから二時間以上、兄樣も私も殊更昔憧憬れた詩や歌の話をするけれど夢みる樣な情緒が搖がない、遂に二人は平凡な世間話に移つて居た。「二人あらば戀も名も入らぬ」と誓つてから僅二年。兄樣も戀した……。け共互に秘め合てる、互に知りつゝ。うちあけてうちあけて失戀の佗しい二つの胸を……。語り合て泣いたらよさ相な物を……。私は幾度か云はふか……としたが。兄樣もそんな樣が見える、けども二人は飽迄も包み合てる——。噫終に終に二人の心は離れる、瞬間瞬間に二人の胸は左と右とに步み離れる、何物だらう!一つなりし純潔なる胸の眞中に溝をほつて隔てたの

は…。「あーあ如何しても再び歸らないかなあ」と我知らず聲を出して大きい吐息をついて、はつと思つて肩をすぼめ尙更顏を深く蒲團の中に埋めた。と、兄樣が「世の中に眞の同情つてない物かなあ」と是も思ひ餘つて我知らず發した、投げ出し聲て…ふいと襖をあけて出てゆかれた。此時私の頰には初めて冷い涙がぼろ〳〵零れ出した。何と申ませう、絕望！悲哀！なぜこんなだらう、齒痒い！眞の同情とは…いやな今迄しつかり握つてた寶を放棄して了つた樣な、なぜいやな氣もする。け共兄樣も私と同じに社會の冷遇に沈んだ心を私によつて慰め樣と思つて居らしつたのを…そう思へばお氣の毒な。二人は餘りに淸く美しき無垢なる心をもて世に人に交つて、其初らしい心の芽をもみ落されて、互に掛けて僻んだのだ…。嗟こうして居れば刻々に私と兄樣との情は薄れて行く、靈は別々の處に持ち運ばれる。何うしたらいゝだらう、何故元の通りな、美しき情愛、一の胸に歸れないのだらう、嗟！こうして十年目の會合の時には二人は他人よりもまだ冷たくなつてるのではあるまいか――？

今回の應募作中、感情を主とした文章では殆んど此篇が首位を占めてゐる、微塵も雜血を交へない純の純たる若い女の文、何物にも支配されず、只生れたまゝに溫められた血が通ふてゐる、たゞ弱く、たゞ淸い、更に銳いところと、更に深いところが出來てくるやうになれば、作家たる素地も養はれるのである、これは未だ作家たるには餘りに若いのだけれど、而かも他に見るを得ざる抒情詩的散文だ（評）

五等

温泉の宿

秋草女

その晨。湯から歸つて見ると室には誰れも居ませんでした、溪に面した方の障子が一枚開いたまゝ。其の間から若葉の山が見える、若葉と言つてもまだ、ほんとうに軟かな、芽を開いたばかりの、ごく靜かな微風がそよぐ毎に葉は裏がえされてきらめき光るのです。爽かな、例へば薄茶の味ひ――と言つたやうな空氣は室内を流れて火鉢においた鐵瓶が微かな音をたてゝ優しい湯氣を吐いて居ました。そのまゝ廊下へ出て見る

と友はそこにたゞ獨り、あちら向きになつて畑と町の上を見渡して居る、湯上りの熱した肌を山上の朝風に弄らせて居るといふ樣子て、美しい、しなやかな掌を欄干にのせたまゝ佇んて居る。

すつきりと柔かに晴れた空を靜かに風が流れて、十里二十里の遠い山々が皆東へ向つて朝日を迎へて居ます。

浴衣に細帶などゝいう姿て、早く湯槽へ身をなげて魚のやうな快樂に耽りたいとばかり、欄干に倚る二人の前をいそ／＼通る、若い娘や老いたる人。その人達の後姿にも目をやつて、暫らく語りました、湯澤川の水音は靜かにきこえて石を越して流るゝ響までかすかに耳に入りますので……。目をあげると遠い景色は漸く煙のやうに霞んて來ました、日は赤城の山をかなりに、離れて。

＊　＊　＊　＊　＊

その夕べ。溫泉神社の階段をのぼりつくすと、平な境内てす、櫻はもうちりつくして、色褪めた、花片まだ梢に殘つて居るのが一片二片、ほろ／＼と風なきに、散る、落花を踏んて樹蔭を逍ふと春はまるで謎のやうてす、榮華と凋落と、歡樂の夢のさめたあとの寂寥とが一つになつて空に漲り地上に漲つて居ますする。

日はもう沈んて暮れがたの霞の群が集まつて、樹蔭も谷も黃昏れて來る、さらぬだに靜かな山上は一層ひつそりとして來ます、それをしんみりと、物を思ひながらさまようと、物の哀れが胸に湧いて來て、うれしいやうな、そして又、かなしいやうな、懷かしい思ひに思はず淚がさしぐまれる。

これが「春の愁」とでも言ふのでしやうか。

＊　＊　＊　＊　＊

二三日してとある夕べ友と溫泉神社の椽に腰かけて語りました、しつとりとした空模樣の水をふくむだ重い空氣に葉櫻の心地よい匂ひが波のやうに流れて居ました、空想を誘ふやうな鳥の聲もない靜かな夕てす暫らくして。

「歸らう」として立ちあがつた私達は社を廻りました、其の時、風采にかまわぬやうな若い西洋人が樹蔭に佇んて居るのを見つけました、やがて步るき出す。規則正しい步るき方ながら、何となく憧れるやうな、夢心地の目つきてあちらこちらの景色を見まわしながら來る有樣は、何だかから、戀の捕虜てす、活々した憂鬱と言ふことが出來るなら此の男の目つきのそれてしやう。

あゝ何處の國から海を渡つて來たのてしやう、寒い樺の林の中の村落からてしやうか、それとも、暖かい南歐の都からてしやうか。明るいという視覺や觸覺にな

ちされた暖かいといふ感じの戀しさに、私はいく度、南方伊太利の風土を夢見たてしやう。私はその人と話して見たいやうな氣がしました、樹の間から見える郊外の眺望は急に明るくなりました、夕榮です。遠い山々は紫。一團の白雲は靑空を急いで赤城の方へ流れるやうに進んで行く。春は逝くのてしやう。あゝ此の山上の町。遊覧の客にさまざまの物語があるてしやう春の夜の月の興にたえかねてミカドの國の美しい少女を南方伊太利の少女が情けにもまして別れがたいと思つたもあらう。さういふ、果てしないうかれ心を抱いて親しい友と、懐かしい母と、春の光の滿ち渡つたこの山水に逗遛して靜かな春の興を味ふ私達は何といふ幸福てしやう。

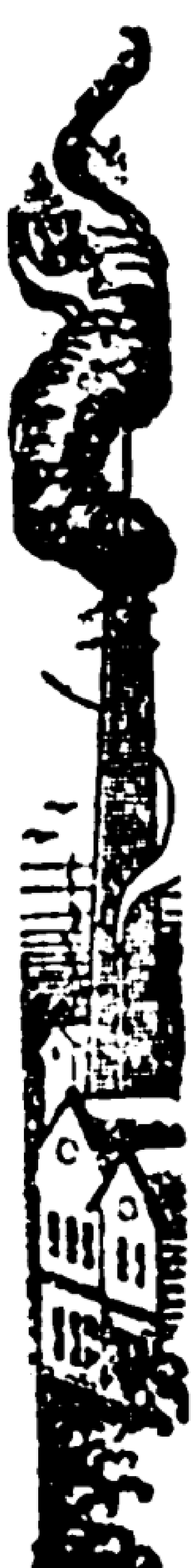
明るい灯と、冴えた弦聲と、哀れげな音律と、互にとけ合つて疲れた神經にふれ、腦に泌みこむて。自然と睫もうるほうて來ますあゝ旅藝人が美しい肉聲て唄ふ歌の曲、その中の人物に同情したてもなく、たゞ、深沈な柔さしい思が胸に湧き上つて魂はゆらゆらとさ迷ふ。自分ながら自分の身が哀れなやうな、所在ない感じに私はつと立ちあがりました、春の夜のはしやいだ笑ひさゞめき、華かな灯のもれる客室の前を過ぎて長い階段をのぼりつくした時。あゝその時。私はどんなに「孤獨」…を感じましたらう、戀よ、名よ、富よはた親も故郷も、友も、たゞ世の中は假であつて總て

が一時のまぼろしに過ぎない――。私は室へは入るとそのまゝ身をなげ出して乳房をかゝえました。

あゝ何物にか憧れ、何物をか慕ふのてしやう。いつそ若い身の夢を抱いて南へ行く人や、枯草に弱々しい秋の日影を浴びて北國へ志す漂泊の群に交つて一生涯を旅に暮らしたらこれが氣まぐれてしやうか……。

優しい息吹が聞えます、友はもう眠つたのてしやう。顔は向ふへ向けて深く耳まで被つた掻巻の襟に油氣のない束髪が頽れそうになつて埋まつて居る、袖盛みにした着物と一緒に藤鼠の帶、腰帶の朱鷺色、帶あげやら帶どめやら、赤や紫に枕元は朧ろの灯影にさながら行春の落花です、あゝ此處も春は逝くのてしやうか。

名は變つてゐますが、「新美文」に「晩春の伊香保」を書いた人と正しく同じてす、華やかな草の匂ひも同じてす、若い哀愁と言ふたやうな感情を表はす事が甚だ上手て、文章の點から云ふと殆んど渾圓の域に入つたものてす、それにしても前の伊香保と同じ温泉宿を材料にし、事柄も似たことの多いのは、聊か智惠に乏しいと云はればなりません（評）



五等

海の日

新作家

男は默した。女も默した。
男の胸は熱く
女は冷い。——海の上
を風が吹いた。

海の波のやうな
荒んだ變りやすい心
情——
虚僞と、はかない誇
りと
——女は冷い白い息を
吐いて、
けろりとして居る。



（六等）春 水戸 北川うめ子

ほたる

男の眼は赤い。——
黒い魔法のやうな浪——
破れた心が——刹那の
執着に
獸性のやうな——
血が顫いて居る。

過去の夢み——美しい
幻覺に
男の誇りが、
餘りに弱い、ひらめき
てはないか。——
水のやうな女の眼——

強者だ！―勝利だ！―
波は嘔歌して居る。
けれども、男はいつまでも
默つて居る―執拗に
―暗い腐れた波が。
白い砂を嚙んだ。
赤い日の顫き―血のやうな凄い
光が、滲んで、吸はるゝやうに
沈んだ。

時―男は言ふた。
『悲慘なる執拗―
個性の自覺は
やがて獸性の眞赤な血だ。…―
僕の眼が赤ければ
貴孃の眼も赤い筈だ』―
顫く聲―男は又言ふた。
『戀が破れた―僕が破れのぢやない
―二人の存在は無だ。
魔法のやうな黑い波の叫び、
呪はれたる運命―
海は永遠の無ではないか!?―』
男は冷たく、泣いた。
海の日は赤い―
腐爛した生命―
女は青くなつてぶるぶると震駭た。―
眼が、始めて眞赤だ。

恐らく詩には造詣の深い人であらう、口語の形式を借りて居るだけあつて、思想は激しい、若々しい、併し今まで文語の詩も多く作り、多く味はつた人でなければ言へないやうな處もある、一概に世の模倣者流と同視すべきではなからう（評）

五等

假面

秋山欣子

庭へいらつしやらない？久し振でテニスでもしませう―暫して私がいつた、「そう―ねえ―」氣のなさゝうな返事して、それでも椅子を離れた幽香さんの、飽まで憂愁を粧ふた假面、私は一思に剝いてやりたかつた、

肩を並べて歩きだす、南庭の四年級の敎室の窓際に、咲きおゝる櫻桃が澄んだ薄翠の空にはえて、袷の肌に風ひや〳〵と心地よい晩春の夕方である、花かげの雨

に朽ちたペンチへ、白い絹ハンケチを敷いて幽香樣は腰をかける、默つて空の一方をみつめ居る、私もかけた、どうも御話がはづまない。

「あのう、」だしぬけに幽介樣お十八番の意味深いこゑで「あの－何年の頃だつたかしら、こう、しめ〳〵と春雨が降つて、このゆすらが露じめりして一層美麗だつたのを、この、」と振り仰いで「窓へ二人倚つて見ながらいろ〳〵お話した事があつたと思うわ、」表情に富んだ瞳を動かしていふ、貴女は薄情よ、もう忘れてる――實際私は泣きたかつた、それは私が三年の春、學年試驗がすんだ頃、雨の日の靜けさに、二人皆に冷かされながらあの窓際で、將來の事まで語り合つたのだ、私は一日も忘れなかつたのに。其時幽香さんは四年生、作文はいふに不及、言葉から動作までがすつかり、何といつたらよからう、氣取つた樣でどこかお品が佳くといつて溫順しい方でもなく、折々奇拔な論なんか吐く、一躰に不透明な人であつたつけ。

「もう私いつそ死んぢまはうかと思ふ、」思ひがけなくこんなことといつては、田舍出の氣の小さい私を吃驚させる、當時私は級の人から、「あなた吉野樣のディヤになるのは考もんよ、」「冥想家のお妹樣どうぞ確りなんて始終浴びせられて居た、けれども年のいかぬせいか、ぽつと出のせいか私には何の事やら分明なかつた二三度は級友にも訊いたけれど、「今にお分明になつてよ」と許り、誰も笑つていつてくれない、强いて訊ねる氣もなくて、それなりけりになつてるうちに、そろ〳〵よめて來たいつだつたかも、

「私ねえ、一生獨身と決めてよ、」いやに笑ひながらいふ、もう度々なのでまたかと思ひながら濟ましても居られないので、「何して？」重々しい口調てきくと「貴女だからお話する、」癖て前置して「もしか私がまりつちすればねえ、ある二三の人の胸を終生空虛の閑にする理由なんてすもの」沈んだこゑ。又始めた、と冷やかに「そう、そりあお氣の毒ね、ぢや獨身がいゝわ、きつと好くてよ、こう始終お好なピアノでもなすつたり、折々は新らしい時代小說でも執筆なすつたり、そりあ理想的だわ、閨秀作家吉野幽香子女史――！」何も惡氣でいつた積ではなかつたのだけれど、幽香さんはフイと横むいて足早に去つて仕舞つた限り。

それからはあまり口もきかない、結句氣樂だ位に思つてると、去年、幽香さん達の卒業式の夜、寄宿舍全躰ての夜會がやう〳〵濟んだ時、廊下てバッタリ、私は

接待係で忙しいのを無理に、眞暗な裏庭へ引ぱり出た。手を固く握つて散りかゝる紅梅のかげ、澄さん、いつた際は、それは力が籠つてる、私は何かしら恐かつた「あなたばかりは私の心を知つてゝ下さるわね、」闇に朧な顔をかしげてこういふ、涙ぐんでると思つた、氣がしれないので默つてると、「皆様が二人が親しくするのをいろ〳〵いふから貴女いやだつたでせう、けども誤解して下すつては不可くてよ澄様、私はねえ、私自身の見た私といふ人間はねえ、さう惡くはない樣よ、」

「あら、何も私誤解なんか、」思はずいつて仕舞つた、

「有難う、貴方がそういつて下さればもう、それて滿足、」喜んで首途につかれてよ、暗い幽しい一人旅の、」すゝり泣いてらつしやる、堪らなく可愛想になつて、

「それぢやいよ〳〵、」「えゝ獨身て、美的生涯に入る積なの、けどもちつとも幽しかあない、辛くもない澄様がある以上」凝と手を握る、眞情が溢れて私は思うさまないた、泣いてこれまでの無情を詫びたつけ。

卒業すつてからは離れてる懐かしさに、いろ〳〵の文句を書き合つた、よく不平ばかし溢してる人て、尤例の、こんな人に有勝な誇張の筆が手傳ふのはいふまてもないが、いつかなんか「貧乏官吏て何事も時計的な父と、舊思想の奴隷として好模型な母と、不活潑な中學教師の兄、裁縫に日もこれたらぬ無趣味な兄嫁との間に、平凡な、單調な日を余程送迎して、しみ〴〵悟つた、私は斷然文壇に立たう？冷死の手に往かう？夢にまで思ひわづらつて居ますよ澄さん、」こんな事いつてよこした、其時は私散々慰さめてやつた、すると一月程前突然、

「私が柔胸に咲く小い紅い花、啄ふとして爭ふ二羽の白鳥の爲に、私は涙を呑んで胸の扉を閉ぢた、其一は我好む鳥、けれど入るを免さなかつた胸の扉は再運命の鍵によつてねぢ明けられた、復活した光を浴びて白鳥は嬉しげに寄らうとした、けれど鍵を握つた大きい黒鳥は鋭目して追ひのけて仕舞つた、あゝ暮れゆく野末我胸の柔土に小さく咲きし紅の花よ——いま、いま、いま！甘い露を吸はれやうとする、あゝ苦しいわ澄様」いたましい薄黒の走り書を手にして私は獨泣いた。それからさつぱり御音便がない、獨もだへて居るとゆくりなく買物の歸さ、睦じい二人連に逢つた、懐しさに無理やり引張つて來て失望した、けふといふけふ假面を脱いだ眞の幽香様を見て、無暗に手紙に泣かされた自分の態度を嘲笑ずには居られない、針程の事

柄を棒大に誇張する女性の心事を怪しまづには居られなかつた、「吉野様、御免遊ばせ瑳珴様お髪が大變似合つてよ」佐戸や形のつや／＼しい丸髷をみあげていつてやつた「そう、」誇らしげに手をやる、忌々しいので、「けどもねえ其髷に結ふのはお止なさいな、空虚の胸を抱いて深い／＼懊悩に沈む人がどれ丈あるか」瑳珴様は望んで嫁つたと去る人に聞いて、例の手紙を疑つたのが、どうやら事實らしいので、急所をついた積で鋭くいふと、吐息して「私もとうと運命の手に捕まつてしまつた、」兩手で目を押へる、もうそんな仕料には欺れない、私は立て歩き出した、結婚の前日あらゆる血涙を絞つて書いたらしい手紙に泣かされた私は、同じ春の日、同人のこうした淺ましい態度に憤慨しずには居られなかつた、幽香様は追すがつて「澄様どこへ？」おろ／＼する　私は默つて一心にかけた、他人に心裡をすつかり讀まれながらもなほ僞らう飾らう、よりよく己を出さうとする態度を見るに忍びなかつたのだ、私は懸命に寄宿舍の應接室へかけいつて內からピタリ錠を下すと、グタリ長椅子に倒れざまわつと泣いた、何の涙かしらぬ。

追ついて暫すゝり泣く幽香様の聲が扉の外に聞えたがやがて先生方に歸るあいさつをしてる様子。涙を拭いて、そつと硝子戸をすかし、重さうに首傾げて悄々と校門を出て行く後姿を見送つた時、何かしら奇しく物足りない心地に、堪らず「幽香さん」小さいこゑてよんでみた。

島水君が『煤烟』の女主人公に「迷へる近代女」の面影があると云つたが、是も其一人であらう、或は虚榮であらう、或は假面であらう、或は眞實であらう、近頃、女性を描寫さうとするには此のモデルは必要だ、欣子女の炯眼を嘉みす（評）

霧はれて露となりける月夜かな　鹿兒島　峯元美佐子

藤咲いて姫四阿に編物す　仝

千金の笑顔短き夜なりけり　秋田　萩原蘭香女

浴して長き廊下や風薫る　仝

美しきゆめ幼子のひるねかな　福井　萩尾眞子

夕食をすまして春の暮れやらぬ　仝

カド提て徒歩主義の人町をゆく　土佐　綠敏子

熨斗つけたうと掛ており醫者の家　仝

ガタ馬車の轍に舞ひこむ櫻かな　美濃　篠野せい子

空想のはてしもあらで春の雨　仝

五等

秘密

白菊

（一）

もう暫時すれば卒業といふので寄宿舍では寄るとさはると將來の事ばかり語ひあつて居たものでした、大芝さんはお卒業になるとすぐなんてすつて」「へエ、速かなのね、そして何誰なの？」「何でも横濱に在らつしやる法學士とか、御覽なさいよ此頃のあの方の風つたらありはしないわ」「さう仰しやる御本尊ももう極つていらつしやるのか知やしない、何だか御嬉しさうですよ」「ま、可い事よ、立野さん記憶てゐらつしやいね、きん子さん、こんど仇うちするから加勢して頂戴よ」「ホヽヽ、後難恐るべしかもしれませんから、まあ嚴正中立を守りませうか」「まあ、きん子さんまでが、そんな事仰しやると、此間の演奏會のあの事を素破拔いてよ」「何卒御たんと、何も覺えのない事でございますよ」「まあ憎らしい、奥樣に御なりになつた時のお稽古に今から、そんなに御すましにならなくても可い事よ」なんてたはいもない事を云つては打ち興じ、さういふ座談の間にも行末の想像が幻の樣に各自の眼前に展開されて居たのです。

三年の時分仙臺から轉校してゐらつしやつた神田およしさんといふ方がありました、平素はごく口數の少いどつちかと云へば陰氣な、性質でしたが、それで何處かこう狂熱的な分子があつて、皆からは變人といはれて居ただけ、私とは妙に意氣が投合つてとう〳〵終には誰よりも仲がよくなつたのでした、休憩時間にはいつも二人で運動場の櫻の古木の下に佇んで夢の樣な話をして喜んで居ました。

てすから皆が夢中になつて、やれ外交官の軍人のと勝手な抱負をひろげ散らして居るのが可笑しい樣で、やつぱり皆が騷ぎたつた卒業前も櫻の下でテニソンの詩を誦じて居ました。

或日、——それは空がどんよりと曇つて、何となく愁

ひの氣のみちてくる樣な日でした——およしさんはふと私にこんな事を云ました、場所はいつもの櫻の下でした、樂しい交際も卒業證書を受けると同時に葬られてしまふのでせうね」よく奇問を出したがるのはおよしさんの癖でしたけれどこれはまた如何いふ意味なのか、私は一寸吃驚しました。

「およしさん、それや、人の心は種々ですものね長年一所に交つて居ても卒業後いろ〳〵の境遇や何かで絶交同樣になる人もありませうけれど、でもまた以前より親しくなる人もあつたり、一概に交誼を葬るの何のといつてしまふのは酷よ」

およしさんの顏は其時大變蒼かつたと思はれました。

「環さん、あなた一生御友達になつて下さつて？」聲はもう曇つて居たのです、「およしさん、私の心は……御わかりになつてる筈よ」といふと、「えゝ、でもね、でも私には秘密があるのですよ」といつたなり袖を顏にあてゝおしまひなすつた、クッキリと白い襟足を惜しげなく現



（七等）　長閑　紀伊　稗田みつ子

せて、身躰をふるはす度にかんざしの蝶がエラ〳〵とする、「およしさん、およしさん！」私はたゞこう言つて脊中を輕くたゝきました、「環さん、私いつそ御話しまいと思ふのよ、打ち明けてまた、貴女といふ一人を失ふのがつらいから」高ぶつた胸だつたとは、身躰に傳ふ動氣で知れました。

漸く、いろ〳〵に言つたので話しだした、そのおよしさんの秘密はこうてした、およしさんの眞實の御母樣といふのは何ても賤しい婦で、およしさんを生むと間もなく他所の男の人と逃げて行つたのてす、――およしさんはこの事を話す時どんなにか耻しがつて、口惜しがつてゐらしたてせう――何ても今は仙臺のづつと田舍に居るといふ事て二三年前まだ御よしさんの御父樣が生きてゐらつしやつた時分は消息も知れて居たのださうてす、ところが去年ふと其婦がおよしさんのうちを尋ねてきて、――もう其頃東京てした――何ても大騷ぎがはじまつたといふ事、しかし何分もうおよしさんのお父樣は在らつしやらないのてすから、つまりは其婦も引き込む事になつたのてすけれど、其時およしさんには一人の妹がある事が知れました、昔およしさんの家を逃げた時もう胎つて居た子なのださうてす、ともかくまぎれもない妹なのてすから、見たい樣な氣もしたといつてらつしやいました、「母は生さぬ仲てすから父もあまりごた〳〵した仲に置きたくないといふので十三の年からづつと寄宿舍生活をしてきましたけれど、いよ〳〵卒業になつてしまひましたから……」悲痛ましいおよしさんの眼から私そつと反らせない譯にはゆきませんてした。

「お母樣は今は御獨り？」母の兄の家に一所に居ります、私も學校を卒業たら其處に居る樣になるてせう、日本橋の商家なんてすものね、」と寂しく笑つてゐらつしやつた。

「汚れた血を遺傳けたんだと思ふと、私今すぐ消えてもしまい度い、すぐこゝて大きな魔の手に奪られて人の居ない處につれ去られたらいゝだらうと思ひますわ、でも一日でも環さんの樣な平和な境涯になつて見て死に度い樣だし」

「そんな悲觀しい事仰しやるものではない事よ、今にきつと、きつと御幸福になりますわ、御母樣だつて、御やさしくなされはきつとよくして下さるてせうし、もう暫くの御辛抱てすもの」といつて慰めると、「私そんな御慰言伺はうと思つてこの事を打ち明けたのて

はないんですのに……」とうらめしさうに、「姉さんには御わかりにならないのよ、御解釋りになりませんとも、御うらやましいわ、私なんか……思つてみれば涙なんてやさしいものは涸れてしまつた人間ね」と引き入れられる樣な笑顔をして御みせなすつた、何となしに私はもうたまらなくなつて、

「およしさん、何にもならなくてもいつまでもほんとの御友達にして頂戴」といつておよしさんの手を堅く握りました、およしさんは無言つてにぎり返しなさいました。

（二）

卒業式もすんで私は家庭に歸りました、五年間の生活を思つては流石に此なつかしい記憶をあとに校門を去るのはつらうございました、夢の樣に樂しんで居た卒業も、いざと迫つてくるとみんな〳〵過去を云ひ出しあれからそれと、名殘を惜しんで、同情心ない人から視たなら氣ちがひじみたと思はれる樣な、有樣で、それても時といふものに追はれて各自自分の家にとわかれ〳〵になつてしまつたのです別れる時どんなに、御よしさんと名殘を惜しんだでせう、日本橋と小石川でははなれて居るといつてもわけのない事、これが遠隔別れるのでないだけうれしいと、せめてもこれを喜んで始終の便は勿論、暇をみて訪問しあふ事をかたく〳〵約して別れたのでした。

て、兩人ともよく手紙のやり取り許りして居ました、およしさんのはいつも胸がおどる樣なのでした寂しい事を書いてあるだけに人を引きつける樣で、動かす樣て、私はある時こう書きました、「およしさん、あなたの御手紙許り待つて居ります、あなたの御筆には何の御力がこもつて居るのでせう、「私は涙で涙をあらひきよめてしまひ度い」こんな御言葉をきくとたまらなくなりますの」

丁度みんなで、三月ほど經ちました、七月の半頃から御よしさんからの便りはふと絶えてしまひました、私は如何なすつたのかと心配で心配て、いく度も手紙を出しましたけれど御返事はありませんでした、きつと御病氣だらうと思つて、一度御たづねしやうとしたのですけれど生憎私も暑さに中たつて一週間程寢てしまひ、そんな事や何かてつい其儘にしてしまひました、丁度修一さんが金澤から歸つてまたうちにゐらつしやいました、修一さんといふのは義理の從兄に當るのです、金澤の學校にゐらつしやる前はうちから獨逸協

會に通つてらしたので二三年うちにいらつしやいました「もう卒業したんてすね」と入ると早々こう言つて暢びやかな笑顔をなさいました、急にうちは賑かになる、私も面白い御話相手が出來たのでつい〳〵忘れるとてはなかつたのですけれど御よしさんには御無沙汰してしまひました。

其暑中休暇は私にとつて長く忘れられないものとなりました、修一さんは金澤にまた行つて御しまひなすつてからも甘い追憶に私は醉つた樣になつて居りました、およしさんからは何のたよりも有ませんてした。

そうして居るうち其年も暮れて私は十九の春を迎へる事になりました、およしさんには年始狀を出しましたけれどもやつぱり何のお返事もありません、暮から日本髮に結つて居るので二月頃まで結ひ通しました、二月の、何でも梅が少し咲きかけた時分でした、髮結がふとおよしさんの事を云ひました、「御孃樣の御學校の人なんださうでございますよ」といつて、それはつい近くの或華族のお邸におよしさんが、榮華をして居るとやら、私は夢かと驚きましたけれど、やつぱりまぎれもない事實、私はおよしさんの爲に泣きました、如何かして一度逢ひ度いとばかり願つて居りましたけれど機會がありませんてした、そしてまた私は廿の春を迎へました、一度得た人を失つたやうに堪へかねて種々な事を想ひながら久世山を獨り歩いて、あてもなくたどつて居ました、と向ふから威勢よく走つて來た車のかけ聲に驚いて途をよけ乍らふと車上を見上ると姿こそ替つたけれどそれがおよしさんぢやありませんか「あらおよしさん」思はず此樣呼ばうとしましたけれど先方が澄まして行きますから、そつと横顔をのぞいたまゝ遣り過して、暫時車の去つた跡を見送りました。

「汚れた血を遺傳た身」「環さんには御わかりになりませんとも」卒業際のあの言葉を私は胸にくり返しました、逢つても一度話が仕度い、つく〳〵私はこう思つて數日後髮結にそれとなく樣子をきゝますと

「女の盛は短いもんでございますね、お芳樣よりづつと美しいのがまた見えましたんでございますよ、尤もお芳樣も在邸つしやる樣な御話でございましたが近々田舍に御いでになるとか、ハイ、御産でございますよ」私は何となしに暗い思ひに襲はれてそれより深く何とも聞く事は出來ませんてした。

およしさんの其後の樣子は絶えて知れません、たゞか

つて居た其お邸は忌はしい風評のある家だと知れました、およしさんの身の上も必然秘密に掩はれて居るのでせうあゝ秘密、それはおよしさんの生涯を通して離れさらぬものなのでせうか。

能く筆が走る、才氣も走る、人間に興味を持つと云ふことも、二通りあつて、始終人間の心持ばかりを味はうとする側、即ち詩人側に接するのと、人間の表面に現れてゐる動作に能く氣がついて、世間と云ふものは斯んなものと云ふ描寫に心がける側、即ち小說家側の人とある、此の作者は寧ろ後者に近い、個人と云ふことよりも、世間と云ふことに興味を持つらしい、書きぶりは一寸大塚楠緒子女史に似てゐる（評）

五等

愚痴を聞いて下さるのは母樣一人

みゆき

野山のけしきやう／＼とゝのひ東風にさゞめく女波男波は麗な春の調べをかなて、雪と白き根芹も老ひ初めました、御地は雪未だ深くお寒い事て御座いませう、ても、皆々樣お障りも被居いませんそうで何よりでございます、貞雄は始終御無沙汰許り致して居りまして申譯も御座いません、全く會社の方が多忙な者てすから、土曜ても七時より早く歸宅致した事が殆どありませんのですよ、四時頃に御歸宅なすつてお湯へても被居る同僚の方も澤山ありますけれど、私は人樣に比較は致しません、只心弱く生れました私、會社のお役に立つのを、少しても會社のお役に立つのを、歸りのおそい淋しさも、待つ間の長いのも忘れて喜んで居ります、そうですのにともすれば此半季限りしか此處には置いて下さらないて、後半季からは田舎詰にお廻し下さるとかいふ事を耳に致しまして、私は思はずほろ／＼と泣きました、本年は春からお父樣が銀行の重役におなりなさるし、兄樣が御昇級なさるし、義姉樣がお身重におなりなさるし、本當に好い事許りが御座いましたのに、何てよい年てせう、必然私共にも好い事がある、必然、必然、必然有ると信じて居ましたのに、貞雄が申ますの、五千人近い同僚の内で火のと

もる頃まで會社に殘つて事務を取つて居る者はほんの二三名、自分も其一人になつて自分の力の及ぶ限り勉めて居るのに、それでも未だ不足の處があつて田舍詰なんぞに、自分の運の拙いのだらうけれどと云ふて嘆きますの。

何も此地に居り度いといふのではありませんけれど人の心の意地としてかはれと云はれて、かはるのはいやですものね、それにおせじの上手な狡猾な少つとも用などしないづるける方を默つて置いて、と思ふと私は餘りの不公平に腹が立ちます、無論貞雄に落度もございませう、落度も御座いませうが、宴會でゞもなければ茶屋酒一つ飲みもしない人を、隨分です隨分だと思ひ升。しかし兎に角旅の者は一割も二割も損です、有志家を脊に負ふてる土着の人は仕合てす。あら又ぐちを申ました。でもこゝにはこんなぐちを語る人もないんですの、よし語つた處て親身になつて聞いて下さる方もありません、旅は憂き物と誰が云ひはじめた言葉てせうか、全くですわね、廣い世界に私のぐちを聞いて下さるのはお母樣一人、思へばお世話許りかけて居りましたわね。

先日春子が來ましたから御振込のかはせの事申ましたら、六圓食費、一圓月謝、一圓炭油料、一圓小づかひとを持つてあとは 姉樣預つて 置いて下さいつて申まして寄宿舍の方へ歸りました、此頃の肥え方つたら丸て豚てすの、如何してお前はそう肥えるのて申ましたら薩摩へきて豚を食べたからだつて。私と二人並びますと同じ姉妹乍らソマトーゼかヂアリンの廣告の樣ですよ。今日はぐち許り書きました、まだ／＼寒うございますから隨分御身おいとひなすつて、父上樣はじめ兄樣姉樣にも御躰お大切にと、くれぐれも仰つて下さい、さよなら。

かひ／＼しき新夫人が里の母に寄する手紙てすが、意も徹し、情も動いてゐます、捨れば一片の文反古ながら、生活の眞相は此處にも露はされてゐます（評）

六等

暗愁

內藤松園

「あなた、何處へ？」と夫人が訊いたら「山へ。」と許り此の家の主人が一挺の鎌を腰に、ぶらり、と出て行くのは毎日の事だ、夕方になると、「今日も亦一日、あても無く歩き廻つたといふ、樣な力ない足元をして、ひよつくり歸つて來る、蒼白い顔を火のない火鉢にもたせて、沈つと考へ込むで居るなどは、決して珍らしく無い。

今日は久しく積みためたお洗濯をと、毎日の退けよりは一時間も早う、急々と門を這入りかけると、



休息（入等）　小櫻　鈴木とみ子

「やあ、先生おかへりか。」と大聲。はつとふり返つたら、後には、かつて見た事もない笑をたゝへて、主人が立つて居た。

「まあ、お伯父樣、今日は大變お早い：：：」

「はー、見つけましたぞ、此れ、此の通り。」

何らかといへば、無愛想な、我れから進むで私等に話しかけるなどは、嘗てなかつた人の此の燥やぎ方、一時は氣でも狂れたのでは無からうかと迄思つた、其れも其の筈、示したのは白い粘土で有つたもの。

「其んなものを、何うなさいます。」と訊いたら、

「はゝ、未だ解りませんわい。」と心地好氣に莞爾々々した。

戸の口を這入るとどつかり。上り口に腰を下して、

「やれ〳〵今日は偉らかつた。」

と夫人の出迎へをうながす樣に。

その日は珍らしく主人の憂顔をみなかつた、立つても居ても嬉れしくつて居られない樣に、千鶴樣をうながして、門の草引きをしたり、私の洗濯桿を拭いて呉れたり、「早く夜になれば好いがなあ。」と西の空を仰いでは又莞爾。

一塊の粘土と主人の顔とを見比べては、不思議相に、而かも何處か穩やかなまゆを顰めたのは、決して夫人丈てはなかつた。

* * * * * *

締て切つては有るが襖一重、隣室の話は手に取る樣に聞える、

「ねーあなた、今日も亦催促を寄來しましたのですよ、これて最も二月にもなります、何うにか方法を附けてやらねば彼れも……」

「諾し〳〵、解つてる、今にお前達も樂にさせてやろ」ともう上調子な聲、

「千鶴、そのランプをな、二階へ持つて行くむだ、それから火鉢に火を入れて、鍋とあの粘土とを持つて來い。」

「あの粘土を?」「まあ。」

と聲をそろへて驚いたが、主人はその儘、二階へ上つたらしかつた。其の夜一時頃、私が便所へ行つたら、手水鉢の上に明々と明りが。仰向いて見たら二階は未だ、起きて居るらしかつた。

翌日、主人は起き〳〵御飯も喰べずに、又ふいと出て行つた。

其の翌日も翌日も、――、

「あんなものが何に成るので御座います。

と解せぬらしい夫人が問ふと

「左うさね。」と頭を捻つて、

「まあ、壁土位だらう。」と無造作に言つてのけて、嬉れし相に微笑て居る。

二

薄暗いたそがれを、私は千鶴樣と二人て、門とは言へ、今は麥や野菜を一つぱいに作つた、廣い畝の中に立つた。

未だ此の家が全盛の頃、幾棟の甍空にそびえて、辰巳

樣といへば近郷切つての富限者、其の昔赤松氏に從つたが嘉吉の變に破れて、世を百姓と忍んだ門閥家、以來五百年、地方の重鎭として威と德と並び仰がれた家系とやら、五十年の昔にはその堅固な家藏が取りこぼたれて、跡に麥や菜の花が咲かうとは、誰しも思はなかつたで有らう。聞けば先代が若死をして、今の主人の未だ幼ないのにつけ込むで、さる親類筋の人が心の儘に振舞つたのが元とか、庭にそびえた老松と廣く取り圍らした高塀とが、昔の榮華を語つて居る。

「此の冬休みに入らつしやいました……彼の方は道夫樣とか仰有しやいましたつけ。」

「はあ、乳母の子で厶います、其の頃は未だ家も、藏も昔の儘で厶いました、何だか茫然といたして居りますけれど、かう長い廻椽が御座いまして綺麗に光つて居りましたつけ、椽に立ちますと足元へ緋鯉が澤山、アツプ、アツプ寄つて來て、私はよく其處から麩をやつたのを覺えて居ります」

「一度道夫樣と二人でやつて居て、道夫樣がお濠へ落ちて私が大聲を擧げて、泣いた事が厶いましたが、あの時分の事を思ひますと、唯だもう、美しい夢を見て居たとしか思はれません。」

と何處となう、謙遜した物言ひ振り、道夫樣といふのは、確か商船學校の生徒と聞いた、脊の高い、潮風に洒された、丈夫な體格。今年冬休みに歸京するとてお暇乞ひに來られた時、千鶴樣と二人で松原迄お送りしたら、もう五丁も向ふへ行つたその人の後姿を凝つと視つめて、何やら非常に決心したらしく、「先生、私……」

と云ひ捨てた儘、此の人には不釣合な、すた／＼と後追ひかけて行つたが、三丁程行つてから、何と思つたか、バツタリ立竦むで、其の儘ぐつたりと下俯いて力なう引き返して來て、

「お待ち遠う樣。」と唯一言、其の顏は凄い迄蒼白かつた、「何うなすつたの？」

といつたら、

「最うよろしいの。」と聲細う、うつむくはづみに、包み切れぬ愁ひの露ははら／＼と砂の上に落ちた。

「その乳母樣は？」

千鶴樣は未だ御存じないの？と言ふ樣な面をして、

「私が八つの時、屋根の棟が落ちるのを苦にして死にました。」

と橫を向ひた、愁の面はもう此の人の常體になつて居

る。

半ば破れかゝつた邸の裏門を、夫人は、小さい風呂敷包を雨の袖で掩つて這入つて來た、窶れては居るが上品の身のこなし。世が世ならば多くの侍女にかしづかれて、朝々の手水の湯も、自らは取らなかつたらうに、此の夕べ、今宵たくべき米麥を、自ら算々して來やうとは何事で有らう。

ふり向ひて見たら、千鶴様はぺつたり跼むで、脊に波を打たせて居た。

三

一時嬉し相に見えた主人の面は、一月許り經つて又漸々、愁の雲が掛つて來た。此の頃はもう山へも行かなくなつて、時々、あー、と長い溜息をついては、

「せめて三千圓。三千圓有つたらなあお牧(夫人の名)私は立派に辰巳家を元の物にして見せる。」

「何も最う運命でムいますから……」

夫人は何日も靜かにいふ。

「三千圓がなければ五百圓、五百圓あつたら私はあの山を買ひ示める。一層思ひ切つて此の邸を賣らうか、なあ、思ひ切つて呉れ。」

「ど、何うぞそれ丈は……」涙に交つた夫人の聲、今日も亦、こんな問答が起つて居る、私は机の上に堅くなつて耳を澄した。

と、眼の先の障子に、ぼうつと淡い人影がさして、

「先生!」

と机の前にバッタリ、ほと走り出る聲を沈つと袖に嚙み絞めて、泣き入つた美しい人。

私は何も言はずにハンカチを出した。

「ま、誠に濟みませんがあの、あの……お部屋、お部屋代を……」

私ははつと思つた、部屋代はもう十日も前に拂つた、未だ上旬も濟まぬ今月の間代を貸せとか、誰が業ぞそも、今日　九の若き人にかく迄の苦勞をさせるとは。云ふ人よりは、言はるゝ身の更に、更に、氣の毒な思ひ、皆迄きかず、急いで取り出した五圓札一枚、顏も見得ずに手渡したら、

「まあ、こんなに……」

と消え入りたい如うに身を震はした。

「何うぞねえ、來月のと御一緒に……」

と漸つと言つたら、

「濟みません……弟の學資金がもう三月も送つて有りませんので……父に言つても氣をもませる許りだつ

て、母が猥て心配を致しますので……」

と切れ〱に言つた。

その夕方、昔から出入のお濱といふ婆樣が、

「奥樣ので御座いますもの、それはもう、立派なお品てムいますから。」

と涙含むだ夫人から、桐の小箱を受取つて出て行つた大方夫人の大切な頭道具ても賣りに行つたので有らう、二時間も經つてから、お婆樣は歸つて來たらしい、

「言ひ價てても二十五圓てムいますつて。」

唯だ、それだけ聞えた。

四

麗らかな日曜だ、私は徒然にふいと外へ浮れ出た、かつて千鶴樣が、「お祖父樣の、お弓の稽古の跡だ」といつた、もう茶色になつた高塀に幾つとなくあいた小さい穴を見て居たら、咲き亂れた菜の花の中に、すうつと千鶴樣が立つた、

「まあ、春らしう御座いますとねー。」

と近づいたら、何にも言はずに淋しく笑つた、喉のあたり粉のふいた樣な白い頬に、ぽつと上氣した、胸にはかねて、可愛いりが菜種の花て蒼白う見える、胸にはかねて、可愛いかつた赤兒大の京市松が抱かれてあつた。緋縮緬の長襦袢に滓紫の裾模樣、西陣の帶を武士結びに結むだ、着物丈でもその頃十兩も出したとか、未だ千鶴樣が乳母の膝に居た頃、兩親が奈良廻りのお土產に買つて來た品だと。

「月子樣、好いお名ねー。」

と抱き樓へ乍ら頰ずりして泌々、

「先生、今日は何て、淋しい日てムいませう。」

と、哀れ、此の麗らかな春の日も、千鶴樣には何の溫かみも與へないのだらうか。

月子樣とは道夫樣が名付け親ときいた。

「何だか今日は、無茶苦茶に乳母が戀しくなりましてねー、最前からこゝへ來て泣いてゐましたの、一度お墓詣りがしたうムいますけれど、獨りて外へ出るのも何だかね……。」

と、瘦せても枯れても、辰巳家のお孃樣、獨りは外へ出られぬと言ふ所に重みがある、

「先生!。」

思ひ入つた如うに、

「もし世の中に、自分の思ふ事も口へ出されない樣な哀れな女があつて、色々の事情の爲めに涙をのむて、

自ら染まぬ境遇にはまつたら、世間の人は其の女を何と評しませう。」

此の人はつ、私は心で叫むで眼をはつた、と又思ひ入つた樣に、

「一人でも其の女の心中を察して呉れる人が有りませうか、それとも恨む人でも……。」

―恨む、恨むなんて其んな人は一人も有りますまい、必つとその人は、お腹で泣いてもあなたの、いゝえ、其の女の爲めに幸福を祈つてゐるでせう。」

「お腹で泣いても……。

彼の女は自ら心に尋ねる如に言つて、その白いうなじをお市松の頭にすりつけて泣き入つた。

間もなく、辰巳の孃樣が廣田の笠井樣へお嫁入りなさるといふ事は、村中の人の話題になつた、先方は三十萬の財產家で、綺緻と家柄とを的にしての熱望だと言ふ事は、學校の職員室で聞いた。

夫人は獨り急々として「世が世ならば。」と自分の古着の殘りを出して來ては涙してゐる、

主人の愁の雲が一重々々、取れてゆくに引き替へて、千鶴樣の面は一日々々細うなつて行くのが目に見える

一日私の許へ無名の小包みがとゞいた、開けて見たら、中には紅萠える樣なレースの机掛が入つて居て、別に小さい紙片に、

家庭が厳格だから彼の女に迷惑をかけん事を恐れて、唯だ一面識のあなたにこんな、失禮なお願ひをする。

といふ事が繰り返し書いて有つて、

「唯だ一人の知己の人から。」

と言つて此れを千鶴樣に渡して呉れと有つた。

私がさう言つて渡したら、千鶴樣は犇とそれを抱いて、私の肩に寄り掛つて泣いた。

其の後、間もなく私は故有つて歸國した、半年程經つてから新聞をみて居たら、

「小野ヶ原明礬山の發見者。」

と題して、多年村民が禿げ山として持て餘して居た、小野ヶ原の蛤山は今度、辰巳總次郎氏の發見によつて、意外にも貨の山で有る事が知れたと、言ふ事から、筆を起して、辰巳家の履歷まで書き立てゝさながら、雲のあなたに身を隱して居た人の、にはかに天降つて來たかの樣に書いて有つた。其の出資者は言はずとも廣田村の笠井である事は知れて居る、

「明礬山の發見。」私は新聞の上に化石の樣になつて、

あの白い粘土を思ひ出した、
「せめて三千圓、三千圓あつたらなあお牧。」
だる相な聲が在り〱と耳に響く。
知らず、辰巳家の暗愁を、かよはひ一少女が、小さい胸に移し植えて立つて居やうとは、誰が知つて居やう。

長いだけあつて事件の錯綜には面白みがある、此小説から事件の面白さを除いたら、稍淋しいものになるであらう、それは此作者の筆に感興が乏しいからだ、感興の乏しいことは此作の大いなる缺點であるけれど、又これだけの事件を自由にかきこなした手腕は、其れを償ふてゐる、用意のある作だ、例へば道夫から千鶴子に机掛を送つて來るのに寄寓してゐる女教師に托するなど、事件は甚だ面白い、初めの粘土も一寸讀者の好奇心を惹く（評）

六等

脚本 **心と心**（一幕）

梅香女

登場人物

會社々長 藤野清兵衛
妻 お金
娘 久子
商學士 松山俊夫
下女 一人
松山友人 甲島義夫
　　　　乙山孝治
　　　　丙野一郎
久子友人 中野よし子
　　　　夏山しげ子
　　　　吉田とみ子

第一場

日比谷公園の場

日比谷公園鶴の噴水を背景にして、すべてあの邊の景色、共同ベンチ二ツ三ツ、一ツのベンチを少しはなしておく、植込みなど澤山、離れてをるベンチに松山俊夫三十位、若紳士風腰を懸けてをる處にて幕開く。

松山立ち上りて向ふを見ながら、

松「まだ來ないのかナア、なか〱手間がとれる、又念入りの化粧でもしてるのだらう。ヤア來た〱。」

と一心に花道の方を見る。

此時久子當世風の令孃のスタイルにて登場、松山を見付けて、

「アラもう來て被入るのよ、」と急ぎ足にて近づき來る

と横道から久子の友達出て來る、久子を見着て
よし子「アア藤野樣よ」、
と久子に近づき
「藤野樣暫く大さうお急ぎらしいのね何處へ？」、
久子驚きたる體にて
久「アラ　中野樣ねマアお珍らしい、アラ夏山樣も吉田樣もお揃ひで貴女達こそ何處？」
時「あんまりお天氣の好いので久しぶりにお二人をお誘ひして散歩よ、何にしろ學校出てから運動不足になりがちで胃病になりさうなの、それてむりに御二人御誘ひして來たの、今日は大に遊ぶつもりなの、さうして歸りに九木へても寄ふかと、今相談してるのよ。お差支なかつたらお仲間にお入り遊ばせな」、



（九等）公園　奥陸　井上よし子

久「さうね折角お久しぶりにおめに懸つてこのまゝお別れするのも不本意けど少し急ぎますからすまないけど失禮したいわ、」
松山折角久子が來たので嬉んでると友達がは入つたので氣をもみながら立つたり居たりして久子の方に注目して居る。
吉「さう、おやア仕方ないわ、だけど折角御目に懸りながら少しのお話しもしないて、お別れにするの本當に殘念ね、少し位

いゝてせう。」

久「少し位なら好いゝわ」

時「あすこのベンチがあいてるからあすこへ行きませう」と皆々揃ひてベンチに腰掛ける、松山手持無沙汰の體て皆の居る方へ背をむけて、話しを聞かぬふりして、實は注意して聞いて居る。

中「私たち卒業してから何月になるてせう、」と指をりかぞへて。

中「七月よ早いものね、もう立派な奥様になつて被入る方があるのよ、此間もね銀座の關口へリボン買に行つたのよ、そうしたらね津川樣が立派な令夫人になつて被入るのよ、私おどろいちやつたのよ、私見違へたの、なんても法學士とか醫學士とかなんてすつて、本當にあんなり立派に變つて被入しつて吃驚したわ。」

吉「アラ立派に變つて被入しつたのホ……、だけど皆樣學校卒業ると美しくおなり遊ばすのね、藤野樣もその一人よ。」

久「あら嫌よ、そんな事ないわ、貴女こそ。」

時「本當よ、藤野樣本當に美しくおなりてすわ、もつともとからお美しかつたんだけど、然し毎日なにして被入るの、もう御令夫人におなり遊ばすんぢやないの。」

久「アラそんな事ないわ、うそよ私なんか一生もらい手がないからミッスてくらすのよ。」

吉「ホ……どう致しまして大丈夫よ、有名の金滿家の御令嬢として交際社會の花とまて云はれて被入る貴女のことてすもの、求婚なさらうものなら後補者が山のやうにあつてよ御安心遊ばせ、さう／＼此間ね佐藤樣にお目にかゝつたらあの藤野樣もうおきまり遊ばしたとかお仰つて被入しつてよ。」

此時松山思はず此處にふりむく、と花道より會社員躰の人三人登場、少しほろよい氣嫌にて

甲「君僕らの課長程けちな人も少ないね、まあけちんぼとうの旗頭だね。」

乙「さうよまつたくだ、月俸百五十圓の紳士かなんだ、辨當に食パン一個さ、僕等大枚三十圓のものと同一だね、然しねそれには原因ありさ、彼人頗るサイノロジーだとさ、あんなに儉約しても皆んな妻君の装飾費になるのだとさ。」

丙「君、彼人の妻君は山本子爵の令嬢だつて云ふぢやないか、家に歸ると妻君の前に頭が上らんさうだ、お互に目上から妻君もろふもんぢやアないぜアハ……。」

など話しながら藤野等の居るを見付けて
甲「ヤア妻君の後補者が澤山居らアー、オイ乙山君ステキなビユーが居るぜ、オイ君の妻君に丁度好いのが居るよ、君結婚申込み給へ、ハツ、、、、。」
乙丙「アハ、、、、」、
と松山を見付け
丙「オイ松山君が居るよ。」
とつか／＼と松山の前に來り、
丙「オイ松山君、なにを考へてるんだい、なんだビユー君お揃の傍に、アヽわかつた」
松山ハツトせし躰にて
松「オーお三方お揃で、ナンダイ出しぬけにアヽわかつたなんて。」
丙野うす笑ひしながら
丙「なにさ君、妻君撰定に、お忍びて公園散歩なんて頗るフルツテルね、アハ、、、、」
女連はいやな人たちと思ふ樣子にて
時「ちよいとあつちへ行きませうよ、」
と皆んな立ち上りて歩るき初めると甲乙あとを追ひながら
甲乙「オーイビユー連君にげたまふな、マア待ち給へ連合してダンスでもしやうぢやアないか。」
と追ひかける女連笑ひながらにげて退場
甲乙「アハ、、、ビユー連君にげて行きアがつた。」
と引きかへして、
甲「オイ松山君、何にをそんなに呆然としてるんだい、ちつと僕たち見たいに快活になりたまへ、悲觀なんぞすると又ぢきに淺間や十二階へ行きたくなるんぢや、チー君そんな處へ行つちやアいかんよアハ....チ――乙山君。」
乙「さうとも世の中は樂觀するにかぎる、人間ダークサイドを見るやうになつちや、終だよろしくブライトサイドを見くなくつちやア、チー松山君、君ラの字が出來たね、それにきつとヒヂテツされたんで悲觀しちよるのだらう、ウーン君、...さうだらう。」
松「鹿鹿云ひ給へ、そんなことがあるもんか。」
丙「アハ、、もしあつた處で僕はあゝだよと云ふもんか、まけおしみてもそんなことないと云ふのは、これ人情の然からしむる處だ、アハ、、、」
甲乙「アハ.........」
此時久子男子連に見付けられないやうに引きかへして後にかくれ話しを聞き居る、松山苦笑しながら

松「君たち、馬鹿なこと云ふのよし給へ。」
乙「なアに僕ら少しも馬鹿の言はいはんよ」
丙「時に君はまだ妻君もたんのか、もうもらひ給へ、僕等と違つて君アもう立派に妻君を養なふ力があるんぢやないか、僕周旋しやうか。」
乙「ア、さうしたまへ、君はなか〳〵交際が廣いから松山君にころ合ひと云ふ處を見立てたまへ、チト松山君君もう持ち給へ、丙野君が周旋するさうな。」
松山困り入りたる顔色にて、
松「僕はまだ早い、まあそんな話しはよし給へ。」
乙「何んだつて、まだ早い笑談ぢやアないぜ、三十男が早い事があるもんか、僕等の忠告を入れん處を見るといよ〳〵ラの字があるんだぜ、チト丙野君。」
松「そんな譯ぢやアないが、僕少し考へる事があるんだからまだ二三年は妻帯しないつもりだ。」
乙「さうかそんなに云ふならむりにとは云はんが、然し何んだぜ好いのがあつたらもらふに限るね、チト甲島君、君どう思ふ。」
甲「どう思ふつて、僕は無論好いのがあつたらもらふ方がいゝと思ふね、僕だつてほしいんだが醜にして且つ貧なるを如何せんだ、向ふから皆んなヒヂテツとくるんで閉口しちよるのさアハヽヽ、松山君なんか美男子の處へ金滿家と來てるんだ、後補者がありすぎて困るだらうアハヽヽヽ。」
乙丙「アハヽヽ。」
松「笑談ぢやアないよ、僕は本當にまだもたんのだから。」
甲「マア好いよ僕等にまかしときたまへ、何にもそんなに耻しがるには及ばんよ、男子たるものよろしく鐵面皮なるべし僕等友情としてわるい樣にはしないから、さうだ諸君、松山君の前途を祝して一杯のもふぢやないか、幸あれに松本樓が見える、諸君幸に贊成してくれたまへ〳〵。」
乙丙「贊成々々さア松山君來たまへ、僕等の厚い友情を入れたまへ、チト君いゝだらう。」
松山迷惑さうに
松「サア折角だけど僕少し用があるから今日はゆるしてくれたまへ此の次に仲間入りを願ふから。」
甲「ナンダ僕等は君のために祝杯を上げやうとしてるんだぜ、君笑談ぢやアないよ、サア來たまへ。」
松山そこいらを見まはすけど別に久子嬢が見えないのて、

松「おやア折角だからおつきあいをしやう。」
乙「それは有がてい、諸君松山君が賛成されたから又御意の變らぬ内に出かけやう。」
松山もしやとあたりを見ながら心のこりのさまにて三人につれられて退場
久子孃のび上りてあと見送り獨り言
久「折角ひまを見て御めにかゝらふと出かけて來たのに目の前に被入りながら、親しく御話しさへする事出來なかつたのに、それにつけても心がゝりなあのお友達の御話し、あの友達が立派な御奥樣を御周旋なすつてもし御氣にめして、お氣が變つたらどうしやう、あゝ御めに懸つて御心中をうかゞひたいけれど、あゝこふしてゝも仕方ないどれ歸りませう。」
久子愁然として退場
道具廻る

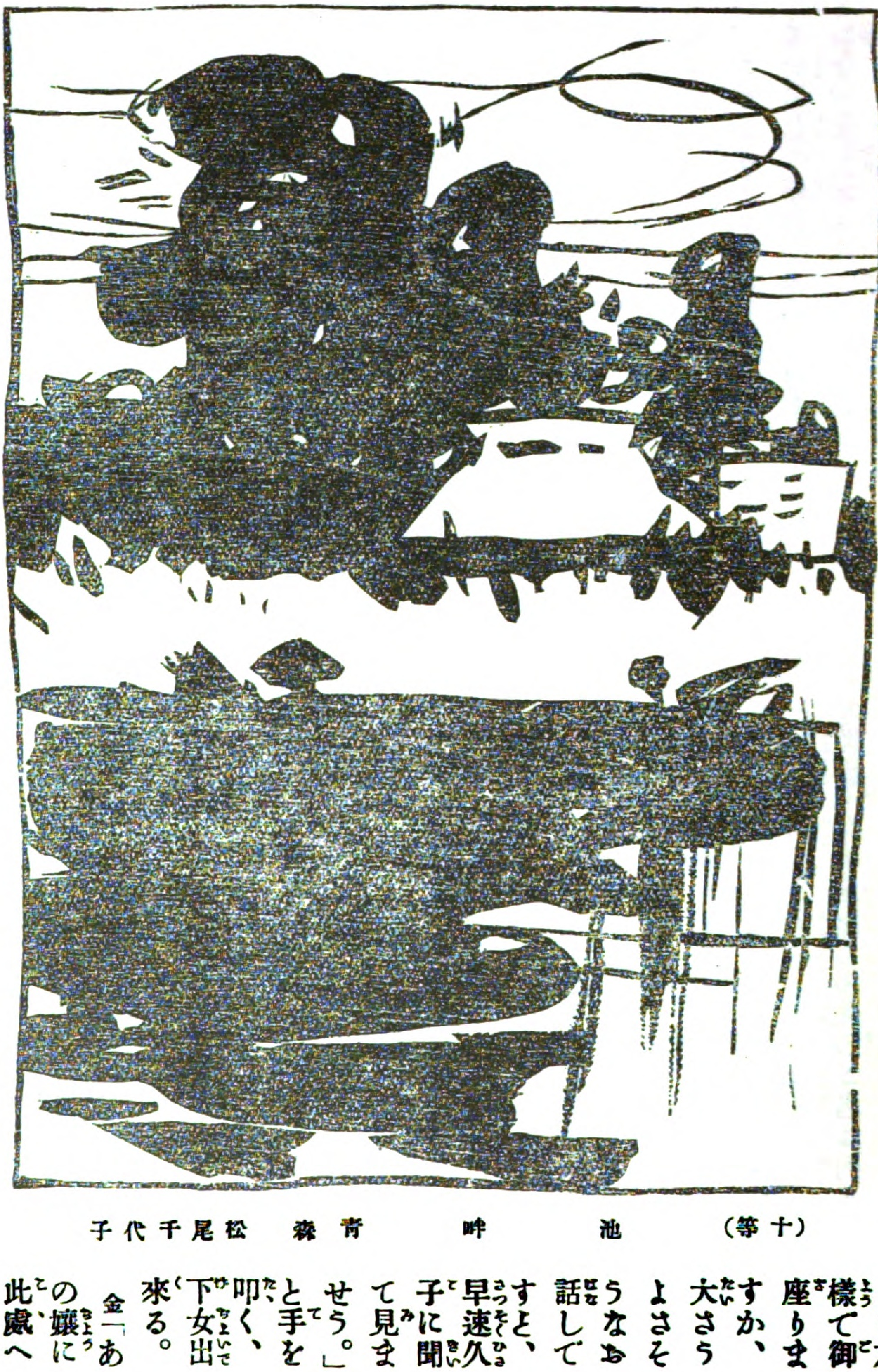
第二場

清兵衛居間の場

善美を盡せる居間の粧飾、清兵衛紫檀の机に倚りかゝり、火鉢の向ふに妻お金すわる。
清「本當に久子も困りもんだの!、早く縁付けんと己れももう六十八だて先が短かいに子供たちの片がつかんと、死ぬにも死なれんぢや、この縁談もいや、あの縁談もいや、おやア實にこまつたものさ、なんとか早くウンと云はせる法はないもんかなアお金。」

金「さうですよ私もひまさへあると云ふてきかすのですけど、どうしてもウンと申しませんので本當に困つて居ります、私も末子の事ではありなるべく好い處へとは思つて居ますけど、又年をとりすぎるとなか〱よい口もありませんのでね、此間の縁談は本當によかつたんですけどね、本當にどういふ氣なんでせう。」
清「まつたくぢや、親の心子知らずで心配ばかり懸けて平氣になッちよる、實はな昨日會社の會計課長の宅橋がやッて來て、いろ〱話しの末にお宅のお孃樣はまだ何處へもお嫁入になりませんか、と云ふからよい處があつたら縁付やうと思ッてるが、どうも思はしい處がなくてな、と云ふたら、では實は丁度、思ふ處がありますがお思召しは御座りませんかッて聞くから、何處だと聞いたらナ、矢張會計に居る丙野ちふものゝ友達だッちふが、あの松山銀行の頭取の松山俊太郎君の長男ださうな、たしか俊夫君と云ふたと思ふた、松山君なら時々あふた事もあるし至極よからうと

思ふ、俊夫君は矢張その銀行てなか〱人望もあるさうなたしか高商出と云ふて居ッた、己れもすぐにも返事したかッたが又久がなんと云ふかわからんによッて、己れは非常によいと思ふが娘の心を聞いてから、返事すると云ふておいたがナア、お前は何う思ふ。」



（十等）池畔　青森　松尾千代子

金「左様で御座りますか、大さうよさそうなお話しですと、早速久子に聞て見ませう。」と手を叩く、下女出來る。

金「あの嬢に此處へ

來るやうに言つておくれ
下女「ハイ」
と入る、ちきに久子入り來る、母の傍に座りながら。
久「ナアニ、お母樣。」
金「實はね少しお話があるんだがね、お前ももう十九にもなるし、私だちも取る年ではあり、早くお前を緣付けて安心したいと思ふていろ〱、お父樣とも氣をもんてるんだがね、いつも何故だか知らないが嫌がつてばかり居るので本當に困つてるんだよ、處でね此度の緣談は父樣も母も大さうよいと思ふしするから、お前は又お前の考へがお有りかは知らないが、大ていにして緣入りしたらどうかね。」
久子又その話しかと云はぬばかりな顏して。
久「何處かは存じませんがおことはり遊ばして。誠に我儘を申して濟みませんが。」
金「さうかへ、お前が嫌とお云ひなら、むりにとは云はないがね大ていにして緣付いたらどうだへ。
濟「オイ〱お金、先も云はんて好いも惡いもわかるもんか、久も久ぢや、先の名も聞かんてことはると云ふ法があるか、なんぢや、實はな會社の室橋からの話しぢや、先はな非常によささうに思ふしするから、此度ばかりは承知したらよからう、己れもとる年ではあり早く安心したいによつて、どうか今度は承知してくれろ、なア久。」
と可愛きものよとぢつと久子を見る、久子困りたる躰にてもぢ〱しながら。
久「折角御兩親樣の仰せては御座いますが、少し考へが御座いますから、仰せにそむくのは誠に申譯も御座いませんがもう一二年程お許るし遊ばして。」
濟「さうか、むりにとは云はんがな、考へて見るがよい、先は銀行の取締の息子、高商出の秀才ぢやさうな。」
と云ひかけると下女出て來り、來客ありと報ず。
濟「客間に通しておけ。」
と云ひつける、下女去る。
濟「久、さう毛嫌せんでよく考へておけ。」
と云ひながら奥へ入る、久子話しが俊夫にてるのでオヤと思ひながら。
久「お母樣、今のお話しの先のお名は何んと仰るの。」
金「どうせ行かないんなら、聞かなくたつていゝぢやアないか。」

久「アラ、お母樣お怒り遊ばして。」
金「それア怒りもするさ、折角親が心配するのに、嫌だ嫌だの一天張りなんだもの。」
久「アラ、御免遊ばせ、本當に我儘ばかり申して居りまして、……ごせうですからお名前きかして頂だいな。」
久子少しあまへる樣をする、お金少し笑ひながら、
金「お名を云へば嫁くかへ。」
久「そういう譯ては御座いませんけど、本當に聞かして頂だいな。」
金「ぢやア聞かして上げるから、承知おしよ、あのね松山銀行の頭取の松山俊太郎樣の御子息て俊夫樣とおつ仰る方だそうだよ。」
久子驚き且つよろこびて、急にいき／＼として
久「エツ。」
金「お前知つてるの。」
久子心づき、おちつきて。
久「イ、エ存じては居りませんけど。」
と考へ、少さき聲にて。
久「お母樣、私參りたふ御座いますわ。」
お金意外といふ顔つきにて。
金「ナニ、嫁くっ」
久「エー」
お金よろこばしき樣子にて。
金「さうかへ、まあよかつた、私もやう／＼安心したよ、お父樣に申上たらどんなにおよろこび遊ばすか。」
と云ふてる處へ清兵衛氣づかはしげの顔付にて入り來り、二人のうれしさうな顔を見ていぶかしげに座につく。
金「もうお客樣はお歸り遊ばしましたか。」
清「アヽ、何にか嬉れしい事てもあるのか、ニコ／＼して。」
お金久子と顔見合せて
金「大ありなんてすよ、久子が此度の緣談を承知致しましたよ。」
清兵衛急に元氣付き。
清「ナンダ、承知した、それは／＼、實は今室橋が來て、此方へ話しゝた事を丙野に云ふたさうな、處が丙野がさつそく松山の宅へ行つて話した、處が初めはなか／＼承知せなんだつたが名前を云ふと急に承知したさうな、その俊夫君はなんても久とは音樂會かなんかて知り合になつてるさうな、そんな言を云ふとつた、そ

れて先でも大さう嬉んで此方に異存がなかつたら、善はいそげで成る可く早くしたいと云ふたさうな、で此方の返事を聞きに來たんぢやが、己れもすぐ承知致ましたと云ひたかつたんぢやが久があんな言を云ふてをつたんで、嫌がつて居るとも云へんで、今話し中だからいづれ明日にでも返事すると云ふて歸した處ぢや、それはなによりだ。

金「左樣で御座いましたか、久もお名前を聞くとすぐ承知したので、不思議に思ふて居りました。」

淸「久、貴樣知つとるぢやらう、名前を聞いて承知するところを見ると、前から出來とつたんぢやらうハ……………、」

「まあいゝわ、先が好い處ぢやで己れもやう〳〵安心が出來るといふもんぢや、善は急げ、己れは室橋の處へ電話で知らせやう」

とよろこばしき樣子にて入る。

金「本當に善はいそげ、どれ〳〵『三越タイムス』でも見て、早速誂へものをしませう。」

といそ〳〵して入る。

久子まあよかつたとよろこぶ態。（幕）

お孃樣が脚本を作らうと云ふ男氣に先づ感服しました、讀んでみるに、成程お孃樣相當の脚本で、甚だ單純な喜劇です、而し讀んで感心するやうな脚本は今の處劇に上しにくい、此作のやうに讀むと平凡なものが、却つて今の俳優には、しよくもあり、しいかすことも出來るのであらう、皆樣も芝居を見てゐるつもりになつて、此の脚本を讀むと一層面白みが加はるでせう（評）

六等 一人娘

大口巨樹

一

「美代お前如何だえ、お前ももう今年はとつて七じやないかえ。」

突然かういひ出したのは、頭にもう少し白い毛の見える、母のお光であつた。

洋燈を中央に向き合つて、炬燵にあたつてゐるのは娘の美代子で、母の言葉に別に相手になるでもなく、唯默つて雜誌をあつちこつちひねくり返してゐる。

「お前も少しは家の爲を思つて與れなきや困るぢやないかね、お父樣でも生きてゐてくれるのならまだいゝけれど。」

美代子がまだ默つてゐるので、お光ははがゆさうに

「ほんとうにお前考へてごらん、女なんて者は何時迄も一人て居られやしまいし、人樣が心配して下さる時定めなきやだめぢやないかね。」

美代子は母の言葉を聞くのが、如何にもつらいといつた樣な顏附をして、何ともいはなかつた、雜誌を繰返し繰返しひねくつてゐた。お光は又

「彼んな人は資格がなくてやだの、あんなへぼ官吏はやだの‥‥なんて我儘ばかしいつて、見よ、今は誰もきてが有りやしないぜ‥‥お前の師範學校位卒業したつて何だらずの。」

と、言葉も途切〳〵に、餘程いら〳〵した語調になつてきた。美代子は冷淡に聞流してゐたが、もう何分にも頭の中が何か打ち壞された時の樣にごた〳〵！としてきて、我慢にも一時も居たゝまらず、急に立つて便所に行つた、出てくるとさも思ひ付いたらしく、

「あれ全然忘れてゐた、」からつぶやきながら他所行の羽織を着換へて、

「お母さん、一寸江崎先生の所へお見舞に行つてきますよ。」

と、言葉もそこ〳〵に外にでた。

二

古閑家といふのは松本の士族て、もと戸田樣の時分は隨分威張つて居つたものだが、明治の御代になるとだん〳〵廢い〳〵屋敷や田畑は、人手に渡つてしまつて、殘りの僅か許を父が一つ手に耕やして、老母妻子の四人の糊口を繋いて居るといふ、極哀れな有樣になつた。

所が不幸はまだつきず、今から八年前たつた一人きりの娘の美代子が長野師範學校三年の二月、來月は可愛い娘の卒業が見られると、其れを賴みに樂しみきつて居た甲斐もなく、杖とも柱とも賴む父が、ふとした病の爲に世を去つてしまつた。

其後の一家は益々淋しくなつた、三歲四歲の頃迄はお孃さん〳〵と、あつちからもこつちからも奉公人に持囃された美代子も、卒業してからは家の事は一切自分で引き受けねばならぬ身となつた。

其上毎日三十町許隔つた近在の學校に通ふのてあるから、お光は家に居つて老母の世話をしながら、何かと内職をしては家計を助けて居つた。もうこれからは娘に早く、いゝ養子をしたいと思ふより外は無かつた。

「ねえお祖母さん、早く美代に養子をほしいねえ。」

とは屢〻吐息と共にてる、お光の言葉であた。其位親達は氣をもんでゐても、美代子は別に心にかけてもゐないらしく見えたちよい〳〵其所等から緣談があつても、皆自分で拒絕してしまつた。

そうして家事は一切自分獨りで切りまはして、この八年の間どんなに困つても、たつた一言でも「お父さんが生きてゐてくれたなら、などの弱みをいつた事がなかつた、これには親類の者も皆呆れて居つた、併し美代子の心は外から見た丈のものではなかつた。

三

母の說法に絕えきれなくて、見舞を口實に、家を逃げる樣にてた美代子は實は外にでてこのむしやくしやした氣を、晴らさうと思つたのである。

澄みきつた空から、十日位の氷付いた樣な月が、靑白い力のない光を、一面雪の上に落してゐる、少し傾きかけた樣な古びた板屋根の低い、自分の家を月明に恨めしげに見やつて、歩きだした。士族屋敷の落ぶれたまばらにある家の間から、雪の上を吹いてくる冷たい風が、ひやりと顏にあたる、躰中がぞつと水でも被せられた樣な感がした。

美代子は、死んだ父親の事を思ひ出した、其後の自分の家を思ひつゞけた、それから自分の行末迄思ひ辿つて、急に萎れ返つた。

「それにつけても、今度の緣談をまとめ樣か、私さえ承知すれば何の事もないんだ、」と今夜母の相談に更に相手にならなかつた事を後悔した。

「併し？、」と又美代子は、思ひ反した。

「自分の友達は皆いゝ人を夫にもつてゐる、早稻田大學卒業生や高師卒業生や惡くても師範卒業位だ、」とだん〳〵考へていくと、又厭になる。

「なんだ檢定派の本科准敎員ぢやないか、人を馬鹿にしてゐる、」と又持前の負嫌がでてきて、

「今夜こそ、確乎斷つてしまはう、」と迄、心の中で決めてしまつた。

心の一方に「まだ〳〵今の理想の人が……？、」といふ覺束ない光明を認めたのであつた。

ふと、氣がつくと、今夜訪ね樣とした江崎先生の家が、もう一軒向ふに見えてゐる、美代子は急に其家の事を思ひ出して、立停つた。

「あの細君は自分より二級も下ではないか、それだのに、もう三年も前に結婚してしまつた。そうしてあの先生は師範卒業きりだが、いつも夫婦で睦ましそうに

暮してゐる「いつかなんてちやんと夫婦て、手をひきあつて散歩してゐるんだもの……」

と、嫉ましい樣な、羨ましい樣な氣がしながら、又靜かに步き出した、門の前迄くると、突然中から、大きな笑聲が聞えた。

「誰かきてゐるのかしら？」疑がひながら耳を澄すと、又どつと大きな笑聲がした。

「あゝそうか、」と美代子は考へた、笑聲で學校の木澤といふ先生てある事がわかつたのてある。

又どつと、吐き出す樣な笑聲がした、何だか自分達の噂でもして、笑つたの丶樣に聞えて、面白からぬ感がした、美代子は尙も思案して、

「ぢや、又くるとしやう、」と確乎決めて何げなしに、通りすぎた、二三軒向うへ行くと道が二つに別れてゐる、其所で又立つて考へた。



肖像　秋田さつき女

直家へ歸らうとも思つたが、歸つて直又種々いはれるのも面白くない、と考へたので、わざ〳〵別の方角へ向つて步を移した、けれど、美代子は何處といつて的のあるでもなければ、たゞ足に任せて、絶えず種々な事を考へながら步いた。

「兄弟をほしい」から思ふのは美代子の常であつた、

「兄ても姉ても妹ても何でもいゝ、一人でいゝ、そうすれば他家へ嫁からが生涯獨身でゐやうがかまやしない……………どうしても自分は不幸福な人間なんだ、責任をもたせられて、つまりはどうにかしなけ

ればならないのだ、」と思へばどうしてよいのかほとんど自分にもわからなくなつてしまう。

それだのにもう、顏には細かい〳〵皺がいくつとなく刻まれて、うら若い青春の色香も一日〳〵と失せてゆく、毎日の化粧に念を入れてはかくしておくが、皺の數はふえるばかり、ほんとうに自分ながら愛想がつきてしまう。

思はず顏をあげると、いつか兵營の前にきて居つた。造られた許の新らしい建物がぞろりと月の光に嚴めしく並んだ、番兵は人形の樣に立つてゐる、中では濁聲張り上げて、軍歌をうたつて居る。

「あんな事してゐたら、さぞ暢氣だらうに、」など思ひながら、すぐ西に隣り合つてゐる女子師範の前に出た、今丁度特別自修と見えて、寄宿舍はどの部屋もどの部屋も、電燈の光が明るく、身動きもせずに机に向つて勉强して居る生徒の頭が、硝子越しに並んで見えた、美代子は立停つて眺めた、自修時間に滑稽な手紙などやり取りして巫戯けた自分の寄宿舍時代の事を思ひ浮べて、獨りで笑つた、心の中では「もう一遍あの寄宿舍時代になつて見たい」と叫んだ。

急に足の疲勞を覺えたので、仰向けばもう大分夜が更けてきたと見えて、月もすつかり西へ傾ひた、體ももう全然冷えてゐる、又風でも引いてはと、急に今迄忘れて居た、體の事を思ひ出して、足を早めて歩き出した。

家へ歸つて見ると、もう九時すぎ、母も床について居つた、美代子は何にもいはずに、淋しい床には入つた。

描寫が表面だけを辷つてゐて、內面的に旨いところはないけれど、筆に少しも苦澁の痕がない、面白く讀ませる（評）

注意。以下十三篇は皆六等賞なり（記者）

兄の歸り

宮崎和子

今夜は何んて彼麼に地理の答へが出來なかつたらう、パンパンが谷の產物であることさへよくは答解されなかつた、近頃大變記憶力が鈍くなつたやうだ、暑さで腦が惡なつてゐるのではないかしら、それにあの生意氣者のコンスタシオが旨く答解されたものだから此れ見よと言はぬ斗りに人を蔑すむやうな目付きで右左りを見廻した時の面憎さ、口惜しさ、今度の試驗に

落第して呉れればいゝけれど、自分はブラウン、ビイブルてありながらハロー、エロウ、ビイブルなんて言ふのは彼奴一人だ、ほんとうに失敬な土人だ、など、無暗と腹立つて歩いたものだから何時の間にか花園の門口へ歸り付いた、

竹園の門を入ると涼風に送られて來るイランイランの香、ガルデニヤの薫り、月夜は殊に香高きサンパカの木蔭を通ると、今までの腹立ちも口惜さも忘れて、何とはなしに嬉しいやうな、樂しいやうな氣がして、小聲で唱歌を唱いながらサンパカの木の下に生てる菫の花を木の間漏る月光りに探して、二つ摘んで、幾度か鼻に押當てゝ、ブウックに挿んだ。

表の階段を昇つて戸の外から「兄さん只今歸りましたと、聲を掛けながら入ると、表の間の卓子で村田さんが眠相な顔して獨案内を讀んでる。

「マスターはまだお歸りになりませんよ」

と、本を置て椅子を正した。

「まだお歸りにならんのですか？　大變遲いのねえ」

「八時には常時もお歸てすけれども今夜何か他に御用事でもあつてお廻りになつたんてしやう」

「御用事て遲くなる時には乾度言置て出店だけれど今朝は何とも仰つてゞは無かつたんですよ」

「それても一日の内には又甚麼用事が起るか解るもんてすか」

「そりやそうてすけれど、もう九時半てすもの」

「今にお歸りになりますよ」

と、村田さんは面倒だと言ふ振りに獨案内を取り揚げて何か頻りに探してる、自分も村田さんの向合せの椅子に凭つて復修を始めた、暫時くすると村田さんは居眠り始めた、自分は可笑さを堪へて見て居たけれどビクリビクリと本の上まて頭を下げてはヒヨト上げ、又下げては、又擡げする其樣の可笑しさ、遂々堪切れずに吹出した、すると村田さんはぎよつと頭を上げて眠相な目を無理に開いて、

「あゝ眠つイたー」

と、顔中を撫てまはす、喉元までこみ上げて來る可笑さを無理に噛潰して、俯たまゝ

「村田さんお寐みなさいよ、ねえー遲いから」と言ふと、

「はい、まだマスターはお歸りになりませんか？」

と、獨案内を讀みながら聞く、

「いゝえまだてすよ」と、自分は顔を上げて答へ

た。
「そりや大變遲いてすなー、そう何時てすか？」
「追付け十一時てすよ」
「そりや遲い、然しもうお歸りになりますよ、私はお先に失敬致ます、今夜は眠くて遣り切れん、あゝ大變蚊に喰はれた」
手首や首筋を掻きまはしながら獨案内は其處に放つたまゝ立上つた。
「松尾さんはお寐みになつたんてすか」
「は、松尾さんは今夜八時頃から寐みました、然し貴孃お淋しいてしやうねえ、貴孃もお寐みなさい」
「はい妾は兄の歸るまで待つて居りましやう」
「然てすか、それては御免下さい」
村田さんは寐室に入つて仕舞つた、村田さんも松尾さんも利益配當て園に働いてる人てある。
自分等の住つてる家はマニラ市の東端に當るシンガロンと言ふ田舍町てある、此附近は土人の植木屋計りて米國人も至つて少ない、兄が三年以前に此の地を借りて日本花園と言ふのを起したさうて、二丁歩計りもある花園の中央に極粗末な極手狹な家を建つて自分等の住家にしてるのてある、家は三間あつて表の廣間が

應接室と食室を兼て、外の一間が松尾さんと村田さんの寐室、殘りの一室が兄と妾の寐室てある。
兄は毎朝六時には必ず此處を出て花園から二里計りもあるエスコルタと言ふ町の花店へ切花や植木を馬車に積んて土人のボーイを一人連れて行くのてある、ボーイは午後六時には馬車を持つて歸つて來るけれども兄はボーイを歸してから店を片付けて歸るのださうだから常時も歸りは、八時前後てある。
日中は松尾さんと村田さんと妾と日本人は三人限りだけれど土人の雇つてあるのが毎日三人働きに來るし、お客さんもぼつ〳〵來るから賑やかだけれど、夜になると田舍町だから八時頃から人通りもなくなる、近邊に家はなし、至つて靜かてある。
自分等は昨年の三月に一週間前後して兩親に逝かれた、其際歸國した兄が花園に來るお客さん接待にとて、其年の六月に兄に連れられてマニラへ渡航つた、然し英語も西班牙語も解らないから、晝一時間西班牙語の先生の處に、夜は町の夜學校に通つてる、夜學校は英語てある、月謝も不用なければ、敎課書も學校て貸して具る、先生は皆米國人て、校長は婦人てある、夜七時半に始まつて九時まて一時三十分間、文法が三

十分數學が三十分地理が三十分間である、級に依つて地理の處もあれば歴史の處もある讀本の處もある、けれど何の級も一時間は文法と數學である、始めの内は少しも解らずに大變困つたけれど、近頃は試問される意味位は聞き取れる樣になつた、今月が修末試驗で、試驗が濟むと七月まで休暇ださうな。

村田さんが寐むと直に町の寺院の鐘樓で十一時を告げた、兄は未だ歸らない、何事かあつたのではなからうか、若も兄の身の上に異變でもあつたら什麼しやう、松尾さんも村田さんも親切な人ではあるけれど、元々他人の事なれば賴みになつて、ならぬやうなもの、其麼事でもあつたら什麼しやう、國の兄さんへ電報で知らせたら直に來て呉れるだらうか、此間の手紙では國の兄さんは膓胃加答兒で大變お惡いと言ふ事だつたが、近頃甚麼かしらと、妹が嘸心配してるだらう、お父さんやお母さんが御壯健だつたら妹も心配する事はないけれど、親はなし、四人の同胞は日本に二人マニラに二人お父さんやお母さんの事思出て泣てるだらう、此方の事を案じて便りなさにしてるだらう、つい此間の樣だつたけれど今月二十三日がお父さんの一回忌、二十九日お母さんの一回忌、もうお父さんにもお母さんにもお目に掛る事は出來ないと思ふと御兩親の面影が眼に浮んで無暗と懷かしく、悲しく、卓子に突伏して啜泣いた。

靴音に駭いて起上ると何時の間に歸つたのか兄が莞爾り笑つて立つてる、兄の顏を見ると今迄の悲しさも忘れて自分もにつこりとなつた。

「何だ泣てるぢやないか、また村田さんか松尾さんにからかはれたんだらう」と兄の顏は曇つて來た、

「いゝえ」と自分は頭を振りながら手布で涙を拭た、

「其れならなにも泣く事はないぢやないか、又何か國の事でも思出したのかい」

「へゑ、國の兄さんの事や妹の事やら、お父さんやお母さんの事を思つたら遂悲しくなつて」

「はゝ、女は其れだから困る、死んだお父さんやお母さんの事思つて甚麼する、泣くのが一番不孝ぢや、笑ふ樣な事をしたり考へたりするのが亡くなられた御兩親に對する一番の孝行ぢや、弟や妹の事を考へたつて駄目ぢや、此處から何程心配しても氣を揉んでも恐らく感應はないね、泣かずとも勉强して早く日本へ歸る工風が第一ぢやないか」

「それでも遂悲しくなつたもの」

「其麼時には直に園へ飛出すさ、然すると悲しくない樣になる、どうぢや今夜の月は、奇麗だねー」

「ほんとう今晩のお月さんは奇麗てす事ねえー」

自分も起つて兄の凭つてる窓の下に進んだ、月は隈なく冴へて、今を盛りと咲き揃ふた撫子の白く赤く、遠く離れた薔薇畑に處々白く見ゆるは綻び始めた蕾でもあらう、冷かな風は得も言はれぬ蘭の香を誘うて來る、其度毎に露が晃々と落る。

「兄さん今晩は大變お歸りが遲かつたではありませんか、何事かあつて？」

「何事もないけれど電車の運轉手車掌が同盟罷工をやつたんだ、其で電車なしと來たもんだから歩いて歸つて來た」

「然ですか、それはお悲道かつたてしやう妾は何事かありはしないかと思つて大變心配したんてすよ、今朝遲くなる樣に仰らなかつたんてすから」

「然かそりや、氣の毒だつたね、歩く傳手だと思つてルネタ公園を横斷つてマラテからパサイの海岸を廻つて歸つたから案外遲くなつた、然し何とも言へん壯快を感じたね、海岸の月は」

「奇麗な事は奇麗でしたらうけれど、そんなにお歩きになつては嘸お疲かつたてしやう」

「あゝ、パサイの海岸から此方大分足が重かつた、時に御機嫌が直つたら飯一つ食して呉れんかね」

「おや、妾すつかり忘れて居ました、どうも濟みません」

急いで卓子を拭て仕度をすると、兄は子供のやうにお箸を持つて妾のお給仕して出すのを待つてる。

「今夜遲くなつた罰に飯は食はさんのかと思つた」

「非道い事を仰る」

「はゝゝ大分遲くなつたから眠つてるかも知れん、眠つてたら驚かしてやらうと思つて樂しんで歸つた處が泣てるもんだから落膽しつちまつた」

「兄さんが餘り遲いからてすは、何故辻馬車にても乘つて歸らなかつたんてすか」

「それこそ大變だ、歸り客のない這麼田舍まで馬車にても乘つて來たもんなら、二三圓は屹度踏んだくられる、然するとかずさんの嫁入仕度が一日遲れる、は……て我慢して歩いて來た」

「兄さんは又あんな事を、妾お嫁になんか行かないよ」

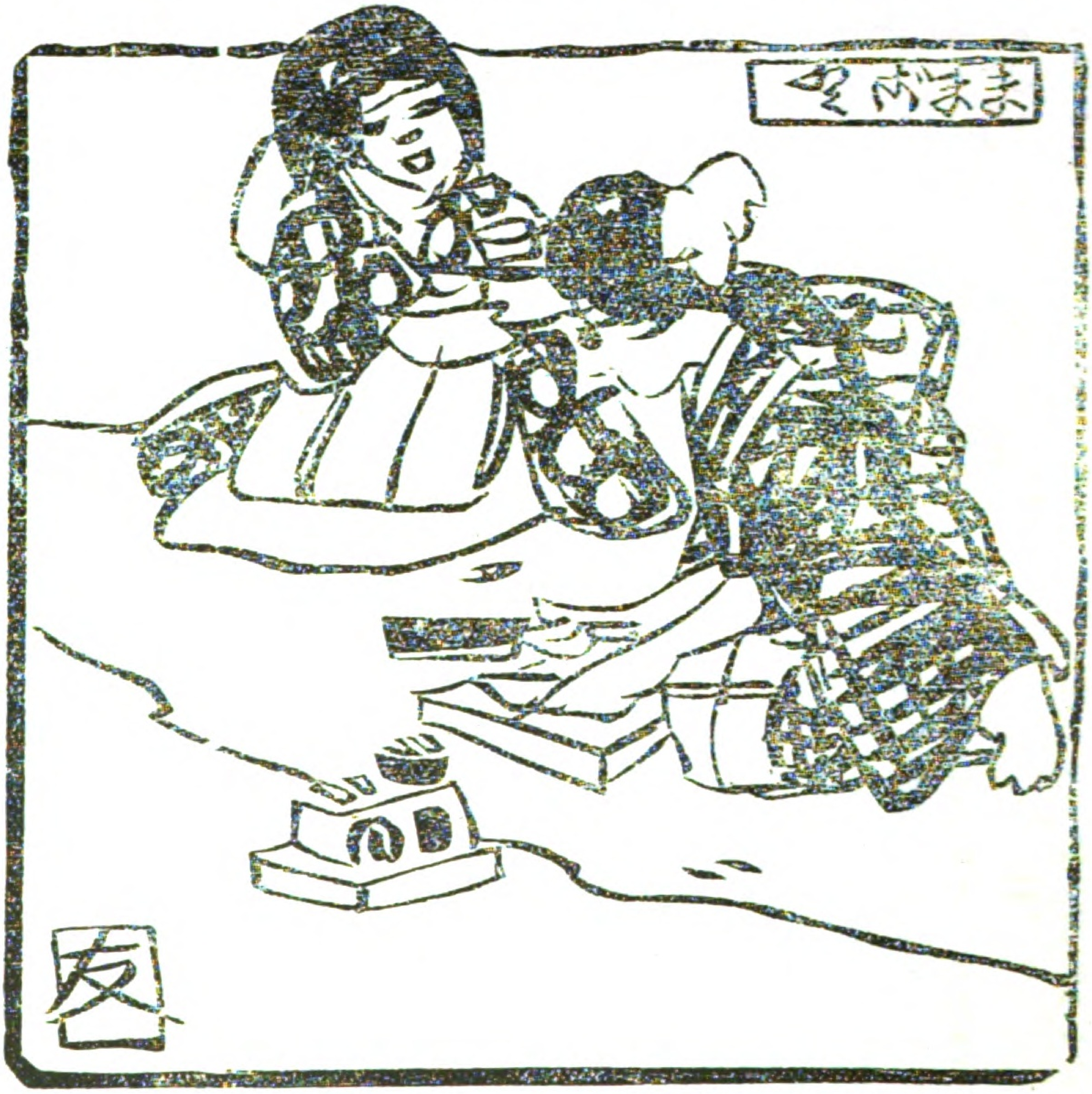
「怒るな怒るな、國さん(國の妹)の嫁入仕度だよ」
同胞思の兄は我が身を忘れて妾等の爲めに盡して呉れるのである、何と言ふ難有い兄の心だらう、妾等より幸福な者がまたとあらうか。

マニラと云ふ土地の風光を表はしたのは甚だ好い、其地に居て其地を知らない人は澤山あるが、それは寶の山に入つて寶を拾はないと同じことで迂愚と言はればならぬ。次に此作の書きぶりはあくまで自己中心で、感興が乘つて居る、而して光明的だから猶更好い(評)

心のみつぎ

梅本龍子

○
君おもふ一つこゝろの貢にとわがおとろへを先づたて



まつる、

葉をこふ

まゝごと　和歌山　多賀とも子

○
捨てられし日の嘆より一條の髪の落つるかかなしかりけり

○
紅き魚は玉藻のかげにこの君は白き腕に春の夜を寝る

○
くらがりの心の室のまろ鏡さみしき影の日ごとうつりて

○
このかなしみ誰に告げ得む何ごとも母にかたりし日をおもひ泣く

○
み情に倦みぬ相見し初めの日交せし程のみ言

○愛で給え初めて見たる日の如きいと美くしきみてゝろをもて

○花大根咲ける小徑のぬかるみに白足袋すこし汚したまひぬ

○まんなかの紅の灯を蓮として少女等をみる春の夜の室

○いさゝかの爭かひごとに怨じてし日など思ひて落梅をみる

晶子夫人の詩才に私淑して其風に欣仰せるものか、獨創の才分ありや否やは未だ言ふに早いか知れぬが、兎に角新派の空氣は充分にのみこんでゐる人(評)

永眠

よし枝

一

二月には珍らしいぽか／＼する日でした、ふと思ひ立つて上つたのは、かれこれ二時近い頃でもございましたか、それは／＼ひどくやせて、二月前の雪樣とは天地の相違といつてもいゝ位、全く肉はおちて、骨と皮ばかりとてももとの雪樣とはおもへない位でした、それでも私の伺つたのを大變よろこんで、割合元氣よく話などなさるので私もまあ安心してそこにあつた新聞を手にしながら、やはり話してゐますと、どうしたはづみか、黒わくの死亡廣告が目についたので、みてゐますと、雪さんが「私もいまにそうなるのねえといつてしみ／＼なさるので「まあいまつからそんな弱い事いつてどうなさるのといへば、

「でもね、今度はとてもいけないとおもふの、いつてしたつけね、惡かつた時には、他でみんなが騷いでるのがおかしい樣でしたわ、目にはみえなかつたけど、だけどこんどはね、他では覺悟してるとみえて落ちついてますけどね、私は氣がもめるの、だつてね、かきかけたものなぞちやんとやいてしまつてとおもふんだけど、やはり自分でしないとね、

「全くあなたにもあいたいとおもつてたの、だけどわざ／＼きて頂くのもわるいとおもつてね。

二

全くわづかの間でございました、あなたがお歸りになつて後も大變きげんよく、好きなおすしなぞ頂きま

して、まあ話してゐたのでございます、と九時頃でした、ふと目がみえないつて云ひ出したのでございませう、早速醫士に走らせたりしまして騷ぎましたのでございますね、すると、そんなにするには及ばぬとてもだめなのだからと申ます、そして醫者のみえられる迄に、一々挨拶してしづかに逝きましたのでございます、あの位しづかに引きとつたのは今迄みた事がございません。

白もすりんの二枚重ねに、おなじ帶をお立にしめて高島田に結つてうつすりお化粧なすつた處はかつてみた事のない美しさでございました。

　私はどうしてもこれが雪樣のなきがらとはおもへませんてした、その美しさ神々しさ、もはやこの上は申あげる勇氣もございません、がたゞ一度、ゆき樣は土とはなられず、灰となられました。

　今一度、ゆき樣の最後は實に立派なものでございました、一々皆樣に挨拶をのこして、おそるゝ樣もなくゆかれました、つまり厚い信仰によつて、行手に光明をみとめて行かれたのでございませう。

死の態も冷靜なり、文も沈着なり、死の確實を寫すには此んな文章でなければならぬ(評)

散文詩四篇

志摩りう子

骨

凄い程眞青な、靜かな深い海の底から、人間の頭の骨をすくひ出した。

一人は男の骨だと云ふ、一人は女のだと云ふ、他の人は人間のでは無いと云ふ。

今迄默つて居た人は「何の骨でもいゝ。己れの生命と關係はない……もう一つ漁つて早く歸らう」前の四人は眼と眼を見合した。

書籍

自分の讀んだ丈けの本を室の中央に積んでみる。

金文字、クロース、蝕ばんだ表紙、その重ねた上に手を置いて、靜に考へた。

晴れた日、高い丘から斷續した山、川、森、村を展望したやうに、

と、思ふ途端、物にふれて一度にくづれた。

ふと「自分は本を見たんだ、見たゞけだ」見たゞけだ

と思つて立つてゐると、今までの生活、誇り、が急に
消えて行くやうに淋しくなつた。

生

何もない廣い處に立つて居る
だん〳〵四方から暗が迫る
身體を動かさないと生て居られぬ
けれども動けない、苦しい、
自分の外に動くものがあれば
その方に走つてゆかう
暗は、かすかな音をたてゝ迫る
自分は今迄生てゐたのだ。

鈍色

日が射す、若い女が着物を裁つてゐる
鋏が隠れた、鈴が鳴る
糸が通る、針が動く
若い女が着物を縫ふ
燃ゆる表と鈍色の裏
鈍色が眼につく

骨は奇警、書籍は意味あり、生は最も詩らしく、鈍色は言ひ足らぬ、概して大人らしいが、散文詩の呼吸を得てゐる（評）

夜のすがた

蘭

庭の木に凭りかゝつてほつと吐息した。

月の光は、茂つた葉を透いて、白い影と、黒い影とが、土の上に在つた。樹の身顫ひに影がちらついて、白いのと黒のとが遊んで居る。男の子と女の子が大勢戯れて居るやうに。——

面白い現象——意味ありげな。——

私はそれを飽かず見詰めて、目動ぎもせずに——

吁何か私に敎へてるのぢやないかしら。

自然が私に、さとれ、味はへと耳元で囁いて居る。決して葉擦りぢやありますまい。

何とか早く私の魂に解つて呉れればよいが。けれど、此頃のやうに始終氣斗り使ふて居ては、腦は只勞れともするとうつとりとなつて。たゞわけもなく此儘

消え入りたいやうな。　眞暗な森の中にひそみたいやうな氣がしてならない。眞黒な闇の中にまぎれて何處に居るか不明らなくなつて來れゝばよいが——若し自分を見出されたら——吾魂の怖れて居る或る者に見付つたら——此上甚麽重荷を負はせられるか知れない。現在てさへ私には重すぎて、毎日々々、小さな魂は勞れてその切なさに泣いて居るのてすもの。

けれどもあの御髪の稍にすがれゆく母様を見るに付け、私の魂は、其時だけ鋭いほど勇みたつが——。あゝ母様。弱い母様。たとへ子てあれ、自分の身てない者を自分の希圖した形に宛てはめやうとするのは無理だらう——けど、けれど兄様だつて。

あの頑固な御祖母様に事へ乍ら、苦心して育てゝ頂いた恩を思はなかつたのだらうか。什麽して兄様は、自家といふ事以外を顧みる餘地が無かつたのかしら。

二人の兄妹てはあるけれど女などは他家にやる者。老ひてかゝるのは男の子。その子が——親の愛には多少はないが、主にたよりに思うて居たその子には、今殆ど絶望して居られる母様。

床の中ての吐息は、どれだけの苦痛の迸しりてあらうか。その吐息の、私の世なれぬそれだけ私につよくひびいて、自分の胸に畜いて居る空想を破かるゝ事も度々なの。

八分の望みを斷ち切られた母様は、あとの二分なるたのみを私に注いて、色あせたる白い頬にやゝ樂しい笑みのぼる其時は、未だ見ぬ人戀ふる心も、親友なるとし子さんおもふ友情もなげうつて、たゞこの薄倖な母様にたゞ一つに集めやうと。そして亡父が母様に對する愛と兄がつくすべき愛と私の愛とをこのかよはい肩に荷なつて行かうと決心した時は、自分の腕のか細い事も忘れ、胸には一種の誇りに血潮の高なるのを覺えたのてあるが——顧つて、母様より私を離して考へる時は、私の身が私の自由な者てあつたら——と考へる時は、人生に絡まつて起るいろ〳〵のきづなが悉く厭になつて、もう堪らなくうるさくなつて來るんてすもの。

人生には裏面が在るのてすけどこう私共のやうに、暗黒な部分が多くては、いつそ、いつそ闇にまぎれて何處かへ遁れたう御座います。

眼を掌てしかと抑へたまんま樹に押しあてたその指の間から、鋭い光の細い筋が射し込んて、思はず大きく眼を見張りました。

たつた十坪斗りの庭てすけれど、陽炎燃えたあとは、厭世家のやうな土の香と、梅の燒り香のやうなうまい匂ひにおところへのこもつたやうな香がするやうて——

私の前には以前の儘の樹の影がありました。けど先とは變つて、庭のあらかたに黒い影をやどしてました。吁影――黒影

それは明るい時もある。私の家だつてうらゝ照る春野のやうな折も一生のいつかにはあるでせう。暗きを離れて新らしい光に輝く朝も來るでせう。けれど我家のこのいまは、家庭のこのいまとおんなじなんです。おなじ幸に包まれて居るのです。

む、然うであつたと獨りで頷いて、指し示された教訓に感謝の涙さゝげました。さゝげたのでした。動搖しつゝある影に向つて――。

感情の動搖した文で、その中にきら〳〵と閃く光がある、矛盾もあり撞着もあるやうだけれど、若い姿をありのまゝに表はした處に眞價は充分に認められる（評）

小鳥外五篇

高木清子

小鳥

ぼつと赤みかゝつた春の日を眺めてぼんやりしてゐると何處やらで小鳥がなく。キヽキヽと、柔らかい自分の胸に針をさす樣な聲で。それは左からだ。左の楢の葉からだ。あ、また飛んだ。葉が白う破れた小笹の上へ。そして不安な眼つきで私を見てゐる。また鳴き出した。

蟲

濕つた空氣に傳はつて遠くの汽笛がボーッと末消えに聞える。

《明日は雨降りだよ》とお母さんの聲に窓を開けて首を突き出した。何か、うよ〳〵と眼先にちらつく。よく見ると蟲だ。小さい羽蟲だ。球の樣になつて廻つてる。吹き飛ばされさうに。

試驗

明日から試驗が始まる。何試驗位と思つて見る。落第、退校。かまうもんか實力さへありや好い。と思つて見る。けれども、けれども、やつぱり胸が躍る。

散歩

唯ぶら〳〵と小川の堤を散歩した。私一人、考へるでもなく足元を瞶めて。日は暖かい。ふと思つた。何處かで土筆が出て居やしないかと。

夜

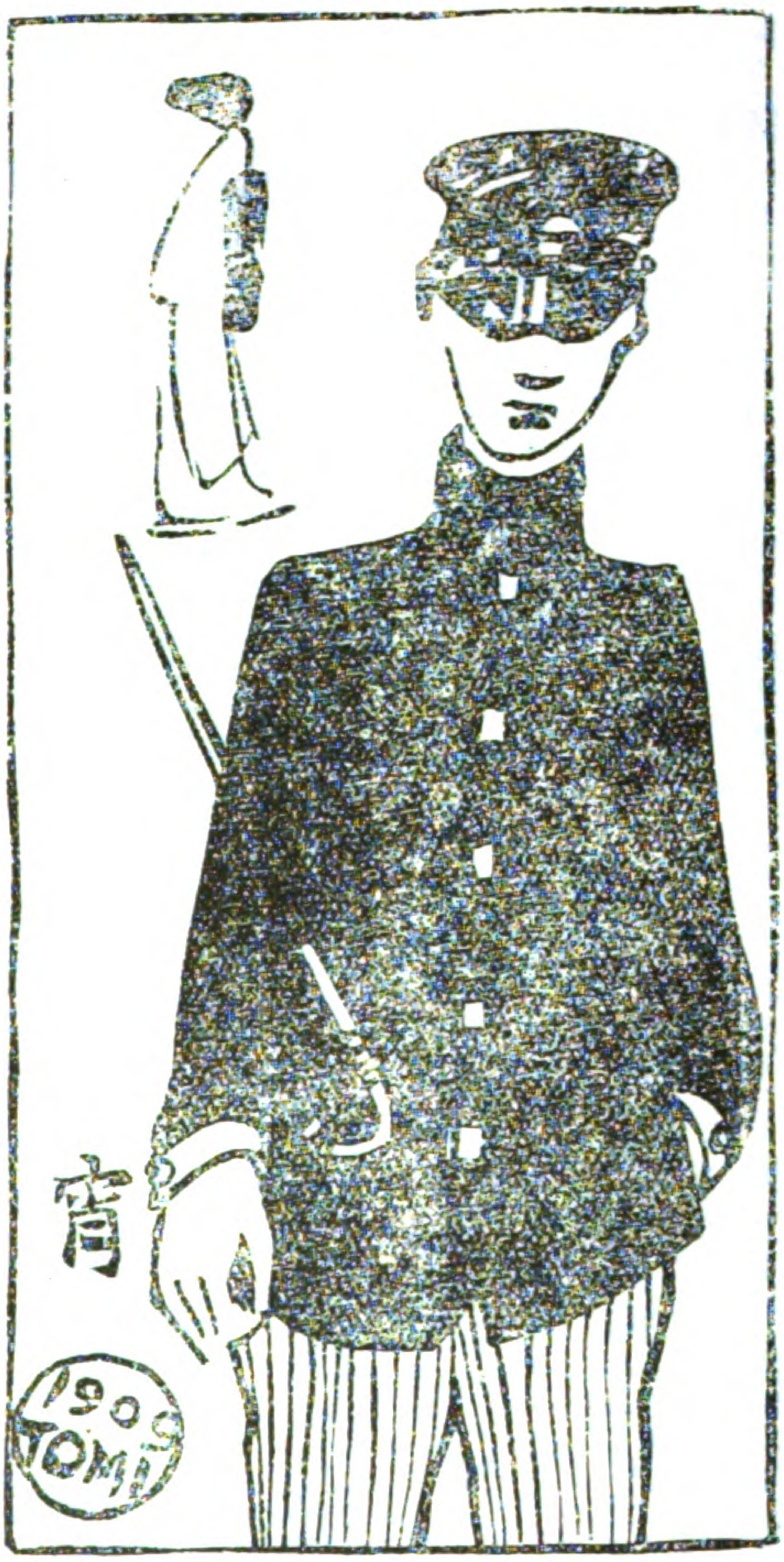
ふと見上げると小さい星が澤山集つてゐる。賑やかだ。丁度華やかな町を眞上から見下した樣に、きらきら〳〵〳〵入り亂れてゐる。と後を向いて見た。西の

山の端から斜に東北の空へかけて、眞黒い雲が空を蔽うてゐる。そして緩やかに動いてゐる。其厚い雲の中には、何か居る。あゝ黒い大きな手が、眼に見える様だ。

幻影

ぐつたりと机に凭れて。おゝ恐ろしい。惡魔、惡魔。黒い様なものが私を乘せて何處かへ伴れて行く。すーつと地上に下して呉れた。何處の國だらう。行く手に赤い門がある。近づくと、愈々高い。何て作へたのか。鐵ではない。木でもない。石でもない。熟々見ると土だ。しかも何て固めたのか固く石みた様になつてゐる。シックイでもない。三和土でもない。唯天然にある赤土をそのまゝ練つて長方形にして積み上げたとしか思へない。正面の高い所に何か文字の様なものが鏤んであるけれど、とても讀めない。こんなもの、こんな處に何時からあるのだらう。と思つて戸口を見た。門の扉はぴつたり閉つてゐる。

各章ともそれ／＼自己の發見があつて、散文詩を讀むやうだ、强て優劣をつけてみると、小鳥と、幻影とが最も好いやうに思ふ（評）



宵　　小樽　鈴木とみ子

小さき花

石川一菫女

春の海吹きてきぬらしわが窓にさゆらぐ風の匂はしさかな

○

白き鳥かさなり飛べる夕暮の窓に君みぬおぞましき影

○

この國をのがれ出でんとするらしも魂ははろ／＼さまよひありく

よき宵は野路に幾むら小さなる眞白き花の薫れ四月は

○

春の色和める彼方白雲の消ゆる樣ともわが魂ゆるむ

○

君が家とおぼし灯ともる遠方は明りにあれど闇に吾こふ

○

夢に來しものゝよきかげ歌にする山の住居の風なき日哉

○

何となく唯なんとなくさわ〳〵と心落ち居ぬ夜の多き哉

○

わが言葉疑ふ樣のふと瞳にうつりし日より心たゞならず

○

闇の中さま〳〵の怪に遇ひつゝもさまよひ行ける心淋しき

○

何に思ふ庭の木に居て小さき鳥二つ並らびつ首をかしげぬ

○

白き鳥浮べる海は事もなくまぶしく沖は日の光しぬ

○

美しき露は二人をとりまきて求め合へども遂にはぐれぬ

○

眞暗なる底と思へど折り〳〵は光するごと君おぼさずや

暗き方面苦しき想ひを歌ふたものに好い作がある（評）

越後より

初子

今日家内總出て、雪消し致しました。兄や弟は碎く方で、私共は繩て雪塊を引張つて行つて、川へ落してくるのです。ドブン、ドブン、水煙りの起つのを後に、冷たいのも忘れて夢中て働いたらどうやら正午迄に片が付きまし

た、ザッと一雨も來たらスッカリ消えるだらふと思ひます。
何だか急に明るい樣な氣がして、着物の汚れが苦になります。
太陽に輝く白塊がいくつとなく、矢を射る樣に靑流を走る壯快さ……。水雷……水雷……などゝ少い弟は無暗に手を拍つて、喜んでゐました。
盛夏に成ると此川の水を汲み上げて、燒け切つた家根や往來へ撒くのです。澤山の鮭がとれるのも矢張この河のつゞきです。秋になるとまた初鮭を味噌漬けにして、お送り致しますよ。
岸一面の白銀の花も今はかたみに、名殘を枯葭にとゞめてゐます。
去年の冬こゝへ密柑の死骸を捨てゝ父に烈く怒られて雪をこざいて拾ひに行きましたのね……川端の共同便所を右に見て、ダラ／＼坂を少し上ると、そこがすぐ私の家の庭ですよ。
座敷で靑い流れも、千手の街も一日に見えます、昔とはスッカリ樣子が變つたし、もう此邊の地理は能くお解りにならないでしやうね。
夫れから内藤の叔父の家の跡へ、新藏が立ちました、例の柘榴だけは未だ垣の下に殘つて居ます。冬枯れの梅や痩せた紅葉の枝が、橋からよく見えます、他の木はまだみんなかこはれた儘て、いづ靑々した姿を見られることやら漸つと晴れたと思へば降りふりするのですもの、本當に心細くなつて了ひます、四月の空に香もなき冷い白花がふる北國ですもの、山の中の越後と思はれるのも無理はありません。兄なんか僕の代になると暖國へ行つて、冬圍ひの費用を省つて遣るよ。」なんて笑つて居ます、何だかガタ／＼と厭な風が吹いて來ました、また雪が降るのかも知れません。よなべに切干し(大根)をこさへましたから、よく乾くと差上げますよ、さよなら。

飾らぬ手紙、却つて愛重すべし(評)

月の夜の思ひ

水野谷子

しつとりと濡れた空氣に、月が靑白く面を照らしてゐる。
黑い影に闇が隱れてゐるやう――冷たい夜氣が肌に觸れる。
私はたゞ獨り。――
夢多いの母に抱かれて恁麽夜に人となつて、異つた彩も無い思ひ出に、何時も空虛な私の胸はまことに淋し

い、寂しい。
憧憬が一つでも眞となつたら……
月が一段の光を添へると、影がまた深くなる。
あゝどうせう。
淋しい。
此の儘夜が凝つてゆくのではあるまいか。

月の明るさと、陰の暗さを對照せしめて、暗い陰に對ふ心持を强く響かせたのは手際であつた（評）

百合子日記

常夏

三月廿七日　土曜　晴

百合子は父樣が大好きて今朝も御出勤なさらうとすると後を追つて泣くのでとう／＼お抱つこして動物園の下まで御一所に行く、もう此處まで來ると私の手に抱かれても泣きもせず、機嫌よく入つてらつしやいをして角をお曲りになるまで見送つて居る。

昨夜少しばかり降つた雪が石のやうに固まつてまるで紅梅の枝は干菓子のやう、昨日の日曜には久しぶりて大久保の母樣お呼びするつもりだつたが此路てはなど考へ乍らかへると安信所から結婚調べの秘密調査が來て居る、これは布哇に居て內地の婦人と結婚しやうとする夫の親友から賴まれたもの布哇便は今朝の八時が〆切だといふに最う間に合はない、おかへり遊ばしたらさぞ殘念に思召事と思ふた、いつか私の手で眠つた百合子を日當りのよい二階へねかして手紙書かうとすると水がない、困つたな仕方がない持つてこよう呼鈴鳴らせば亦起きるだらう、まるで泥棒にでもは入つたかのやうに拔足差足襖開けるさへ心してソッと下へ降りた。

二時頃增尾の伯母樣御來訪お土產の筍私は未だ初物ですよと申上ると悅んで入らつしやる、夕食は早速筍の御はん、柔やはなか／＼御加減が上手だこと、夫の君戲れに百合子の口へごはんを二三粒入れ給へばいやな顏して舌て押し出したので思はず目を見交して笑ふ。

三月廿八日　日曜　晴／曇

池の端に自轉車競走があるので朝からワーッワーッと云ふ聲が樂隊の音に和して聞える、何だか身が引き付けられるやう、連れてつてやり度いが風が寒いから百合子がかわいそうだと仰しやるので、今日も一日籠城ときめて居ると、治雄つれて芳さんが來た、大きくなつたこと、家の子の育つのは分らないが餘所の子の大きくなるのは目に立つて分る、然し百合子に比べると

まだ〳〵小さい、伯母さん今池の端通つて來ましたが大變な人ね、私行き度いけれど子持になつちや駄目ねとこぼす、午食は三人同じチャブ臺に、夫の君は食後みんな上野へ行かれない同志てかわいそうだね、其代り僕は澤山見て來て話すよと體のよい事のたまひて出給ふ、大島の二枚重ねに五ッ紋の黒羽織、偶には和服も好いが、亦百合子に後追はれては大變と抱いて裏へ出ると、風呂場の屋根て悅び鳥の二聲三聲何となく憎からず聞く。

此日のおみやは百合子と春雄におもちや、芳さんと私はお揃ひの襟止、今日こそは原稿書うと考えてた事も、とう〳〵駄目になつて燈下に百合子のお被布のつもり物をして日記書いたのがやう〳〵、芳さんてはないが子持になつてはほんに獨りて居た時が忍ばれる。

思ふ通り筆が動くと云ふことも奥様になつてからの大幸福だらうと思ひます（評）

心かぎり

ゆかり子

心かぎり君が御胸になくと見てさめてし今朝の心地よきかな

○

古里の破れ小窓によりそひて君待つものをあはれと思せ

○

戀死に死せし少女の胸の血のこぼれて咲きぬ緋つゝぢの花

○

又も見る夢のやうなる心地して花の下路君とあゆみぬ

○

玉はりし御文のからを小さくさきてよりてつなぎて衣織らんかな

○

姉戀ひて古里こひてそばしまに櫻散る夜を笛吹きてみぬ

○

かゝる時あゝかゝる時君とゐて泣きてみたけれおぼろ夜の濱

初めの一首、「心地よき」が心地よし（評）

假橋

藤原泣黒子

假橋の水ひた〳〵と柳かな
夕東風や松に暮れ行く五大堂
陽炎の中に八百八島かな
陽炎や磯の苫屋の昆布家根
虎杖を折りて鹿追ふ法師かな
苗床の油障子や春淺し
畑を打つ田を打つ人や晝霞
一人減り二人へる湯や春の月
陽炎の中や壁塗る人の影
堀りいだす古城の石や陽炎す
虎杖や我が立つ杣のしるべ石
春雨やぬるき梅の湯櫻の湯
猿澤や水古くして春の月
初雷や死に損ひし桶の魚
春の水關八洲を沃しけり

鶯の初音を左枕かな
白梅や平家の村の一番戸
手に入つたもの（評）

七等

其日の印象

とよ子

物の影が何となう弱々しい日である。昨日からの靜物寫生に、見事失敗した餘憤を洩らしに、固まりかゝつた繪具を、改めもしないで出て行く。調子の低い灰色の建築物の混雜と並んだ磯臭い町を、無造作に通越して了ふと、もう、なつかしい土の香がシンミリと、胸に泌み渡る曠野に差掛る。心持ちだら〳〵つと降り坂に成つてろ、凸凹の道路の兩側には、幾本ともなく白楊が柔かい春の薄日を受けて、白く輝いて居る路に、生のコバルトを溢したような、陰影を投げて居る。向ふは一面の菜畑で、其間を暗褐色な稻叢が散在して居て菜畑の色との好調和を保つて居る。あちこちと逍遙いた揚句、漸くのことて、好い位置が見付つたので、三脚を据ゑて、兎もすればしぶり勝な

筆を、無理に働かせて居ると、も——空は疲れきつたように、黄ばんで、悩げさうな鈍色の雲に蔽はれて行く。筆を修めて出來かゝりの畫を見ると眞つ黒に成つて居た。不消化な紅や、青やの生々しい色、さては汚れた灰や紫に——

山とビオレーに、森は暗藍に野は曠々と暮れて了つた。と重くるしい陰欝が空氣を透して、痛ましく瘠せこけた白い馬が、獰惡な顔の馬子に追はれて、悩ましげに吐息し乍らカタコトと、古ぼけた簞笥や、鍋や、釜や、クチヤ〳〵に成つた大風呂敷包を載せた、荷車を引いて行く。新月が夢の樣に青白む路に、瘠せ細つた馬や車の淡い影を置いた。何處ともなくスイ〳〵と甘い沈丁花の香が漂ふてくる。其中を若い男も通つた。生際の拔けあがつたお婆さんも通つた。ツト後を見返ると、夜の休息に入らふとして居る道路に、惨酷な轍の跡が深々と—。妾は其跡を踏み乍ら妾の行くべき路を考へた。友の誰彼はわたしが藝術の園に這入るのを、非常に危んで居る。昨日も淑子さんが被仰のに『藤子さん妾つく〳〵さう思つてよ、藝術家の生涯程お可憐さうな悲慘なものはありませんわネ、貴女、』と。わたしは何も云はなかつた。二人は無言で歩いて居た。淑子さんは御宅へ、妾は叔父の家へ立寄る用が有つたので、行くと『藤つ……聞けばお前は畫かきに、成るとか云つとるそうじやのう、馬鹿つ現今はな、最う那樣陳腐い思想を持てる奴は、一人も無いぢや、なつ、藤、現今は之じや〳〵山吹色じや。と母指と食指とで圓を御こしらへ被成る。妾は腹の中で獨り考へて見た。物質の滿足と、肉の衝動とのみに生きてる、憐れな幸福者——の多いだけ、夫れ丈けムラ〳〵と反抗心の熱度を昇騰させる。若し



停車場の夜　下谷　佐野貞子

此妾に同情してくれる人ばかりで有つたら、妾は一時も安心が出來ぬ、不安は不安をするに違ひない。私の前途は遼遠である。私は幸福である。自然の懷に抱かれ乍ら、彩管を採つて純なる美の眞髓をとらへて、之を發揮させなければならぬ使命を帶びて居るのである。これが喜ばずに居られようか。努力――努力――然し乍ら此努力をして敢果なき努力に終らしめぬように、切に神樣に御祈りした。あの激した、昨夕の事や先刻の哀れな馬や友の身の上など丶、餘り古くも無い記憶を辿つて行く中にもこもれる華かなうれしみ、暗き悲、悲しのうれしみとでも云つたようなものが、潮と胸を浸して了つて、輪廓のボーッとした、印象の弱い、皮の厚い頰を、冷い、涙がツル／＼と辷り落ちた、餘り心を闇くしてはと、思つて、華やかに唱歌や軍歌を唱つたりして、痛い足を引きづり／＼蹠々と魔の樣にたつてる大きな森を拔けると、懷かしい家の燈火がチラ／＼と瞬いて居る。

其所には妾の母が待つて居て下さるのである。

寫生に出る日のことであるから、如何にも凡ての描寫が印象的に出來てゐる、繪師より文章家になつたら何うでせう、此れたけの心持を捨て現はさうとするにはなか／＼へ求てはゆきません（評）

注意 以下二十篇は皆七等賞なり（記者）

紅梅ちる日

むらさき

學校から歸つて炬燵に橫になつてゐる。大和風呂にお鍋をかけて、お肴を入れておられた姉さんは「君さん。こんな葉書がきたよ。」とそつと出される。默つてずつて出て受取つて、見ると金釘か蚯蚓のぬたくつた樣な、しかも誤字だらけで

「浮世は夢の如しいつしか三年を頸たり消息如何」

と。裏をかへすと、家の番地が少し間違つてゐる。差出人はと見ると唯ごぞんじよりとある。消印を見ると東京深川……。につこり笑ひもしないで、抛り出すと

「早忘れたんだよ、薄情なものだね。相變らず何の事かちつともわからない事を、書くね。」と長煙管ですぱすぱ煙草を吸ひながら云はれる。やつぱし默つてると「君さん、誰だかわかつてるの。」

僅に合點／＼をする。「あんな人は、何處へいつたつて成功するものかね。怜悧馬鹿なんだから、却つて仕末がわるいわね。」唯フーンと云つたが心の中で、姉さんは自分があの人を、思つてるとても思はれやしないかと思ふから、あんなに云ふのじやないかしら。早忘れ

たんだよ。薄情者だつて？これが眞理だ。姉樣は飾つてるに違ひないと思ふ。

唯フーンと云つたばかりだから、不安に思つてか「あんなに一度きれたのを、父樣は今によくなつたらなんて云はれるからしやくに障るつたらないね。君さんだつて、あんな兄樣は厭だわね。」

唯フヽンと笑ふと「そうじやないの……エ……。」

仕方なしに「そんな事もないわ。」と云ふと「そう？。」と一寸何處やらで笑ひかけたが、氣のついたやうに咬みつぶして「噓をお言ひ。お世辭を云ふのだね。君さんは……しかしあの人は、一つ縹緻がよかつたね。だけど風采なんて何うでもよいね。」又フヽンと笑て姉さんこそ僞を云つてるよと思ひながら炬燵から出る。書齋へいつて机の前に座つたが、陰氣なので障子をあけると、まどの外にすぐ紅梅が、きれいに咲いてる。細い雨が少し斜に降つてゐる、座つたものゝ先刻の笑が何だか、氣にかゝつてじつと梅を見つめながらこう思ふ。氣の毒な——きつと心で思つてるに相違なからうに、どうにかならぬものだらうか。今夜あたり又きつと義坊を抱いて泣かれるだらう。併し男も男だ。早く成功して歸つて子の顏が見たくないのかしら。氣の强いものだこと。三年たつてもあんな馬鹿な事を云つてよこすからは、先刻姉樣の云はれた通り……忘れたんぢやないかしら……あゝ姉樣はまだ幾らか積みにしてゐらつしやるらしいに、もしそうだつたら…… 突然下て義坊の泣ごゑ。續いて甲高い姉樣のこゑ。

あゝ氣の毒な!!!

紅梅がいきなり二ひら三ひら、散つた。

人情の機微と云ふやうな處を捉え、擒縱自在な筆で、あやなしてゐる、少し說明の勝つたのは雖だけれど（評）

空の文箱

細谷鏡子

緋ぬりの文箱にかたく錠をおろして秘めて置た三十七本の玉章いづれも丈に餘る長文ばかり、是が岸野樣から月に三本は缺した事のない熱烈な手紙だと思ふと今きた短文の葉書と思くらべて泣くまいと思つても止度なく頰を流れる此涙!! あゝ私が此樣な運命にもてあそばれるのも矢つ張り自分から求めたのだ、岸野樣の彼の熱烈な一字一句にたいする私の返事は意外に冷淡だつた物…… 其くせ心は炎と燃えて居ながらなぜ其十分の一をも表す事が出來なかつたのだらう、或る時は筆のすさみに岸野幸枝と幾文字か書いて人知れずほゝ笑

だ、そしてわづかの物音にもさつと顏をほてらしてあわてゝ、墨黑々と文字をぬりそれでも不安と思つてビリ／＼と幾つにかさきくづかでの底深くおしこんだ事もあつた、けれどもどういう物か其眞情を筆にあらはす事が出來なかつたのだ、だから岸野樣もさぞ張合のない女だと御思召したのだらう、否、御思召したに違ない、だから此一ヶ月は終に一度のお便りもなかつたのだ、私の方から差上て見樣と思はぬてもなかつたがどうしてか矢張氣がとがめて終に果さず、今日はくるか明日はくるかと心も心ならず待ちわびて居た甲斐もなく、月ももう二十八日となつたのでとう／＼堪りかねて筆をはしらした、菫に胡蝶をあしらつたすかし繪の卷紙に、幾度か首をかたむけながら一行かいては破り二行書いてはやぶり、やう／＼かき終つたのは机上をすべつて疊へ幾度にかたるんだ長文！美麗封筒の彼か此かとゑらんだ末終にこゝろおどらせながらポストに投じて三日目、一日千秋の思で待つて居た報酬は此悲しい葉書であつた…岸野樣に差上げ樣とめづらしく袴なしで寫した寫眞が昨日出來てきたので、此次御返事をだす時お送りしようともう裏には「樣へ」の文字もしたゝめて置いたのにあゝそれも無駄になつた、とつぶやきながら机の引だしから取りだしてつく／＼見いつて茫然とした。

心のどこかにひそんで居た惡魔のしわざかはつと我に返つた時二枚掛けの寫眞は無慘にも五片にやぶられてひざの上に散て居た其なゝめにやぶられた顏が悲しげに目にうつゝた時はどうして私は此樣な荒々しい事をしたらうと今更ながら散らばつて居る片々をあつめながら恐しい樣に思つた。

あゝ此三十七本の玉章!!!あつては泪のたねとやにわにかゝえて今客の去つた應接間にかけこみピンと扉に錠をおろしてさかんに燃えて居るストーブの前へに立つた、只さへ上氣し；居る私はムッとする暖氣に頭はふら／＼として目がくらみそうに感じた、持つてきた文箱をあけて何度か躊躇したが終に目をふさいてバサリと火中へ投じた後は見むきもせず、空の文箱をひしと胸に抱きしめて又も限りない泪にむせんだ。

室の中央にかざられてある名家が描し油繪の少女は樂器を手にして其美しい表情に富んだ目でぢつと私を見まもつて居る、閉切つてある室にどこから風がはいつたのかレースの窓掛がゆら／＼としてテーブルの上にさゝれた白椿がほろりと意味ありげに散つた。

少し書き足らぬやうに思ふが、首尾一貫して心持が出て居る、書き足らぬと云ふのは熱が足りないからだらう、併し少しも惡い癖はない（評）

果物店

月沖さゆり

美くしき
華瓦斯ひかる夜の巷
そことしもなく、さまよへば
夢かのさまに我が心
ほゝゑまれぬる——
春の夜の、ふと行づりに覗きみし
八百屋の店よ。
（眼にうつる
　いとうつくしきさま〴〵の
　果物の香はなつかしう
　たゞよひ、我心そゝる。）
路を行く、あまたの人は一やうに
我れと同じき、思ひをば
胸に抱きて店頭を
のぞき行くらし
夜の空氣、いとやはらかに、巷をながる。
（眼にうつる
　いとうつくしきさま〴〵の
　果物の香はなつかしう
　たゞよひ、我心そゝる。）
灯にはゆる、紅き林檎よ少女子の



水吸み　紀伊　多賀とも子

希望あふるゝ、頰の色か
もゝその匂ひその色は
遠くはなれし、北國の
その故里をいと仄に
ゆめみてあらん!。

(眼にうつる
　いとうつくしきさま〳〵の
　果物の香はなつかしう
　たゞよひ、我心そゝる)

ばなゝの香、あゝ懷しの追想よ——
熱やみし夜を、此の果かみて
母がみ膝にうつゐせし
その面影を、浮べては
少女子なれば胸のうち
さしぐまれぬる。

(眼にうつる

　いとうつくしきさま〳〵の
　果物の香はなつかしう
　たゞよひ、我心そゝる。)

技巧は圓熟して殆んど間然する餘地の無いまで好く出來て居るけれど、惜しいかな思想は借り物で本人の胸から出たものでない(評)

吾妹

杉山春翠

少女とはうれしきものかわが妹は笑ひ興じて今日も過しぬ

あやまちをわれは知りつゝ改むるよすがもなくて今日もすぎ行く

わが胸はいと小さなりおもかげを一ついるゝにおもひわづらふ

別るれば心は空に通ひつゝ住居のさまの面かげにうく

君の住む里の邊遠く眺むれば見ゆる森かげわれを招くかも

野を見ればふりにし夢の思ひ出をおもひいだしてかなしかりける

君を得ぬ昨日といはじ今迄も只管泣きしわれなりしかな

ほこらひの性のすべすべてをなげうつはさすがに惜しきこゝちこそすれ

形すらりとして整へり（評）

木蓮

桑本きさ子

木蓮はくづれて落ちぬ御佛の面もくもれる逝く春の日よ

憧れの息ふきかけて咲かせたり紅の香強き名も知らぬ花

春の夜の香たく部屋やよき人の笑まひこぼれて灯の花ふるふ

花の息よき人の息重なりて紫色の霞となりぬ

乳の香す涙と人はからかひぬ黒髪みだし琴ひかぬ春

逝く春の夕の花に蝶一羽なみだぐみつゝさゝやきてゐぬ

紅の衣きせよとぢれし時の香のふと薫りたり春の夜の氣に

はにかめる少女に似たるえん豆の花はゆらぎぬ蝶の羽風に

頰笑みも惜みて去りぬ居ならべる男子等の仰ぎ見送りし君

夏の太陽は沈みながらも熱を吐く我秘む戀の焔にぞ似る

花の息……の一首、殊に好し（評）

燭

柚木白菊

つくづくと燭見ておはす雛かな

桐火鉢友と木盃し鳥づくし

我猫に戀する猫をにくみけり
消え殘る雪に雨降る涅槃かな
籔陰にしたゝか落ちし椿かな
山畑に犇と生えたる土筆かな
菖蒲湯の殊に熱きが嬉しけれ
ゆで芋に添ゆる山椒の若葉かな
若葉して汐打ち寄する小島かな
山陵に續きて岡の若葉かな
水打てば雛芥子の花くづれけり

俳句では集中の第二に位す(評)

小舍芝居

佐藤浪子

桃梨りんご紅い果青い實種々なのを山の如に積んだ露店がゾロリと並んて、カンテラは黒い煙を吐いて居る糰子細工、氷屋、飴やに筆賣、ベラ／＼しやべる旅商人の諸々、其中を人は押される、ふまれる子供の泣聲境内では太皷の響、見せ物小屋のなり物、さながらひつくり返す如、人波に押されながら妾は歩いて居る、丁度妾の横の方に若い凛々しい方が歩いてゐる、其方の腕と妾の肩(空氣草履をはいて居たから)とが歩く度にすれ合ふ、薄い單衣を通して生ぬるい肌の溫度が通ふ――其刹那言はれぬ感じが胸にさはいで、ビリ／＼と强いけいれんが滿身に起る、と誰か妾の足をふんだ、ヨロ／＼と前のお婆さんに當つた、ハッとした矢張肌の溫みが通ふた、――、枯れた血――露はな骨――、何となく寂寥と敗殘を感じる。髮の惡いにほひ人いきれ、揉まれもまれて漸々大通りへ出た、お新粉屋、菓子やが「お土産に召して」と呼んで居る。

木戸口の囃しに釣り込まれて五錢はづんだ彼の小屋芝居、義經何んとか言つた狂言だつた――、十二三の少女、滑稽な書髯して馬乘袴はいて、陣羽織とか着て鉢巻迄して汗ダラ／＼流して居た、花道から頭振り振り出て來て――「待て――待て――まて／＼／＼／＼家來共やあーい」と小さい扇を開いてバタ／＼とあふいで「義經公のお側には、かめ井片岡伊勢駿河、おつと忘れた武藏坊の辨慶――彼奴己等より少と强い、若し坊主と見たならば、逃げるが一の手、よしか承知か、がつてんか――――其待て／＼と云つた時の手付其聲色――、何處と無く優しさが仄見えて妾は無性に懷しかつた、そして「可憐」の念が胸一杯に滿たされて覺

えずハラ〳〵と泣いた、妾の地方では野師だの、すれつからしと人はつまはじきする、可憐想に彼の少女には父も母も無いのであらうか?、罪惡にみたされた一團に交はつて、年が年中旅へ渡つて歩くんだもの、自然美しい少女の血は未だ堅い蕾の咲くをも待たて涸れて終はずばなるまい、噫彼の少女も其中の一人ではあるまいか?、乾度――、けれど彼の優しかつた言葉付、動作から目元の邊の美しさが妾には此上なう可憐てたまらぬ、まだ〳〵彼の少女の血は泥に染まぬ――、美しい――あたゝかい――だけれど長い月日の中には先聲通り心のねじけた血の冷えた者になつて終ふんだらう――あゝ惜しい〳〵、何と云ふ不幸な運命であらう――またしても他人事に涙脆い妾は泣かせられた――人通りのはげしい大通りをこんな事懷ひ作ら片はじを妾は靜かに行く、月は十五夜、影長く前にうつして、來る人の顏は皆蒼白い、氷やの風鈴がチリンチリンとなる。

多感多情、血多き靑春の女子が物に觸れ、情に動くこと、正しく此れに僞りなし(評)

アームチエーヤ

西村ふみ子

無理に强られた葡萄酒の名殘が、頭に來てぴし〳〵と痛む、顏はぽか〳〵とほてつて、莫迦に襟の間が暑苦しい。ひとり身の憚る人もなきまゝに、私は襦袢一つになつて、窓を一ぱい明け放つと、きら〳〵と庭の立木の瑞葉を滑つて流れ入る風が心持好く涼しい。横になつたまゝ女子文壇を見る、けれども妙に眼がちら〳〵して、而かも此宏大な家がくる〳〵と廻轉して居るやうに見える、て、兩手を胸に組むで、凝と瞑目すると、私の身體もそれに連れて、ゆら〳〵と搖れてゐるやうな氣がして、堪らなくそれが嬉しい、と言つて私は現在の境遇に滿足して居るものではないが、兎に角、私の胸は、今ふら〳〵と海の上を漂ふて居るやうな氣がして、唯わけなく、嬉しいやうな、可笑しいやうな何とも言ひ知れぬ快感が起つて來る、と何處からともなく、微かに私の名を呼ぶやうな氣がする、而かもそれが涼虫の音のやうな――優しい――透き徹つた――振ひ付きたい程いゝ聲だ、と思ふて、ふと覗いて見ると家の前には二頭立の立派な馬車が一臺、横付けになつて、

それは二人の男の方が乘て居る、これはかねて私の懇意なる人なので……、今私を呼んだのは慥かに此二人てあつたらしい、二人は私を見て莞爾して居る、と私は何時の間にかペルフームの香がきびしい二人の間に挾まれて居る、と思ふと馬車は流れるやうに走つて居る。馬車やら電車やら人の往き來が雜然として織るが如き大路小路を、左に流れ右に走りて、いく曲りか曲つたと思ふ頃、私等三人は眼界廣いルテタ公園の眞中に走り出た。馬車が止まると二人は兩方から、辭退する私を無闇に草原へ引つ張り下さうとする、「其處までだもの、寸時いゝぢやありませんか」「さあ下りませう」と二人は私の手を捉つて立上る、途端「いや、是れは驚いた、一體如何したんてす、此の着物は？」「やッ、是は怪からぬ」と注意せられて、今まで少しも知らなかつた自分の裝に始めて氣が付いて、私はぎよつとした、これは何とした狂態だらふ。薄ぼいメリヤスの肌衣一枚の上に、汗が滲んで黃色くなつて、而かも片袖斷れたメレンスの長襦袢を纒ふて居る許りで帶はない、お腰はあるが、素足のまゝ片方には下駄、片方には靴を穿いて居るのだもの……是には自分ながら驚かずには居られぬ、實に心外てならぬ、どうして私は斯樣な態で悠々と白日の人目の繁き中を、而かも男の方と同車して、斯樣な處に來たのだらふ?、と一時は奇怪の念に堪へなかつたが、追に他見愧かしくて仆れるやうに私は車の中に身を縮めた。

「そりや不可、隱れるなんて卑怯てす」。「さうだ〳〵裝振なんぞ構ふ事あないさ、それて澤山てす、胸さへ包むでゐりや大丈夫てす、さあ下りた下りた」。と無理にも引き立てやうと、私の手を握る。

いやだと振り拂へば、又引つ張られ、引つ張られるを又振り拂ひして、互に引きつ縺れつ、はては突くやら叩くやら、さゞめき狂ひ、三人が躍氣となつて大立廻はりを始める。

「まあ、西村樣ぢやなくつて？」。

「西村樣、もし、西村ふみ子樣」、と不意に後の方から私の名を連呼する聲が起る、はつと思つて振り向くと、同じ小豆色のお袴を穿いた廂髮の女が二人、さく〳〵と小砂を踏むて、徐に此方へ進むて來る、刹那、私の舊い記憶は、私をして忽ちソレと首肯かせた、首肯くと共に私は尠からず喫驚いた、まあ、どうしてあの方達が……と思ふた時にはもう私の胸には、一種言ひ知れぬ喜悅の情と、堪へ難い慙愧の念とが焔のやうに燃え立つて、全身さながら水を浴びせられたやうにむな〳〵と打ち顫ふ。

「まあ、何日此方へ……」やつと是れ丈け私は聲を絞つた、けれど二人は聽くや聽ずや、

「ご艶福だ事ォホホオホ」「オホ……」、と如何にも冴え

冴えしい調子で、嘲けるやうに口を揃へて笑ふ、私はいよ〳〵極りが惡く、面目なくて、穴でもあつたら這入つてしまひたい程、堪らなく心苦しい、と言つて此塲合どうする事も出來ぬ。

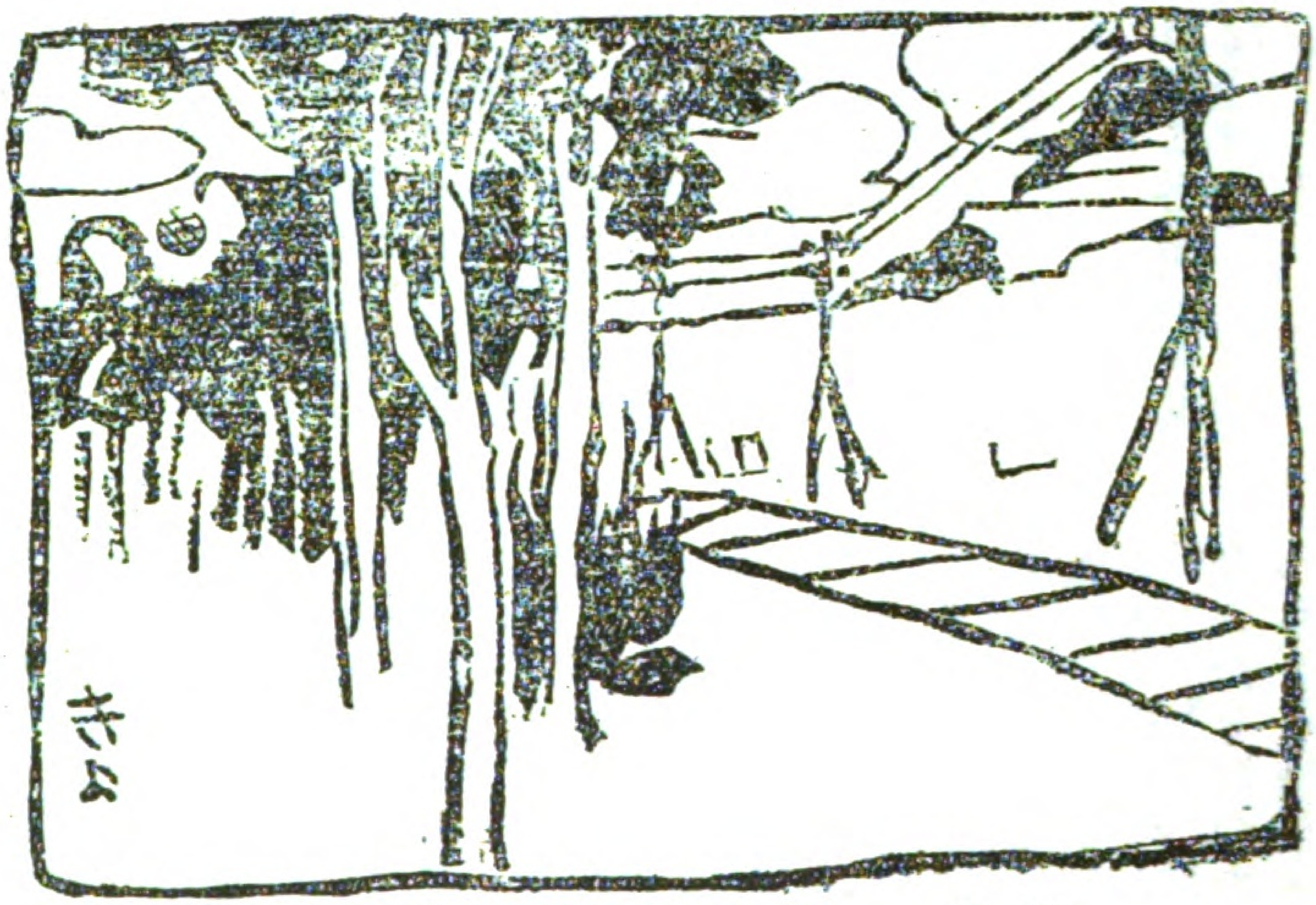
「吉野樣、加藤樣、甚麽わけで此方へ被來したのですか、え、お二人とも？」、矢張り二人は頭を垂れたまゝ沈默を守つて居る。「ねえ、加藤樣、何故だまつて被居して、もし、吉野樣、何故物を言つて下さらないの？え、吉野樣、加藤樣、もし、もし」、と私は二人が手と手を握つて打ち振つた。

「うるさいッ、何です貴女は!!」、

「何です其醜態はッ!!」

と云ふより早く、二人は一せいに手と手を振り拂つた途端、ピシリと私が頰は何物か當る音がした。

あッ!!、と私は驚いた、驚いて眼を開くと、悔しや二人は何處へ去つたやら…男の姿も共に消えてしまつて、唯私の眼の底に幻のやうな四つの影が殘つて居る許り、四隣を見ると意外！意外！ルチタ公園の砂の上と思ひの外、衣物も帶も寢臺の上に脱ぎ捨てたまゝ、私は自分の部屋のアームチエーヤに寢て居るのであつた。撲れたと思つた右の頰は、窓から射し込む夕日の光りに照り付けられて、ピリ〳〵と痛む。



風景　尾張　鹽野きよ子

女の耽溺と言つては語弊があらうが、それに似た心持を冥想の裡に描き出したもので、甚だ大膽な描寫である、反對する人もあらうけれど、描寫に生氣があるから之を採る（評）

から風

平塚白百合

ガラス張の飾棚に千代田草履や吾妻、柾目の男下駄、霞形、何形とにぎやかに飾つてある。赤い絹紐で下げたガラス板の上には、朱塗のポツクリ

に繡珍のまばゆいやうな緒をすげて据ゑてある。浮かしたやうな蒔繪に西日が薄すらとさしてゐる。

店には勝色縮緬の羽織をゾロリと引かけた濱島田の、それ者らしいのが二人、白木の疊付を幾臺も並べさせて撰擇んでゐる。

帳場には額のぬけ上つた主人が店先を見い〳〵天井から鼻緒や傘草履等の闇い程に下つた奥の方で帳面をしらべてゐる。丸い臺を置いて小僧は黒塗の跡丸の緒じめをしてゐたが、片方出來ると隣の小僧に渡した。受取つた小僧は一寸緒のメかげんを見て梅花形の緒止をあてると、口に含んだ眞鍮の釘を一本づゝ出しながらチヨン〳〵と打込んだ。前の小僧は後緒を口に銜へて加減を見い〳〵しめてゐる。

島田の二人は臺の撰擇も定まつたらしい、白いボール箱に入つた鼻緒を臺の上にのせては見てゐる。何か云つたと思ふと、縞お召のまつはつてゐる白い足を出した。紫の鼻緒がクッキリと素足になづんで、美しい。

とう〳〵白い鼻緒に定めたらしい、口輕な番頭がお世辭云ひ〳〵小僧の方へまはしてやつた。

* * * * * *

ヒユーと電線が鳴ると忽ち、落ち散つた紙屑も塵も捲上げられて、にぶい冬の太陽は光を失つて黄色く、塵

埃が立てこめる。裏町とは云へ直ぐ後は壕をひかへたので乾き切つたからッ風は、幾軒かの家の上をこしてたぎり落ちるやうに塵をあびせる。

今は水をまいたばかりなので塵埃も少ししづまつた。けれど餘波がくるので通る人は目をしばたゝきながらインバチスの襟を引立たり、シヨールにうづめたりして、いそぎ足でいつてしまふ。塵埃車が來た、塵埃を山のやうに積んでゐる。バチルスを振まかれるやうでいやな氣がする。乞食が切れ〳〵の着物を着て、眼ばかり光らして、フラ〳〵と食物店を一軒〳〵にのぞきながら來た。

角の駄菓子屋ではよけいに浴びせられるので、また水をまいてゐたが、すむと手拭を冠つたまんま皺くちやの猫背の婆さんが菓子箱のガラス蓋をハタ〳〵とハタキかけてゐる、お菓子所と白いのれんに西日をよけてゐる椽先に小兒が二三人腰かけて一文菓子をうまそうに食べてゐる。

風の力もやゝそげたやうてのれんを打つのも間遠くなつた。すじ向ひの芋屋では白い煙がモウ〳〵と上つて今ふたを取つたらしい、竹馬にのつた男子が懐から暖かそうな煙をスート出しながら出ていつた。入れ違つて下女らしい庇髮の眞赤な太い手で風呂しきをつかんだのがは入つた、鼻の下のきたない女の子が、五厘に

きつてかけ込んだが、飴屋の笛が横町から乾き切つた空に聞えるとフイに買ふのをやめてチヨコ〳〵と笛の音をあてにかけていつた。

寫生文ではあるが、氣が利いてゐて面白い、下駄屋の店も、から風の吹く町の様子も、能く表はれてゐる（評）

淋しみ

月霊子

冷えて行く、冷えて行く、
最高の熱度
徐ろに、徐ろに
冷えて行く、さびしみ。

炎吸ふ力こめ
抱けども力足らずや
得てしもの、逃れ行く
するすると、するすると。

消えて行く、消えて行く
白臺の燭火
一つ宛、一つ宛
消えて行く、さびしみ。

淋しみよ、淋しみよ、
われは知る、燈火の
行きはつる、途すがら
しみじみと、しみじみと。

口語詩、散文詩の到り得ない此の境がある、詩に心を傾けんとするもの此境を忘れてはならぬ（評）

井筒

松田まさ

白く澄んだ春の光の庭に、青錆びた井筒は大なる鏡の形に据ゑられて有る。背には春の光暖ふさせども、尚ほ胸には冬の冷たい思ひの魂を抱いて、お俊と義妹のお蔦は袖を並べて踞つた。昨日遁げた順治の行方を占はんとて城跡の巫女を訪ふて、徒然を、井筒の鏡に照して居るので有つた。其巫女の歸宅を待つとて、徒然を、井筒の鏡に照して居るので有つた。午後二時、梅の白き葩はゆるく香つて一つこぼれた。日は二女の眉に輝いて、胸を傳つて肩に走る陽炎に、相見

て、そして默つて俯いた。物思ふ人は只下を見る。二人は數多度井筒の鏡を覗た。光の底は動かぬ色で有る、凹凸の石を疊んだ深い管の光は、人丈にして陰を帶び布丈にして闇の傘をかざす。お葛の投げた石は三度まで側の石に凄まじき音を立てゝ闇の庭に青い幾條の絲を曳き殘して、やがて微かなる水の音を傳へた。青絲の垂れたる尖に赤錆びた綱が動く樣に思はれた。二女は此遠き音に耳を澄して喜んだ。

お俊にも投げよと云ふたが、只微かに笑ふて頭を振つた。そして遙に目を空に放つた。井筒の鏡の白き光りは細き筒を空に投げる。白い雲が走る。動く雲は一瞬毎に色を更へる。「あゝ大きな日の暈です」とお俊は云ふ。薄色の日の輪は、日を眞中にして冷かに春の光を他の何物にも劃る。お葛の胸は只管に日を望んで日の輪の面を走せ入る雲の樣て、お俊は、只、寂しく日の輪の陰にうち背き、冷たき風にふかれながら流さる屑雲の樣て有ると思ふて胸震はした。

「あれ鳥が、鳥が飛ぶ」と、お葛は立ち上り井筒の鏡に映つたのだらうか。立つて長く／＼見送つて居た。

頓て以前の姿勢になつた時、お葛は話した。

『深き湖あり、暗き林はそを環れり、湖の畔なる巖は天を摩せんとす。こゝに荒鷲の巣ありき。母鳥は雛等に敎へて稱き翼を振はしめ、またその鋭くせん爲日輪を睨ましめき。偖、雛等の巣立を送りて曰く、汝等は諸鳥の王なるぞ、目は利く拳は强し、いざや飛べと。かくて巣立せる雛は一羽は巖の頂に羽を斂めて日を凝視し其光の限りを吸ひ取らんとする如くなりき。一羽は湖の面を窺へり。忽ち覆舟の如き大魚の背を攫めり湖面の波こゝにさかまきて、力相如ける魚と鳥は相曳きて波に隱れたり。母鳥は悲しく呼びて巖の上なる一羽を見れどもあらざりき。只、一黑斑の日に向ひて飛ぶを見き』(即興詩人)

お葛は眉を上げて、兄は魚を攫まんとて湖を窺へども妾はやがて、日に向ひて飛ぶ雛とならん、今日は人を探す身の、明日は探される身とならうと思ふた。朝夕に只だ日を見つめた目には逞ましき驕慢の輝きが見えた。お俊は、只、獨り殘された母鷲の寂しさを思ふて泣いた。常に暗きをのみ見つめなれた目には、光の裏にも黑き陰のあるを思ふて。

あゝ人は遠く去つた。去つた人は苦しむ、――苦しむが爲に去つた。殘る人は思ふと自ら痛む。去つた人の苦むのは肢體の震へてある。殘つて思ふ者のは、胸の震へてある。

黃なる夢の思想の中に、白き鳩の羽の如き素足を飜らせて人は近づいた。丈なる黑髮を肩に拂へばそれは巫女であつた。微笑だ姿が靜に二人の目途を覆ふ。母の樣な懷しさて有る。頻死の人に對する如く聲は心安さ

を色にした慰示である。「あゝ、二人は生きんとして居る」と

そして象牙の如き皎き石を拾ふた。そして高く夕日にかざす紅の彩が肱に流れた。「天なる星」とお葛は瞳を輝かした。肱を回してお俊を抱いた、掌の底の暗きに青き冷たさを含んで、お俊の暗き瞳と相合ふた。「冷き氷、」と痛き胸を抱いたお俊は女で有る。人妻で有る。巫女の肩には嚴かに夕陽の紅が流れる、廣き胸は春の日の白きに張つて、石に立つて教を説た野の豫言者の如く二人を見下して云ふた。「二人は願ひの、「生き得られたなれば」熱き星を欲した者は冷き氷を得、冷き氷に苦みし人は光ある星を得給はん、されどそれには五度の風、五度の雨に摩かれては」と。『さては、妾は光を吸ひ得るにや」とお葛は叫んだ。巫女は憐むが如く見て云ひたした。「星は光ある石、月は輝く水、汝の剽光を望て走る時、背にある火の希望いかに熱くとも水に石よ、馬は冷たさに屢ばつまづかむ、走に従ひて轉々火の思ひは動き止む期あらじ、石の山を踰へ氷の川を渉る時汝は燃かん額清らに、瘠せたる人の屍多かることを』、と多くを答へず。只靜かに空を見た、鳥は翼に白毫を乗せて高く翔る。

お俊は膝を進めた。『さては夫(ひと)は歸り來ますや』。巫女は象牙の指を夕日の陰に延べた、舊城の癈墟につゞく草場には起る野火の煙低く地を這ふ。『君は思ひ人は思ふ思ふの炎の圍り、靜かに物陰に芽ぐみし昔こそ幸多かりつれ、見給へ、外面の風に觸るゝ時、廣き野に至らんとする思ひは湧かん、相思の戀の炎は離れたるに非ず、炎の手と手、思ひは固く相抱けども、東と西に炎は遠る、抱くは白き昔の遺骸、只灰のみ、一人は男、汝は女、東と西に相離りて、再び相抱かんと思ふ日は、灰の白きに驚き給はん」と、音も無く靜に去つた。二人の胸と胸を隔つる井筒の鏡。

夕陽は今、白き春の光に紅の炎を混へる。炎の絲は雨の如く斜に物の層を刺す。白き鏡は、今、廣清らかなる二女を乗せて夕陽に輝いた。

斯う云ふ美文を作るのは骨が折れて、其割にはえないものです、つまり極端な技巧派に墮するのです、何うしても時勢後れと云ふことは免れません、選者は此作者の勞力を敬すると共に、此勞力を以て新文藝に向はれんことを切望します(評)

御玉章焼捨て申候

塩見喜代子

恨めしきおん姉上よ。小さき妹をもおん身が妹と思し召せばこそ賜はりし數々のおんいさめ有難く身に浸みて覺え候ふ。さりながら、あゝおん姉上よおん恨みに候ふ。今更に

「深く昔に歸れ」とは、『妾も一時はかゝる事もありしがふつつりと思ひたち……』とは何事に候ふぞ。今更にうち捨てし希望を追へとや前途を思へとや、されど、されど、妾の耳には無意味に候ふ。希望も前途も、はた光明も、妾が思ひに比べては何せむものに候ふぞ。あまりのおん恨しさに情なきおん玉章の數々燒き捨て申し候ふ。燒き捨てゝ、微かに上る白き煙、あとに殘りし黑き灰を、半ば現に眺め入り申し候ふ。おん姉上よ、如何におん美はしき玉章も、前途も光明も、妾の死後を、はたや彼の人逝き給ひての後を如何せむものに候ふぞや。

眼とづれば仄かに浮ぶ白木の柩、白布に引かれて永劫より永劫にとはてしなく續くを。あゝ如何におん姉上は宜はすとも、おん母は嘆き給ふとも、妾が切なる此思ひは永劫に生くべく候ふ。春來る事も遲き鄙の里は今梅の花盛りに候ふ。都の春は今盛りにぞ候はむ。されどあやしき運命の手に弄せられし子はかくてあるべく候ふ。若し今の妾が身に變ることありとせば、そは妾が幸福の翼にうち乘りし時にぞ候はむ。骸の土となるべき折にぞ候はむ。

激しい手紙、要領は得ないが感情は溢れてゐる（評）

明日の今頃

向井光子

三月二日晴、父上の風邪も母上の御病氣もまだなかなか癒える容子はない、たつた三人の小家族に二人まで就床せられて獨り殘る私の淋しさ、

朝飯後のお藥を差上げてから、水仕事をやつと終えて赤く膨れた手を火鉢にかざした時、『郵便ッ』

明日當中隊の古兵三十餘人郷ノ口へ行軍、宅にて晝飯致す心算に候間何卒其準備をなし下され度願ひ上候、但し晴雨に不拘

食事の準備は揚豆腐飯八升、味噌汁三十人分（一人二椀宛）煮〆（小芋、燒豆腐、棒鱈、）酒三升、此他將校下士は鷄肉を饗すると以上、

大變だ、さあ眞に大變だ、此小さい家に三十幾人、しかも二方共病中なのに、あゝどうしたらよからうと迷つたが私一人でどうする事も出來ぬ、止むなく此手紙の事を父上に話す、お二人は苦しい息をしながら强ひて起出られ、三人で家の片付やら掃除やらの大騷ぎ、明日の今頃はラッパの音勇ましく好きな軍服姿が來て下さる嬉しい、しかし何だか妙に耻かしいやうだ……お酒を出したら皆なが醉つて面白い唄なんか歌ひなさ

るにきまつてる、將校のお方お名は聞いてゐるけれどまだお目にかゝつた事はない、明日は、

久しく逢はなかつた兄樣も見られる、早く明日になればよいのに、こんな事を聯想してゐると仕事の方はお留守、

『何ボンヤ



物思ひ　青森　松尾千代子

りしてゐるのだ』と父上に呼ばれてハッと氣付いてはまた忙しく動く、

午後急に思ひ立つて千枚漬をする、畑て大きい蕪を採つてきて母樣と切り競爭、そりやどうしても私は下手だ、始めてだもの、母樣が五枚程切る間に私

は一枚、しかも二三分位の厚さだから更にその一枚を四五枚にもきらなければならぬ、なかく以て容易の事ではない、
それに又、うるさくも『明日の今頃』を絶えず思ふのだもの、捗らないのも無理はない、
月は大きな暈をさしてゐらつした、どうか明日は降らなければよいが――

其當日を書かずに、其前日を書いて、いろくの豫想を讀者にもさせると云ふのは、文の材料の扱ひ方を知つてゐるものです(評)

驕りし日

三留なみ子

皆ありとほのに知りつゝ限りなく驕りし日をば寂しみ泣きぬ

かくて我生の曠野をゆきかへりわが眼はうみぬわが手つかれぬ

此熱き涙とゞかむ人もなくたゞ春くれぬうらさびしさよ

この矜りやがて悔ゆべき日をおもひあゝ故しらずこゝろ寂しき

風そよろ葦の枯穂にさゆらぎて落日冷たき山の沼かな

過ぎ去りし幸の車の影趁ひて今日も暮れけり轍の跡に

對ひ居て君も語らずわれもいはず目と目相見て心足りし日よ

終りの「對ひゐて――」が壓卷(評)

雪の夜道

今西春江

(明治四十二年二月二十四日。夜――)

門外が俄かにひつそりとなつたので、變だなと思つて窓の障子を開くと、雪だ。暗いので始めは何だか和解らなかつたが、通る人の傘の上が眞ッ白なので其れと知つた。

何心無く見て居ると雪はまばらのやうだが、靜平と眼を据えて見ると、二尺程を限つてひつきり無しに降つてゐるのが見える。それも暫くの間で、長くなると眼がくらくとして、雪は無數の白い棒のやうに見える。けれどもまた眼を据えなほすと、明らかに白いかたまりが、靜かに降つてゐるのが和解る。

「おい俥屋。曾根崎橋まで何程で行つて呉れる」と、一人の男が私の家の軒に這入つて、トン／＼と傘の雪をはたいた。薄黒くなつた敷石の上に、白い輪が殘る。

「へい／＼」暗い中に白く淡い長方形の灯が動いて、「這麼日の事で御座いますから、どうぞ拾錢お遣りなすつて……」

「ウン宜し」と、男の姿は闇に消えた。

私はランプを机の上から取つて、窓の處へ持ち出した。光輝は鈍いがボヲッと闇の中へ、俥臺と俥夫が浮き出された。

俥夫はランプの光輝の爲に、梶棒の上に白く雪の積つてゐるのに氣がつき、吃驚したやうにフウ／＼と吹き出した。けれども其れ位の事で雪は散らない。終ひには梶棒を上げ下げして、ガチャ／＼やりはじめた。

「おい無茶するな」ほろの中から聲がする。すると、「ハッ、ハッ、ハッ、……」と、何が面白いのか俥夫は急に高く笑つて、ガラッガラッと駈け出した――。

「おい吉田君!!。君は此雪を積ると思ふか、積らないと思ふか？……」

將校マントを頭からスッポリかむつて、頭と肩のあたりに雪をためた、化け者見たやうな黒影が横町から二つ來る――。

「さうさね。僕は積らないと思ふ。」

「馬鹿云ひ給へ。此雪が積らんと云ふ事があるものかい」

二人の影は話をしてゐるが、どつちがどれを云ふてゐるのか、解らぬ。

「僕は斷じて積らないと思ふね。古歌にも「儚なく消えし春のあわ雪」とか何とかいふ事があるぢやないか」

「それや君。雪その物が淡いので、今晩の此雪は決してあわ雪とは云へぬ」

「何の事か僕には解らんね」

「解ら無きやそれで宜いさ」

「まあ何にしても僕は積らぬと思ふ。」

「ぢやあ掛けをやらうか」

「ウンやらう」

「鉛筆一ダースだぞ」

「宜し!!。僕は斷じて積らぬ方だ」

「僕は必ず積る方だ。負けてから。ペンシュルを出さぬなぞ云ふな」

「無論」

ちいさい紫色の紅葉傘が、そろ／＼窓の下を過ぐるすると其中からちいさい白い顔が出て、大きく口を開けて空を向く――。と、小傘は急ぐ其顔をかくす。

また出る。またかくす。また出る。またかくす。そんな事を五六度したが、遂ひには白い顔が呶鳴つた。
「姉ちやん嫌だいッ。僕は雪を口の中え受けやうと思つてゐるんだに、傘なんか差しやがつて、ぢやまになる」
一人の商家の丁稚らしい十二三の小僧が、軒つたひにちよこ〳〵來たが、不圖向ひの軒看板にいやといふ程頭を打ちつけた。
「痛ッ!!!……」
小僧は靜平と頭を抱えて、暫らく身動きもしなかつたが、やがてそろ〳〵頭を上げた。そうして四邊を見廻して軒看板につばを吐きかけ、握りこぶしで四五度なぐり付けて駈け出した。それでもまだ腹が立つのかまた戻つて來てつばを吐きかけ、今度は軒看板をウンと突き飛ばし、ゆら〳〵〳〵とゆられるのを見て。
「フン。ざまァ見やがれッ」
と、心地宜さゝうにせゝら笑つて、ちよこ〳〵と軒づたいに行つてしまつた。

描寫がおもしろい、まだ少し垢拔がしないけれど、能く努力したら文章は上達する質だ(評)

郵便局日記

鈴木房子

日曜でも朝のうちは騷がしい、正午すぎやつと窓口を閉めたところへ、或商店から書留郵便を百二三十通持つてくる、勤めする身は日曜が一番樂しみだ、一週の中にたつた一度の午後だけのひまを、切手と番號票を貼つて消印と原簿につけることに暮らさねばならんかと悲しい氣がして、机の上ばかり見つめて居る、そしてもう妾も事務根性が餘程しみこんだと我が身が厭になつた。
五時頃他の人の御飯を食べに居らつした時、ほつと息をついて窓をあけた、頬と右の手計り熱して、指には筆の跡がついて居る、ふと外を見ると、女學校で一所だつた豊浦さんが山田先生と遠足の歸りらしい、原簿の上に涙が落ちた、あゝいつそ退めたい……がすぐ、退いて如何する老ひた祖父をば――といふ思が浮ぶ、この思ひに引摺らてからもう二年になる、妾はまだ十七であるものを、俗事や生活問題を思はずに、若き日の寂寥を沁々味はつて見たい、妾はもう夢に生きて居られないのだもの、早く仕事にかゝらう、机の上にはまだ澤山郵便物がある。

四月七日、出局の途中で清水谷女學校の方にあふ、すぐと横道へそれて了つた、晝前から雨がふつて局の晝も靜かだ、秀野さんがお越しになる、島田に結つて、以前此局に通つてらした時より娘らしくなつて居有るお話は、はきはきした調子で妾はのけものにされたやうに默つて居る、荒木さんが『なぜお話をなさらんの』と仰有つたが、矢張聞いて居る計り、胸に一種の悲愁が滿ちた。

お歸りなすつてから荒木さんが『貴女と同年だのに大層な違だ』と憐むやうに仰有つたので、殘念な氣がしたが、たゞ笑つた、そして彼んな人と一所にされてたまるものかと思つた、妾は自分の悲慘な境遇をひそかに誇つて居る、――だがそれは負惜みだ、實際は辛い淋しいのだ。

四月八日、圖畫展覽會へ行く、生徒が澤山通る、つひ去年頃迄は、自分も學校に居れば出品するのにと、實てもとりそこねた樣な心地がしたが、今は何ともない、たゞ見て居る、悟つたのかどうか、……未だ五時、早く七時が來ればと待ちかねる。

夜歸宅すると祖父はよく寢て居る、荒彫の塑像の樣な顏、歸りましたと云ふと、一度目をあけて又安心した樣に寢て了ふ、妾は冷たいお茶づけを食べて薄い蒲團へ這入つた、斯うした晩が大方である、つくぐ思ふのは、座敷へ上るとあの土瓶から湯が立つて居て、笑み乍ら迎へて下さる母樣があればと……。

飾らざる告白、若い胸からの苦勞人て。而かも思想の健固な、感情にも燃える好い女性の影が映つてゐる（評）

炭を送る

三ヶ島よし

寒い寒いといひながらお彼岸になりました、みな樣お變りはありませんか、私二三日前に摘草に出ましたら蓬や蕗などはたくさんありましたが、梅の花は他所よりずつと遲いので、此頃やうやう咲きはじめたばかりです、それに昨日はまた大雪なのですもの、淡雪は重いから花どころか、杉の枝がたまりません『今年も雪にやられるのか』と山の持主はみんな大心配をするのです、けれどゝ降つてゐては仕事も何もお休みですから、隣の人まで話しに來て家内中あたつたり笑つたり、いつになく賑やかでした、夕がたには骨を折つて拾つて置いた薪の結ひ繩が殘つたばかり、春の一日を事もなく圍爐裏のはたで暮してをりましたが、ふと御地の運送が市毎に五日市町へ來る、といふことを聞いたのです、さあいつかの事が思ひ出されました、そし

てあのせい〳〵と明けはなつた蠶室にあふれるほど、輝いてゐた美しい繭が庭の雪よりも白く目の前に浮んできました、五月雨の靜に降る日にその繭の中の撰りに撰つたのをならべて置いて、叔父樣や叔母樣や太造さんや何かて、一つづつ耳にあてて蛹の動く音を聞きました時、私はいくら指てはじいてもよくわからないと申しましたつけね―、ほんとうに名ばかりの御手傳て却て厄介だつたてせう、だが私はまた伺ひたくなりました。

今年もやがて桑の芽が出ますから、いろ〳〵御仕度にお忙がしいてせう、もう澤山買ひになりましたらうがこの炭は當地の產物、楢と樫との上等を撰つて此邊で一番上手だといふ隣のおぢさんが燒いたのてすから、あまりすこしてすがたつた十貫目程、俵に造らず麻袋へ詰めたまゝ今朝五日市へ行く馬に賴んでやりましたから、どうぞ御受取下さいませ、お池の菖蒲の花が咲きはじめ、御座敷のたゝみをおあげになりましたら、大きな爐の中へ入れておためし下さいませんか、もつといゝのをお使ひてしたら、御迷惑て御座いませうが、さよなら。

興味ある手紙(評)

親不知

しほれ草

『あゝ母樣にすまない』……『だけれど、どうしてもあの事だけは御心に從ふことはだんじて出來ないのだ』ア、どうしたらいゝかしら、自分て自分の心を決する事は出來ないのてす、どうしたなら母樣は元のやうに私を可愛がつて下さるのてしよう、思ふと、もう〳〵悲うて〳〵顏に袂をあてずには居られません、アヽもう二た年の過去とはなつたのてす、其の以前母樣の私に對する愛、それは〳〵一通てはありません、といつて何處の母樣ても自分の御子供を深く愛するのは當然の事てしよう、けれど私の母樣の私を愛することは、欲目から見るせいか、同じ姉妹の中ても、一番てした、其れから一寸した出來事、アヽ思ふと身の毛のよだつ程いやなのてす、それは小學校を卒へ補習科も卒へた、十六才の春てした、元より私は裁ち縫ひは好みません、どちらといへば數字を好みました、てどうか何なりとも女子の職業を覺へてそして他の助けを借りないて、世に立つて行きたいものだとは常々心掛て居つたのてす、けれど、私の父は昔風の氣質故女には學問はいらぬ、家の仕事をせよとばかり此れ以上の學校に入るを許しませんてした、私の修學したいといふ心は日日に增すばかり……丁度其の時父は役所の用事の

爲め、遠方に出張したので、殘るは母ばかり、私は此の時ぞと思ひまして、上の學校に入れて貰ふやう、しきりと願つたのでした、それで母は親類（母の方）に行つて相談したさうです、都合よく承知してくれたとの事で東京の〇〇女學校に入學する事にきまつたのです、私の喜び例ふるにものはない天にても上るやうな心地でした、なつかしき〳〵故郷をあとにして東の都へ參り、難なく入學も出來ましたが何となく故郷が戀しくつてなりませんけれども此んな心を起しては一人前の者となつて、歸國し父樣に、御詫をする事は出來ないと、堅く心を決して辛抱して居りました、……四ケ月も夢の間に過ぎて、夏休みも數ふる程になりました、或る朝突然電報が參りました、びつくりして開封しますと『母大病すぐ歸れ』とあります、ア、其の時の私の悲みはどんなでしたらう、もう生きて居る心地は致しません、立つても、すわつても居られません友人が大勢參りまして、慰めてくれましたが只々泣いて居るばかりで、答ふる言葉も出なかつたのです、すぐさま先生に送られ青森行の列車に乘つたも夢中でした、……汽車の進行も遲くつて〳〵なりません……幾十時間の後待ちに待つた、なつかしの停車場に着きました、迎ひのものはとあたりを見ると、向ふから妹と下女（母の實家）とがかけて參ります近づくより私は「母樣はどうなすつて』と聞きますと『いいのよ』と申します、先づ、一安心急ぎ吾が家に歸らうとしますと妹は『母樣



姉樣のお顔　宮城まき枝

祖母様の御宅にゐるのよ』と申します……此はどうした事かと思ひつゝ祖母の宅に參りますと、不思議や大病の母は出迎ひてくれました……夢ではないかと疑ひつゝ導かるゝまゝ奥の座敷へ參りますと、母のいふには『僞りの電報かけたので、さぞびつくりしたらうね！、だがお前に是非きゝたい事があるので』……私は不快で〳〵たまりません、もうぢき夏休なのに試驗最中の場合に休ますとは何んといふ母様の思召しにやと思ひつゝ默して聞いて居りますと其の理由は大略こうなのです。此の前私をあちら（東京）にやつたのは實の所爲吉（母の親類の者）が是非ともやつてくれといふので、行く事になつたとの事、それが二三日父が出張先より歸宅して、此の事を聞いて一方ならず御立腹なさつたとの事、又爲吉の方から約束ばかりでもいゝから私をくれまいかとの事、それ等の事で私をよんだのであるといふのです、母は再び言葉つゞけた『こゝだお前に聞きたいのは同じ兩親とはいへど義理ある人を捨てても此の母を捨てても父に從ふか、又、あんな頑固な父に從はないでも義理をつくし母に從ひ愛してくれる人に嫁すか、それだ』……此の事をきいた私は全身に針をさゝるゝよりもまだ〳〵つらかつたのです、苦しいやら口惜しいやらで、胸もはりさけるばかり……此の爲吉とは母の親類の人で中學校を卒業したばかり、それはどうでもいゝけれど東京に出て修學するとは名ばかりで惰怠放蕩兩親の耳に入つて歸宅した今では改心したとか云つて居るけれど己れの仕事とて何もない遊び一方だ、……其の方を如何に母様の御親類とはいひ義理ある人とはいひ私に嫁けとは……あれほどまでに私を愛して下だすつた母様の御心が……たゞ〳〵落涙のするばかり……其れや無論父様も大の不承知でした……私も其れだけは母様の御心に從ふ事は出來なかつたのです……其れからは母様の御心は一變したのです、……何事も他々しくなさるのです……私は其の爲め殘念ながら東京に行く事は出來なかつた私の苦痛はどんなでしたらう、もう〳〵無我夢中でした——今でも何か御氣にめさない事をいふと『どうせ私の事なら無理な事ばかりですもの』……と仰有る……私、其れが、なさけなくつて〳〵ならないのですア、どうしたなら、此の御言葉を耳に入れないで行く事は出來ましよう、……元の母様になつて下さるのでしよう……アヽ此んな事をいつてはすまない、私が惡いからだ……此れが幼少の時あまり我儘をした報だ……もう此れからは力の及ぶかぎり元の母様になつていたゞくようつとめやうと思ふのです。

親の心を子は知らず、子の心を親は知らず、思想の違つて行く現代には、ありさうな事柄で、此れなどは寧ろ單純な方でせう、何うかして母の心をもとに返さうとする處はいぢらしくも氣の毒に感じます、ハイカラな飛上りの思想を抱いて、一言の下にはねつけて反抗するやうな態度の人が多いのに涙を呑んで學校をやめた此方の心理は同情に堪へません、文章よりも其事柄を正直に書いたと云ふ點で、皆樣も此一文を御覧なさい（評）

天人

三浦ふみえ

天人に雨洩る堂の若葉かな
春の雲或は鶴に似たりけり
春の山麓に古き都かな
菊苗の簀圍ひ解くや蕗の薹
桑の枝撓むる畑や殘る雪

俳句の境に遊ぶもの（評）



秀逸

厭な人

浮草

（一）

階下の大時計が二時を打つた。

またかと私は嫌な氣がした。どし／＼階段を上る音がして急はしく上つて來た重田さんが、ちら――とあはてた風に皆の顔を見渡してそれから、黒板の縁にたまつたチョークの短かいのを一々拾つて丁寧に傍の箱に入れた。

重田さんは出雲の人である。すぐわかる。發音をよく間違へる、人から呼ばれると「ハイ／＼」と云つた調子に語尾をあげて返事して、ヂクと眉根をよせる。

蒼白い顔した、頬のこけた、それから眼の凹んだ、突起した眼窠部に濃いゝ眉がぴり／＼動いて、ちらと見た折、そのおど／＼した眼付と八の字髯とが何時までも胸に殘る。

當家の藥劑師で、講習が始まると何時も此の人が先生の代理として筆記の役を務めるので、毎日その神經質らしい、おど／＼した顔に接しない日はない。

口はあまりきかぬ方で、それでも物を言ふと凄い眼の

まゝて口元に一寸笑を見せて、案外わざとらしい猫撫聲をする。

筆記の切目〳〵に必らず人の顔を見廻す、それはぢつくりと大膽に見つめるのではない。チラ――と狼狽てた風にぬすみ見るので、それが氣の所爲か主に私を見る樣な氣がしてならない。

一行々々顔をあげて見い〳〵して、その目を何氣なく重田さんの方に向けると乾度見てゐて、それは非常にあはてゝ云ひわけらしく一座を見まわす、あれがあの人の癖かしらとはじめの程は思つた。

（二）

此間の朝だつた。火鉢の傍で大山さんと健末丸を揉むでゐたら重田さんが私の傍に來て座つて、自分でも健末丸を揉みはじめた。

大山さんと私との話を默つて一言も交えずにきいてゐたが、私が何かの序に「春は悲しくてすかない」つたら、突然「へゝン」と意味も無さそうな、濁つた笑方をして外の方を見て「雨になつたナア」と云つて序に私の方をちらと窃み見した。それから何やかや話した末に、私が何も好みがないと云つたら「丁度俺見た樣だね」と云つた。

大山さんが「重田さんと一緒になつたら佳いわ」といふと、おど〳〵した風に、心配そうにちらーと私の顔を窃み見て何かにや〳〵笑つてる。

大山さんはなほ語をついて、「重田さん、何故あんたそんなに笑ひなさるだいにこ〳〵して……嬉しい事でもあるのかね、あんたが落着いて丸藥するなんてない事だわ」つて頭から揶揄ふ樣な調子でいふ、「嬉しいでない、面白いだ」と矢つぱりにや〳〵笑つて人の顔をぢろ〳〵見てゐた。あれから私は重田さんを疑つた。

今迄は四十餘りのお祖父樣に近いと思つてゐたのが、急に若いかもしれないと云つた樣な氣で見る樣になつた。私の經驗から云ふと、自分の何とも思はぬ人からしげ〳〵見られるのはあまり嬉しいものではない。超然と遙かに其人を眼下に見下してやりたい樣な誇と

それからそれが侮蔑に變つて、どうかすると存分迫害を加へてやりたい樣な、反抗心が湧くものだ。

それでも、私は割合に穩當な態度を取らうと思つた。けれど、ふつと眼を上げた其の人の目とカチ合ふた折の氣拙さと云つたらない。嫌て〳〵、憎らしいほど厭惡の情が胸に漲つて來るので、私は兩手で頭を抱えて

突伏して成るべく顏を見られまいとつとめる。判らぬ字でも重田さんには聞かぬ樣に、避よう／＼とする、すると重田さんは氣の毒なほど力のない、うすら寒い樣な眼付て此方を見つめる樣になつた。

「貴郎、平岡さんから藥取りに來ました」と上つて來たのは船沼とかいふもう一人の看護婦。
重田さんはいま／＼しそうな、怒氣をおびた眼付して「寺岡だらうと澁り切つて「ア、そう寺岡」といふのを「よく字を見て云ふが佳い」、となんでもない事を叱りとばす。
「だつても、どうでも貴郎も下りなさいせにや不可ませんわね」と船沼さんは不平さうに、白箒の粉のまみれついた重田さんの着物の袂を見つめてをる。
「今下りるがな逃けてをれ」と追ひかける樣に云つた。
奧樣だナ――と私は悟つた。奧樣は餘り佳いお容貌ではない。それを重田さんは奧樣だ――と人に知られるのは、殊に若い私達に知られるのはいま／＼しかつたらう。
と何だか吹き出したい樣な、氣の毒な氣もしてわざと其の人の顏をしげ／＼見てやつた。

重田さんは眉をしかめて腹立たしそうに、併しボンヤリと目を据ゑてあらぬ方を見つめて考へてゐた。

描寫に一寸鋭い處があるのだけれど、氣が利いてゐないのと、說明が多すぎるので、實價より二三割の損がある（評）

三春の行樂

西戸政江子

日曜日なので師團の大兄樣もお歸りになつた、それに從兄妹の五郎さんと綾さんとがおそろいで居らしつたのでお晝御飯の時のにぎやかさ、お給仕の仲が目を廻しさうなので氣の毒だつた、御飯がすむと大兄さまと五郎さんはお書齋へ行つてお仕舞ひ遊ばす、綾さんと妾はお庭を散步する、恰度今日は祭日なので綾さんは奇麗にお化粧して居らつしやる、藤紫の眞んとにハイカラな縮緬の羽織、夢想裏に光琳風の春の野を色入りに染めて紋織御召の綾裏の二枚襲、そのうちでも葡萄鼠の裲が俠て一等氣に入つた、十合で母樣にねだつたのだと得意らしかつた。
　ずつと御池を渡つて築山の向ふを一廻して緣に腰かけた、空は青々と心地よく晴れて、暖い春の日はポカ／＼とあるかなきかの春風にチラリ／＼と梅の花が散る、綾さんはポツと上氣した樣、美しい頰、妾の小指の指環も嬉しい程光る。
「ほんとに貴女今日はお奇麗よ」といふと綾さんは、

「アラ」と羞かしさうに肉色のハンカチを唇に當てゝ。

「嫌だわ」　お白眼なさる、

と仲が出て來て

「あの孃さま、若那様のお召して」と呼びに來たので二人連れだつてお書齋へ行くと寫眞撮りに行かないかつて仰しやるのでお母様に伺ふと「お撮りなさい」と仰しやつたのでお供する事にきめる。

綾さんと仲に手傳つて貰つて衣物を着代へる、兄さまは早く〳〵とお急き遊ばすし妾ほんとに困つて仕舞つた、やう〳〵仕度も出來たので出掛けやうとするとマラソン競爭に居らしつた小兄様がお歸りになつて寫眞と聞いてそれなら僕も行ふと、とう〳〵五人連れとなつた、大兄さまは中尉の略服で、小兄さまと五郎さんは高等工業の制服、お母様は、

「眞實に男はすつぱりと可いわね」と仰しやる、これには妾も綾さんも一言もなかつた。

京町橋で電車を下りて獨立軒へ入つた、お天氣が可いので三十分ばかりも待された、ブックを見て居る間につい一ケ月程前に嫁らしつた小原さんの八重さんの寫眞が見えた、まあ綾さんも妾も驚いて仕舞つた、

すつかり奥様姿になつて居らつしやるんだもの、

やつと順番が來て五人一緒のを一組と大兄さんと小兄さまと妾と三人限りのを一組撮つた、歸りに四ツ橋で五郎さんと綾さんに別れて歸る、大兄さまは時間が遲いからと仰しやつて御飯も召し上らずに德の車で師團へお歸りなすつた。

夕御飯のすんで小兄さまとはなれてピンポンをやつてゐると綾さんから電話がかゝる、出て見ると今晩南の演舞場に藤間流のお浚があるのですつて、それであの絹子様が十八番をやるのですから是非居らつしやいと云ふのでお母さまと二人して出掛けた。

やつぱり絹さんの――月の朝妻――は十八番だ、一等氣に入つた、あの漆のやうな艶々しいぬれ羽の髮を勝山に結んで、　紅梅緞子の派手な姿はいつ見てもあでやかである、

仇アシ…………と左手の手拭をハラリと向ふへ、

仇ア浪…………と同じく向ふへ返しながら右手に持直し、うはきづら　……

と云ふ處から、

……露散る芦の花ごゝろ、言はず語らぬ我が思ひ……

の間なんか妾はもう何事も忘れて恍惚とした。

負けず嫌いな綾さんも之ればかりは感心して居らしつた。

洋々として娯しみ盡きず（評）

私の現在

羽衣

私は、十六歳の少女です、私の家は、祖父様と、兩親と、私と、下女二人とです。思ひめぐらせば、三歳の前のことでした。叔父さんは、海軍大尉の御軍服嚴しく、信雄様は、中學五年で東京より歸省なされ、私は其時十二歳で、三人で臥牛山の麓に散歩に、出たこともありました。此時叔父さんは、三十一、信雄様は、十九でした。そして信雄様と大沼に行つたり、札幌や小樽に旅行した事もあります。兩親は、私にも勝るほど、信雄様を、大切になすつた。近所の方は、あれは、どなたと、御いひなさる。私はたゞ親類の方といひました。けれども、私は、或日親類のものから、私の許嫁の方である事を聞きました。私此時の心の中は、どうでしたらう、嬉しいやうな、恥かしいやうな。それから、二人で旅行はよしました。たゞ大沼公園などに叔父さんと、三人で出掛たのです、何故、御兩親はもつと早く敎へなかつたでせう。兩親が敎へなくとも、なぜ自身でさとらなかつたでせう。



少女姿　靜岡　鈴木ます子

其後信雄様は、三十九年三月、御卒業遊ばされ、十箇年間留學する事となり、三十九年に横濱を、御出發、渡米遊ばされて只今は、ニウーヨークにて、英語の研究中です。私は、女子文壇中學世界などを、毎號送つてあげます。御禮には、リボン、書葉書など、色々送つて、下さいます。

叔父さんは、三十九年の日露戰役の時には、大尉でした、其後旅順鎭守府附となり、當地より、御轉任なされました、戰地より御歸朝の時に眞佐チャンにと緋の丸帶一本御送り下されました。只今は、郷里に歸つて、入らつしやいます。

信雄様は、三十歳にならなければ、御歸朝になりません。私は、其時は二十四になつてしまひます。私は、此頃、新聞紙上で、排日案を見ては、信雄様の、御身に、恙なかれと、神に、祈るのであります。
私も、兄様に負けずに、勉強するつもり。しかし、信雄様は、外つ國で、一生懸命研究されて、入らつしやる。私は、未だ女學校の二年ですものどうして追ひつかれませう、父様は、二十五迄、勉強させるから、高等師範に入學せよと、おつしやる。母様は女子大學とおつしやる。私は、師範希望ですが、私如き未熟者には、合格する事は、出來ますまいか。師の君は、英語御上手だから。女子大學英文科に、御入學なさいと、御世辭だか、知りませんが兎に角そう仰せられる。こゝに記者様に、一つ御願ひがあります。私は師範へ入學したらようございませうか、どうぞ御知らせ下さいませ。

あなたのやうな大切なおん身は誘惑の多い東京に出て勉學するより嚴父の許で語學なり何なり修養なさつた方が安全ではありますまいかそれとも思ひ切つて一二年の後にアメリカへ渡つて、御一しよに勉學なさる事が出來れば、それが最も好い方法だと思ひます（記）

淋しい人

新村基子

夫れは、神保町でよく見ます。女です、年は四十位てございませうか。

どうして、みなりは、絹づくめの、中々立派なものでございます。
前髪を、極く〳〵詰めました、束髪て、紋附のお被布を召して、黒いお袴を、しつとりと裾長にお穿きに成た工合が、細つそりとした、丈ながきお姿によく似合て實に高尚な慕はしい方とお見受け致します。
が、此方は、屹度、獨身か何かの方て、そして、どこかの學校にでも、出て被居るんぢやないかしらと、何故か、私には、さう考へられてなりません。
夫と同時に、何となく淋しい人。
光りもない、花もない、荒れ果てた野の細道を、宛もなく、とぼ〳〵辿る様な、極くはえのない、境遇の、淋しいかたとの、聯想を禁じ得ぬのでございます。

賑やかな人

丸顔の色白、笑ふと右の頰に、きゆつと笑くぼのいる三十四五のおかみさんて、よくお湯屋で見かける人てございます。
此人の又子澤山てす事、上は、何ても十二位て、夫から八つ、五つ、三つ位の四人の男の子に、生れて間も無い女の子との五人てす。
一人拭いてあげて了ふと、一人連れて來、又あげては、お替りを呼び、夫が濟むと、次が來ると云ふ鹽梅て、夫りや可笑しい位てす。
すつかり、すみました時は、見てをりました私迄が肩

の抜けた様な氣が致しまして、ホッとするのでございます。

ですが、誠に、氣の練れた人と見えまして、いつも小言一言申しませず、上手に欺しては、入れてゐます。

私は又、どういふものか、此人を、賑やかな人と申し度いのでございます。

『淋しい人』は描いて未だ深からず、『賑やかな人』は命意いさゝか定かならぬ様にも思はる（評）

一人ぎり

しらはぎ

私は今日もまたいつもの様にして過すのだ。

うす暗い室に、只一人きりで——

姉さん！——あゝ、姉さんがなつかしい、けれども姉さんは、私のたつた一人の親身の姉さんは、いくら私が呼んでも、さけんでも、永久に／＼歸つてはいらつしやらないのだ。

あゝ、私の姉さんはどうして、私一人を殘して逝つたのでせう？

私は、姉さんがうらやましい。

姉さん私は伯母さんの家で毎日……あゝ、そんな事云ひますまい。

たつた一人の母さんに別れて、まだ其の涙もかわかないうちに、頼りと思ふ姉さんもまた……どうして私はこんなに不幸なのでせう。

頼みにする伯母さんは、姉さんの知つていらつしやる樣だし、私は毎日／＼西の空を眺めては、一人で泣いてばかりゐますの。

私姉さんの御言葉よく身にしみて居ますから、どんな事もがまんしますが、此の重い病氣では……あゝ私も近いうちに、姉さんの御そばに行くかもしれないわ……私一人きりで、暗い室に寢て居ても、誰一人見舞てくれる人もなし、水仙がさいても、梅が咲いても、私の室をかざつてくれる人は一人もない。

やつぱり私は、このうす暗い室でたつた一人きりで………あゝ、逝つた姉さんがなつかしい……

一寸散文詩めいてゐる（評）

洪水

小田切錦子

今日は私の誕生日である、お母樣は朝からお勝手に居て少しも見えない、外には此間だから降り續く雨がざあ／＼と休みなしに降つて居る。牧駒ちやん／＼と奥の座敷で兄樣の呼ぶ聲がしたので行くと、大好な花の着物を持つて待つてるので、大喜びで着替させてもらつた。そして、お母樣の處へ見せに行くと、おう綺麗だ事宛然お姫樣の樣だと云つて、お皿に餡を入れて呉れた、窓の下で獨り食べて居ると「今日は」と入つて、

來たのは、待ち兼ねて居た、田舍の乳母であつた。お母樣乳母が〳〵と飛んで知らせに行くと「まあ喜んで」と、母樣は手を拭きながら出て「よく此雨に來られたね、先刻も此樣に降つては出られるものぢやないと話し〳〵て居たにまあ〳〵よく來た」と云つて足洗ふ水等出した。乳母はお土產を勝手へ下して、新らしい着物に着換へ、私を抱きながら母樣と話しして居る。

「ほんとに此雨は心配だねあんなに水が增した」と前の川を指して云つたので見ると水は半分以上增してどう〳〵と渦卷きして流れている「何だか道で聞ますと大倉あたりは道が崩れて通れない相てす」「エイ」と母樣は心配げに乳母の顏を見た、此時外の戶ががら〳〵と開いたので見ると父樣が今役所からお歸りになつたのである、乳母が來て居るのでよく此雨に來たなあと母樣と同じ樣な事云つてゐる、貴方役所はと聞くと洪水が出ても大丈夫皆大事の物はしまつたからと笑ひながら云つた。

又誰か來た、兄樣が出ると、役場の小使で裏の堤みが危いから用心せいとの知らせてある。此時丁度玄關の時計が十二時打つた。母樣と乳母は勝手へ入つてお膳立して居る、私は父樣のお酒召してゐる傍にお座して見てゐた、お床には、今出來立のお萩が山の樣に積んである、間もなくお膳が出て皆ていろ〳〵と話し〳〵ながら食べて居ると、突然ボウ〳〵と、裏の方で貝をならす音が、憐れに聞えた、そら堤みが切れたのだと、大騷ぎして物を片づけ樣としたが、もう水は戶、障子を押倒して、四邊にある物を何もかまはずにどん〳〵とさらつて行く。見る間に腰まで水が來たので、よろ〳〵としながら皆思ひ切つて二階へ上つた。お母樣は一生懸命に念佛唱へていふ、がら〳〵と大きな音がしたので、窓から覗くと、向ふ側の大川の家の、石崖が崩れて、今にも川の中へ入り相に横になつた川の水は堤の切れた爲にどこが道か分らなくなつて轟つとすさまじい音を立て〳〵流れてゐる、もう、此家も危いと云ふので、側の壁を破り、こゝから屋根傳ひに逃げる事と定めた。あゝこれからは一歩違へば、地獄の井戶へ落ちるのである、雨はだん〳〵大降になり、屋根はすべる、家の流るゝのはすぐ前に見える、皆生てる心持はなく眞蒼になつて只神に運をまかせてゐるのである。

「お母樣早く〳〵此家が動いてるから早く〳〵」と兄樣は滴くの顏を傳ふのを拭はうともしないで手を上げて叫んでゐる。「私らはいゝから早く行なさい道雄」て五六軒の後ろて母樣は答へた、お父樣は、遂に私をそこへ下して、兄樣と二人お母樣や乳母やを助けに行つた。

二人は、引づられながら、漸々に其動いてる屋根を渡り過すか過さない中にがら／＼と崩れた。
お母様は皆神様や佛様を、大切にした御影だと云つて喜こんでゐる、其中に目的の宮の前へ無事に着いたので大聲を出して助けを求めた、宮の人は暫らくして見つけて梯子を懸け下して呉れた。
あゝ此時の喜こび……今だに忘れぬ、明治三十二年三月二十四日の晝、丁度私の八歳の春の事である。

かゝる急激突嗟の光景を正面から描くのは、頗る難いことであります、此文などもいろ／＼遺憾もあるがまづ普通には出來て居るやうです（評）

奔馬外二篇

野菫

暗き夜（あれ馬が誰もなしに）と一人の聲に、馬が離れたことを知つた提灯ともした人が、おちこちから走り出て追ふた。馬は橋を越えて廣い畑にそふた細路に出た、と向ふからの提灯におどろいて、チリン／＼と路を離れて走つた、提灯が澤山になつた、馬は益々走つた、そして麥畑を眞一文字に走る、それに灯をともした人が追ふて行く、チラ！／＼チラ！　チラ！　と逃げたり追ふたりする、それを川向ひて見てゐた私は幾らか氣の毒だつたが、興づいてゐた、後で聞いて見た、私はおどろいた、意外、馬の主はあばらを三枚折られ二枚は曲つてゐるとの事であつた。

梅

寒い／＼と思つた翌朝、北と南との山には淡雪が降つてゐる、庭の梅はあたりをはらつてはつきりと咲いてゐる、朝の香は又一しほであるとうなづかれた。

夢の土産

子供を抱いてゐる姉様が私にお土産を下すつた、それを頂かうとすると何だかかすかに、騒々しい音がする、私は構はず受取つて奥へ立たうとすると前よりか少しはつきりと音がする何！立ちとまると鐘の音らしい、あら！　と耳を傾け樣とすると枕が動いた、此度は確に騒々しく早鐘が聞えた、と私は震ひ出した（早鐘、父樣火事ですよ）と其聲にはね起きた皆の人、前戸を開け裏戸を開けた、火事は山の家であつた。とおちついた、私は彼の姉様のお土産が惜しかつた。

奔馬もお土産も奇抜、梅は平凡（評）

としがれ草

登美子

ひともとの一年草や、
陰影ひたす澤の面に、
—悔の波回想の波——
陰影うつりうつりて亂る。
哀愁の青葉はいくへ

こゝろをば蔽ひつゝめど、
清らなるこゝろの奥を
つらぬける「愛」の紅莖

花さけど花は仇花、
花はあゝ石女の運命、
蕋の粉に蕋の香散りて
甘じたる露のしたゝり。

ましろなる「生」の根ざしに、
——生の苦の根ざしは深し、……
華草は搖ぎてたてど、
生の苦の根ざしは深し、

新しい詩歌の匂ひは深く籠つてゐるが、なほ一段と垢拔けのしない點がある（評）

罪

香川育江

もゝ度の招きに堪へて只一度行きにたる子も罪せらるゝや、
しばしの間かの大空の歡樂の代に召されし後の疲れぞ
春の日のあすある事を忘れはて餘に歌ひ疲れはてたる
芝居など見しあくる日の寢たらざる目にはひとしを人戀しけれ
かたはらの美しき子と面白きあとの幕とを殘して歸る
日輪の光をあまた吸ひぬれど肥えぬはづなりかゝる事おもふ
妹のかたはらに來て美き子の噂する憎き兄かな大士が
わが足の底くすぐりてわが手の上の白玉落す

芝居の歌二首とも佳し（評）

椋の木

かへで

春風は酒屋の門の椋の木につなげる駒のたてがみを吹く
朝日さす浴室うちに暫時は身も世もわすれ鶯をきく
ゆく春をまゆも作らず緣に居て散り浮く花をたゞながむかな
やう／＼にわすれ得しかげ夢にみて又よみかへり胸みだすかな
戀すれば野の路わびし夕もやの君すむ方をすゝみゆく時
今頃はいづくいかにさてもをそし立ちつゝ居つゝ我まち戀ふに
なつかしき人來ませしと見しは夢か現にはよもあらじとおもへば
鶯の音にきゝとれて居しまてとほゝあかめつゝいひわけましぬ
人々は櫻に醉てまろねしぬ山の豆狸やかさきて來よや
君が御文またまきかへすをばしまや吹く夕風におどろ

かれぬる

興あり情あり（評）

丘の朝

秋子

丘の朝夢の心地に露こめぬ
仄に呼びぬ君の名かしら

春の夜や君が瞳の潤ひを思
ひて一人里の灯を見る

八つばかり花の鉢おき琴ひ
きぬ君來ぬ雨の日のわびし
さに

あな淸し泉の中にやごとな
き神ぞ居まさむ銀鈴のなる

人生れ戀に泣くべく今日も
又萬人あれぬ淋しからずや

朝間野は卯月の朝おく霜の
眞白き中に鶯を聞く

我胸はまことの木々にいつ
はりの花さく日かや涙なが
るゝ

ふとそこに尼の黑かげのぼ
り來ぬ古塔の月のうすらぐ
中に



おくつき　攝津とよ子

一ならび花のやうなる
火影して淡霧の宵を春
の船かな

朝間野の霜置く朝に鶯を聽ける此上なくめでたし（評）

靑インキ

津田汐汀

歌思ふ眼を見ひらけば
色の中の机に靑きイン
キつぼあり

轣轆と胸に車をひき入
れぬ戀の荷を積み淸き
少女は

うれしさは夢をさませ
し鶯のその聲よりも君
が一と言

君ゆゑにしりし淋しさ
悲しさをいくつすごさ
ば我が世はつきむ

淋しさや天地に生くも
のみなの冬ごもるとて
土にいりける

その日より心なごまず囚れて歌に生なく詩に力なし
きづきなば昔こひしくきづかねば淋し心地の胸の花の
塔

未だ調べ弱し（評）

母か娘か

江森美子

ねずみ色になつた、空を、見詰めて居る、と美しい星が二つ三つ弱い光を見せる頃。私は面外に立つて居た。夕陽の落た其の淋し氣な空を見上げて、何んとなく悲哀の感に打たれながら。其の時私は妙な人を見た、其れは三十二三の美しい女である、美しい女、私は其の女を、美しい女とばかり見なかつた。何にか深き憂に沈んで居る樣な、何にか秘密を胸に包んで居る樣な、どことなく陰險な淋し氣な顔だ、と、又美しいだけ猶、すごみを添ゆる顔だと思つた、其の女は愛らしい少年少女を伴れて居た、罪のない活々とした天使の樣な少年少女を伴れて居た、少年少女の愛らしい姿を見るにつけ、なぜあの女は墓塲から出て來る樣な、淋し氣な顔をして居るのであらう、私は女の後ろ姿を見送りながら、心の老衰者が。彼の女の心に漲つて居た温かき春の光は幾年の昔に、むなしく消え失せたのであらう。あ哀れな女であると、猶も見送る内、心の老衰者と、すれば、胸に包んで居るらしい秘密は何んであらう、實に妙な女だ、私は始めて見た女の心を其れ以上に考へる事は出來なかつた。明る日の夕暮にも其の女が、天使の樣な少年少女を伴れて通つた、やつぱり淋し氣な顔をして。鳥渡私の立つて居る二三間前へまで來た時、愛らしい少女の唇は可愛くほころびて、鈴を震ふ樣な聲に、母樣と呼んで美しい瞳に、女を仰いだ。まあーもうあの女は母であるのかと、私は驚き顔に女を見た。女は何にか惡い事でも聞かれたかの樣、俯目勝に私の顔を見て、眉と眉との間に、八の字を寄せて、低い沈んだ聲で「何んです」と答へた其の聲は、最愛の子にたいする母の答とはどうしても思はれない。私は昨日より深く彼の女の胸に秘密のある事を知つた。私は、彼の女の胸に包める秘密の雲を破らうと、思つて、心は、幾度びか彼の女の胸に向つて突進した、けれど女の胸に、堅く〳〵鎖されし扉は突破り難く、何時か心もつかれはて、たゞ彼の女はなぜ可愛い天使の樣な、子供等に母と呼ばれるのが忌やなのであらう。少年少女は、なぜ愛も情けも知らぬ女を母として生れて來たのであらう。何に事も皆な運命であると思ふと何時しか頬には涙の繁く流れて、疑惑の霧は、愈々深く我が胸に漲ぎるのであつた。二三日たつてのこと、私は何心なく外面に出た時、天使の樣な彼の少女が、一人で道端の小草を摘ながら遊んで居た、私は暫らく可憐な少女の後ろ姿を見て居たが、何んだかたまらな

くなつて、「あなた可愛いのね」と、笑顔に呼び掛けた、少女は氣まり惡氣に歸つて行くだらうと、思ひの外、にこ／＼しながら寄つて來た、私は可愛くつて、可愛くつて思はず少女の、紅葉の樣な手を堅く握つて、情け冷めたき母親を持つた、少年少女を哀れと、思ふ心は、知ず／＼お父樣はと、聞いて終つた「死んだの」無心に言つたらしい、少女の聲も涙に曇つて居た、折りから「妙、御飯だよ」と、母親が呼びにきた、少女は急いで歸つて行つた、私は今まで母親は情け薄き人なるとも彼の少女等には優しい父君がある、きつとあると思つて居たに、早くも逝きませしと聞きては、そゞろ少年少女等の哀れ深き身の上を、思ひやつて泣た、愛も情けも知らぬ母に呼ばれて、やつぱり懷かし氣に歸つて行た少女の後ろ姿を、思ひ浮べて泣いた、泣いた末は又此んな事を考へた、彼の女は、最愛の夫が形見にと殘せし子供等をなぜ可愛がらないのであらう、やつぱり秘密の爲、私は女の胸に秘密のある事は、益々明らかに分つたが、其の秘密は益々分らなくなつた

其後三月ばかり淋し氣な女の姿も、天使の樣な少年少女等の顏も見ゑなかつた、見ゑなければ、見ゑないほど氣になつて、夕暮には自分の義務でもあるかの如く外面に立つて居た、或る日まだ夕陽の色紅く、富士の秀峯が桔梗色に高く聳えてゐる頃其の女が通つた、天使の樣な少女等は伴れず、まるで乙女の樣な姿で、ハイカラな紳士と面白さうに、手を取り合つて通つた、其の顏は得意の色に、輝やいて、秘密の色も憂いの影も消え失せて眞の美人となつて居た、私は其の女の顏を見、ハイカラな紳士を見て、胸の中に漲ぎつて居た疑惑！の霧は淸らかに晴れて終つた、けれど私は其の女の行ひを哀れと思はずには居られなかつた、どうしてあの女の瞳には、りんごの樣な頰、緋桃の笑初めた樣な唇、星の樣な美しい眼、あの可愛い姿が見ゑぬのであらう、まだあの女は若い、あの女の若い心は彼のハイカラ紳士の囚になつて居るのだ、其の爲に我が子の愛らしい姿も眼に入らぬのであらう、あの少年少女等のエンゼルの樣な姿はいづこの空で如何なる人に愛されて居るであらうか。やがては彼の女も、まよへる夢のさめはてゝ何時かはエンゼルの樣な我が子の姿を慕ふ時もあるであらう、夢うつゝにもあゝ可愛ゆき我が子よと天使の樣な姿に厚きキッスを、あたゆる時もあるであらうと。美しい花の上に甘き蜜の香に醉ふて結ぶ小蝶の夢よりも猶たのしげに、若き紳士と、語りつ又笑ひつ行く彼の女の後ろ姿を見送りながら、私は思つた。

一寸不思議な書き方をしてある、初めは夢幻的に現れた女と子供が段々實在になつて、つまりは小說に終つて居る、甚だ不得要領の作品でありながら、多くの要領を得た作よりも、何處かに燦めく光輝を持つてゐるのは何故であらう（評）

十年後を占ふ

くちなし

雨の日のつれ〴〵、ふと思ひついた未來の身の上判斷十年後の友の上でも占つて見ようとミシン入の卷紙を切目々々てはなして細長い紙片を十數枚拵へた、そして一枚一枚に種々の境遇を書き、書いた所だけ捻つて見えないやうにする、皆書き終つたら此度は目をつぶつて心中にこれは戸野さんこれは中田さんと念じながら一つ宛つまみ上げて其名を書いた、同級の中でも親しかつた方や何か目立つた方を撰んで書いたそして私の大變好きだつた筑城先生のお名も書いて、一番おしまいの一枚を私の分とした。すぐに私のが見たいのだが辛抱して他のからずん〴〵開けて見る。

戸野さん、秀才の母、あのしつかりした特待生、きつと相子樣は秀才に違いないだらう、まづあたつた。

中田さん、世話女房、あの中學敎師の妹さんが、これは思ひもよらない。

本田さん、貴族の令夫人、聞かないうちならそうかともうなづけるハイカラさんだがもう會社員と約婚してあるとの事だからこれも駄目?

市瀨さん、破鏡の嘆、マア可愛想にこれは誰れに當るだらうと思つてたら人もあらうにあの溫和しい方にとは、二年後には式を擧げてすぐ洋行とか聞いてたが緣喜でもない、私の大々親友だのに。

筑城先生、墳墓、イヤだ、墓になるなんて、しかしあの弱いお身體や、常々「人は若いうちに死ぬ方がいゝですね」など仰しやるとを思ふともしか、そうなるんじやなからうかとも思はれるイヤ鶴龜々々。

島本さん、零落、高等師範に勉强の最中だのにこれも違う。

足立さん、賢母、最も年少の方に母樣とはしかし十年後なら無理もないが。

大川さん、オールドミス、縮れ毛の赤ら顏で今敎師してゐらつしやるが、もしかするとこれは實現するかもしれない、しかしこんなこと聞いたらさぞ立腹だらう。

野上さん金滿家の妻、野上樣は金滿家の令孃よ。

北條さん、音樂家、もう、嫁かれたし聲もよくない。

富永さん、圓滿幸福、如何にもそうあらう、顏からからだから圓滿なこと。

山口さん、未亡人、マア豪家の令孃で頗るハイカラだのに、しかし近眼鏡かけた未亡人振りが見えないともない、さしあたり雪子刀自かね。

池田さん、文學者、太り肉なあの方の柄じやない。

堀川さん、子澤山、蚊とんぼの樣にやせてゝどうしてそう子供が出來るものか。

坂本さん、學士の妻、如何にも、大學生の奥樣だも

の。

田中さん、百性の妻、級中一の美貌、殊に見得坊、どうしてお百性なんかなさるもんですか、最も不適當です、しかし豪農へと云ふんなら何とも云へない、最後に私の、恐わ〳〵あけて見たら官吏の妻、つまらないちつとも當つてやしないわ。

一寸おもひつき（評）

北海道より

野の花

春が來ましてよ、北海道にも春が來ましてよ久さま、桃のお節句が來てもお彼岸が來ても消えそふにもないいく尺積つた雪をながめては、つひ心細さに涙ぐんだ事もありましたが、春はやつぱし平等に人里遠いこの北海の山奥も音づれて、温い手に一枚一枚白い衣を脱がしてくれます。

昨日まで見えなかつた窓の下のグスベリの茂みもまだ枯れ〳〵ながら姿をあらはしますし、裏の細い流れもまん中あたりは氷が解けて青い水もうかゞはれます、今に梅や櫻、片栗や山牡丹や、その外いろんな花といふ春の花は一時に野にも山にも咲くのですもの、北海道の五月は內地ではとても〳〵見ることの出來ぬ美しい自然の天地をあらはします。

家と家との間から瓦に輝く月をながめたり、櫻の宮の塵くさい枯木のよふな花を見て、わづかに心をやつて居ました私は、こふして目のあたり自然の悠大なしかも一日〳〵と春の姿の整つてまゐります景色にのぞみましては何と申てよろしいか、しみ〳〵と物のなづかしさが感じられますの。

その代りにね久さま、長い〳〵寒さのうちに脱ぎ捨てた衣類がどつさり何所のお家でも押入れにたまつて有るのですから、今日この頃の暖かさにはお洗濯やらお張り物やら女は目のまわる程も忙しいのです。

半年雪の中にねむつて居た北海道は今やうやく目が醒めて活動の舞臺にのぼらうとして居ます。

新緑したゝらむ浪花のおたよりお待ち申ますよ久さま、

左様ならば

女らしい手紙（評）

どうぞお諦め下さい

益子

お母様もうどうぞ、そんなことは仰やつて下さいますな、此度の事は私とうより深く覺悟なして居りました事でございます、元より自分の子を自分で育てやうなぞと思つて此家へは參りません、これもみな運命と、

諦らめて居れば少しも不平とは思ひません、世間の人は言つて居るてせう、初て出來た子を生れるなり人手に渡すなんてどんな心强い女てあらうどんな無慈悲な母てあらうと、いゝゑ私だつて普通の女てすもの情に變りはありません母子の情に二つはありません可愛い可愛いてす、子を持ちて知る親の恩とやら、これが我子であると思つた時の感じは、……………あゝ眞實に可愛いものとつく〱……あゝあの赤い顔、莟のやうなくちびる……あの泣き聲が今もなほ……、いゝゑ〱こんな事は申すのてはありませんてした、思はず筆が走つて心にもないくり言を、……元より我子てないつもりでしたものそれ程可愛いとは思ひません、それよりも可愛いのはこの子てす、年さへもわからぬ内に母に別れて、義理の中とも知らばこそ、母ちやま〱と慕つてくるいぢらしさ、これが可愛くなくてどうしませう、世には繼子いぢめとやら悲慘な話をきゝます、また、違つた間といゑば圓滿てないのを當然のやうに云います、けれども私は不思議のやうに思ひます、見ず識らずの人の子てさへ子供といゑば可愛いもの、それを自分の子となれば尙更、まして眞の母に別れた不幸の兒てあると思へばどんなにか愛は增ります、私はこの子が可愛ゆくてなりまん! もし我子なんかはいりません、なまじか我子のこの子にうとくなり、さもしい心の起るやうのことあつては私の子は申すまてもなく、子供達にも不幸てす、それよりかへつて慈悲深い人の許へ遣つた方が互に幸福てあると思つて――お母より他の人だつてあんな小さい子供乾度可愛がりますわね、乾度優しくして居るでせうね、ましてほしくて貰つたのですものね、ですからお母様どうぞ此後はそんな事を思つて下さいますな私は決して不幸なことはありません、ちつとも悲しいとは思ひませんよしや思つたからとて……いゑもうあきらめて仕舞つたのですもの、何ともありません、今更そんなに思ふ位ゐならば良人はもとより姑樣達にそむいてまて遣りはいたしません、どうぞよくお考の上お諦め下さい、ねお母さま、お得心が參つたてせう!。

おあきらめなさいを此んなにおしつけて言はないても好さゝうに思ひます、自分て道理をつけてあきらめてゐるやうて、此手紙にあるやうな事實は此の手紙の文章位て解決のつく問題てはありますまいも少し理性の考が欲しかつた(評)

耕地病院

上土井定子

風さや〱吹いて心地よい朝だけれど、昨日から頭重く熱さへ起つたやうで、今朝は病院に行かうと思ふ、耕地へ來て以來初めて行くのであるから診察時間が分らない、隣のかみさんに聞かうと思つて居た所へ、キヤンプのポリスマンが鹿毛のホースてコト〱やつて來て、薪はあるかと問ふので、幸にドクトルの診察時間

を問ふた、すると今行けと言つた薪はないから運んで下さいと言ふとオールライとポケットから手帖を出してハウスの番號をつけて去つた。

キャンプの一隅に生垣をめぐらした る廣いヤードの茂みの中に青塗の大きなハウス二棟と、小さいのが二棟、ガーデンは種々の花が淋しそうに咲いて居る、其上に枝を披げたるキャベの木にはさゝげのやうなピンスが黄ろく、熟して青い細かな葉の下にぶら〳〵風にゆられて時々ポテ〳〵落ちる椰子の三間計り



寶子　　張津とよ子

延びたのが三四本日傘のやうに葉を廣げて居る、それに乘つて雀がチウ〳〵と鳴いて淋しい病院を訪ふかのやうに、妾は表の門を開いて入ると石疊が二間計り下駄の音しのばせて階段を四つ五つ登ると廣いベランダーである、右と左のペンチにはもう二三の患者が來て居られた、一人は腹滿々と差出したカナカ婦人、一人は朝鮮人手を痛めたものか繃帶してゐる、一人は鈴子さんのマ、さんであつた、お早う御座いますと挨拶し乍ら向ふの壁にかけてある診察時間

表を見ると、午前八時より九時迄、午后五時より六時迄、但何々、折から室內より聞ゆ八時の點鈴表口より多くの人は時をはかつて來たのか樣々の病人が十人計り入つて來た、ドアーは始めて開かれた、順番に診察室へ入る、四十計りの大きな白人のドクトル、髯はなけれど眼の光つて恐しい樣な顏付、されど優しい言葉つかひ、番操は妾どうあるかと問れた、頭が痛いと答へると右の手をとつて脈を見て亦左の手も、舌を出させて胸に手を當て、オールライ少し熱がある水飮むな、お粥食べよと、日本語で言れた時、後に立つてゐた人がクスと笑つた、一包の丸藥貰つていざ歸らうと階段を下つたが不計、千代子さんの入院せられし事を思ひ出し、訪ふてみんと裏手に廻つて見れば、幾十となくウインドーには、金巾のクロースがかけてある、如何なる人の如何に病みつるかと思ひつゝ彼方此方と見て居ると、三十位の看護人が中央の室から出られたのを幸い、問ふと、ハイあの室ですが、餘程熱が烈敷のですから御出ぬ方がよからう二三日したら少しは減じませうから――でも折角來たもの、アヽどうしやう、オヽ私も病んで居るのに早く歸つて寢やうと、扉の中なる千代子さん嘸切ないでせうと心に思ひつゝ、元の方へ行かうとする、頭の上に呻く樣な鳩の聲、オヤッ驚いた、此頃は毎日の樣に死亡者があるとか、今日は何れの室から如何なる人が逝くやらむ、アヽ耕地の病院程悲慘な所はあるまい。

口語の文章な書きなれないと見えて、苦しさうな言葉つかひもあるけれど、努めて其地の樣子を表はさうとした苦心は大いに諒とする（評）

裏白の一葉

石原小百合

我家の裏には桑畑兼菜園があつて、横には小川があるいつもきれない水が流れて居る。或日の朝ふと此小川の邊に立ちて、何を見るともなく流るゝ水を見て默想に耽つて居ると、折しも舊年末の事で誰れの手から離れたのであらう一枚の裏白の葉が流れて來た。默想は遂に此裏白の一葉で破られ、是は面白いと其後から道も無い樣な畔を徐に從ふた、水流は今靜かで裏白の葉も極めて平和に進んで居る。少し行くと流れは急に激して、水底の石も時々其面を表して見える。此處まで來ると今迄儼然と構へて居た裏白は、突然其一端を石に嚙まれてくるりとトンボ返りをした。が、また次の石に支へられて再び廻轉をやつたが、どうしたものか石に捕へられたのであらう、動かなく成た。水は容赦なく其上を乗り越して、裏白は僅に其一端を水面に出して、非常に苦しんで居る樣子であつた。すると上流から一片の竹切れが流れて來て、裏白を乗り越えやうとした、と、見る間に二つ連れ立つて早くも二三尺彼方

へ流れた。其處は丁度流れが少し右の方へ廻つて居て石垣がしてあるので竹片はこつんとそれに頭を當てゝぐるりと一廻轉して、ずつと流れ去つた、裏白も靜かに其一端を觸つて廻らうとしたが、又他の邊が觸れ其邊が離れると又次の邊が觸れる、とう〳〵石垣に順次其一端を着けて、靜かに廻りながら進み始めた。向ふを見ると流れに沈んだ小松が、どうしたものか一本仆れて水中に横たはつて居る。彼處へ裏白がいつたら如何なるてあらうかと、思ふて居る間に裏白は石垣を離れて、其處へ向ふた。木の葉や藁の屑や乃至いろ〳〵の塵埃は松の枝に堰かれて澤山溜つて居るので裏白も亦支へられて、暫時塵と交つて居たが、上流からは尚も塵が後へ〳〵とやつて來るので、遂に推されて水中に見えなく成つた。

すぐ松の下を潜つて出て來る事と待つて居たが、どうしたものか、待つても〳〵姿を表はさない。仕方なしに、モー家へ歸らうと思ふたか、これからが面白いのだと思ふと、歸りたくない、裏白の行末を見とどけたい、て、芝生に腰かけて、水の面をジッとやゝ半時間ばかりも見て居ると、突然松の下流二尺ばかりの處へ表れた。木の葉や竹片や藁屑や板切れなどゝ共に。此處から十間ばかりは流も眞直て、水も平穩なので、裏白は悠々と流れ出した。すると一つの水泡の大塊が恰ど氷山のやうに流れて居たが、つつと寄つて裏白に密着た、それを振り落さうともせずに、裏白は愉快氣に進んで居たが又も水流の左折する處があつて、其手前の水が少し激して居る。裏白はどろ〳〵と流れ下つたがやはり泡とは離れないで、向ふの蛇籠の少し右手の處で、ぐる〳〵と二三回廻つた。泡も矢張り付て廻つて居る、其内に泡がふいと蛇籠に吸着いた。裏白も亦泡に引かれてしばらくは留つて居たが、やがてそれを振り離して左の方下流へと流れた。泡はやはり蛇籠に着いたまゝ。これから先きは土地の傾斜が甚しく、隨て水流が非常に激しく怒つた龍の鱗の樣である。其上處々茨が其枝の先を水に浸して、行く手を妨げて居る。

定めてこれからの裏白の活動も面白からうと思ふたが丁度妹がよびに來たので、割愛して引き返へした。顧れば桑畑兼菜園から僅かに一町ばかり。水はざわ〳〵と呼び止め顔にさざめいて居る。

寫生の微に入り細を穿つもの（評）

湯煙の影

木村綾野

野中の湯の白い白い煙が、

スーと黒い小さな筒から上る。
私の靈は共にぬけてさまよつて――
大きな山蛾をぢッと眺めてゐると、
湯煙の影が足を流れてゐます。――
暗い思の影、あかるい望の光が、
さしては消え、消えてはさし、
暗より明に――明より暗に――
魂はたえずまよつて――迷つて――
死影、といふ様な事を胸にうかべて、
みつめて――みつめて。――
ああ、いつになつたら此影が消されるのでせう……
きえるのでせう、
いゝえいいえ、
こうして百年でも千年でも、此影は失せないでせうね！。
あつてほしうございますよ。――
ああ暗い影――影あかるい影が、
交代に冷たい土の上、青い草の上に印して消して、
いつまでも、繰返しくりかへし――。
あのゴーゴー云ふ叫びが、死と生とを作る宣告ではないか。
たえず此様に、暗い死の影と光りある生の影がただよつて居るのでございませうよ世の中にも――。
私の靈は共にゆらいて迷つてゐます。
この影が消ゆるまで、こうやつているのでせうか――
死んでもこの魂は執着の心ふかく、
あゝ永久に私のたまは…。

魂の影と烟の影とを一つに見たのは流石に散文詩でも作らうと云ふ人の感じです（評）

花一つ　　辻芳子

わが胸のみどりの小野をいと清き君が心の水ながれゆく
天と海おなじ若さの藍いろにいだかむとす見ようなだるゝ君
たとふれど矢を得し獸刻々に痛はゆるみされど死ぬる日
君が胸の眞晝の小野に花一つ燃ゆるが中を吾はさまよふ
葉になげき木に涙して老いてゆくあゝ蝸牛寂びしからずや

花一つ燃ゆるが中をさまよふは歎ばし（評）

滋賀少女　　順子

京の風舟より降りし七人の滋賀の少女の袂に吹きぬ
二人をばつなぐ原あり美くしきかの天上の虹の色して

紫のからかさたゝみ眞白なる花摘みし日の若さに歸れ
雪ふりぬ生駒の山の麓にて鶯かへる軒にたゝずむ
絹裏の裾さや／＼と美女數多來るにあらず笹に降る雪
美女數多來るにあらぬをかしさよ（評）

春淺し

時雨子

春淺く小梅のさとにうつりけり
美しき石拾ひけり春の川
泥の手に指環の光る汐干かな
店先きの串柿やせて春の風
御家流敎ふる家の牡丹かな
風薫る衣桁の衣のゆらぎ哉
三月や華美な衣織る女の子
指環の光と派手な衣と（評）

春寒し

渡邊登喜子

春寒の深く挿したる簪かな
春雨の袂に少しかゝるかな
袖をたち裾を裁つ日の永さかな
妹に唱歌敎ふる日永かな
二日灸夫と共に据ゑにけり
出代りて母を養ふ女かな
振袖の裾に重き手鞠かな
鶯や琴を流るゝ朝の風
白梅の御所紅梅の館かな
簪を深く挿したる心持、女ならでは（評）

怪しき男

端枝

新宅へ引移つてから、朝父樣がお出ましの後は、母樣と女中二人に小猫一疋のひつそりとした暮し。始めの中は閑靜なと喜んで居たが、ひと月二月と立つうちに別に用事とてない、來る日も來る日も、同じ單調な生活にやゝ厭きて、何となく物足りない、淋しい思ひが頻りに湧く。今日も例の通り茶の間で。母樣と向き合つて針持つ手を動かしてゐたが、話しの種もつきて無言の折柄。「御免下さい」と玄關で音訪ふ聲！「はーい」と少さい方のが立つて行つた。

「御主人は御在宅で？、私は西戸部の川瀨と申します……　、御不在？、……一寸お目に懸り度いのですが……ては奥樣にても……」

母樣が私に出て見よと、目で仰有つた。見ると、米流の綿入に同じ羽織を着て、茶の中折れを被つた、脊の高い、目の底光りのする三十五六の男が立つてる。

「何か御用で？」と膝をつくと、「別に……御普請が御立派だと承りましたから、一寸拜見致したいと思ひ

まして」と首を下げる。では何卒こちらへ」、先に立つて長い廊下を突當りの離れへ案內する。

檜の香りがプンと鼻を衝く十二疊の座敷で、九尺の床の間にて鶴龜の能畫の二幅對、其前の二尺の水盤に苔の付いた松のぼくがドッシリと活かつてる。

曇つた日なので室の隅々が薄暗い、違棚の古い、青黒く光る蝶貝入れの文庫や、金泥に影日向の牡丹を織り出した唐紙を見て居ると、ぢつと心が落着いて、深い溜息が知らず〳〵洩れてくる。

「どうも結構で」――を口癖の樣に言つて、黒檀の床柱を叩いて見たり、浪形にうね〳〵した神代杉の天井を見あげ見卸し、書院の小障子をあけたてして建付の工合を氣にして居たが、やがてする〳〵と次の間に這入つた。八疊敷で姿見のある室、昨日お琴のお浚ひに着ていつた、桔梗色縮緬の三枚重ね――裾の方がボーッとぼかして櫻の模樣――のが厚板の帶と一所に、蒔繪の衣桁に懸けて在るのを、ぢろ〳〵見てる。ふと自分の姿が鏡に映つて居るのに氣が付くと、身を廻らして縁に出て、履脱の庭下駄を穿いた。何をするのかと障子の內側から見て居ると、今を盛りに咲き誇つてる枝振りの面白い白梅や、五分程若々しい芽をふいて春を知らせ顔な、池の菖蒲などには餘り目も止めず、そろ〳〵と木戸口の方へ進んで、門扱の樣子を凝と見ると其儘、踵を戻して、今度はそれと反對な、母屋に續く勝手口の南隣りの湯殿を窺いた。眼がギロリと光つた樣に思はれたので、グッとして、斯んな人案內しなければ宜かつたと、後悔した。

客を送り出して茶の間に戻ると、「お前、知つてる人?」と母樣がお訊なさる。目が疑はしげに光つて、眉と眉との間に不安の雲が蔓つてる、ハッとして、「イーエ父樣の……」「父樣にそんなお近づきは無い筈だが……何だか氣味が悪いね……吃度御覧、今晩あたり、家へ泥棒が這入るから」、と云はれて見ると、思ひ當る節々が一々胸を刺す。今迄朧氣に感じて居た恐怖が盛んに活動し始めた。襟元がゾク〳〵する。

あの凄い目付、塀を見上げた樣子、然うだ、然うだ、乾度それに違ひない――まあ何うしたら宜からう。

世間へ出ると自分一人の事を考へる外に、斯うした心配もせねばならぬのか、ア、厭だいやだ、こんな家ッ、こんな家ッ、捨てゝ仕舞ひたい!!!、

邊りが急に暗くなつた、空は今にも降り出しさう、重たい、陰氣な空氣が頭を押し付ける、母樣も無言、私も無言、時計の音のみが忿るそうな響を立てゝ居る。

泥棒!、泥棒!、強盗!、と恐ろしい聯想が頭の中をかけ廻る、と、黒い着物を着て覆面した、脊の高い影が白刃を振り翳して現はれた。途端!、キャーッと何とも言はれぬ凄い聲がして、血だらけの女が仰向けに

斃れた――肩先から乳の邊迄切りさげられた樣子――長い黒髪がバラ〳〵亂れて、歯を喰ひ縛つた顏は眞青！、細い、白い手が何かに縋らうとして、虛空を堅く握つてる――。

「もし泥棒に這入られたら、爭はずに何でも持たして遣る事だね」、と沈んだ母樣の聲に、目をあいて見て居た幻の夢から覺めた。母樣もきつと私と同じ思ひに、惱まされて居らるゝのだらう。ポツリ〳〵と廂に當る雨の音！、アッとう〳〵落ちて來た。眞暗な恐ろしい夜――どうぞ今晩何事もなく濟んで與れるといゝが……。

遂に怪しき男は怪しき男で終つたが、幼い恐怖は能く書き表はされてある、深い味ひとてもないが、女性の文章たる特色は確に發揮されてある（評）



後ろ姿　大阪　西戸政江子

新聞紙の壁

田の人

何うしたのか、今日は朝から氣が欝いて、鳥渡した事にても胸がドキ〳〵してちつとも面白くない。此う云ふ日には顏でも剃ると、少しは氣持ちよくなるだらうと思つて、私は十時頃、村に一軒しかない床金へ行つた。床金は小さな新しい床屋て、家族は若夫婦二人きりだ。

二人は御客が無いと云ふので、丁度長火鉢を挾んで雜談最中であつたが、私が入つて行くと、金さんは直ぐ煙管をおいて剃刀を磨ぐし、妻の竹さんも、私もちと働こうかと云ひながら流下へ出た。

私は用意の出來るまで、椅子に腰をおろして、見るともなしに四邊を見廻した。

田舎の事だから、四周の壁は皆新聞紙で貼り詰めて

ある。天井もさうだ。

新聞の本文は字が小さいから見えないが、私はその廣告の字の大きさうな處ばかり、椅子にもたれ乍ら讀んだ。

つひ始めのうちは何とも思はなかつたが、よく〳〵見て居ると、本文より廣告の方が餘程多いい樣に思はれた。て、私は片端からズーと見て行くと、仁丹、淋滅次亞燐、胃活、ゼム、清快丸、ヘルプ等云ふ藥が非常に多い。大きなのになると一頁位なのもある。實際現今日本に於ける廣告のうちで藥の廣告が一番大きいだらうと思ふ。其の他、トレホイルだとかアルボースだとか、レート花王石鹼美顔水等色々の化粧品も負けない位ある。

私は外になにかもつと面白いのが無いかと思ふて見たが、小さければ小さいなりて藥品か化粧品だ。たまに見付けたかと思ふと小説本だの辭典類計りだ。そして、これこそ日本の富源だと云ふ樣なものは一つも見えない。無い筈は無いがと私は血眼になつて、忌明御禮だのね小便だのと實に五月蠅い處を覗き回つた結果漸く石油發動機の小さな廣告が苦しさうに、群衆に壓迫されて顔をしかめて居るのを見付け出した。

一體世の中の人は何うして居るんだらう——高い金を拂つて化粧して無暗に外見計り飾つて、それに内面はどうかと云ふに病氣て藥が無くては仕樣がないのだ其の上小説を讀む。また辭書の樣なものを見ては理窟を云ふ。此の風は近頃だん〳〵勢力を得て、とうとう女學校までも占領して了つた。無暗に高襟を氣取つて權利だの義務だの、或は理想の夫理想の子供だのと云ひながら、飯一つたく術を知らないで得意然として居る者が多い。多いどころか、よくよく考へて見ると、この私がどうやら其の一員らしい。女學校へ入つてから田舍へ歸つても、どうも仕事が手につかぬ。頭は痛い勝ち、仁丹は肌を離した事がない。それて中々立派な風がして見たい。めかして見たくてならない。

私の聯想は此處でハタと止んだ。

金さんはまだコト〳〵と剃刀を磨いて居る。奥ては竹さんがガサ〳〵と米をとぎ出した。此の二つの音が、妙な調子で靜かな淋しい家の隅から隅まで響き渡る。外には猫の歩く音もしない。

私は今度は繪を見はじめた。但し廣告の繪はもう嫌てあつたから小説の繪計り見た。

一番初めのは昔流ので私には何の感興も與へなかつたが、其の次ぎのは、硝子戸の側に二人の婦人が通りかゝつて居る處てあつた。何だらう、女學校だらうかと思つたがそれにしてはふけ過ぎて居るし等と思つて居る間に次の繪に移つた。

年頃は十七八の奇麗な御孃さんらしい。服裝も立派だし書齋も立派だが、何か非常に思ひ沈んで居る樣な

妾だ。私の煩悶と同種類の煩悶をして居るんぢや無からうかと思ふと私は何んだか同情が寄せたかつた。

また次へ移る。若夫婦らしい。今旦那が外出すると云ふので、奥さんが後から羽織を着せて居る。旦那は嬉しさうな顔を後向けて居る。

羨やましい私も…と思ひかけた途端

お待ち遠うさんでした。サ、やりませう。

と金さんが前に立ち塞がつた。私は急に赤くなつて、そして夢から醒めたかのやう。

剃刀は動き出した。私は、金さんが邪魔になつて、もう新聞を見る事が出來なかつた。

寫生文式のもので、筆は達者だ（評）

何てせう

岩田文窓子

ぽかぽかと暖かい日、小山へ登つた。若芽の匂ひがして、彼方此方に躑躅がもえそめた。ふと、足元を見ると若芝の上に、お菓子の鐵砲玉位の、白黄色の玉が、十ばかりある。私は「何てしよう」と拾ひ上げた。春子さんは、のぞき見たが、急に目を圓くして笑ひながら「あら兎の糞よ」と云ふので私は片手に持つてた躑躅の枝と共に、ばつと投げだした。

破三味線

ぎく／＼する切ばりだらけの、破れ三味線を持つて、門づけが來た。旅あるきに似合ぬさつぱりした着物をつけ、顔は白粉やけのした何處となく、可憐な老女、僅一錢て、長歌を歌つた、お世辭を殘して隣の門へと行つたあの老女は若い時は、どんな榮華をしたらう。はでな着物を着た、藝者が行く。きつと――きつとあの藝者のやうだつたらう、あゝ榮華した人の末は皆こうだらうか。

草餅

花ちやんは草もちが出來たので、町の叔母さん宅へ一重持つて行く。菜の花やれんげ田のあぜ道を、とぼ／＼と行く、歸りにと思つたが、重をなげだしてれんげつむで居る。何處からか大きなぶち犬が、鼻を動かして來たが、花ちやんのやうすを見て、重をくわへて振り廻す、とたんころ／＼ところがり出た、一口に食べる、けれどまだ花ちやんは知らぬ、も少して花束が出來上る、それと氣づいたらどんなに驚くだらう。

始めのも終りのもたかし（評）

想ひ出した手相の事

夢野園子

それは春雨の降る日であつた。私は明日までに是非仕上げなければならぬ兄の羽織を縫うて居た時、一通の封書が來た。それは親しくして居るみつ子さんからであつたので、取るものも取り敢えずといつたように開いて見た。みつ子さんとは別れてから、もう一年近くになりますので、懐かしさと一種の好奇心とで胸が湧き立つような氣がした。といふのはみつ子さんは某町へお嫁さんに行つてるからである。

手紙は簡單であつた。是れまでの無沙汰の詫が型のようにあつて、次に近い中にお目にかゝれるかも知れないとある。私は必度子供を産むにお出てになるんだと、何だか嬉しいような、妬ましいような氣がしたが更に次々と讀んで行くと、全く奇異な感がした。手紙にはそれとは書いてないけれども、書振りから察するとみつ子さんは離縁されたらしいのである。末の方に「手紙は他の方へは差上げ申さず、妾の心をお聞き取り被下且つお察し下さるは、貴姉のみと思へばにて候。」とあるので見てもそうらしい。

私は華やかな夢を半ばで打壊はされたやうな氣がした。只だ〳〵樂しいもの、蜜のように甘いものと思うて居た結婚が、今最も親しい友の身の上に於いて破壊されたのを聞いて、どうもほんとうと思へなかつた、私はボーッとした、取止のない、夢のような思ひで手紙を讀んだのである。

みつ子さんは極く優しい、それで物のわかつた人であつた。私よりは一つ年上であつたが、女學校は同じに卒業した。それは去年で、卒業して間もなく嫁いだのであつた。家は士族で田畑も少しはあるようである容貌も私などとはくらべられぬ程美しい情の籠つた顔なので、方々から縁談があつた中、同じ士族で金持で、其の上息子は高等農林學校とかを卒つたといふ今の家へ嫁いだつたのである。あの性質、あの容貌、よしんばどんな無情な夫でも、離縁までは・・と思はれて人事ならず胸にひゞいた。

卒業してみつ子様が行つてからはあまり外出しない妾は、更にその噂を聞かなかつた。それに手紙は一度も來ないので、屹度お忙はしくつて居られるだらう。屹度仲よく、お兄さんが出來る位だなどゝ思うて居た位だつたのである。私は手紙を見て非常に驚くと同時に、何とも云はれない哀愁――自分が築き上げた美くしい想像を、土臺から壊されたような氣がして、しみ〳〵とみつ子さんの身の上か傷ましく思はれたのである。

私は羽織をぬふのを忘れてぼんやりして手紙を見て居たが、思ひ出して縫ひ出した。針の手を動かして居る間にも、戀愛――結婚――夫――家庭――離縁など

といふ事がぐる／＼と頭の中をめぐつて、女といふものはどうしても夫や子の腕を頼らねば生存して行けないものかしらなどゝいふ事が考へられた。

春雨が音もなく降つて居た。

私はまだ學校に居た時、口惡のさよさんがみつ子さんの手相を見てやるといつて、「貴女は夫を三人持つてよ」といつたのを思ひ出した。その時私には「貴女は二人よ」と云ひましたが、私は何とも思はなかつたがみつ子さんは顔を赤くして「嘘だわ」としきりに辨解したつた。今思ひ出して、若しもさよさんのいつたのが本當で、みつ子さんは是からまた二人の夫に事へなければならぬ運命を持つて居るのだらうかと思つた。それと同時に私の方も氣になつて、矢張り不幸が身につき纒うていろ／＼邪魔するのではあるまいかと、薄氣味が惡くなつて來たのである。

私はふと手を止めて襖の方を見たが、目には何者も映らず、頭にも何も浮ばなかつた。只だ何處とはなく儚ない思ひが、煙りのように過ぎて行くように感じた。

どうしても氣になるて、羽織は夜おそくまでかゝつてもこしらへようと、其まゝにして、それとなく様子をきゝにみつ子さんの家へ上つて見ようと思うて立上つた。

外にはまだしめやかに春雨が降つてゐるが、私は此の鬱陶しい、景色を見て、行かうか行くまいかと躊躇ふた。

梅と春

愛子

一日。昨夜母様が仰つしやつた通り今日から臺所へ出て下女のお手傳をする事になつた、たすき掛けて庭へ下りると仲や梅が、まあたすき掛けてゐらひ御奮發で御座います事と云つた、梅に何をしようと云ふと、それではこれをお拭き下さいませと云つてお茶椀を出した、此んなお茶椀位ゐ直拭くわと云つて布巾を取つて拭いて仕舞つて、梅其次に何をしようと云へばお茶椀にさはつて見て、此んな拭き様では仕方が御座いません、もつと布巾を堅く絞つてちつとも濡れて無い様になさいませと云ふから、そんな六つかしい事出來ないわと云ふと、頬をふくらしてそれが出來なければもう上へお上りなさいませ、お出てなさると却つて邪魔になりますと云ふた、私は腹が立つたから直上へ上つて仕舞つた、眞實に梅はゑらそうに云ふ、敎へて呉れもせずに人ばかり叱つて、いゝわ後から母様に云つてやらう、今度から手紙書いてくれと云つたつて書いてやるものか、母様も母様だ私にあんな臺所のお手傳をなさい等仰づしやるから私が梅にえらそうに云はれるんだわ、昨夜女と云ふものは臺所の手傳をしておかな

いとお嫁にいつてから何も出來なくて恥をかきますと仰つしやるから、臺所の事なんか下女にさしますと云ふと、そんな事を言つてはいけません、よし御飯たきや何かは下女にさすとしてもそうそうお菜の事まで下女に任しておけますまい、母様はお前を一人前の者にしようと思ふから臺所のお手傳いをさすのですと仰つしやつたけれど、何あにお菜をこしらへる事なんか學校で割つぽうの時に敎へて頂くから直出來るは、母様なんか割つぽうの事御存じないからあんな事仰つしやるんだ、もうあすから臺所のお手傳いなんかせずにおこう、梅みたいな者になるそうに云はれて、

二日。昨日の事を母様に云つたら反對に私が叱られた母様は私は少しも惡くないのに私計りお叱りなさるんだもの、大きらい、それに今日は又それぢや臺所の方は止して春が拭き掃除をするのをお手傳ひなさいと云はれたから、又拭掃除をせなけりやならない、厭だけれど拭掃除の方が優しらしいからする、春がお床の間を空拭さして下さいと云ふから一生懸命にしたら手が痛くつて堪らない、春に手が痛いからもつと痛くない處をさしておくれと云ふと、笑つてそれでは此臺を拭いて下さいませ、そんなに力をお入れなさらずともゆつくり丁寧にして下さいと云つて拭き様を敎へて呉れた、春は眞實に優しいから私大すき、今度音樂會か何かあつたら春をつれていつてやらう、臺を拭いてから春に見せると、すかして見てもう一度此の處が光る迄お拭き下さいませ春が奥の間のお掃除を仕舞ふ迄それを拭いて居て下さいませと云つた、眞實に春はよい仕直しするのでも優しくいつて呉れるから、臺を拭いて見せると、まあ美しくなりました事これでは春が負けそうで御座いますと云つた、私ほんとうに嬉れしい、あすからお掃除ばかり仕様、春と一所に。

我子の敎育

綱野やす子

私が女敎員の片端に席を置くから申すといふ譯では有りませんが、世の母たらんとする人には是非一度は、敎師の職に就いて戴き度と思ひます。

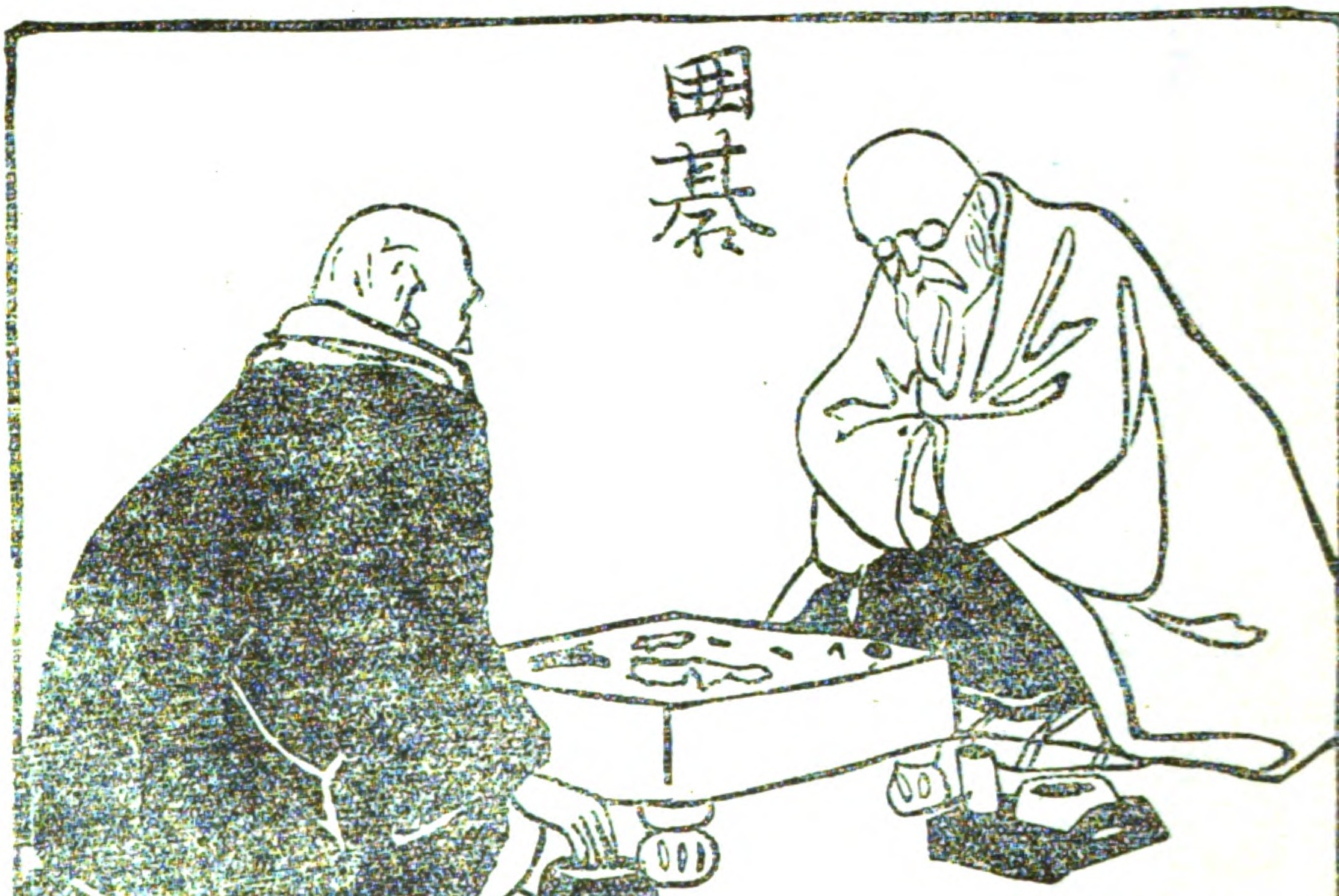
けれど人には種々の事情がございますから、そう一人なし敎師に成るといふ事にも參りますまい。がそういふ方達には敎育書の一册や二册は必ず讀んでもらひ度のです。

今の世の多くの方は、やれ茶の湯だとか、挿花だの、音樂の交際法のと、これ等の事のみを以てお嫁入の御仕度は充分なりと考へられて、敎育法だの育兒法などといふ事を一向頭の中に置かないといふのは實に殘念の至りです。

人の妻たらんとする人は必ず母たる可き覺悟がなければなりません。又母たる以上は必ず其子を育てるの任務があります。世の中に子に勝る寶はなしとかや。實に左樣でございます。其母親として其子の育て方を知らぬといふのは實に恥づべき事ではありませんか。

私は百藝を以て誇りとするよりも寧ろ此一事を以て誇りとす可きだらうと思ひます。

或日私は親戚に參りました、丁度其時夕立がはげしくしまして雷が非常に鳴り出しました。すると今迄縁側て元氣よく遊んで居た太郎は、眞青い顔をして母の膝へ驅けて來ました。すると母は「そら雷樣が臍を取りに來ましたよ、まあ恐い事、長い爪を生やした大きなお猿の樣だ」と申しますと、太郎は增々恐がつて母のひざに確固としがみ付いて悲鳴を擧げて泣き出しましたすると母は又「そらそんなに泣くとほんとに來ますよ」つて自ら僞はつて、驚かして、泣かして、又すかそうとして泣かして居る。



圍碁　紀伊　谷田峰子

噫此時太郎の母にして教育の法を知つて居ましたら必ず此好機會を利用して雷を恐がらせず、反つて好智識を與へたらうにと私は實に殘念に感じました。

これは只一寸の例てすが、世間には斯う云ふ風な教育をして雪よりも清く、飴よりも倘嬌め易い最愛し子を汚曲

して仕まふ母親が澤山あらうと存じます。「どうも宅の妻は子供の育て方を知らんで困る」と男の方のおもらし遊ばすのは時々耳にいたす事でございます。

山曇り

中宮よしみ

嫁入の荷馬落花に浴びてゆく深山曇りの國境かな

ふと君が投げたる一語わが胸の靜けき沼に波たゝしめぬ

深山百合素子かをとめを若人の熱き涙やよりて咲きけむ

相よりて暮雲眺むる山の家孤兒らしきをとめ二人よ

夕霧の木々のひまより燈火を望むが如きわが運命かな

欲りつゝも今はと捨てしわが戀のこりて咲きけむ汝よ

白梅

ながかりし悶えのむくろ歡樂の又も悶えによみがへりぬる

初まゆ

木村露草子

初まゆは母にさゝげぬ乙女子の我ひめごゝろ君にさゝげぬ

九のわかおもふなぞときしよりいと／＼惜う思はるゝ君

花と花のあいにすごもる身にしあればいづち方へとわれためらひぬ

あゝ美し紫雲の西こえて夕の日ざし地におつる時

三度みて三度みつめぬ夕燒の森の木立の陰ゆく人を

袖の摺り合せ

重子

二月二十七日は丁度初午に當り家に居たつて面白くもないので、笠間のお稲荷樣へ行つて見ようと、早速、車夫に用意させて出かけると、かけ聲勇しく、風を切つて走るので寒い事、ショールに頸を埋めて居ると、カチリと車が止まつた、降りて切符を買はせて、改札口へ來ると、赤ン坊を負ぶつて立派な產着をかけた若夫婦、草鞋キヤハンの人、コートの人、洋服の人、ゴチヤゴチヤかたまつて居る、お孃樣切符が落ました、つて車夫が注意したのでハツトして切符を拾ふて、チヨキツト鋏を入れてもらつて長い階段を渡つて、三等室の前を通つて二等室へは入つてホツト一息して居ると、ガチヤリ戶を開けて向ふ側へ腰をかけた方がある、何人と云ふのか知らないけれど眞中にリボンの付いた帽子をかぶつて、黑の外套を着て、狐の皮の襟卷をして飽迄色の白い、鼻下に美しいひげのある、人を引付る樣な顏、其方が私をジツト視て居るんで何んだか極りが惡るい樣な恐しい樣な氣がする、も一人誰かくればいゝと思つても、皆、三等へはかり乘るので、只二人きり私はだまつて俯向ひて居ると、窓から車掌がヒヨ

ツクリ首を出して、あちらの室に暖爐をおきましたからお移り下さいつて、戸を開けて去つた、其所を出て二ツ三ツ後の室、此所て御座いませうかつて聞くと、さうてす、と戸を開てさお入りなさいつて言ふから窓側の方へ席を取ると其方も脇へ腰をかける、其れても此所は四五人居た、私は今日は何故こんなにあわてるんだらう、切符を落したり、此所てせうかなんて聞かなくつたつてわかるものをと思ふと可笑なる、又、戸がガチヤリと開いて四十五六の丸髷に結つた、デップリ肥えた待合の女將らしい人が、眞向ひに席を取ると間もなく汽車が動き出した。

公園下の岩穴が幾つも見える、前の女將さんは絶えず私と紳士とを見くらべて居る、妙に恥かしくつて、俯向けるだけ俯向いて居る、がたんと止まつて、笠間笠間つて呼ぶ聲に吃驚して降りると、まあ大變な人。

伯母樣の家へ寄つて女中を連れて行くと狹い道を山車が通る、何んだか不氣味な山車だと思ふ、道の兩側に名物買つて入らつしやい、買つて入らつしやいつて、しきりに呼んで居る、お社の周圍は樂隊やらいろ〳〵て賑やかだ、お札を受けて名物を買つて、伯母樣の家へ來るともう十二時過ぎて居る、又周章出して、切符を買はせるやら、プラットホーム迄女中に來てもらつて汽車が着くのを待て居ると先の方はずつと向ふのほうに立つて居らつしやる、汽車が着いて降りる人。我先にと乗る人、私の樣な者は殺されさう、車掌が、貴女降りたんですか、いえ今乗るんです、ぢや早くお乗んなさい、車掌の後について乗つた、さつきの方は如何したのてせう未だ入らつしやらない、外を見て居る内に汽車は動き出した、何んだか同じに乗らないのが物足らない、向ふ側に眼鏡をかけた紳士風の人が、ちよいちよい私を視るので氣味が惡いから外ばかり見て居た、友部で五分間計止まつた時、待ちに待つた方は入つていらしつた、ヤアと私の向ふに眼鏡をかけた方と、今いらしつた方と、同じ樣に帽子を取つた、無理に押し込まれて酷い目に逢つた、と腰を下しながら云ふと眼鏡の方が、さうてしたか大相お歸りが早いですねえ、僕今日は東京へ歸へらうと思ふので其れぢやなけりあゆつくりするんですが、と私を見て云ふ、忙しいですね、僕初めて行つたんですが小ぽけな所ですね、ひげをひねりながら言ふ。

あの方は東京へお歸へりなさるやうお目にかゝられるかわからない、此汽車が水戸へ着けばもう別れなければならないと、思ふと急に惜しいやうに思はれる。

車中は急に騷がしくなつた、田舍紳士らしい客と女の連がビールを二三本持つて奪ひ合て、口から飲むでは

キャツキャツと騒ぐ、早く降りてくれゝば好い、彼の方もジロリと眼をくれて嫌な顔して考へ込む、何を思つて居らつしやるでせう今朝からの事を思ふと同じ樣な事を考へて居らつしやるのぢやないかしら、私は何處へ行つても丁寧にされる、又行遭ふ人には、必と、振返る、自分も美しい事は知つて居るが、どこが好いのだらう、欲目かも知らぬけれど彼方も心が動いたやうに思ふ、窓外を見ると、もう公園下まで來て居る、いよ〳〵お別れ、私がソツト見ると眼と眼がハツタと合つて紅くなつた。プラツトホームに着いて、出札口を出ると車夫が待つて居るので車に乘つた、彼の方も乘て何か言はふとした時梶棒は上がつた、只會釋だけして東と西に別れた、其面影は今も忘れ得ぬのです。

川邊の落花

稗貫みつ子

春も半ばは過ぎた華やかな宵てした、私はしばらく堤の下の小川の邊を歩きました。さら〳〵と暖かい風が櫻の梢を音づれますと、雪の降る樣に又胡蝶の舞ふやうに、はら〳〵と美しい花瓣は散つて、えならぬ香をたゞよはせます、仰げば裝飾にしてほしいやうな星の數々が、月無い空にまたいゝて、流星の彼方此方に飛ぶのも見えます。

小川の細流は、空の星影と散る花とを浮べて靜かな音して流れて居ります「散る花の粧ひのどんなに美しくて……」と私はそと手を延べて落花を拾ふとした、刹那つと目を射たは、白い花瓣の中一際目立つ紫の花でございます、其處にひざまづいて見ますと、――おゝ紫の愛らしいひともとの菫花なのです、落花の下に埋もれて淋しさうにうつむいて居るすみれ何となつかしくもあはれな風情でございませんか「あはれ菫よ汝はそも誰に見られ誰に償へられやうとしてこんな所に咲いて居るのであるか」と私は悲しくて「切めては私の熱い涙をそゝがば――さぞや――」と寄り添つてそと口づけさすとむゝ妙なる香いしくも鼻をついて只一本の可憐な菫が此の愛らしいすみれが私の心をよく醉はしめたのです。

嗚呼神は天地を作り給ふた、神は今にも踏みにじらるべき人の目にはとまらぬ花にも、愛のみ露をくだし給ふて、此の麗はしい色と、優しい姿とさうして床しい香とを與へ給ふたのです、「すみれよ汝は幸多きよ、」としばしの後私は菫に斯う囁いて花の傍をはなれました。

起床外二篇　やまざと

起床

今なつたのは六時、早夜が明けたのだらうか、もう起きなければならぬが、せめて百呼吸をして――一つ――二つ――三つ……三十――もう起きよや。三十五――三十六……五十四――夜が明けたぞ。五十九――六十――おい起きぬか、こらつ。は、はーい。早く起きぬか、六時いつなつたと思ふ。

後生

お朋友のみさほさん、年寄つた人が後生の話しなんかして居ますと、地獄の極樂のつてそんなものがありますものか、とよく議論をなさつた人ですが、近頃ご病氣で危篤だと申しますので、お見舞にまいりますと熱心にお僧さんからお話を聞いてゐらつしやいました。

昔戀ひしき

昨日も小米さんと二人がお話するのです、久野さんがお嫁入なさるのを見て、妾等も早ふあんなになつてお嫁入がしたうございますね、と學校から歸りにお話したのもまあ此間のやうに思ひますが、今ては又本袋と草履袋とをさげて、學校へ通つて見たうございますね。

花屋

花や花、花や花、と妹が呼ぶと、花屋さん〳〵、花を見せてください、と靜江さんが呼ばつて、はいこれが二本て一錢、これはよいのですから一本て一錢てす、はいそうですかたいそうよい花です、高うすぎます、まけてくださいと、商ひ眞似をして居ますので、そつとのぞいて見ますと、まあ!! 妾の大切な薔薇を皆折つて――びつくりして障子を明けると、姉えちやん花はいりませんか、これだけて二錢にしてあげます、無邪氣な妹の顔!! どうして叱ることが出來ませう、そうてすか、それてはもらひませうね。

友の夢外二篇　二葉

友の夢

なつかしい君江さん、ゆふべも又あのふつくりと出した前髮、眉のこい美くしいお顔細そりしたお姿。二人して樂しくあの町はづれの櫻の下を歩いて居たに……君江さん……。あゝなぜ夢にばかりはあゝして生きてゐらつしやるのでせう。

初丸髷

髮結さんは歸つたが私は障子に手をかけたまゝ開る勇

氣が無い、頭が重いのでそつと髷に手を、變な手ざわり、ふり向と後の鏡に丸髷姿がうつゝて居る、サッと顔が赤くなつた。思ひきつて開ようとして又ためらふ。ほんとにどうしよう、なきたくなつた。

私の心

私の心。私の心はまあ何にたとへたらよいでせう、花笑ひ鳥歌ふ樂しい春よりも、すみ渡る秋の空よりも樂しく清いのです、私は毎日々々面白くて嬉しくて樂しくて只もうとける樣です、だからほゝ笑は顔をはなれません。七色の虹の橋を渡つて月の宮へ行ける程曇のない心です。

ゑりとかほ

田とみ子

「さあお掛なさいまし、」ふとんを新らしいのとゝりかへて呉れたので、私は今西向にとある大鏡の前に姿よく腰をかけた、剃刀を磨いてる中眼を細くしたり、口をつぐんだりして、どうしたら私の顔が可愛くそして美人に見らるゝ事かと人知れぬ心やり、うつむいてみたり仰いでみたり、あゝ宮樣方の御肖像が額にしてあるわ、一番北の方が閑院の宮樣だ此間御來岐の節母校の庭に枝よき松をお植え下すつた、どうぞあの松が儘かに根力づいてくれゝばいゝが、ひやり、ぬめり丸はけて白粉ても足つきにぬつて貰ふように 首をうなだれて膝のあたりをみてる、ゴリ／＼云ふようなかすかだけれど、痛い事、刃先でも入れやせんかしら、をう一休みぢや無い此度は左が、頭をかしげて南の方をみると、哀れな梅の花が枝にしがみついてる樣、はい一寸うつむいて下さい、そう剃つちや髮の生下りが少のう見へる、長い毛があつては猶更だから、と首をすくめる、お痛うございますか？いゝえ、さあお顔、もたれて下さいつてぽん／＼枕木を叩く、自在ランプをギーイと廻す、私はかどはゆいので眼をしよぼ／＼：：額際からまあ毛のあたりずう／＼ずう、ほらまゆ毛だ、細なつてしまふといけないのに、痛い／＼そう角立てた使ひ方をせずともよからうに、おーう苦しい／＼鼻計りで息して居るのでつばきがのんどにたまつた、早く手を放してくれんかしら、痛い事する人、どうせ血が出てるに、大事の顔をそれも額邊を、おう苦しかつた、早速頭を上げてつばきをのみ込んで櫛が落ちましたよ、はい右手にとつて鏡を覗く、やれ嬉しや血も出て居ないしまゆ毛もそう細くは無い、手のひらで剃刀をゴシ／＼やつて北側へ廻つてはいと云ふて頭を枕木にもたしてしまつた、またごり／＼やり出した、鼻の上へ左の食指と親指をのせて眼ふちをこそげる頬のあたりは實に心地がいゝ眠むくなつて來た今私は無心になつて半夢のようである。

絶望の花

佐藤エン子

死の門の
濕めらへる扉に、根引きて、
低首れ咲ける「絶望の花」や、
香もなく、黒にびの
小葉こそ繁れ。
その花の
露、扉に滴るゝ
忍び音は
呪はれ人の終の
息、
古笛のむせび、
宛然に、
悲しく暗し。
あはれ、その
光りなき花、風
なき葉、
「希望の神」の手に摘まれ、
忘れかたみの花束や、
幸なき人の手に殘る。

淋しき嫁

味方こう子

雛祭すこし淋しき嫁女かな

癈院は櫻の精の領じけり
鐘樓守のかね撞きなやむ櫻かな
滿山の櫻滿村の櫻かな
山見れば櫻水見れば櫻かな
夏近く海水浴を思ふかな



子守り　品川　内田よし子

春の水古き都を流れけり
戰沒の馬葬るや春の雨
山守の飯盗む鳥や春の山

ハモニカも上手になりて夏近し

鴬

三浦とみ子

鴬に醉ふと少しあるきぬ春の山
獨活の芽の紫淡し春の雨
待人を占はせけり宵の春

ある朝

靜代

冷たい夢から覺めて眼をあけると、眞黒な天井に戸の

隙間からおぼろげな明るさがさして居ます、カサ〳〵と音がする「オヤ又雨か知ら?」と其まゝ飛び起きて戶を開けました。

まあ驚くぢやございませんか、庭は眞白に飾られて居ました、桃の蕾がふくらんで、梅の香さへ風と一所に行つちまつた此春の日に大雪は?

今頃は戶塚の原でもさまよつて不思議な美しさを靜かに眺めてゐらつしやるんぢやありませんか御懷かしう存じます、美佐樣、今朝もねえ、又父樣から叱られちやいました、廊下を無意識に步いてゐた時、足許に紙が落ちてたから拾つて鶴を折つて居ました。

此時は何にも思ふ事が出來ない靜かな胸でした朝から晚迄理學だの、化學だのつて、理づめにされてるんですものせめて此靜かな朝鶴を折る少しの間でも瞑想の一もないおだやかな時をむさぼろふとしたのでした、あゝけども、もう私の胸は亂されちやつたのです、「朝から何て喜樂な眞似をしてるんだ、彼方に行つて勉强でもしろ」つて頭からどなられました、折角の靜けさを破られて又私は本を讀んでも頭に入らなくなりました。

こうぢつと平和にしてゐると氣がすが〳〵してよく記臆が出來ますのに、こんな事で淚が止度なく溢れてエヽどうなるものかつて……云はゞ反抗心でせうか、頭の古い父樣は（例へ醫學上には新らしい思想はあつても）今時代の若い人には消せば消す丈强くなる反抗心の焰のある事を知らないのです、

はがゆいけれど私は其を自身で父樣の前に披瀝する事が出來ない、只かげで泣いて居る許りなのです、何故でせう、此頃はいやに神經が過敏になつて下らない事に一人で怒つたり、泣いたりします。

あゝあなたが今此に居らしつて一言慰めて下さるなら此いやな淚もすぐ消えてしまふでせうに、

だれにも云ふ人がないからかうやつてせめて筆にでもかきますと少しはたのしくなりますの、どうぞ笑はずに見て下さいまし、世の運命といふ車は喜びや樂しみを乘せてぐる〳〵とまはつて居ますけれど私の所に許りはちつともたのしい事を廻しちやくれない、

何といふ不公平なうきよ車なんでせう!!!

弱者

鈴木靜江

私の村は岩と石とで出來上つて居ると云つても好い、後ろは小高い山は岩と石で築かれ畑は一里も行かなければならぬ、梅櫻は勿論、林とても風の爲と雪の爲て育たない、山から三十間程前の海邊には立丈の岩や女郞岩等もある狐岩もある、皆其形に似て居るのでつけたらしい。其外刄のやうな岩は屹立して數へられない程海面を、せんりやうしてゐる。

一町程行くと平磯「アイヌ言でカンバリ磯」と云つて

大運動會を開いても宜い位な平な廣ひ岩がある、貝の小さなのが一面に附着して居るので草履位の要用は有る。

其岩の鼻崎に少し中高な所がある、之は私の椅子とも机ともなるのです、妹は姉さんの煩悶所と命名して居る、今も友人から來た手紙を袖にして眞黒に、ひからびた岩やへろ〳〵と、すべる岩の上を歩みながら例の岩に例の如く山を後に腰を下して、手紙を操返した。

文面の大躰は「此頃はどうしたものか貴女の御笑ひなさる美しいお顔が拜したくてなりません、とか又は其上お氣質が珠のやうなものですからとか、貴女の樣な方は田舍にをくのが誠實においたわしいとか貴女が其地へ被行してから色々と變遷しました、さぞ來て御覧なすつたらお驚きなさる事でしやう」等と人を、まるで持遊んで居る腹立しくて引裂かうとも思つた。

卷き終つて封筒に入れやうとすると、まだ一枚有つた――が見なくとも宜いと懷中はしたものゝ又どんな事がと見たくも成つて取出した。

半紙を小さく刻て極々小さな字で「私本月の末に醫科大學出身の高木樣と結婚を致す事に成りましたの、そして來月末頃御地へ行く樣に成るさうです、其時はくはしく御通知はしますけれど」

と、かうあつた私の胸は奈故か異樣に騷いた、手はわな〳〵ふるう、あくまでも人を馬鹿にした。

何と云ふのか此の心――矢張寂寥としか云得ないピカリとして何魚か過ぎ去つた、後に自分の髮毛の風にそよぐ外は動搖ぐ物一つない、ついに自分も吸込まれたのか、うつとりと水面を見詰めて居ると飛込みたい樣な氣がして足がふら〳〵する。

急に後ろで、破れ太皷のやうな聲で「姉さん今日は隨分海苔かゝらね――日だんす」と云ふ聲。

驚いて振顧て見ると村で太郎家の豆と云つて居る女でした「そうね――」と云ふ中に向の岩を小鳥の梢に囀るやうに飛て居る、海苔摘みに來たのでしよう肩に籠を下げて豆は女の身一つて亡夫の遺子六人をどうにか育つて居るのを村の人々は人間でない樣に云ふが私は感心して居る、それは子供に破衣を着せて乞食見たやうにはして居るが、頭の子供が今年やつと十五の女の子だもの、其上其子が半馬鹿だとか、皆運命が然せしむるのだ、それや親心だもの着物も着せたからうが着せられないからだらう、聞けば四日程前に末の子が生れたと云ふのに早や海へ出たら身躰に惡い事は而も承知だらう、子供の爲に犧牲と成り果て其日〳〵を送つて居るのだらう。

村の者は何所へ行つても豆の說で持きつてゐる、いや麥を五升買へば毎日麥ばかり米を買へば毎日米ばかり食べて居るとか破れた着物を子供にやれば其まゝに着

せる、だから村中で誰も彼に應一ッ呉る者がないのだと話合て居るけれど〳〵私は決して彼が惡ひのではない皆運命だもの、それは米も麥もと買へる身分であればそれもさうかも知れないが僅五合か一升買ふのに雨方と云ふ譯にも行かず、自然そふかも知れない、叉着物も縫たり仕度とも出來ないのだ、食べる事にばかり追はれて座るひまがないのだらうに、奈故こう世は弱者をばかり侮るのでしよう。

一人て縫ふた被布

齋藤れい

先日御催促の御座いましたちゑ(妹)の被布、卒業式も昨日了りましたから早速お送り申上げます。此間申上げるのを忘れて居りましたが色が少しジミであつた樣に思はれます、それに模樣も赤味を帶びて居りませんからちゑには似合ふかどうかと氣づかはしう御座います。

此度の仕立は隅から隅まですつかり一人でしましたふらをかしな處も御座いますし恰好も思はしく御座いません。到着致しましたなら何卒惡いところを仰つしやつて下さいませ。折角ちゑちやんが待ち遠しがつて居るであらうと思ひますと一人微笑まれます。

それから此中に一所に入れて御座います繪はがきこれは何か義つちやんに送つて上げたいと思ひますけれども何も丁度よいものも御座いませんし幸今閑であるのを利用して面白半分に畫いて見たので御座います。

またお清書はあまり出來のよいのではありませんが新らしいので御座いますから御送り申ます。

尚お父樣のお羽織は來學期でなければ仕立てられないやうになりましたから、出來上りは六月頃かと思ひます、何卒其御積りに居らしつて下さいませ。申後れましたが昨日小包到着致しました。わざ〳〵御面倒おかけ申まして送つて頂きましたが、皆樣が單物の方がよいと申されますし、私もそう思ひます、それにいづれ單物も入用なのですから、これを殘して置いて、別に買ひたいと思ひますが。ですけれどももしまた買ひ置きの物が御座いましたならお送り下さいませ。

今日は用事ばかりで筆を止めます。

氣候の變り目で御座いますから皆樣御身御大切に遊ばされます樣。

かしこ

リボン外二篇

紫水

リボン

リボンを買つてくれと妹がねだる、此十八日に運動會

があるといふので。しかたがないから連れ立つて町へ出た、小間物屋の前に立つた、妹にうながされて中に這入る、パッとする樣に美しく飾られた中に娘さんがたつた一人、淋しさう。「姉さんあれ」と妹がいふ。受け取つて見ると、目覺める樣な牡丹色に浮草の散らし模樣。

思出

風がゴトゴトと雨戸を搖ぶる、烈しい暴風雨、頭が重いから宵から床に入つた、眠られない、燈火はほの暗い淡い光を放つてぼんやり室内を照してゐる。何だか急に寂しくなつた、もう寢やう、寢返りをして目をつぶつたが、矢張寢られぬ、だんだん目が冴えてくる許り。横降の雨はしつきりなしに雨戸に打ちつける。恰どこんな嵐の晩いとしい愛子は靜に眠つた、今に歸らぬ。それから、嵐の晩は深い悲しい印象を頭に刻りつけるのである。ああ、いとし子は今頃何處を彷徨つてゐるだらう。

座敷

不自由な下宿住居ではあるが、何處か寛りとした處がある八疊の離座敷。床がついてゐる、違ひ棚がある、北が壁で東と南が廻り縁になつて其前が庭である、南は高塀で庭を隔てて東に母屋がある。床には松に鶴の中軸がかけてある。床の割合に大きい花器にはヒバが生けてある。

その傍には、手ずさびの薔薇と忘れな草とが小姓の樣に飾られてゐる。私は此室の東北の隅に机を置いて東に向ふ。時々南の障子を開けて、左のひぢを机にもたせながら身を少し斜にして、限られた庭の風情を眺めるのがすきてある。今日も亦例の通りに開けた。梅がもう半開。

土臺外三篇

手島政子

土臺

都々逸や新内、それかと思へば盆踊唄の高聲で、今日も又西木組の土運びとみへる、生活につかれ、世に捨てられた人の手に、やつし〳〵運ばれる土は、やがて新校舍の土臺となつてどんな人を養成するやら。

瀬戸内海

蒼々たる水平線よりつと頭を上げた伊豫の石槌山は、雲の樣に霞の樣に、夢の樣な姿を現して居る。丁度其の岸を走つて居る樣に見ゑるが一里ぐらゐは離れて居るのであらう、烟波渺茫たる間を白帆が行く、波が光る、あれ、海鳥が何處へか去る。

離緣

「まあさん、ちよいと、お道具が歸つてるよ」、と門口の方から姉樣がお招きなさる、私は敷居の上て爪高して見ると嫁入道具がすつかり歸つて居る、とう〳〵向隣りのお嫁樣は離緣になつたんだらう……子まであるに……噫、女ほど安心の出來ぬものはない。

黄昏

「歸るのよ、歸るのよ」、と私は姪を負つて裏口を出た又雨が降るのであらう乳色の暮靄が山の端を包んでゐる、雫も、露も、花の涙も、塀越に亂れた山櫻の梢より落ちる、落ちる、落ちて里川の流と一しよになる、姉さんはなぜ歸らないのであらう…小川は何事かさゝやいて居る。

薄れゆく光

笹舟

弱い〳〵橙色の光がカーテンの間か
ら漏れる。うすぐらい壁に――
靜かだ。
動かない。自分の魂もあんなぢやな
いかしらん。冷えて――
褪せて――
暖い活動といふ熱はないのだらうか
あゝうすれて行く――
褪せてゆく――
遂に闇となるのだ。冷めたい光のな
い土の中に沈んてゆくのだらう
永久に――

人の運命

秋月すゞ子

今朝はあまり寒いのに足が冷へて早やく目が覺めた。雨戸を一枚明けると、冷たい廊下に白い雪が、物得し顔に這入り込んて、暫にて野菊の咲いた樣な模樣がついた。今日の寒さと言つたら總身に染み渡樣な、震へる樣な寒氣である。

やがて拾時過ぎだ、出口の戸がガラガラと音した、と思ふたら、戸――表から裏までつきとほしの通り合ひの戸――を押して「居なすつたかの」の一聲、手前ら裏座敷に居て、…誰かしらんいやだなあんな音立てて、…と思ひながら「はゝ居ましたでの」と、出て見たら、やれやれ、栖吉――約二里遠村――のお父樣着なれぬ裳に穿きなれぬ草鞋、七森笠の雪白く黒の股引に、黑の脚袢、身輕るに身を結ひつけて、びつくらびつくら――少さい時燒足して片足惡るい――とやつて來た。「おや栖吉でゐなすたの！あ！此寒むいにさあ！よう御出かけなすつたの」と、裏口へ案内する、「お母樣栖吉のお父樣が」と申上げる、母は、左樣かさうか―と、暖爐から出て來て、「まあまあお前寒むかつたちうが…さあ暖爐が暖たかなつて居たすけ」と、眼

鏡を掛てつぎだらけの着物を着てさも親切顏に云ふ、お父樣は「は有がとう御座んす」と先づ座わつて御挨拶、「みんなが御達者だかの先日は御厄介になつての又あの子——長男——が來て御厄介になつての」と一息づいて先日から寒むい〳〵と思ふて居たどれ雪が降らないでよいと思ふて居たら急に大雪になつての」と母も相當に挨拶をして居る、自分はお茶と菓子とを持つて來た「さあ食べらつしやいの、うまくないたつても」「は、どうも」と辭儀して、何だか思案してるらしい。

まだ雪はやまない。

きつと昔を追想へば——あゝあんな親先祖のあとをたやして、あんな山村へ引込んで、四郎丸——郷里——に居た時奢りに流れて



馬　丹波きくよ子

奢侈に流れても年中食つて居られる丈けの財産はあつたのだが、ふと相場に手を出して一たゝきにたゝかれ財産——田地田畑屋敷に土藏家財道具——を安々と賣り拂ひ果てはあさましい今の有樣、生花茶の湯謠曲の稽古とやら、あの會此會と愉快に暮らし、また下女下男をつれて悠久心の櫻、柳島の競馬見に行くつて、酒樽もたせて重箱持たせて遊び廻つた時は、如何に、樂しかつたか想像も出來ない、お母樣は、村の醫者の娘ださうな、きりようよくやさしい眼に口元のしまつた愛嬌のある顏だて、私らが使に行つても遊びに行つても「さあ表町の孃々てつちへ來なさいて」とさも珍らし顏に夏ならば庭に面した緣側に、ラムネか甜瓜冬ならば暖爐へ案内して牡丹餅に甘酒、秋は秋、春は春、

相當の物を下さる、――果物の樹は何でもある――歸りには必と、又何か下さる、練り菓子はよしかけ物菓子はよし、子供の澤山あるのにもかゝわらず私に多く下さる、て、私大好き、お父樣ならば少こしは臆面する樣子もあつたが……今は少こしも……さつぱりお合ひしない、子供はさぞ、大きくなつたてあらう、あゝ可愛さうにあんな村へ引込んでさぞ子供はいやてあらう、言葉許りわるくなつていたづらになつて、――さぞ悲しい思ひのするてあらう。……

毎日の食事に困つて居るからお母樣に針仕事をさせてお父樣は終日大勢の子供をかたつたり御飯をこさえたりして其日其日を暮らして居る、馴れぬ男の水仕業米をこぼしたり鹽辛くしたり、淡くしたり、毎日毎日お粥許りださうだ、一二回知人の紹介て、石油掘る所の事務所へてたが、運わるく石油の出ない中に、資本金がつきてとぼ〳〵と險しい〳〵〳〵山道をおりて家へ歸つて……

――ほんとに險しい山だ私も老ひた母と二人て、用事あつて事務所に居らるゝお父樣に逢ひに行つた、高等三年の時の國語讀本の張良と云ふとこにあつた「古木茂りて森々とひるも小暗らき細谷川瀬音許りぞさわがしき」とあつたが丁度そこと思へば間違ひない、左右山て、六寸か七寸位の道、餘所見すれば數十間も深かい谷川へおちる、私は心配した、母が眼のわるいのに、洋傘をたよつて、てく〳〵歩いて居るのに、若しや落ちたらどうしようと只淋しくつてさびしくつて……私ははぢめてあんな山へ行つて見た、凡そ七里位もあるだらう――。

お父樣はおもむろに口を開けて「私ものお前べつてはないがの一つ相談があつての、寒くつて出たくなかつたどもの氣がもめて仕方がないんだんがの、」と聲細々と言つた、母は耳を澄まして無口て居たが、「そうかい」と下向いて「困つたの――」とまた言葉を續けた。

後は……

私はひる飯の仕度に取り懸つた冷たうて冷たうて仕樣がない、雪はやまずに降つて居る、最う三尺はたまつた、雀は軒に來て餌を求めてゐる、水棚先から雪が這入る。

笑　　ひつじくさ

一

妙な事から誤解されて仕舞つた。

しのぶは可笑しさに止度もなく笑つた。

事の起りはつひ三日前の事、妹の習字を傍に見て居て、

「まあ此樣字で能く『甲』が貰へるね、如何な人か知らないが、お前の先生も餘程下手だと見えるよ。御覽此字なんか、まるで足投げ出して欠伸してるやうぢやないか」

と云ふと、

「隨分よ、姉さんは、私は下手でも先生は上手ですからね。知りもしない癖に、酷いわ、ひどいわ」

とぷん／＼怒る。

「だつてお前の字を拜見したんぢや、餘りお上手とも思へないもの、姉さんの方がきつと上手に相違ありませんよ」

「よくつてよ。其樣事ばつか云ふなら姉さんの書いたの頂戴よ、私先生に見せて、何方が上手ですつて聞いて來るから」

「あゝ、聞いてごらん」

と隱しきれぬ笑を見せつゝしのぶは、机の中から薄葉に書いた、歌の反古を出して與へた。

今日、學校から歸つて來る時分には、最早ケロリと忘れて仕舞つて、

「あれをお目に掛けたら、先生ニコ／＼してらしてね歸る時、之を姉さんに上げて下さいつて」

と手紙を出され、夫てやつと思出した位。讀み終らぬ中から吹き出して。

「ゆうちやん、お前何てつてお目に掛けたの？」

「私？私ね、云へなくなつちやつたから默つて上げたの」

と少し萎れる

「だからだわ、まあ可笑しい」

涙を拭き／＼笑ふ。ゆうちやんは、可愛い眼を眞丸くして、

「アラ、姉さん如何したの？何が其樣に可笑しいの？敎へて頂戴な、ねえつてばよう」

「オホホホホホ、あゝお腹が痛い。何でもないけどねゆうちやんの先生は餘程オノロイつて事」

しのぶの書いた歌はさる人の

『人見れば面ぞ赤むよべの夢に
君をし戀ふと泣てつげしを』

二

四五日過ぎての日曜日に、しのぶはゆうちやんと、

お友達と三人で、ゆうちやんの學校へ遊びに行つた。先生——野原先生は、學校に寐泊りして居る。玄關側の柳の下で、薄い髪を中央から分け、青白い平たい顔に眼鏡を掛け、鼻汁でも附けたやうに悪く光る着物をゾベリと着て、眼をつぶりながらヴアイオリンを彈いてる人がそれと聞き、しのぶは吹き出す前に先づ一寸、落膽したやうな氣がした。

「彼樣人か」

先生は頗る優待した。妙な味のする珈琲を出す。ベタ／＼するモルヽンを出す。舌や歯の邪魔になるやうなカステラも進めた。

白い、細い、藝人の樣な手をキチンと重ね、

「三宅さんには度々お目にかゝりましたが、貴女には初めてゞありますね、何卒宜しく願ふのであります」

丁寧に頭を下げると、汚れたキヤラコの襟がチラリ見える。

「イエ私こそ……。毎度妹がお世話になりますさうで、誠に有難う御座います。母からも宜しくとの事で御座いました」

切口上で述べ立てながら、窃と三宅さんの膝をつゝいて素知らぬ顔。先生は三宅さんの笑聲に驚いて、間の悪るさうに鼻汁をかむ。

ゆうちやんと三宅さんが便所へ行つた留守、先生は少しもぢ／＼しながら、

「先日は結構なお歌を頂戴して、私は、誠に嬉しうありました。私のお手紙もお見たのでありますか？」

「ハ、拜見いたしました」

「左樣でありますか。私、貴女のお顔は寫眞で拜見して、能く存じて居るのでありますよ。貴女も私も存じて居たので？」

「イエちつとも。今日が生れてから切めてゞ御座いますの」

「ハア左樣で……」

チトけゞんな顔をした。而して顔を少し赤くして、

「失禮でありますが」

と赤いリボンで結へた、薄い、四角い物を、膝の下へ押し込む。しのぶはあわてゝ、

「アラ、其樣事をなすつては」

と押し戻さうとする所へ、二人が歸つて來たのでそれなり。

三宅さんは横目で見て、白眼む眞似をする。しのぶも白眼む眞似をした。先生はゆうちやんを抱いて何か

頻と耳語りして居る。ゆうちやんははにかんで、一寸上眼を使つては又急いで下向く。二人は顔見合はして聲を立てずに笑つた。

歸りがけにしのぶは例の物を、傍の『婦人世界』の中へ入れて來た。

三宅さんは突ひかけて、

「如何です、大變な先生樣でせう？」

「エヽ、全く驚いてよ。私最早ちつとハイカッた人かと思つてたら」

しのぶは思出しては苦笑した。

三

間も無く野原先生が學校を退いて國へ歸り、同じお百姓仲間から嫁を貰つたと聞いた時、しのぶは、

「あゝ云ふ人は定まつて奥樣孝行なものよ」

と冷笑した。

春雨

根岸鐐子

春の夜をしと〳〵と降る雨の音
幽遠の靑き愁の國よりか、
あゝ小さきわが胸を焚く苦痛の
黑き灯やはた赤き灯や、
夢のゆらぎか……あゝ、ほと〳〵と雨の音。
微妙なる戸外のさゝやき
咲きし花の零れ散る音か……
この雨の夜を
ひとり囚舍にもだゆる心地
あゝ、雨の音――胸にしむかな。
かゝる夜こそ
燈火の影淡く死せるが如く
時おり雨の音――風のさゝやき
さびしいかな、靜寂なる夜の
しづかにふけゆく――を。

海のよろこび

伊達まつ子

春の雨君をおもひてうれしさに心のをどる夜をしきりなり
はち〳〵と花こぼれちる音ほのにきゝうるほどの靜かなる夜や
うるはしき春の日の下大いなる海ゆた〳〵とよろこびにみつ
遠方にいとうるはしき人の居てわれよぶ心地森の夜の雨
旅はつる日なり思へば來し方のなつかしきかな遠空の雲

冥想

落葉

幸うすき我を生みにし島も今春の光にねむれるけはひ

日落つれは魔の神來りわが双手とりてみちびく花なき野邊に

濃きあけの藍となりゆく夕雲を君が心をおもひて泣きぬ

月照れば薄きながらも歩み來しあとこそのこれ眞白き砂に

草を敷きて冥想に伏す薄月夜ゆめの樣なる海なりをきく

禍鳥は胸の透垣そと越へて幸の若芽を啄まむとす

青き月呼ぶにも似たり聲なげて嵐にふるふ丘の大杉

懸賞文清書日記

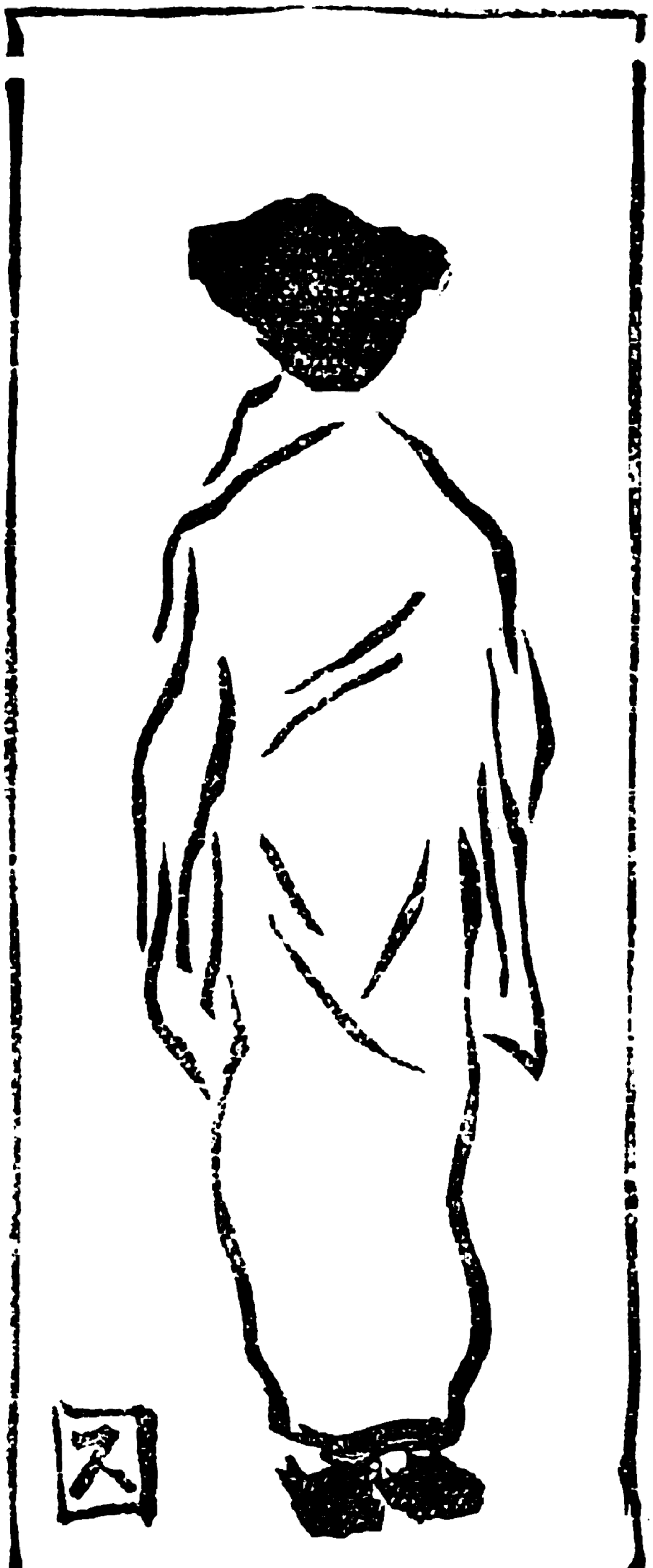
うもれ木

三月十六日、八時雨をついて出勤、愈清書用紙が、支會本部から來て居る、包んだ新聞紙に百八十枚と書いてある、何となく自信が出て、微笑まれる。躰操、裁縫の二時間は、常も休みなので、サッサと清書しかかつた、隣席の老先生文字をのぞき込んで、「清正公さんも、小學校の先生には、御供へ物の御注文が違ひますなア、それは兎も角、厄介な三百年祭ですよ」と煙草臭い息で御笑ひなさる、時日迫れりといふのて、急ぎ謄寫して又直ちに筆を執る、夕飯もろくに頂なけい、座蒲團三枚敷いて、肩から大きなショールをかけて、薄ら寒い雨の夜を、原稿と清書用紙と視つめたきり、黑軸の眞書を走らせて行く、一枚出來ては、元書いたのと重ねて握つて見る、早く此の厚みが重なり重なつて……と、心急いては又筆を執る。

夜が更けたのか、雫の音が澄みきつて聞える、ジージーと石油を吸上ぐる微かなランプのうなりと、タラタラと絶間なく、落ちる雫とが、寧ろ私には賑はしい、が暫時疲れた目を閉ぢると、又それが何とも云へぬ佗しさで、ポテリ！、ポテリ！、大きな雫が泉水の中に落ちてるのを聞いてゐると、胸の底にこの雫を浴びせられる樣で、不可思議な一種の賴りない！ といふ情がムラムラ湧いて來る、嗚呼斯る夕、戸ぼそに佇みて、叩き給ふ愛の御聲は？ と机上を見ればホルマン、ハントの描きし、聖像桃の花かげから優しく、美はしく自分を招かるゝかの樣に……「見よ我戸の外に立ちて叩く……」其の聲がきこえる樣だ！ 不圖氣づいて又筆を走らせた、ガタンガタン戸が鳴る、湯の中で言ふ樣にウーンと下女が聲を出す、モー二時、九枚出來た明日の授業が思はれる、床に入らう？（二時すぐる十五分）

三月廿一日、大きな聲が裏門て聞える。驚いて目覺めると、新宅の奧樣の安産の報知だつた、時計は午前四時！ まだ一時半より眠らなかつた眠たい道理だと又目を閉ぢたが、安産の事から空想に空想を生んで、生存の意義が馬鹿らしくなつて、ウトウトなつた

が、呼び聲に覺まされたら、モー七時半！ 寓居の夫人に又息子さんてと云ふと、エ、又娘より何程好いかわかりませんよつて、午前の中に子供が邪魔するからつて、宿の主の發議て、遂に離れ座敷へ轉居した、ランプ、夜具と、机一脚懸賞文用紙英書一冊日記帳！財産家だてと、前が竹藪て葉ずれの音が間斷なく聞えるので、急に山に來た樣て、罪なくて眺むる配所の月の樣な氣持がする。此處て朝から夕方まて、机と仲よくして書いたので、十五枚半は出來た、圖を書き入る丶のが面倒だが出來れば字よりは、紙數が早く殖えて嬉しい、夜もサッサと筆を運んだ、時折顏をあげて新室を見まはすと、薄暗いランプの光て、不明瞭な色彩に葬られて居るのが、却つて胸底深くに、鮮かな印象を留めさする、午後十一時頃毎夜の疲れて眠くて／＼、



後姿　尾張　竹内鉆子

どうにもこうにも仕方がない、立つて雨戸を開け蒼天に輝く無窮の星光を仰いだ、離れて居るから心配なしと、大きな聲て、「花散り失せては薪に賣られ」を歌つた、その刹那、皷動激しい此胸を抱いて、暗い／＼この夜に、彼の空を昇つて行つたら…と幸ある未來を望む樣に仰ぎ觀た、夜氣に身は筋肉のしまつたのを覺え心は、自然の不思議に呼醒まされて、又筆を執つた、かくて幾度か、潮の濱の眞砂ても洗ふ樣な、竹の葉ずれの音を、雨てはないかと思ひつ丶夜は更けた、疲れた手てにじり書きに、例の通り更けたのもかまはず日記を書いた、この夜の竹の葉すれの音が、詩の樣て、暗示の樣て、忘られない！(二時半)

三月廿八日、六時から昨日の續きを書く、連日の努力てモー百六十二枚出來た、試驗休業て歸省してる友達を雇つて綴ぢ方やら、重ね方を頼んだ、手が疲れて序

言の清書が思はしくないが、先づ忍んで置く、車夫が待つて居る、十一時の豫定が午後二時まで遅れた、髮も梳らず、着物もその儘で、車夫に丈晝食させ、自分は午食も止して、教育研究所迄車を飛した、支會長の笑顔が又なく嬉しくて、大事でも成切した様な誇りを覺えた、歸途車を止めて、書店から新美文を買つた、車上て、入賞作家の面影を眺め入りつゝ、夕日の傾く頃歸寓、頤の淋巴線が大きくなつてたのが氣になる、文壇て不圖、河岸通り…　故田中久子の文字を見た、閃光の如く文壇の花の姿が見えた、三浦三崎の文字が浮ぶ、風葉先生の未來の進境が思ひやられるの評が來る、自ら閉ぢられて、病骨高き文人の面影が聯想される、再び目を明けて又「故」の字を見た、私の胸は冷たい風冷たい！そして夕暗の中に立つ墓標を思ふた。ある懸賞文は何物？、教育品展覧會とは何？、父もない、母もない、玆に嚴存して居る自己の滅亡は何時？私は星を仰いで故人の瞳の輝きを歌ふ程詩趣ある身ではない、故人を追想する時は必ず、暗い冷たい墨痕鮮かな墓標を悲しまずには居られぬ、俗人です、アヽ明治文壇の獨歩も忘られやうとして居る、女子文壇の君も亦　…アヽ床に入らう！、　ショールではこの春寒むは凌げそうない。（午後九時）

日記

磨志緒

三月五日例の通り仕度をして外に出ると暖かい事、毎日〳〵寒むさうに見て居た山の雪も消へて、心地の好い風がフーと吹いて袴の裾と袖とを動かす。春とは知つて居たが殊に今日は如何にも春らしいと思つた、學校にいつて休み時間にはレースで栞など編だ、おひるの休みに郵便が來て、どなたと筆蹟で裏を見ないでわかつて居る久保様から、すぐ開いて見ると常に變らぬ優しいお言葉、姉様と慕ふはずよと獨言！赤ちやん産れたさうな、定めし可愛い兒だらう。名はホヽ……まだよ今日生れたのだもの　私が叔母様になつた。こんな事を考へて授業のリンに吃驚りした、放課後舞踏をした、羽織ぬいて、終つて少し寒うなつたから、羽織着ると肩がつまる、四時に歸つて久保の姉様に返事をかく、赤ちやんの名を靜雄か健一、にして下さいつて書く、其わけは無いが私は何かなしにこんな名が好だから夕方火を點して日課表を書た思ふ様にかけぬので困つた、今日は舊の十四日、月が圓うなつて學校からの歸りには靑い雲の中に光もなく薄白う見えたのが、日課表書き終つて外に出た時は頭上に、星と一緒に美しう輝いて居た、空を眺める度に私はいつもあの中にお伽噺の材料が入つてあると思ふそして又あの月が鏡て遠い〳〵國の懐い人がして居る事を毎晩うつして

呉れたらどんなに嬉しいでせう、そして丁度手紙の返事のやうに又私の姿や行をうつし返せたらとも思ふが同時に若し月にうつつた私等を雲が隠したら出した手紙が途中で、うしなへた樣で、先でもこちらでも心配する—こんな事考へる、今晩もそう思つて二時間程外に立て私の一番好きな離小島を、御身とわれは此島に、と此處迄歌つた時、星が一つ飛んだォャ！——と暫くだまつて、又いつの間にか盤上の夕暮を歌ひ出したお隣が戸をしめる、私も内に入つて時計を見ると十時過ぎ、床にはいつて新作家の原稿をと考へても半分出來て又外のを思ひ出す、何を作らう、月、月がッ——之はいかん、我身といふので美文、いや駄目、美文はいつも沒書だから、おゝ此間の月下の散歩…恥かしい、やめよう、それより小說絡琴として私の現在を作らう、やう／＼定まつて文章をと考へて居るまに眠て了つた。

暮鐘

中西繁

靜かな大氣がしつとりとして、濕つた井戸の方で地蟲がなく胸に泌み入る如な、寂しい夕暮だ。

昔風の優雅な桐の机に大理石の小さい像が冷たさうに立つて居る。机も古くなつて蟲食ひだらけだが何んとなく雅致があるので捨てるには惜しい、私の淚で黑くなつたのだ。

素焼の甕に活けて置いた白桃がホロリと散る隣りの室でお母さんが朝から來て居る、身寄りの人と話をして居被る。

私の處のも何うかこうか嫁付けましたましたのでヤット安心致しました貴方の處のお孃さんは——ア、十八にお成りなすつたのです子大變おとなしい方です子。

エ、あれも妙齡になりましたのですけれど、未だカラねんねですから仕樣がありません。

いつもお母さんは、未だねんねですとおしやる、——私が何んにも知らないねんねかしら——アまた机に椅つた。

靑春は人の花だ。暗の私くしの胸にも、淡の白く美しい花が薫つて居る。山村さんと、私の心はまた迷ふて行く。

母さまは未だねんねだと思つて居被る、何うしよう、昨日本箱が少し開いて居たが、あの手紙を見やしないかしら、困つた困つた。あゝけれども山村さん、私が…こんな像なんか捨てゝしまへ、こんな活花なんか何だ——あゝけれども山村さん、迷ふてる私がお ん夢に入りませんか——。

私位の歲は人の花だもの、かまやしない、だけれどもお母さんが此事をお聞きになつたらさぞ、おなげき

になるてせう。
何時か泪が出て居た。其の泪で山村さんと書いて下に自分の名を少さく書いて見た。
何心なく障子を開けて見ると、弟はいつも庭へ來る白鳩に夕餌をまいて居る。
義衛さんと呼んで見た『エヽ』と云つて、こつちを向く、
「お客さまはお歸りになりましたか」
「未だ話をして居て歸らないの」
「そう何んな話？」
「なんだか僕にはわからないの」
「だつて義衛さんはそばに居たんでせう」
「アヽそうそう伯母さんがハイカラな服を着た人の寫眞を見せてたよ」
「何んなの？」
「顔に目の二つある人よ」
「またそんな事を……」
弟は何んにも知らないでまた、鳩に餌をまいてやる。蓮光寺の鐘がボーンと私を闇に導いて行く樣に鳴る。お雪が灯を持つて來て、雨戸を閉めた、ボーンとまた暮鐘がなる。

海の別れ

荒木さだゑ子

八月廿三日晴、松の梢を拂ふ風を、雨かとうたがつた

のは、きのふまで、大分私はこの濱に慣れ親しむ樣になりましたが然し、私は明日歸京せねばならんのです、休暇も早や數へ日になりました故に。
家を右手にみて、十二三間ばかりの處に、水のぬるい瀬の淺い川が流れて居ます、私は袂を抑へて、髮を撫て丶身を屈めましたが慌て乍らとびのきました、川べりに凝つとして、夢安かな小魚を覺ましては、と思つて……。
『夏川を越すうれしさよ手に草履』ほヽ笑むで又、踵を返しました。
川を横ぎつて、波の打ちよせる、海邊に立ちました夕べかにを捕るとて穴を堀り返した所は跡もなく、しつとりぬれて、私の一歩前には白い水泡が蛇の如く、うねうねと遠くまでつヾいて居ます、ああ、今朝こヽに居る私、愛する海を望んで立つた私、わたくしは海に向つて告別の意を表しました「海、海よ!!」とのみ、廣い大きな果てしない物だけれど、私には何んだかこー形が見えて、さヽやきの聲が聞えるよーで……。想像なんだけれど、やつぱり。
この神聖な自然の氣に觸れたいと思つて、裾からげ跣足になつて、波を待ちました、サーッと二三尺位のが頭を擡げ乍ら、私を目がけて……。
ひやひやしつヽも身を斜めにして、アレ來た、眼をねむつてハッと思ひ乍ら肩を引く時ザブーと浪の花があた

りにとび散る、びちや／＼足を浸してスーと逃げて行く、私の足もさらはれそー、また眼をつむる、遠い々々國にても引張て行かれさう、眼をあいた、足は砂の下に隠れてしまつた。

「爺様、えらう今朝はお早いがの」私は驚いて顔を擧げましたら、いつのまにか宿のばあやが潮汲みにきて手桶を半ばかたむけて、腰をまげ乍ら浪を迎へて、私をみてニツコリと致しました、

あゝ、私はいつまでも永久にこの朝の今を忘れたくありません、また決して忘れますまい。

學年末

八田文子

學年末――、私は學年末になると、かなしさに身も心も包まれるのです、成績調査――、素行記入――、他の先生は譯もなく筆を走らしてなさるのであらう、けれど、私は走らしたくない、筆を走らしたなら、走らしたゞけ子供に悲しみをよけい與へるのですもの、不合格――、走らしたくない、泣かしたくない、今おろす筆の雫にあるてすもの、考へなほす、けれど三人ほどある、常の悪戯には泣かない子供だけれど、夏にはきつと泣くであろう、泣くにきまつてゐる、不合格――、私の心は泣かずに居られません、多くの子供に笑はれるのか知らと思ふと、誰が何といつても、進級さしてやりたい、進級――、どんなに悦ふてあろう、その悦びを見たいのてす、けれど丁が三つあるのですもの、もしや、もしや校長様に問はれたときには、何と答へよう……、丙になほしておいてやろうかしら、と思ふ、なほしておいてやつたら、三年の誰それは：……と、いはれはすまいか、平素が平素だもの、どうしよう、私は苦しい、その悦びは見られないのか知ら、何といつて慰めてやろう……、心は苦るしい亂れる。

優等て進級する子供もあるに、なぜこの子供だけは、てきないのであろう？、やはり悪戯の賜かしら、賜といつても私の罪てはあるまい？、きつと／＼私の罪である。注意さへしておいたなら、こんなこともなかつたてあろうと、落第さすのが可愛さうになる、私の腑甲斐故てはあるまい？……。私は悲しい、落第者をだすのがつらい、落度てあるもの級さつての、他の級にはあるかしら落度はつらい、この落度をどうしよう、作りたくない。

昨日も問ふてみた、悲しんてゐる者、悦んてゐる者、私は其悦びをわかつてやりたい、私等も嫌だつた、泣いてゐる子供（お友達）をみたとき、成績の半分をやりたいとも思つた、先生を恨んて、いなさつたお人もしつてゐる、どうしよう作らねばならないのか知ら、誰しも我子悪いと思ふ親はない、心のうちては可愛子

だと、思つてなさるにきまつてゐる、それを今、落さねばならないのか知らと思ふと、深い思ひに沈むのです。他の先生は筆を走らして、甲乙丙丁、の字をかいてなさる、子供の運は紙の上を走る筆の雫に刻まれてゆくのです。

夜の町

近野春子

四五日前からの風邪が、僅つと快くなつた樣だから、お隣りのお美津樣と御一緒に、町筋に出て見た。丁度、舊の十三夜なので、春の月はおぼろで、艶に美くしい。

先づ、通町から、賑やかな唐人町を下る。折柄の三百年祭とて、花瓦斯と花電燈とは、或は紅に或は白う、店に坐つてる人達や、道を行き交う男女を照らして、その美くしさ。ちよいとした横丁までも、平素の寂しさに似ず、大小の提灯、花の如に連なつて、賑やかな人のさゞめく聲が聞へる。

米屋町と細工町との十字街まで來ると、場所は全市中ての目貫きの場所である。老舗軒を並べて、大看版が夜目にも美くしい。そして白色の電燈は眩ゆきばかり牛島自鳴堂、其他の店の、飾り立ての華々しさ。殊に正木呉服店の陳列所など、得も云へぬ巧妙な意匠を凝したあとが見へて、行くさ歸るさの老若男女が、必と、一度は嘆美の聲をあげて居る。

ずつと下ると、所々に見知らぬ、料理店や、旅宿などの新築が目に付く、其中でも一番目立つて、大きな美くしい宿屋の前で、「いつ、こんな宿が出來たんです。」と美津樣に尋ねると、「あなた、御存知ないの、先日新聞に出ていた玉城屋と云ふんです。」

妾は僅か四五日位しか打ち伏しては居なかつた。だがたゞの四五日間にても、社會の移り變りは、斯くまで甚いものかと、驚ろいて了つた。ある書物で見た、「時代の推移」と云う事が、小さき病み上りの胸にひしひしとこたへる。

祇園橋まで行つて、遙かに停車場の方の、不夜城の景を見て、歸りには、新市街を通る、一層の美々しさて、新らしき町並だけに、非常に引き立つて見へる。左方には、舊熊本城内のイルミネーション、田舍人の婆達には、中天の星河の樣に、奇麗で目新たらしく、右の方では、大和堂の近邊で、エムパティ活動寫眞などの、大仕掛の與業が、賑合つて居る。

やがて通町に出たが、どうやら、寒む氣がするので、長崎書林で、大聲蓄音機の前に、眞黑く人が集つていたのを後にして、櫻井町には入る。春の町から、冬の町には入つたとでも云はうか、場末の屋敷町は寂しい限りである。所々の門々に、薄暗い提灯が下つてゐるが、幽かに光る具合が、却つて寂しさを添へてゐる。水道町に出ると、角の家で、二階から三味線の爪彈き

陽氣に騒いてる人の影が、障子にうつてる。折柄プーンと、高い良い香がする。其垣根には、夜目にも白い櫻の花が、薄月夜にほんのりして、美津様と妾とが、無言で歩む肩頭に、チラ〳〵と、二片三片、しづ心なく散りかゝつ來た。

迷へる從兄に

芳翠

兄上様！千萬の諌言も水の流れときゝ流して少しもかへり見て下さらぬ兄上様ですから今更私の様な小妹がどの様に申上ましても　きゝ入れ下さらぬとは知りつゝも今宵可愛いゝ芳ちやんのいじらしい言葉をきいて矢も盾もたまらず筆をとりました。

今晩ね叔母さんと芳ちやん許のお湯に參りましたのして家の花坊が父といろ〳〵さわいて居りますのを見てあの可愛いゝ目をパチつかせておばあちやん家の父ちやん東京の學校からいつ歸るの早く歸ればいゝなー」あゝ四才の芳ちやん‥‥私はたゞ〳〵顏を背けた許りうら若き頃より天にも地にも一人とかしづく夫には捨てられてあじけなくも刻苦を重ねつゝ一人子の兄様を頼りに世を送つて居らした氣丈夫な叔母様！村でも貞婦よと呼ばれた叔母様！あらこの時この叔母様のりゝしいお目からは只一滴血の様な涙がほろりと落ちました學校!!!學校とんだ學校に入つて下さいましたのね從姉様が無心の芳ちやんに父様の不在を問はれて其不審をとく爲云ひ聞かせたのを芳ちやんは信じておりますのよあゝこの時の從姉様の胸の中はどんなでしたろう、あの決斷力に富んだ男勝りの叔母様ですから口へこそいろ〳〵と出しておつしやいませんけれど此頃ではめつきりお顔がやつれなさいましたの。兄様私と貴兄は一人子の集り眞の姉とも兄ともお頼り申すのは兄様お一人じ



泣顔笑顔　信濃　糸子

やありませんか迷の雲に閉されて居らつしやる兄樣の御心には私の事等露ほども思つては居て下さらないでしようね私いつでも兄樣から戴いた女のかゞみだの家庭訓など出してはあゝ今の兄樣がこんな物下さる時代もあつたのかと却つてこの書物が恨めしくなりますの、兄樣！貴兄も直實で能才の御名はこの村はおろか郡内にも響いたではありませんか立志の聲に高鳴つた御胸の血は冷えきつて遂に魔の神の擒になつておしまひなさいましたのね、！　けれどこれもみな一時の夢でしよう迷でしよう夢ならばさめて下さい迷ならば正しきによみ返つて昔の美しい御心に返つて下さいましそして叔母樣のあのお顔に赤味の出る樣になすつて下さいまし……ね—　兄樣——明朝竹吉が兄樣の入らつしやるお近くへ參るときゝましたので血の涙を以てひそかに認めましたものどうぞ兄樣小さき妹の狹き胸の苦しさお察し下さいまして一日も早く消えかゝつたやうな家庭に暖かい光をなげて下さいまし。

子供の寫眞に添えて

さち子

暫らく御無沙汰いたしました、別にお變りは御座いませむてせうね、御父樣は相變らず魚釣りて居らつしやいますか春とは申しましても未だ〳〵中々冷えますからどうぞ〳〵御注意遊ばす樣に願ひます、宅ては益々春てご座ます、永い間御心配掛けましたが最う是れからは悦むて頂だく事ばつかり、どうぞ澤山祝つて下さいまし。別封の寫眞は、お母樣喜んで下さい武坊がタッチ〳〵の出來て三日目紀念に撮つたのでご座います、良人は腰掛けの方がよいと申されましたけれど私お母樣にお目に懸けたいばかりに骨折つて立つた處を寫しましたの、身の丈はそれだけでご座います、櫻の小枝を持たせて置いたんですのにイザと言ふ時落して終ひましたの、ねえお母樣體つきは可笑しくつてもニッコリした處は可愛いゝぢやご座いませんか、二三日の內に寫眞ばさみを編みますからどうぞ私のと並べて置いて下さいよいゝてすか、良人に似て居ますか私に似て居ますかおつほゝゝどつち？

罪深く候ぞ

みつ葉

昨日の雨にゆるみてか、川端の桃が二三輪莟を破り候上己の節句は、女子の祝ひ日なれば、草餅をつくらん蓬摘めよと母上の宣ふまゝに、霞ヶ丘に立ち申候雨あがりの野邊は生々として、烟の樣に水蒸氣が立つて首擡けた麥の綠、たんぽゝの黃なる紫雲英の赤き、錦織りなす其美事さ、何も彼も忘れて子供の時の心にかへ

り申候。
三年振りにて、唐人笛の音に似たる麥笛を鳴らし候。
沼の堤は、今も昔にかわらず、蓬が一面に生えて、蝶が數多遊び居り候。
不圖、姉樣の事を思ひ出てゝ、懷しさに堪へ兼ねて、堤に腰かけて眺め候へば、油のような沼の水の白ふ光りて、眩しきに、眼を轉ずれば、鷺一羽、長閑に輪を描きつゝ南に飛ぶを見候。
鶴の和羽に似たる雲の一片、緩ふ流るゝあたり、陽炎もえて、霞の中に浮き出た樣な鎮守の社、あの蔭の家に姉樣の居るかと思へば、懷しさに涙の流れて、染々と、春の悲哀を覺え候
嫁しては家に歸らずとは申候へど、お客にも來ずとはあまりに情なく候はずや。
お節句には連れ立ちて、是非來給へ、霞ヶ丘の堤に座して今一度、姉樣と呼び妹よと、仰せられ度、くれぐれ願上候。
近頃の疎遠は、中々に罪深く候ぞ、持つべきものを持ちたりとて、さりとはあまりに情なく候はずや、海山情なき仕うちと恨み申候。
失禮の數々は、お面會の節緩々お詫び申べく候かしこ

電報　電報

加藤菊子

ビユー／＼と吹き荒ぶ餘寒の風は隙洩れてヒヤリ／＼と瘦身に沁み渡る、夕餉を濟ましてから嫂樣と妹と梅も一所に一つ火鉢に手を出して、せゝこましう暖り乍ら世間話をして居ると、下駄音寒そうに「今晩は！」と這入つて被在つたのはお隣の信枝さんであつて「御免なさい」と馴々しう上つて被在ると、すぐ「あのね大變な事があつたのよ」と鈴の樣な眼を圓るくしてお話なさる、三人寄ればかまびすしい女の五人も集ふて隨分騷かしい事であつた。
信枝さんのお話は未だ新しい先月の事で、學校の寄宿舍で或夜の眞夜中に、電報／＼と廊下を走せ廻る者が有て、眠りより醒された皆樣は廊下へ出て見ると誰も居ないので不安乍らも寒いものだから又床に就くと、今度は信枝さんのお部屋で入口の障子がスーと微かな音を立てゝ開いたので「何人ですか」と聲をかけても答がない「寒いから閉めて下さい」と云へば又音を立てゝ閉める、はていやな事此眞夜中に誰がいたづらするのかと思つて居ると再び障子が開いた「そこ開けてはいけません」と云つたら矢つ張り閉める。そして又開く、又閉める、今は皆樣も恐くなつて互に帶や袂

につかまつて舍監の處へ駛け附け、此事をお話すると「そんな馬鹿な事は有ません」と仰せられるのを强てお連れ申すと果實、舍監も驚かれて、小使をして隅々調べて見たが誰も居ない、他室の方は皆面白がつて見に被在るが信枝さんたちは只恐くて其夜は遂にお寢りなさらなかつたとの事、何しろ舊蜂須賀樣のお城跡だから、もしかすると古狸でも居るのかも知れないと被仰られた、白い「レース」の肩掛に襟元を包んで默つて聞いて居た私はもう身の毛も悚ふ程恐く感じた、妹は割合元氣者それから其れへと根問葉問して興に入つてる。

やがて信枝さんはお歸りなさる、孃樣はお部屋へ妹はお二階へと皆それ〳〵寢に就てしまふ、私はまるで魔に襲われた樣な氣持をじいと押えて、父樣お寢つてなさる次の間、妹が延べて呉た床の中に這入つたが。サア眠られない、夜は寂々と更けて來るもう途行く人の足音も絕えてしまつた、斯う靜かな夜に眠られぬと常でも胸が騷ぐのに、宵の中の話から、神戶の寄宿舍に居た時分私の部屋へ盜人が這入つた事、京都でも矢張私の部屋であんな恐い事が有たともう過ぎ去つた時の思ひ出が續けられて、どうしても眠られない。

時は容赦なく進み四隣は刻を追ふて寂となり時計の振子の音益々さえて耳障りになる、こんな時三度唱えると乾度眠られると亡き祖母さんに敎はつた觀世音菩薩のお眞言、合掌して口の内に繰り返して居るといつの間にか寢入つてしまふ…

忽ち眞闇の中にススス――と靜かな音がして、雨戶が明いた、そして何者か私の方へ近寄つて來る、氣の狹い私は夜具引被つて身を縮めて居ると、サア大變、苦しい病ひの胸を强く押えられたのでもう堪らない、「アレお父樣」と有丈の聲張り上げた「きく―きく」と父樣のお聲は耳に入つたが何とはなしにまだクシ〳〵泣いて居て梅に搖起されて辛々惡夢より醒めた、何やら梅はクス〳〵笑つて居ると思つたら、私の胸の上に日頃愛して居る小猫が「チヨボン」と坐つて時々私の顏をのぞいて居る。

あゝさづきのは皆夢、夢なればこそ雨戶の明たのも譃人の這入つたのも譃、只胸の押された感じは小猫の上つた故かと氣が付て見れば可笑しい樣な者の、胸は矢つ張り不安に滿たされて居る、噫もう眠らないで置かうと文机の上に上つて居た新美文、いそぎ引寄せて薄暗い燈火の下で俯臥になつたまゝ夜を明した。

春日和日記

三栖鶴江

三月△日晴れ。十分に干した大根を、婆さんと共に方付け掛る。去年よりは見榮えが善い樣である。薄暗い二階の隅から次第に並べ出し始めた。下で繁坊が落る

干大根を頻りに集める。在所廻りの小間物屋が來て、仕事の邪魔をされた、ひやかしは二三度、未だドッサりある石鹼を買はされる。今日は近頃に見ぬ日本晴で奥深い大空には、米粒程の雲もない、長閑かな春日和である。溜り池の水草を隅の方によせながら、小さい木舟を浮べて居る繁坊、薄い辨慶縞の着物が輕い風に腰から下へはまくり上げられて居るのだ、母は先程から勝手でお彼岸の團子を拵えてる。

晝から母がお寺詣りされて、お留守居仰付けられた。婆さんはお隣へいつたが、日當りの縁で何んだか長いお話しの果てしなき樣。跡には只二人、話の要領得ない繁坊と內でお留守居をする。

夜、按摩さんが內へ來た「昨夜頼まれたの　」と云ふが頼んでゐなかつた。家違ひであらう、一軒上も同じ三栖だから!、二階の書齋へ入つた。「家庭小說ひとりぼつち」を讀み出した。四五枚は數えた時分に、母が都の兄から來た手紙を讀めと持つて來た。クダ〳〵しい、長い長いお手紙だ。父がお留守だから、明日は爲替を切つてこよと頼まれる。九時半寢床――

灰なき火

い　子

私の胸に灰のない火がある。
常に闇が籠つて
陰欝が湿々としてるから
恁う朽ちた鐵の扉があるやうで…
魂は戰慄してる。

私の胸に灰のない火がある。

その淋しい胸に
時々戀の焔がゆらめく――が
それは單に影だ、映るに過ぎない
あえかな光閃はするが
直く暗が來るのだから悲哀しい。

私の胸に灰のない火がある。

現實に囚はれて、新愁の
涙が湧く胸の瞳にも
その戀の火影がちら〳〵と映る――
あゝ灰のない火だ。

四天王寺

と　き　子

大阪の東をめぐる野の霞四天王寺の塔影浮ぶ
大空は美しきかな虹見ゆる我が住地もかくやありなむ
唇の紅さに似たる紅梅は今盛りなり春寒うして

さや／＼と竹の葉ずれのさや／＼とさえ／＼しくも響く夜半かな

花吹雪天上すらん廻廊に緋袴長き王女かてみて、

葦の葉

吉川多美子

影のごと野の面にもゆる陽炎の幻燃ゆる戀になづさふ

葦の葉の騒るを見ればそゞろわが古戀人もおもひいでつゝ

しりうごち嘲み顔して子を抱く妻とし君も背きたまふや

男の子らを世づかぬわれの泣かしめし皷とうてぬゆく春の雨

花ちれば雨そぼふればほの匂ふ夢野の限のわが蓬かな

華やぎし宴の後の寂寥に似るとふ若き母のおもひて

その昔の髻華に挿させし郎女の麗き子おもほや藤まける巫女

わが船は苦艱の海の浪黒う渦まく中に北す南す若き日のとありし事にときめきし心の外に君をおかまし

白き蝶

中村澤子

桃色の絹につゝみて願はくば永劫(とは)にのがさじ歡樂の春

相見ては君が家に咲く緋牡丹の色にをとらぬ頬のほてりよ

なまぬるう春の小雨は母ゐます桃咲く里に思ひはてびぬ

すれ／＼に白き胡蝶のもの思ふ我頬かすめておどろき去りぬ

紫の露置く谷にあけの衣白き衣きて百合姫の立つ

燕

梅月老史

姫君も膝崩し給ふかるたかな

草餅の臼に影しぬ春日傘

嫁の荷の來る聲かすむ廣野かな

雪とけて蕗の臺こそ立ちにけれ

乙鳥の來て覗きけり化粧室

羅漢

隅田れい子

歌がるた危機一髪の勝利かな、

沫雪や盥に浸けし足袋赤き
初夢を問ひつめらるゝ女かな
夢見おはす羅漢〳〵や日の永き
鳥鳴く山深うして螢かな
櫻散る正倉院の御物哉

留守居

天野白絲

針に凝る肩を休めて摘菜かな
花摘みて置きわすれけり花の上
鶯の來たことも云ふ留守居かな
花笠の破れや小さき春の風
むらさきの褪めし菫のわかれかな
彌生雲帆よりも白う沖を飛ぶ
のら猫の濡れて鳴くなり春の雨
淡雲も交りて降るや春の雨



讀書　青森　立花とも子

石垣

大竹はる子

蟻出て鬚掻く春の日和哉
この花をよくる堤や花菫
菜の花やせはしさうなる蟻二つ
しづ〳〵と夜ははなれゆく櫻かな
田螺啼ねたらぬ夜とはなりにけり
石垣の間々や草青む

松の根

栗山けふ子

線香の煙る墓場や落椿
盃に散る花うけてそしみけり

雪解けや蹄の跡に水溜る
すね太き男ゆきたる雪解かな
腰かけし松の古根にすみれかな

初雷

小見山春子

初雪や寢てゐる人をゆり起す
冬の夜や古猫化けし美少年
歌かるた一度は戀に破れけり
燒跡の十年を經たる榕かな
春雨や窓より捨てし獨活の苞
鍋洗ふ自炊男や水ぬるむ
鶯や茶を賣る家の中二階

冷

碓井呉竹

今日はどうも、氣分がわるい
朝から、變に思ふ。
腹の眞底から冷て
寒く〳〵ならぬ
そして何だか
胸が、つかえて
頭がソク〳〵する
そして
目まいがしそうである、
私は火鉢へ
炭を澤山ついて當つたが、
やはり寒い
この時、ふと「冷たさ」と「死」
と言ふ事が、心に浮んだ。

若布

木村花子

打よする波の若布や磯五丁
馬を練る花の廣野や春の風
戀歌も三年古りたる茶摘かな
行く春の月の曇りや沈丁花
花嫁の裝なりぬ鉢の梅
朝雨や最合傘して花を見る
散りかゝる花に振向く美人かな
花吹雪美くし眉のひそみけり

雲雀のうた

萩原やす子

（そのあした日は照り映えて、
軒の雪滴と落つる。）
人、車、ゆきかひ多き
街の角、深きぬかるみ、
行き惱み佇む耳に

ふとも聞く雲雀の歌を――
(かくて我が胸のよろこび――
みよ青き春の曠野を、
花の香を、霞のあやを、
耳かさば鄙路なまりの
野の小唄仄にもきかむ。
(白銀の軒の點滴、
絶え間なく雲雀は歌ふ。)
うらぶれて都大路に、
共になく、同じき運命、
野を慕ふ心とこゝろ――
さはあれどなほ悲しきは、
歌もなき我が身――さすらひ。
(籠の鳥ほがらに歌ひ、
日は裕にあたりを照らす)

火影

若葉

五月頃の暗い晩
窓から見ると
一つの火の影が動く
疎な木立を縫ふて
廣い野を、ゆる〳〵と
何處へか行く
何處の人か
わがたまは
しきりに逐ふ
その火影を――。

小手術

木村那賀子

お正月の頃から病むで居た、右の人さし指が今朝は非常に痛むので、思ひきつて醫師に診て貰はうと、手早く衣服を着替へて出る。途中新宅の叔父が病氣を訊づねる、襖を開けて「叔父さん如何です」と尋ねる「あゝ那賀か、今日は大分快い心持ちだ、一寸お茶を貰ふかな」「はい」とお茶を上げる「今日は何だい」「はい指が痛みますので醫師に診て頂かうと思ひまして」「其れあいかんな、出て了ふから早く行つて診て貰つて來い」と仰言つて下さる、「ぢやあ行つて參ります、又歸りに寄りますよ」叔父の家を出る。藤本さん(醫師の名)の玄關へ來て「ご免下さい」「はあ…」と代診の大島さんが出て來た「先生はご在宅ですか」「居りました、診察なら彼方らへ」。診察室の出入口受付けの所に侍つて居

る、暫らく過ぎると大島さんが來て「此方らへおいてなさい」誘はるゝまゝ診察室へ這入る一種藥の香がプーンと鼻を打つ。室の中央の卓上には藥瓶やいろ〳〵の手術用の機械が置かれてある、隅の方には金盥へ血のついた綿が小サク切つて入れてある、「之へおかけなさい」「はあ」と椅子へ腰を下ろす「何處が惡いのですな」「此指ですが」と痛い指を出して見せる「うむん」と大島さんは小首を傾ける「初めは何したんだね」と問ふ「針を通しましたので」「何日頃」「お正月の頃ですが其れ程痛みもしませんてしたので」「何れ」と再び手を取つて丁寧に指を見る「此れあウンでも居ないね爪が拔けるのだ、其爲に疵ゑさわるので痛むのだらう」どれと云ひ乍ら卓上の銀の鋏の如な物を取つて、痛い方の皮膚をグッとはさんで持ち上げて見る。痛いのなんのて話しにならない、あいッ、、と思はず顔をしかめる「あはゝゝ痛いかね」と私の顔を見て笑ふ「多少は堪へるさ」と云つて又はさむ、痛い、痛い、一生懸命目をふさいで堪へる、涙がボロ〳〵出る「泣いてるね」と大島さんは私の顔を見て「だつてあんまり痛いんてすもの」「仕樣のない弱蟲だな」とはなす、見ると爪のふちへグルリと血が染んて出て居る、其れを石炭酸付けた白い洒布てふき取つて「今少しだからね」と云つて又はさむ、今度は皮をよせてをいて其處に付いてゐる方の爪を切る、サクのかしらと思つて「サクのてしようか」て訊く「なあに、此まゝ洗つて藥でも付けて置いて見よう」と其れから石炭酸て疵を洗ふ、其處へ白い黄色がゝつた、チットリした藥を付ける、其上に白のチルをはる、それから油紙の如な物をかぶせて白の洒布て捲いて、指の脊て結むて呉れる、「さあ是て宜からう」手術が終へた、大島さんが手をはなす、「是限りて治りましようか」て訊くと「何うしたものだか、痛くなつたら又來るさ」と呑氣な事を云つて居る、先生にやつて頂いた時と違つて、何となく工合が變だ氣の故かしらと思ふ。大島さんはグタリと椅子へ腰をかける、兩手を懷ろへ入れて、ヂッと考へ込む、大島さんは若いお醫師樣、十七の年藥局生に住み、廿の今年代診に成つた、頗る沈着な勉强家、面長な顔、色の蒼白い、神經質らしい、一寸見ると平凡の如て平凡てない何日でもあごを衿の中へ入れて考へて居るのが此人の癖、、、、、

北の海岸

鈴木梅子

いつかお出なさい冬は冬でまた景色が可てすよ、と或人から再三云はれて居るので今日の天氣を幸に妹と低い下駄掛て出た、冬のほか〳〵した日が搔卷を通して背へ強くさす……顔がぽーつとほてつて蒸せる樣に暖い、こんなならば着て來なければ宜つた、と二人で同じ

事を繰返す。雪がキラ〳〵して‼知らず〳〵眼を細くするものだから前が見え無い樣になつて、時々道を外す、村端の急な坂を下るとすぐ右側は海へ深く突出して居るタヽキにした樣な平磴で廣い事たら疊をひいたなら何十疊しけるか知れない、こんな廣い家に青疊をズーッと引並べて自分一人暮して見たい、左側は何丈有ろう、かと云ふ程の巖で、平常は霧の樣な細かい水が何處となく滴つて、夏など下へ行くと雨の中に居る樣で有つた、あの眞直な水が、今は降ると冷い固いツルくした氷になつて居るのだもの、其固い氷が間々切れて、丁度水色縮緬を何反も上から一時にたらした樣て、たれた端の方は巖、まー！　絶景つ――と幾度も賞讃するより外なかつた、第一あの色……奧底からほんのり、と色をなして居る透明な、うす水色‼其も全體てなくて影になつた處だけなのだから一際目立。あゝあれとそつくりな紋付がほしい……どんなにいゝだろう……非常に私の氣に入つた、いや私から好むのだ。足元の滑るのも知らずに見入つて居ると、姉樣まだ見て居るの早く行かないと遲くなるは、突如寂寞を破つて私の耳を貫いた、其聲に驚いて振向と一町餘も前に妹が羣立つたまゝ此方をぢいつと見て居る、え今行くから前に歩いてお出、と云ひをきはしたがまだ去ろうと云ふ氣になれない。之を水彩畫に畫いたらどんなに宜いだろう私に出來たら喜んて畫くのだけれど……空には鼠色の雲が北の一隅に一團となつて、ともすれば靜かな青空を覆ふとてか幾つにも別れる。

母の前

今泉磯千島

母の前もろ手つかへて涙してはらからたちと聞し日思ふ

午後の日は花野にわれを立たしめて夢よと覺ます電車の響。

朝な夕な君居ます島見てしわれ今朝霞して見ぬがかなしき。

春雨はさびしく降れりわが門を美き少女子も來ぬとぞ思ふ。

得も言ぬ悲しき月の胸にみちてすゝり泣くかや朧ろに照れり。

砂路

村島きし子

悲慘なる運命の綱に繋がれて泣く人の子をわれとおもひぬ

止み難し止みがたしとはきはめゐぬ只鐵の隔はあれど

うなだれて砂路あゆみゆく跫音の天地ともに消えゆくおもひ

日暮れがた官舎の森の一室に電氣ともしてペン先取りぬ

君が身のわれに代る日漂泊を止めよ神とわれは祈りぬ

小指

酒匂とし子

あやまりて君が小指を切りし時あなおそろしとただなき伏しぬ

白菊とつたからとを白紙につゝみ封じぬ涙しながら

よはりたる美し鳥の口ばしにあつき息ふき水あたへたり

そのゝきぬ宵の明星ふと見けるせつなに君がひとみおもひて

十八の琴爪はむる君が室の寒き日かほる沈丁花かな

さまよひ

花子

起もせず夢にも入らずさまよへる我が黒髪は亂れ〳〵て春雨に暮なんとせる春の日よ人さま〳〵に思はするかな

かぎりなき胸の思よ君いかにふたゝびあはじ春の日かに

懐かしきおん君よりの玉章をくりかへし見る春の夜の月

あゝ我はふたゝび春の日をうけし迷ひまよへる君をすくはん

朝な夕な捨てしけはひの水すひて咲きそめにしか庭の白ばら

おもひ出の胸なる中に咲く花の匂ひをめでて泣きぬる我よ

花に吹く風より來る香をとめて若きをほこる心なるかや

郵便

八重子

郵便を開けば梅の香りかな

白梅に賽錢箱の古さかな

梅を挿す同窓會の幹事かな

先生は多病なりけり青き踏む

春寒う根岸の伯母を尋ねけり

婚禮の君に送りぬ櫻鯛

梅咲くや村に新聞發行所

行く春

行く春を女肥えたる恨みかな
君が袖わが袖の上に落花かな
春の月塔の廂に上りけり
さかしまに落る鳥あり春の空
女一人男二人の田植かな

根芹

小原あき子

二三寸根芹の芽出す泉かな
磯釣瓶汲む人なくて花の散る
京の子の摘む手の白き土筆かな
芥子の花花かたさうに蕾かな

稗田みつ子

撫子に糸引く蜘のさゝやかさ

深山や梅白うして星の戀



お針り　紀伊　稗田みつる

梅

露子

梅が香の海越えてゆく日なりけり
夕暮に細う見えけり青柳
若菜つむ娘姿や吉野路
廣き野の果に消えたる胡蝶かな
白き手を差しのべてつむ野芹かな

猫

静枝子

大川や片戀に泣く舟の猫

馬小屋に水のつきけり五月雨
夕立や箱根八里は暮れかゝる
凩や雁八丁を一吹きに

燕　勝又和子

つばくらや歌舞伎通りのひるの雨
新らしき傘のにほひや春の雨
春の雨身にしみ／＼とさく夜かな
さえずりや姉住む寺のひる静
五月雨晴れや社務所の庭の石疊

戀猫　蝶夢子

戀猫に障子の穴の太りけり
梅の香や衣桁に掛けし緋の袴
白桃や經よむ尼の年若し
菜の花のはては桃咲くわが家かな
青嵐島の一角よぎりけり

羽毛　紅雲女

美しき羽毛拾ひけり春の風
春雨や皆眠むさうな人ばかり

父と母はなれ／＼に畑を打つ
此の邊りお城の趾や畑打つ
四五月や雪に別るゝ陸奥のはて

花　川上めぐむ

花吹いて人美くしうなりにけり
よき里や家毎に桃の花の咲く
上包み洩るゝ新茶の匂ひ哉
鶯の雛すや笹の朝しづく
飯事の青物店やはゝこ草
名物のそば賣る家やいと櫻
春の雲暖かさうに浮びけり

あゝ少尉候補生　敏子

十五の春てした。
遠くの山々が大分黄昏て、よき香を込めた柔かな風がさら／＼と渡る頃てす、夕飯を了へて、私は妹と二人お緣に出て、垣根ごしに、本願寺の小坊さんが暮れの鐘を杵くのを見て居しました、お座敷ては、阿父様がまだお酒を少しづゝ召し上りながら、さも愉快さふにお母様と戰爭のお話をして被居しやいました、すると玄

聞て、急しそうに、號外　、と叫びながら一枚投け込んで行きました、すぐにお父樣につげて皆はじつと耳を澄して聞いて居ました。
一等戰鬪艦初瀨敵の機械水雷にかゝり旅順の沖にて沈沒云々、戰死將校の名前をずつとお讀みになる、少尉候補生澁江良次郎、(おや!)(え?)殆んど同時にお父樣と母樣と。私は無意識に號外を拾ひ上げて目をみ張つた、どうしやう、あゝどうしやう、何程見ても同じ字、けれどもしやと思ふて幾度かへくりかへした、が眼の迷ではなかつた。
從兄樣は艦と一しよに深い〳〵海の底に………。
從兄樣は遂々死んでしまいました。
無言の室は徒らに鐵瓶の沸るにまかせて、お父樣のお目は曇り、母樣のお目の涙、妹は鈴のやうな目をみ張つて居ます、私は自分と云ふ者を意識する事が出來なかつた、お父樣は冷えきつたお酒を、がぶり〳〵と召し上つて居被しやる。夜を大分更けました。
私は妹と二人室に退いて床に就きました。
(姉樣、澁河の兄樣が死なれたつて眞實う)妹は無心に燈火を見つめながら、私は、僞!と云ひたいけれど、私は只頷いて見せました、生れて十五年、はじめて、心からの悲しみを感じました。
生憎や、お父樣と母樣とのしめり勝なる昔語りが、しめやかに耳にひゞくのです。
私はそれから涙を知り初めました。
別れて幾年、恙もおはすなと祈つたに、お父樣はお國の爲めと從兄樣の死を祝福なさる、母樣は義務を果したのだと仰しやる、けれど私は辛うご座いました、悲しうご座いました。
それからは海を見るにつけ、艦を見るにつけ、その時の事が思ひ出されてなりません。

野に立ちて

井上澄子

今日も同じように病院の裏から南に曲つて田圃へ歩を運んだ。いつもよりか少し早いので、そう〳〵機械的に同じ道を歩くのも、あまり趣味がないから、凸凹の甚だしい道を西の方へ行つた。と細い川が、遙か北の名も知らぬ禿げた山の麓をめぐり、うねり〳〵と來て、妾の歩いてゐる道を橫ぎり、そして川の向ふにある大籔の果てから西に曲つて、やがて見えなくなつてゐる、鐵道は二條のステーションから一直線に來て、川を渡り、大籔をぬけて、いやそうにゆがんで花園の方へ行つてる。妾は其處まで來て、妙な感じがした。それはその邊りの有樣が、故郷の塚の本にそつくりなので。してみると、この西に墓があるかもしれんと思つて、そろ〳〵土橋を渡つて西へ行つた。けれども墓

はなくて、一面の田てある。同じように行列した畷には、麥が二三寸のびてゐて、あちらこちらに蠶豆が二葉を出してゐる。

どこからともなく、寂寞と飢餓とを訴へるような調子で、梟の聲が聞える。颯と一しきりの風、妾の頰を撫て、後ろの籔にあたつて笹の葉を弄んでゐる。

やがて四邊の靜けさは妾をして、そゞろによしなき過去のことを想ひ出さしめた。

あゝ、もはや一年の昔とはなつた、妹が逝つたのは。

想ふに、妾は唯一人の妹と倶に、日影うららかな春の日、蓮紫雲英の床に横たはつて、花に眠れる胡蝶の夢をおどろかしなどして、一週間のうさをはらし、夏は古い先祖の手植の松の枝から枝へハンモックを釣り、ハーモニカを吹きすさんで一日の暑さを忘れ、夜の長い秋の日は燈火の影で、面白く學び且つ遊んだ、木枯の吹き荒ぶ冬の夜は、炬燵の中で、祖母の昔し話しを聞いて寒さを忘れて、平和な夢路を辿つたのだ。

春光はいたる所駘蕩として、百花は咲きみれだ、萬象はみな喜びの色を浮べてゐる時であつた。學校では、最終の數學の試驗があるといふ日の朝、電報によつて妹の死を知つた、電報を手にした時には、夢ではないか、現ではないか、と思つたが、夢でも現でもなかつた、事實であつた。げに人の命は、朝葉末におく露の如く、夕の虹のそれのようなとは、知つてはゐたが、あまりのことて……。仕方なしに學校へは行つたが唯夢の中を辿つてゐるようて過ぎてしまつた。その日歸つてみると、あらなつかしや、お家流の母の字で、一通の手紙が來てゐた。妾はそれを手に握り、壁にかけてあつた妹の寫眞を顔にあて、そして、千代ちやんどうして死んだの？と言つた。しかし妹は答えなくてたゞ軒吹く風の音のみが高ふきこゑた。封書の中には妹の最後の筆がある。いつもなら割合によく書けるに、どうしたのか、しどろもどろて、しかも墨のつかぬ所さへあつた。アノ奥の六疊て悶えに悶えて書いた跡があり〱と偲ばれた……あゝ今ても。母からは、妹が死んだ有様が、こまごまと記してあつた。妾はその夜……忘れもせぬ、明治四十一年三月二十三日……一夜まんじりともしなかつた……

ピユウ〱ゴー〱なる響は突然妾の皷膜をうつた。駭いて大空をあふぐと、十三夜の月はのぼつて、宵の明星はぎら〱としてゐる、やはり梟は淋しく途絶え勝ちに鳴いてゐる。

俄か雨

丹後せき子

雷が耳も破れよとばかり西へ落ちた、ぽつり〱大つぼな雨がやつて來て間もなく、ざあと降つて來た、忽ち雨垂が勢よく落て庭はどろ〱になつた、縫を入れ

る音、干物を入れる音雨だ雨だと片付にガタ〳〵走る雇人の男一度にさわぐ、間もなく晴れた。

深　夜

ジーッと鳴る燈心の聲が何か歌ふかの樣に妙に心を引きつける、私はきつとそれを見据えた。隙間洩れる風がはだまで浸み透つて、更け行く夜は、只シン〳〵と靜かに、灯はすと消えた、まだ隣の年老夫婦がわらうつ音はやまぬ。

雨あがり

雨がカラリと晴れた、日がキラ〳〵照る、雨傘は庭一面に廣げられた、見る〳〵かわく、水蒸氣がゆら〳〵と立つ、紅い露、青い露、白い露キラ〳〵して居る、御隣のお神さんの聲で。
「よいお天氣になりましたねえ」いつの間にきたのか柴垣から、顏を出してゐた。

春の光

逝　く　雲

ゆら〳〵と陽炎立つ庭を眺め乍ら私は半身を暖き春の光に包まれて、緣の柱に倚りつゝ遠き未來を夢みました、人は常々未來に何等かの光明を見出てゝ、光に近寄う〳〵として、現在てふものを連續してゆくのではありますまいか、過去、現在、人名は皆此の異なつた歷史を持ちつゝ同じ（時）のみちを辿つて未來にはせて往くのでせう。ふと私は我過去を省み、暗く悲しき過去の歷史を心に繰り返しました、春だつた、此頃の樣に四方の山々に花の雲がたゞよふて居る長閑な春でした、激しく腦を犯されて、日頃の希望も目的も一時に抛つて了つた時、何に例へませう、身心の苦痛悔恨を、胸も頭も悟う何者にか掻亂される樣、堪へられぬ悲哀を覺えました、あゝ望みなき我半生よ。前途に橫たはる暗く淋しき未來は幽なる螢の火程の光明すらも認めませぬ。

光、光も夫れのみに憧れつゝ私は暗く寂しきかげに依つて「決して死でお呉れで無い」と云ふ母樣の其お言葉にからくも活きて居りました、元よりかたくなる性質として、心の秘密を知られまい〳〵と憂ひを隱して人前許りは華やかに微笑みましたが……窮すれば通ずるとか、去年の春私は眞の慰籍者を得ました、義兄、其れは教育者でございます、私は多大の教訓と同情とに依つて始めてほのかなる光に接し、朝の鏡に我頬の艶なる色を認めた時、什那に胸の波が高鳴りましたか——然雖、煩悶に過ぎた過去の暗き歷史は、我短き春を包て永久に逝つて了ひました、あゝ私は長き惡夢に襲はれて居たのでせう。

蒼海の如く澄み切つた南の空を眞綿の樣な白雲が、一片悠然と流れました、苔も石も草木も皆春の輝やかな光に照らされて生々として居ます、僅に咲き初めた櫻の梢からてせう床しい薫が洩れて來ます。

日課表

はしがき

此の日課表は本誌各寄稿家が記者の需に應じて、一々寄稿に添へられたものです、姓名(雅號、年齢を含む)住所、家庭(職業、父母同胞家族の現在)日課(其日の行事)の四項に就いて明記してあるのです、誌面の都合に依りて、本名又は住所を削つたのもあります、又全然日課表を削除したのもあります、皆本人の希望と事情とて然うしたのですから、讀者も諒察せらるゝことゝ存じます。

猶て排列の順序は作物の順序に從ひました、表中には姓名、住所、家庭、日課等の文字を省略しましたけれど、是は御覧になれば直ぐ分る筈です、　以上

記者識

長曾我部菊子　二十二歳

德島縣板野郡松島村(高地なる山村也)

父死去　弟妹五人　孔孟の敎によりて眞面目なる家風、職業は甘楮類栽培(元村長)

本日、(三月十一日)明日が父上の一まわりなので十時まで家内大掃除、午後二時まで縫物、其後はいろ／＼の雜務にしたがふ、人の出入繁くして、少し疲勞をおぼゆ、近來はひもとく暇なけれどもやがて時をえば、水沫集、唐詩選、平家物語をよむつもり。ねむりにつきしは午後十時也。

秋葉淸子　十八歳

大阪川口本田三番町(空を覆ふ煤煙、地に渦く紅塵、)

(私は女中)主人、奥樣、孃樣一人、外にお店の人大勢、皆よい方。

孃樣のお相手、島渡したお使、夜は勉强、

山村龍子　廿二歳

伊賀上野町

家は粉屋　父と母と今年十九の坊主刈りの弟と妾と四人限り

午前五時に起床、今日は妾が飯炊きの番、午迄に和歌を四首作つた、職場で粉だらけになつて仕事をしながら。午後は二首しか出來なかつた、父の面白い話を聞いて居つたから。夜、中央公論へ投書する和歌を書いて後新聲の短歌を讀む。

千とせ　十八歳

本郷區

父は官員　兄は學生

枕時計の六時に鳴いてつま戸を繰ると、又今日も花曇、父樣は御友人が亡くなられたので早朝からお出まし、兄樣は二三の友達と越ケ谷邊りの春の風情さぐりに、弟は不忍池畔の自轉車競走を見物に、後は母樣と私、藩日のさした庭に丸が寢ころんで居る、餘り靜で居睡りを催しそう、此の間に新作家の原稿でも害かう、夕方庭口のしまりを改め乍らふらりと外へ出つ、茲七日の月は朧、稍々盛過ぎた緋桃の花がなま暖かい風にゆさりと搖いだ、と思ふと私の袖に二片……眉に三片。

加藤ふで子　十九歳

本郷區千駄木町

父は十一の年に歿し、私は目下勤め人なる兄の

厄介人なり。

まだ昨夜の雨しと／＼降りつゞく朝の仕度掃除等をすませ、机に向ふ、折から空は晴れて、どうやらお天氣になつた様なり。午後英語の塾に行く、途上美しかりし不忍池畔池生院の桃の色薄くあせたるを見る。塾では何事もなし、歸宅夕餉をすますと、非常にねむい、血の道のせいだと母上から振出し薬をのまされた、兄上、十時歸宅、羊羹の御土産。更けて風あり明日の天氣もあぶなし。

潮りう子　十八歳

海を隔る牛里、日本海の濤聲嵐と交りて聞ゆ、風の絶間、辻占賣の聲悲し。

一家そろうて情の人

朝　電燈消えぬ間に起床、九時雲井六段をさらふ晝迄原稿を認め、午後寄護法講習會に行く、四時よりお針、夕厨に立つ。夜　小路に追分きゝつゝ筑紫のはてに文かく、臥床後燈火細くして人知れず徒然草をよむ。

秋草女　二十三歳

上野（前橋から十五里の山奥です）

家は農家　私も手傳致します

農家の女のつとめてす、水汲み、飯焚き、裁縫洗濯、毎日大した變化もないので今日、髮を洗ふ、暖い日。

常陸石岡町唐物商秋山伊輔長女欣子、雅號といふもの存せず十八のけふまで生れたまゝの名。

昨春三田の女學校をいでて今は家庭の内外務文部を兼ぬるいそがしき身、この文の生産地は帳場格子の中白磁の一輪ざしに、香る水仙の花に眼をやりながら。

昔は弓矢たばさんだ家柄、町家で暮すけふも襟の掛かつた着物きぬ家風、祖母本位の、文學趣味通有の、面白い家庭。

白菊　二十歳

麴町區

伯父の邸内に住む

午前琴の稽古にゆく、午後あちこち手紙を書く二時頃より三枝にリボン買ひにゆくマンドリンの襟止もとむ、夜縫ひかけの袷仕立あぐ。

みゆき　二十二歳

鹿兒島市から八里の山奥

良人と二人

午前六時起床、小女の走り使さへ使用致しませんから何やかやと今日も一日襷のかけ通して過ごしました、雨のふる日は洗濯がないけれどお天氣の日はほんとうにせわしうございます。

内藤松園　二十二歳

播磨

醫業

目下の家族は妹と兩親との四人にて誠に靜かてす。

お彼岸だから、早く起きて佛様をおまつり昨夜から母様の御命令、五時に眼が開いたから其の寢れずに辛棒して居た、佛様は平常の二倍てお茶碗が五十餘、勿體ないが早くお彼岸がすめばと思はれる、母様が臺所へ行つて入らつしやる間に私は父様の御飯のお仕度をする、玄關の方がお忙しいので、又しても、おかずが冷めて仕舞ふ、おあがりになつたのが到々十時、いつもこれて私は時間を無駄に取られて仕舞ふ、父様の御飯が濟むだので、やれ／＼と思つて弟のお袴を裁つて縫ひかけたら早お晝、おひる迄は實に短かい。

午後、夕飯後新聞を見る、別に變つた事もない夜、女子文壇への投書の書きさしをかく、もつと色々かきたいのは山々だが頃日來の不眠で頭が疑になつて幾許書かうと思つても茫つとして仕まふから思ひ切つて止しにする。

阿部秀子、雅號梅香。

越後國高田町、第十三師團の所在地にて、後には妙高山を初めとして高山連り前には日本海をひかえ、雪の深山降るを以て名あり。

父は官吏、家内は父母と自分と下女一人だけにて、いと平和に樂しき日を送り居れり。

日毎々々にきまれる日課とてはなけれど、裁縫手藝、習字、料理など、其日々々に應じてなし居れり。

友達の音信、每月來る諸雜誌を見るが、なによりの樂しみなり。

明治四十二年彌生月の末つかた、春雨しめやかにふる宵にしたゝむ。

宮崎和子　雅號K.M　二十歳

マニラ市パコ區シンガン町 P. O. Box. 911.

Manila.
見あり、家は花園、妾は花が大好
起床後花を摘む、午前十時より十一時まで西班
牙語の先生の許へ、花園への來客午前三人午後
入人、夜は夜學校へ、日中は大熱暑、夜は月清
し。

●●龍子　十八歲
大阪の街はづれ
夫、鍛父、兄、他に母姉妹、友染業、早朝姉と
妹と共力して御飯炊き家内の掃除、午後、家業
の手傳ひ、夜、僅かの間お仕事、寢に就く前、
歌三首宛つくる、發浮んだ想をおへだすのを例
としてゐる。

●蘭　十九歲
大阪市西區阿波座
叔父の家に來遊中
午後たけちやんをつれて寫眞やに行くこの子就
學の記念のためなり。
雪ちら〳〵ふる夕がた雪やみて入日美し。

●●●●●
石川きよ子　雅號一葦女　十九歲
土佐香美郡明治村
御兩親に鍛妹あり野の家
久しく病みて床住居の身
今日は雨なれど常になく少し快さまゝ無理に筆
とりぬ苦しきこと限りなし。

●●●●
水野谷子　二十一歲
下關市

一家は周防岩國にあり、現今兄の宅にて遊び居
り傍ら手傳す。
六時半起床。兄は例に依り七時半過ぎ銀行へ出
勤す、後、鍛姉と故郷の話しに耽り病床を慰む
甕めづらしく豆を煮る。
午後友に手紙を贈る。後暫らくして「天うつ浪」
と「新小說」を讀む靜かなれど冷たき日。

崎山富美子　雅號●●常夏　廿歲
根津の里上野に近く二階からは青葉にまじる櫻
も見られます、
夫と長女百合子、下女一人都合四人の樂しい家
庭です、夫は會社員で私は琴の先生、子供が產
れてからは忙しいのでほんの十二三人の稽古し
ます
七時百合子と一緒に起きて庭で新らしい空氣を
呼吸してから食事に移る
九時から五時までがお稽古、然し此間には子供
の世話も致率するし夕食の料理は夫の口に合ふ
やう私が手を下して働く、夜は洋服の塵を拂つ
たり仕立物のつもり物したり十時過ぎ眠る
音こそ無けれ軒の點滴、流石に春の雨なり

柳澤なみ子　號●●●沙かり　廿三歲
品川御殿山
夫と下女が二人
午前六時に起き夫の御出かけのしたく。それが
すむと先御茶に新聞、御出かけの後かたづけや
今日の下女たちの用を言ひつけてほどきものゝ
半分もすればをやもうドン
午後裁縫四時から晩のしたく

夜は夫と二人で讀書、談話明日の天氣は又怪し
さうだ

藤原不二子。雅號●●●泣黒子　二十二歲
越後中頸城郡寺野村
父亡、母健存　終日終夜奉養
午前　雨、午後　洗ひ張り

●●●●
むらさき　十七歲
石川縣金澤市（靜かで、すぐ前に臥龍山が見え
る）
父は六十二、私は年取つておられるのが何より
悲しい。家は醫者だけど父は嫌ひて鶏がすき。
甥が一人をるけど父と呼ぶ人がない。
朝はすぐ鶏小屋掃除に行き、私の持分の鶏に餌
をやる漢文を習ふ。午後英語を復習し赤坊の杏
足袋を編む。夕方勝手の手傳し庭へ出て、黄色
の雲を見て「たそがれ」を歌ふ。夜、雜誌をよむ
月が寒そうで、窓の下の海が時々よい香を送る

●●●
細谷鏡子　十八歲
日暮里
午前中は琴の先生御出になり御教授をうく午後
音樂會へ行く夜明治詩集を繙く

●●●●●
月沖百合枝、　十七歲
下總佐原本宿
母なし父は故あつて遠國にありて、現在は叔父の
家に身を寄せてあり、
午前弟妹等の世話をす、
午前は針仕事、午後久しぶりにてお琴を弾ぶ、

琴爪…あゝこれぞなき母君のかたみなる。追想の細道夢のやうにたどりては幼き日母上ありし日を思ふ。夜チエホフ傑作集を讀む、

杉山とし子　雅號春翠　二十歳
兵庫西宮內町
父母あり兄弟なし、家は無職
午前は家事を手傳ふ、午後は琴の稽古、夜は、電燈の下にて和歌俳句の書籍を見る、外には弦月形の春の月照る十時半就床。

桑本きさ子　十八歳
伯耆國東伯郡上郷村
家は農業、兼製生糸業、(但し雇人によつて耕作はし父は製糸會社の管理をなす)
お轉婆な妹あり十一歳小學校に通學す、腕白な弟、十五歳　中學校に在學中、祖父一人あり
俳句に耽り古器物を弄ぶ
朝飯後妹のせがみによつて、室內で羽つきをして遊ぶ、母や下女は子供だと笑ふ、いつにない寒い日とても散歩は駄目　炬燵にて編物す、午後は投書を認む、私のは一夜づくりだから選者はきつとお笑ひ遊ばすであらう、すぐ郵便で出す、夜は父もみんな歸つて集まつておもしろいをかしい話をなす、寢室に行てから「ツルゲーネフ短篇集」をよむ、屋敷中の雜木林がざわ〳〵となる、

柚木とよ　雅號　白菊　十九歳
神奈川縣高座郡相原村
家は荒物商

黴雨にして蒸熱し後曇る嫂様御身重なれば此頃は變りて毎日店番する今日は小學校の證書授與式なれば子供の足袋を買ひに來るもの夥し　午後も店番、夜に入りて兄と賣揚を調べ雜誌を讀みつゝ同じく店番

佐藤涙子　十七歳
越後
養父母、無職業　妾は小學校卒業　後は家業を手傳ひ日々平凡に暮す。
妾はおそうじ、母はお飯の仕度、後裏の小川へ洗物に行く、冷いけれどサラ〳〵と流れて心地がよい何とはなしに春めいて、周圍て子供がタコを揚げてる、お裏から新作家の投書を書く、女子文壇四月號來る、お天氣は好いけれど風が障子をガタ〳〵やつて居る、可愛金鶯が頻りと鳴く晩には慈善演藝會へ行くつもり。

西村ふみ　二十一歳
米領マニラ市アリキス
獨身　仕立物をする
朝六時起床　室を掃いて　茶を喫すお誂の浴衣を縫ふ、來客二人ある
午後、二時間程休して又針を取る、夜、昨夜書き殘した女子文壇の原稿を書き上げる、

平塚いと。雅號、白百合　二十歳。
牛込左內坂町
夫は、官吏、二人の手鍋世帶。
食事の用意、七時に夫は出勤する、後かたづけを終はると九時、仙臺の兩親へ手紙をかく、月給を取つたので小使金を送る爲め。四時まで裁縫、夜、ふと短文を考へついたので夏の眞ひる時をかく。七時頃來客があつて外出する、四日ばかりの細い月が雲に追はれて凄かつた、戸をとざす時軒先の紅梅が散り間際の香を高く放つてゐた。

川霧子　廿歳
遠江國
石油舗
すぐ新聞をよむ、九時頃から午後の四時まで裁縫塾へ、夜女子文壇の四月號と新譯の伊勢物語とをよむ今日は朝から粉のやうな雨がふつて居る過がの名物カラッ風も此頃は勢がない。

松田まさ　二十歳
山城相樂郡菅井村
家は農家、
妾としての洒掃、裁縫、夫に代りて姑につかふ。

向井光子　十七歳
京都府綴喜郡田原村
父は大の變屈家なり
起床家內の掃除、終日裁縫、就床前に新聞を讀みて笑はる、

三留なみ　十九歳
新潟縣東蒲原郡東川村
山中なれども沼、川、瀑布に富み風景頗る佳、
家は農、家族十人
午前は裁縫自習、妹の袴の破れを繕ふ、午後は

弟と共に後山に若菜を摘む、夜、妹と共に眞田を編む、十一時床に就く　外には小雨降る

今西はるゑ　十八歳
大阪東區高麗橋詰町
菓子商、母無し、兄二人、妹一人、弟二人、下女三人、雇人八人
午前は縫物屋に通ふ、午後は英語教師の許に行きて英語を學ぶ、日曜日には琴の師匠の宅に行きて稽古す、平日文學書類を繙く、午後九時就寢

鈴木ふさ　十七歳
大阪南區安堂寺町
父は目下大連　母は他家に仕ふ　耳しいの祖父とおばの世話になつてます
午後五時半まで九條なる叔母の家にて裁縫を習ふ夜机に向ひしかど何をもなさず月明かなる夜なり

三ヶ島よし
東京府西多摩郡小宮村
去年より叔母の家に寄留す洗物を畢る
雷のあまだれが落ちきろのを待つて張物し午後は風呂湯を汲みて沸かし夜に入りて机に向ひ日誌の中の和歌を書きぬきて六臙にも投書せんと思ひ寒さ強けれども之をかく六日月が庭に光りを投げてゐる

しほれ草　十八歳
秋田縣

纐山桑
午前中は裁縫午後は刺繍の稽古夜は燈火の下に女子文壇を見る、（曇り）

三浦ふみゑ　十八歳
羽後院内村
日うらく、小鳥の聲長閑なり、卒業生一同の寫眞撮、兄上東京へ行く、朝「春」をよむ、

西戸政江、
大阪島の內、半町程て心齋橋へ出られますが極閑靜な處てす、
お父さまは京都に、大兄さまは師團に小兄さまは高等工業に妾は女學校へ通學中、
兄さまが八釜しく仰しやるので冷水摩擦だけは必ずやりますわ、けれど冬だけはお母樣の仲裁て中止です、

羽衣　十六歳
渡島國函館區（宅は後は臥牛山前は函館灣にて眺望よし）
午前六時半に起床、朝一時間復習八時登校、歸りて毎日三時間復習、外國に手紙三本出す。夜大日本歷史下卷一一八七頁もあるので每夜一章づゝ讀む。

新村もと子
神田區佐柄木町
兄官吏、父母は鄕里に在住

義姉上のお手未だ捗々しからぬに、かてゝ雇ひ入れし人までが、腹痛とて歸宅なしたれば、あとの炊事萬端悉く我肩にふり懸れり。とりわけても子供二人の世話には、肩張るまでに覺えつ
望みて學問の遂げられざるさへあるに、又此辛き境遇、何たる幸薄き身ぞと、そゞろ額の熱さを覺えぬ朝よりの曇り遂に霽れず、見上ぐる灰暗き大空には、星影一つまたゝかずして、あすの天氣も心元なし。
用事も終へつれば、十一時すぎ、疲れし身を橫たへぬ。

しらはぎ　十九歳
京橋區
家庭なし
室をかたづけ朝食を終へてより新聞を讀み、九時より淺草七軒町第一高等女學校に卒業生の謝恩會あるにより行く午後七時歸宅心地惡しき爲床に入る

小田切鍋子　十九歳
橫濱市南太田町
父は書記母は色の黑い人私は養女
朝四時から六時まで讀書六時から八時まで炊事八時から五時までは私一人其間だはお針したり使に行つたりします

かへて　十八歲
大阪府百濟村
母一人兄三人妹一人
今日は風多き日なり例日の如く散步もなさて机

によりて紙のはしくヽ黒うせし後思ひおきたるやうに新作家への投書をかくかきての後何やらむ心臆して我ながらはづかし午後は用なきまヽ炬燵の許にうづくまりこし方ゆくすゑなど思ひてつくくヽ病む身のはかなさを思ふ

●●秋子　十七歳
信野北佐久郡小もろ町
家は料理店但し妾は大嫌ひ。
長兄は海軍、次兄は陸軍
朝六時に起きて六時四十分の下りにて上田高女に通學す、歸りは四時若、一時間琴のおけいこお母のお茶がお豆て大へん好しい。
明日より試驗なり、歷史と國語、兩方共見ず豫備試驗に見て泣きしにより。夜新作家の原稿をかくために三時間費す。藥(胃)をのむのを忘れてれてから氣がつく。

津田たき子　雅號汐汀●●
若狹國小濱町
父母と妾と下女の四人、家は百姓その日くヽ仕事も何も一定せず
月の中は必ず女子文壇、中學文壇、中學世界、文藝世界に和歌、俳句を投稿す

●●江森美、雅號、秋水　十八歳
麻布霞町、
家庭、厳格な父君に優しき母上、其れにわんぱくな私皆様はよく一人子て幸福だなんて被仰るけれど淋しいは、今日の様な雨の日は、記者様や誌友の方に遊びに來て戴きたい事よ、

男しい喇叭の音と共に起床して午前中は心靜に清きうぐひすの調など聞つ學に勵み午後より夕暮までは自由
夜は好める詩集などにふけりて、三聯隊の靜に閑を流るヽ、喇叭と共に、甘き夢を結び初むる

●●●くちなし(至つて訥辯なれば)　二十歳
京都市のまん中
父母健在、姉妹あり、家は呉服商
曇天なり、朝昨日縫ひ上げし人形の着物に模様なかく、姉羨ましがる、ひるすぎ裁縫もいやになり女子文壇の投稿思ひ出して書く、母曰く「針仕事にくらい日も字かくには差し支へないと見える」思ひかへして針とれど心うわのそらにて落ちつかず、暮るヽを待つ、夜燈の下にて書く、讀みたし書きたし時は疾くすぎて十二時に垂んとす

越智ますみ　雅號野の花●●●
石狩國中富良野
今は親戚の家に假居
裁縫又は讀書夜は新聞を見る、
今日は彼岸の入りの日といふに雪降りしきりて寒さ厳し

●●●●●上土井定子　二十一歳
布哇オアフ島ワイパフ本願寺附屬小學校内
校長兼布教係大江開教使外に教師二名妾は助教
朝は薄暗いうちに起床して星影うつる眞清水にて洗面し柘榴の實の齒を嚙み出してゐる庭を掃ひて本堂の掃除をなし花を更へお燈明を上げお詣りをすましてから炊事役コーヒーをたててパンを焼いて朝食の準備が出來る頃先生方は起きられる二人の先生は食事を終りて朝授業に教室へ行かれると妾は食堂を片付けて白人學校へ登校す午後二時夕食の支度にかヽる六時半一同食堂に集つて洋食に舌鼓を鳴す七時よりミセスローセーの許にミシンの稽古に行く八時半歸つて翌の復習と翌日の教案を綴る外には太平洋より吹き來る風のいと強くキヤベに觸れて其の枝のウインドーの硝子を撫てる
西暦一千九百〇九年三月五日

石原勝子　雅號小百合●●●　十七歳
但馬朝來郡竹田村
父、母、兄、姉、妹、私と六人
冷水浴を行ふ、午前は裁縫の稽古、午後家事の手傳ひ、夜讀書(雑誌にては女子文壇、女學世界、ホトトギス、)(文學書にては俳句書雪月花深山櫻、其他新體詩集、等いろくヽ中にも寫生文好讀す)
櫻の名所の朝來山には三日あとの淡雪が殘つて居る。外には霰まじりの小雨降る。

●●●木村綾野　十七歳
金色夜叉に名高い、伊豆熱海の一隅に、山海を友に閑日月を送る。(本宅東京府下)今日は雨、波は高く山はボーとかすむ、涙誘ふ日。
職なし、父と下べは都に、母と姉と私は熱海朝牧場の笛に起されて、海岸を辿り、朝仕舞すみて、バイオリンをひく、温泉浴して、さき子様へ返書送り、よし子様へ先日の音樂帳のお禮と長い手紙をかいた。小學校の生徒成績表を持つ

て歸るのをみてつい涙が出た。午後母樣のお伴して醫者へゆき、樓が岡より横磯へ出て、田圃て蓮華を一包土産を一包にしてかへる、今年は嗣におそい、歸つて姉樣と和田の方へ運動す、道て婆さんが重箱さげて寺の方から歸るのに幾度もあつた、川向の二階やから萩餅七つ頂く、暮方窓の側夕燒雲をみつゝ大阪のおば樣と父樣の許へ手紙だす、夜母樣と橋際のおばさまの家へ行き焚火に身をあたゝめて歸り床につく、二三日前てきた源氏節芝居へ行く人の足音絶間なし。（以上三月廿二日）

●●●
辻芳子　十八歳
滋賀彦根町
琵琶の湖へ五町山へ七八町景色よき所
父あり（十三歳の春母は死亡）無職　男女兄弟七人（四人大阪、一人丹波、一人東京）
妾工業家へ嫁入したし
家にて父につかふ。俳句、和歌好き。
午前中家庭の用事す、午後自身の好きな原稿を書く、友人間にて少友の會を開き居ります。
本誌にて鳴雪さん好き、昔の小説を讀みます、得意俳句、

●●
順子　二十一歳
大阪西區
父は漢詩人なり、我幼きより漢詩を父より授くるを何より樂となし居りき
起床、窓をあけ深呼吸をなす、八時學校へ出勤愛らしき生徒に學科を授く、四時歸宅夜は梅かをる机により（詩集）夢の夢をよむ、おぼろの月は窓に影しぬ

●●●
時雨子　二十歳
長野縣諏訪郡中洲村
兩親と良人私と四人　農
父上彼岸菜の種おろしに畑へ、私もあと追ふて行く、野は春であるが家の中は寒い母上は家の中て寒さにかこたれてゐる
良人は例日の通り學校へ行かれる。後は裁縫、夜萬朝報、報知、信毎、南信、日日を見るどうしても私は萬朝が一ばんいゝと思ふ
風なく靜な夜月は七日頃かすんてゐる

●●●●●
渡邊登喜子　十七歳
横須賀市
父、妹、
夜は八時頃花江樣が御見へになりました、來る四月三日に催す運動會を打合せの爲に。軒では春雨が絶えず風に煽られて雨戸を叩いて居ります、

●●
端枝　廿一歳
横濱市
職業なし、但し月末になれば支配人來りて、地代家賃等の揚高を納めて行く、父母存命、弟は中學の一年生。
午前居間の掃除をすませてお花の稽古に行く、山櫻を活ける、歸りにお琴へ廻る、午後は母の傍て裁縫、夜、新聞を見たり、雜誌を讀んだり。

岩田ふさ　雅號文●●窓（十二歳の時つけしなり）　廿歳
埼玉縣比企郡小川町。（山四方を圍みし小町なり）
名産は紙、鹽せん、素麵、皆太陽の手傳ふ仕事のみなれば、今日の如き小雨にては、困る家多し
庶業、兄弟四人各々大、中、小、學に在學す、
朝八時に弟を出し。辨當を持つて、裁縫の師の許に行く。五時歸宅すれば女子文壇社より新年號、短文天賞の賞お送り下さる、美しきハンカチーフ、皆は「それはかりつき出して歩きたいれ」とひやかす。御禮狀書く、米國より歸國せし叔父への手紙も。後大好の讃書す
殿よと再三云はれ、日記、小遣つけて休む

●●●
夢野蘭子　二十一歳
陸奥名久井岳の麓
母は三年前死亡、妹一人あり。呉服商にして、妾は小學校に通ふ。
朝飯の仕度して登校、四時頃歸宅して家事を處辨す。夜は讀書と裁縫とが相半ばす。音樂が大好なり。

●●●
小西愛子　十六歳
近江大津市
株式仲買業
當市高等女學校へ通學二時半歸宅　勉強は大嫌ひ
夜家族集りて順番に其日の出來事を話す　九時床に就く

●●●●●
緒野やすの　二十二歳
甲斐東山梨郡松里村山と山との間

祖母と父母と妹二人、農家、私は學校
自分乍らよく早く起きたと思ふ、家のお掃除な
自分の受持丈けする、
學校へ八時半出勤學年末の調査て一日中忙しかつた、雨が降つて來たので學校の傘を借りて歸る、
夜は炬燵で四方八方の話をする、後で日課の串譯計りに机に向ひ友達からきのふ拜借した深氏物語を繙く、
暑いも寒いも彼岸迄といふ事が有がけふはもう彼岸の三日目てはないかそれを此寒さは何の事だらう外てパチリ〱と木の葉を打つのは雨ては無いらしい微かしら。

●●●● 中窗よしみ　十九歳

奈良縣吉野郡賀名生村、南朝三帝の行在所から一里餘りの山奥て、和歌山縣まて僅に三四町、
一昨日の雪は未だ全く消えやらぬ。
幼い頃兩親に死別れ兄樣とたゞ二人のさびしい生活、兄樣は父の遺業の林業を勵んて居られる。
朝白梅の匂ふ窓に倚つて和歌の創作を試みる僅に二首を得たるのみ、午前九時兄樣と一しよに山林の雪の被害を見廻るため辨當持にて家を出て夕方歸る、夜つかれを辛棒して新作家の原稿をかく、大變に寒い夜てある。

●● 雁子　二十歳

水戸市
糸繭商、父母、祖母、叔父、妹五人、弟一人
勝手てバケツの音や、お店て戸を開ける音が聞える、起きやうかと頭を上げると、何處からともなく風がスーツと入る、又夜具を被る、中々起られぬ、茶の間の時計が七時を打つ豐いて床を出る、夕から降り通した雪が三寸位積つた、
女中を相手にカステーラを燒く、
午後お琴のおけい古をする、夜二三種の雜誌を見る、冒險世界の押川先生の小說はいつても面白く讀む、

●●●● 稗貫みつ子　十六歳

臺灣臺北艋舺江瀨街、天候=雨靜かに降れども風甚しく頭れ脊したき心地す、
父、祖母、母、妹花枝（尋常小學校五學年）、私（臺北高等女學校二學年）
七時二十分登校此の三月卒業せらるる方々の送別會をなす、
午後三時歸宅、和歌宿題を作りて後算術數題をおく、夜妹と共に三學期試驗の答案ども父上に見厭きて安心して悠々見んと女子文壇開きて始めて「新作家」の事に心づきそれよりこう作りて消書しぬ、十二時五分過ぎ床につく明日呆然とし或は居眠り笲して父母の心配な〜給ふみ言葉にいかにか答へん、外には嵐吹き荒れて物凄し、

●●●● やまさと　十七歳

福井縣
祖母、父、母、弟一人妹二人農業
毎日近所の娘と共に母に裁縫、琴、花（池の坊）茶（千家流）を習ふ、又時々家事の手傳をなす、夜は學問をなし、十時より早く寢たる事なし、

●● 二葉　二十二歳

阿波、（波の音峯の松風耳にちかし風致美）
兄夫婦に其子供三人それに夫と私、夫は上京中
花瓶にて水仙を切り佛壇にそなへる、髮結びて裁縫、夕早く夫の羽織が仕上りければ友のもとに手紙書く、それより下女と煮物などなし、夜は雜誌讀みつゝ和歌など作る

●●●● 篠田とみ子　二十二歳

岐阜市
家は質屋、
午前八時半朝食、あめ樣へ端書一本法律せめの斷りにお上手を云ふ東京の母上へ留守中の事かいて是れも端書かな樣へ初めてのご挨拶お返事是も葉書いつもなら是れから菅原先生へお琴の稽古に行くんだが今日は母校へ同窓會の打合せにへぽ幹事大多忙、新聞も雜誌も讀まれず、家事の手助は勿論、八の日だけど松久先生へお茶の稽古にも行かれずつかれたし雨がふるて、打ちやりにしてあつた大忙がし新作家原稿を今夜一晩にかいて封しとく早や一時過ぎた、けど眼はさへて居る。
まだ一つ今朝日曜て郵便爲替がとれぬといふて困つてた人があつたて六七圓とりかへてやつた姉樣に云ふと叱られるから内密だ

●●●●● 佐藤ゑん子　十九歳

淺草區馬道町
家は櫛商、姉妹なし、
九時半頃裁縫の師の許に行く、正午歸宅、晝食後小說「生」を讀む、烟附近を約一時間散歩す、

雪は漸くやみて風激し。

●●●味方こう　二十一歳
四谷片町
父なし、母弟妹あれども、故郷新潟在住故に獨居して、職業は、日給取りのお耻かしい身分、朝食七時區役所へ出勤、歸宅後は例により、雑誌や、評釋杯の雑讀、頭がフラ／＼する、只今可成大きい地震あり、

●●●三浦とみ　二十歳
羽後由利郡院内村
少しくもろ、午後、あやさん、つろさんと三句吟
春雨や君をおくりて猶泣

●●靜代　十九歳
日本橋區
家は病院、兄弟なし、
午前、丸の内に散歩にゆく午前中は勉强、午後あや子様と百花園に梅見に行き夕方歸宅各患者の室を慰問す、夜後子様に手紙かく、靜かなる晩なり

●●●●鈴木靜江　十九歳
北海道西島牧村大字原歌村
家業は醫師
朝は掃き掃除と拭掃除が私の役目、午前は學校時代に習つた事を復習し其間に造花を致しますの、午後は裁縫或は刺繍を為し二三名の人に點茶の相談をして上げる
夜は文壇を見もし原稿を書き等して十時頃眠につく外はまだ北海の地とて時くやうな雪はしきりて有ります

●●●●齋藤れい
北海道石狩（故郷は北の果海邊です）
菓子製造業　父も母もあり兄弟五人其他の人五人居ります
登校前は割り當てられた仕事や時には豫習か復習などをし今は八時半に登校二時半に歸舍六七時まで或は復習し或は雑誌などを見それより九時半から十時近くまで復習するのが普通であります

●●紫水　二十二歳
播磨國の山中
父母兄姉あり
朝、同宿の芳子様と掃除及炊事をなす身のまはりを整へて小學校に出勤す
午後四時半歸宅掃除炊事をなす
夜燈下に家事教本を讀む春の夜は美しく晴れてゐる

●●●●手島まさ子
廣島縣
父は七年前死去したのである現今の家族と云つては母と兄きり、兄は三等郵便局長である、
朝はもう局の方の人々が出入するので朝寢などはてきない、午前八時より裁縫所に行く直に編物を練習するのである中食後遊戯又は散歩を試む歸宅後作文を添削す、夜、造花案内書を繙く九時寢につく。

●●從舟　十七歳
家は兵庫縣赤穂、私は明石に居る
父、祖母、母、弟妹三人あり
職業は穀類及洋酒等
寒き風窓より流れ入る。午前八時登校午後四時歸舍、電氣燈の下にて今日の事ども復習す、外には春雨しと／＼と窓を打つ　和歌二三首認む
けたゝましき鈴の音に冷き床にもぐり込む

●●●●●秋月すゞ子　十八歳
長岡市
父なし無職但私は通信手
夜勤て朝八時歸宅午前は母の手傳をして漬物桶一つ洗ふ親類まで用事あつて二時間かゝつた現業衣を洗ろふ午後は習字をやつたり古るい雑誌を出して見る正四時三十分出勤天候上

伊澤英子　雅號ひつじぐさ●●●●●　十九歳
岐阜市
叔母、從妹、自分、女中、
朝叔母の看病のひま／＼に「文章世界」「窓」を讀む
午後漸く脱稿せし「小説」と「美文」を新作家に投ず　東京の母へ叔母の病症を報ず　夜は從妹の學課を復習しやる　雨しと／＼と訪づれて戀こひしく母こひしく淚落つ

●●●伊達まつ　十八歳
山形縣西村山郡左澤町
父、死亡、母あり兄一人あり文學を好む、家は商業但し私商業大嫌ひ

顔だけ冷水浴をやる朝から晩まで縫針のケイコ夜燈下に歌集を讀む歌を書く歌を作つては、兄に笑はれる、そんな歌が何處にあるつて、私は、歌より他に讀む氣にならない作る氣にもなれない

毎日右とほとんど變りない

●●
落葉　十七歳

神戸市兵庫（現今明石）

父、會社員、母有り　兄姉あり　弟も妹もあり（但し毎日家に在るのは母のみ）

鈴の音に起されて　暖い床をはなれた。「お早うございます」と室の者が挨拶を終ると大掃除にとりかゝつた机を室の前の廊下にかき出す、がらくゝ窓をあける早やぽんゝゝ疊をたゝき出すといふ風で思つたよりも早く室は美しくなつた大急ぎで髮をいひ顔を洗つて冷水摩擦、理髪室も洗面所もいつになくよくつかへてゐる

朝食後は外出ぽかゝゝと暖い日がてつてなんともいへぬ心地がよい、九時前に歸舍した、九時から深呼吸ひきつゞいて講堂訓話十時半には室にかへつて一人で雜誌をよむ

外出して買つて來た絵葉書を弟に送る樣にした夕食後一寸三十分ほど散歩、手が痛くてテニスも出來ぬ

六時から又夜の自習今日は地理のしらべて二時をすごした、八時から食堂で集會、集會がすむと床をとつて電氣燈が消えるのと同時に床へ入る、話をする人もないから、いろゝゝな事を考へた、枕元のカーテンには美しい月の光がうつつてゐる、舍監先生はまだお廻りなさらない

●●●
うもれ木　二十二歳

熊本縣玉名郡横島村

父母健在幼弟妹三人父と共に小學校に辨當さげて通ふ、

晝間は幼き天使の顔を見て暮す、夜は日記を書きて馬太傳五章六章哥林多前書十三章を必ず讀み、生徒に算術國語等を敎ふ、今日は机上の桃花に、樹類と片假名で花瓣一つに一つ宛書いて、先日習つた十字科の應用がうまく出來た樣な顔して、生徒が得意滿面。思はずほゝ笑んだ柔かな春日が南椽にさしてゐる。

●●●
林定子、雅號、露志路　二十歳

滋賀縣甲賀郡貴生川村

父、母、弟、家は醫士

八時出校す山々の雪は消へ吹く風もいと暖し、大阪の久保姉より御手紙來るいつもながらの御情あつき御言葉の兄弟少なき我には誠の姉とも慕はれて四時學校より歸りて御返し認めて後白梅の匂身にしむ破窓の下にて此文を作る

地は近江線の起點關西の通行驛にて我家の前を關西が東を近江線が通ふ四面皆田にて菜種の花盛りいと美し產物は米、茶、干瓢、等なり。

●●●
中西繁　十八歳

芝公園

父は亡　無職業

午前七時起床佛様を拜す後白鳩に豆をやり學校へ行く商業學校なり今日はコルレスポンデンスの英譯で頭が痛し。午後、お朋友幸田みどりの訃音に接す。高木さん來り文學を談ず私は短歌が大得意だと言ひましたら貴方の短歌狂を友人で知らないものはありませんわと仰せらる。夜短歌集朝きよめ、明暗、夢の華を讀む。

小雨庭の緋桃を散らす。

●●●●●
荒木さだえ子　十八歳

神田南甲賀町

父は會社員母は裁縫、

今は試驗休み、午前中洗濯してからお琴の稽古に行く、お盥からぬいさしの絹入を手にしたが倦きて机にもたれてゐる、紅椿が一輪ほろゝゝ散りさう私の顔に落ちておいて、そばに猫が鼻をうづめて眠つてゐるけふは朝からどんより曇つた、これがきつと花曇りなんだらう、いま買つてきた女子文壇これは、晩に……。

●●●
八田文子　十九歳

山城

父、母、兄妹一人づゝ家は製油と米と柴、

家事を手傳ひ髮の亂れをつくろひ、七時家を出て學校に向ふ十五分の休時間に子供と愉快に遊ぶ鬼ごと午後四時一里の道を歸る校務終つてから午後五時夕餉の支度をする母は風呂たき、夜子供に破られた袴を縫ふ、別に用がありませんから四方山の話をきく、風呂入の客十二人、皆樣の古着を風呂につけてねる十一時犬のなき聲きこえる二三疋ゐるらしい。明日からは證書をかく日である

●●●●
近野春子　十七歳

熊本市の中央にして縣廳所在地の附近なりと云

へば此上もなく聞ゆれども、たゞ一圓の貧民窟にて、目に見ゆるは、瘦せさらばいたる菜色の老幼の、口汚くのゝしる姿、耳に入るは、苦に惱み生に勞れしあはれの聲。殊に、本日の如き、ふりみふらずみの春雨日には、あたり景色殺風景を極め、胸惡きばかりの汚れ、狹き路を流れ行きて、心地いかにもあしけれども、また釀つて炊ぎの煙さへ立ち兼ぬる家もあらんと思へばさても淚ぐまるゝ。

父、母姉は一人福岡に嫁ぎ弟は新高等小學二年也

午前水仕事にかゝり父と弟とを出て立たせ、晝間は母と針仕事、疲るれば雜誌などに目を通す學校は高等小學校卒業後、家事のみにたづさわる。午後十時頃就床。

芳翠　十九歲
長野縣北佐久郡志賀村

山國の信濃の中でも殊に山多き佐久私の村等は四方山に圍まれて丁度すり鉢の底の樣てす水の少ないのが私の村の特色又は田植が出來ない〳〵て每年御百姓がなきます

農作男一人家ては畑を少し作るのみ父は現在村役場に出勤妹弟は中學と女學校に參ります。

今日は御彼岸の明け日午前中母樣に御手傳してほとけ樣にそなへる御餡をこしらへる午後墓參ぬるき風はゝを打つて心地わるい午後三時河村樣より手紙頂くいつに變らぬひようきんの方夜は返事認め雜誌にふける

鈴木武子、妹　佐知子　十九歲

静岡市馬場町、昨年六月西草深町より移轉せしものなるが家狹く、庭なく從つて植木無し外は車の響、人の足音繁く病身なる私には最も不適當。然し裏は兵營(三十四聯隊)に臨み廻ぐれる松の間より富士山を眺める等ことの外好景色なり。

活版印刷業、父、母、私と妹ます子とは醫者通ひが朝の務め、それよりは服藥の時間のみ違えず氣の向きたる事に手を出し最早遊び飽きたる位女子文壇見るが唯一の樂しみ妹は畫をかくが樂しみ弟は十歲尋常三年甲を頂だくのが大自慢次の弟は六歲母を困らせるが一日の仕事小僧二人下女一人何れも忠實

加藤菊子　二十歲
兵庫縣淡路三原郡賀集村

南北二方は濱へ一里、西方は半里隔てて又海、東は四里置いて海、其割合に魚は少ない他へ積出すが故なり

商業官設賣元賣捌母は私の產後に此世を去られ再び後の母も三人の妹を遺いて逝き給ひ、家は今、父と嫂との世となり、私は病の爲めに療養ばかりして居る

朝飯前に郊外散步す、午前好きな活花猫柳に水仙の根〆を用ひて活けたり午后、今日は亡き母の命日にて櫻の一枝を提げて奧都城に詣でぬ夜は六疊の間、ランプの下にて女斗り集ひ思ひ〳〵の雜誌繙く

三栖鏡江　十六歲
紀伊西牟婁郡鮎川村
家は農業

午前深呼吸を行ふ八時より登校す、午後北島樣の宅へ遊びに行く、來る日曜に摘草に行く事を約束す、夜北海道の叔父樣へ手紙を內より頼まれて書く、八時半より復習する、十時就床、

田中とき　二十歲
大阪市北區

父、母、及び五人の兄弟外に雇人二人

今日は日曜だから朝から賑ぎ朝の務を終へてから皆て綱の綱引をしたが妹と弟二人に對する私一人て勝負は兩方等しかつた　午後水菜を十本計り漬けた洗ふのに暇が掛つて漸う夕方に片付いた晩は寒さを忘れる爲に多勢で聲張上げて唱歌をうたうた

吉川多美子　二十歲
信濃國下伊那郡上鄕村

夫は教育者家內は夫婦の外ことし二月生れたる絢子との三人

午前中裁縫、午後四時學生四五名來り徒然草の講義をなす、夕刻まて疲れたる絢子の熱出てゝむづかる

思はむやわが生涯を手もすまに、母と呼ばれてかゞづらふこと、など口ずさみつ、さはれ四人の母樣となりたまへる晶子樣のおん上偲ばれてひたすら我身はづかし、夜、スバル三月號を讀む、春雨の音軒を繞りて靜けし。

中村澤子　十八歲
岐阜縣山縣郡千疋村、うらには小さき城山あり前には水清き長良川をひかへて風景よし。
父母健在、家は農、同胞三人、但し女ばかり、妾は一番の末子
近來なき好天氣なり、父は程遠からぬ松林へ松露とりに行くべく進めて下さるけれどあまり暑いので止める。病氣中の事とて別に何事も無し

隅田れい子　十八歲
丹波南桑田郡篠村
農業、兩親、兄二人妹三人
朝御飯を喫べてから龜岡町へ家の用事でゆく
午後は家で縫物をする　夜風吹く

天野いと雅號白糸　二十一歲
福岡縣宗像郡大島村
父は亡し、母と兄と妹と妾の四人にて、家は農
昨夜來の春雨未だ止まず、直に茶を沸して餅搗きの支度にかゝる、今日は彼岸會の入りとて、早近所にも餅搗きの音が聞える、流石朝寢坊の兄も餅が大好物なので、今朝に限り早起して餅搗きの如勢をする、朝餉を終つて終日裁縫、針片手に「早桃の垣根に咲ける一もとに昨日も今日も雨ふりそゝぐ。」てふ腰折れ一首を作る、夜は新作家原稿の淨書並に日課表を記す。

小見山春子　二十歲
岡山縣備中國小田郡城見村
備中と備後の國境大門驛から東北十丁鐵道線路に添ふた淋しい所
今日は風が少しあるが温かい
父は醫師同胞五人兄さんは醫者がお嫌ひ又は好き今内に居るのは父母と弟が一人妹が一人青學校へ通學外に男一人と猫一疋
朝の内は藥局の手傳に忙しい
午後大阪の兄さんから手紙來る俳句をお目にかけた返事
取材が古いとの事
來週の献立表を作る
田舍は材料を得るに困る
夜看護學を復習して後女子文壇を讀む
遠くで尺八の音が聞える

兆竹　十六歲
吳市
酒商　兩親有　四人兄弟
午前八時登校　午後四時歸宅　夜は復習及び速成習字練習す

木村花　十九歲
大阪市北區中之島
姉の嫁入先、姉夫婦、下女、自分共四人會社員
但し自分は某所事務員
空晴れたり身仕舞をすまして出勤す、年度末にて多忙を極む四時歸宅夕餐の手傳ひして例により電燈の灯影に家族くつろぎで晩餐をすます、千枝子の君より繪葉書來る、奈良遊びの誘ひ狀なり、七時半より書齋に籠りて原稿を認む、習は美文、書簡文等意に充ず强いて書く暖かき夜なり、兄君は謡に姉上はお仕事に、下女は明朝の仕度に忙げなり、

赤間まさ子　若葉　十七歲
北海道有珠郡伊達村
父母は農業　私はぶら〳〵　深呼吸して身の健全と詩欲の上達を祈る、朝飯後風葉先生の戀ざめを讀む、午後より新作家の原稿を認め夜九時迄に書終るおぼろ夜の風冷かなり

木村那賀子　十七歲
常陸下館
勝手を手傳ふ　午前張物　午後裁縫　夜女子文壇を見る　雨降る

鈴木梅　十五歲
北海道後志
家は醫師
朝塵を捨てに裏へ行つたらゴミが水くゞりをして居て面白かつたので四十分も立つて見て居た十時半頃小川樣迄お使に行く、序に白と青の絹糸を買つて來た。午後姉樣から縫物を習ふ。夜女子文壇の次を見る。外にはこつそりとほたほた雪が降つて居る。

今泉文子、雅號磯千鳥　十七歲
茨城縣石岡町
家は書肆、但し私は大好き。
家事を手傳ひ、午前十時わが居間に入りて此れを認む。
今眞盛りの白梅紅梅は麗かなる春日を浴びて馥郁たる淸香を庭に放つ、――時しも「年月めぐ

りて……」の卒業式の歌聞ゆ、そゞろ二年の昔を偲ぶ。

村島きし子　十八歳
芝區
家は無職但私は無職がすき朝より晩まで女子文壇の投書の稽古にて日盡す學校は休み、用事も勤强も一寸も致さず外に春雨陥々たり

酒向敏子　二十歳
山口町
家族九人　官吏
午前お座敷の掃除をなす後は午後四時迄裁縫髪結來ろ、初島田のかしらいと重し、よくうつるよとて手しよくもて祖母君お目鏡で見給ふ、皆機姿の側をはなれ給はず、喧笑はれて書もよまれず、夜に入り投書の美文を自分に添削幾度もえゝ出すまいと鉛をなぐそのまゝにして習字をなし十一時床に入ろ髪氣にかゝりて枕具合わろし外はほんのおぼろ月何となう紫式部のおもかげ見えてやまず

花子　二十歳
麻布谷町
家は實業　私實業は好まず
午前手習練習盛りて雪さへ降れる様なれども後には晴れろならんと母も私も髪洗留守居盛りては晴れ晴れてはくもる心地あしき日よ

過八重子、雅號、入重女　十六歳
須賀濱

、弟、妹、
年賀の廻禮で日が暮れました、夜、かるた會を催しました、雪枝樣を初め十二人、朝から吹いて居た初東風は吹き通して軒端七五三を跳らせました、十一時半頃床に就いたがまだ風は止みません、多分明日も吹くだらうなど考へながら何時しか眠つてしまいました。

稗田みつ子　拾七歳
紀伊西牟婁郡岩田村
家は無職少しばかり畑をつくる、家族八人午前臺所のお手傳ひ
午後專らお針ばかり暇あらば好きな畫をかく時には郊外寫生に出ます晩小さいランプの下で原稿をかいて女子文壇社へ出す。春雨がしづかに瓦をうつ

小原あき子　十九歳
秋田縣仙北郡金澤町
家は表具師　私は造花大好き
叔母と共に食料の手傳ひ其餘暇には叔母に從ひて針仕事夜間は從姉妹方と少し勉强當文壇を繙く十時入床天候終日淡雪降る

澁谷清子　雅號翡子　十六歳
出雲國飯石郡頓原町山中にて今猶雪の顏を見る
雨を盜み、私は父と共に丁稚等にさしづ、しつゝあり
冷水摩擦を行ふ、學校に行く、午後來客の爲め學校を缺席し下女の手傳をす、なかなかにつらきものなり、夜なつかしき東京の友より玉章を頂く嬉しく拜見す、折しも雨は一つぶ二つぶと降り出した此模樣にては雪も消ゆるならん

蝶夢子　十九歳
若狹
家は農、兄は軍人、姉は敎師、
書齋の掃除をなす、午前は裁縫、午後は村松靜子先生を訪ふ生花を習ふ爲なり。
夜、燈下晶子著歌集常夏と白光を繙く、外には春雨降る。

千田千代子　紅雲女　二十歳
秋田縣仙北郡大曲町
父母兄弟妹
釜に火を焚きつけながら俳句を考へた、「新作家」に出して見やうと思ふてゝある題は畑打！二十分程かゝつてやうやう一句出來た、皆出て行つたので、後に殘つたのは母上と私ばかり、極く靜だ。

川上めぐむ　雅號、梅月庵老鶯、十八歳
信濃松本市
父、兄、姉、妹、弟、現在六人家内
家は、遂磨製造販賣業、私は、無職、但し家業を助手す
今日は社日にて、神詣りに行き、市中を見物したり、小學校の紀念館をも拜見して、歸宅す
午後は神道公會所にて俳句會有り
披露俳句集の開卷なり、此所へ出席す午後五時歸宅、夜は新作家原稿をしたゝめ、外に俳句研習會へ俳句を投詠す
北風、晴天、市中人出多し、



女(をんな)の子(こ)ある
家(いへ)にして
いたはり育(そだ)つ
さくら草(さう)
七つに變(かは)り
九つに
かはる姿(すがた)も
少女(をとめ)なれば
美(うつ)くしかれと
いのるかな

醉茗



闇の夜

服部貞子

なか〳〵止みさうもない、小言は小言を。生んで、例によつて古い落度までひき出して來る。だら〳〵と思ひ切り惡るく、同じことを繰りかへして居る。それがいつも自分の寛大を有難がらせる口振りだ。それが癪に障るのかも知れぬ。榮太郎は妙にぢり〳〵した心になつて、尻のそゝくれた藁草履の足をもぢつて居た。

「今日ちア――」

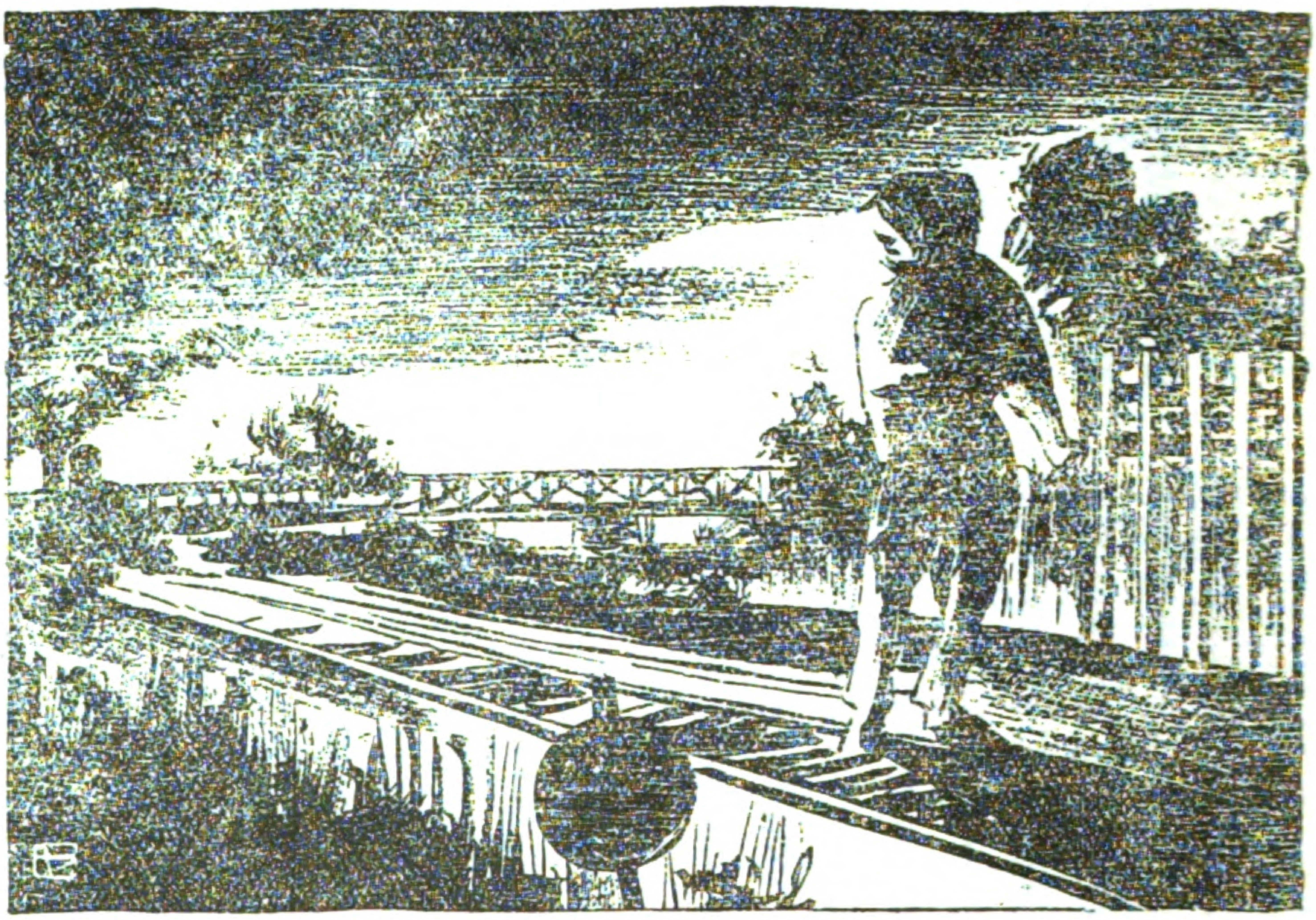
そこへ恰度、背負ひ籠 空樽をごろ〳〵させて、揚げ手拭ひの在郷女がはいつて來た。

客大切な返事を大きくして、新造が起ちあがるのを機會に、榮太郎はふらりと裏へ出た。別段何の氣もなかつた。が敷石傳ひに簷の低い醤油倉の、濕つぽい風に觸れて其前を通る時、薄暗い中からヒヨツコリ顔を出した倉男が、「イヨツ」と變ちきな掛聲をして、尻を叩いて調戯つたので、例のことであるのに、今日はぐつと癪に障つた。「馬鹿にしてやがる！」と思ふと、今までうよ〳〵して居た反感が、一時に胸に突つ張つて、榮太郎はどん〳〵裏門を出てしまつた。

何處へといふ目當もないのを氣付いた時は、とある長屋の路次をぬけて、土の硬い畑の、自然に人が横切つてつけてしまつた、道でない道に出て居た。柔い風が時々思ひ出したやうに顔を撫でて行く。その長屋の前からうそ〳〵隨いて來た小穢らしい犬が、桑株に例のものをしかけて、諦めたやうに歸つて行かうとすると、榮太郎は

ふと口笛を吹いてそれを呼んだ、腰から財布の麻袋を外して、その紐を長くして振り廻して見せる。中では二三枚の銀貨や銅貨が觸れてチヤリ〳〵と鳴つた。ふと榮太郎は先刻のことを思ひ出した。

午前十時頃、伊勢屋といふ醬油屋に三十五六の目のぎよろりとした在所者風の草鞋ばきの男がはいつて來た。小賣りするのだとか言つて、五升樽に詰めらせたのを、代價は町はづれの茶屋で拂ふことにして其男は出て行つた。主人が留守の伊勢屋では、新造が自ら番號をつけて、釣錢を持たせて榮太郎に樽を擔がせてやつた。茶屋の前には一匹の馬が休んで居た。男は其馬に樽をつけてさつさとたゝせ



てしまふ、自分は爐傍に陣をとつてぷかり〳〵烟草を燻して居る、榮太郎はそれと向ひ合つて犬にかまつて居た。男はやがて起つて裏へ出て行つた。――男はそのまゝ歸らなかつた。その男のと思つて居た風呂敷包みも外の客が忘れて行つたのだといふことが知れた。それから一時間ばかりも過ぎてから、榮太郎は泣面をかいて伊勢屋へ歸つて來た。

桑畑やら麥畑やら、續いた畑の先は堤で、その下は線路になつて居る。榮太郎はその土手の草に寢轉んだ。青い空が際限もなく瞳に流れて、柔い、強い光りが自づと瞼を射た。何處ともなく雲雀が囀つて居る。

──ふと強く吸ふた息に、風は冷たく鼻の穴を通つた。うつすらとした寒さが肌を這ふて行く、榮太郎はぽかりと目を開けた。いつか空の青みは鼠の色を加へて居た。そよ〱とした風が吹く。眠つたのだなといふ感じがかすかに起つた。猶投げ出したまゝの手首が冷えて居るのに氣が付く。と昔から永劫變らずその耳について居たやうに思へて居た響きが、形になつて目の前を通る。汽車だ！榮太郎はむつくり起きあがつた、足がふら〱して、額を強い布れでゞも縛られて居るやうだ。頭腦はぼうつとして居る。そのぼつとした中へ、古い、新らしい、種々の記臆が混雜になつて甦つた。

「一人化物置いてんべ！」

ばた〱と二三人の足音がして、踏切りを驅けぬける頭が見える。後れて小さなのが一人、泣き聲をたてながら後を逐ふて行く、われとわが足音に逐ひかけられて、一人後れるのは怖ろしいものだつた。と思はず四邊見廻してすた〱道に出ようとした。忽ち歸るに歸られぬ苦しさが胸を打つ。たゞ漠とした反抗心に驅られて主家を出たので、歸らぬ積りもなかつたのだけれど今となつては歸つてからの思ひが怨ろしい、歸りたい、歸りたくない……腹は空いた。

誰しもの常とて榮太郎も堪えられぬほど父母を戀しく思つた。故郷を思へば雪の深い。軒の低い疎らな家々が目に泛ぶ、野袴はいた背の小さい父親の顏──大きな腹を抱へた母親の姿──遠く賣られて來る時にさうだつた故かも知れないが、母親を考へ出す度にその大きな腹が目についてならぬ。小さな草鞋を履いて、三里程歩いてはじめて汽車といふものを見た。赤い帶を締めた姉も一緒だつた。姉は時々傍の男に隱れるやうにして泣いて居た。榮太郎はたゞ窓から窓に入る山や川を眺めて呆氣にとられて居た。其姉は四里程離れた隣り町に住んで居るといふことを聞いたそれも、懷しい。──が併しどうも夥しく腹が空いて居る。

榮太郎はのそ〱歩いて道に出た。踏切りの番人が家では、子供を背負つた女房が、今蔀を下さうとしてのつそり土手から下りて來た榮太郎を透して見た。小さな洋燈のかげに、棚の燐寸やら草鞋やらが見えて、晝間の賣れ殘りの金鍔が、三つ四つ硝子の蓋を曇らせて居るのを見ると、榮太郎はいきなり飛び込んで二錢銅貨を投げ出した。かつ〱した手許を、女は怪んで見て居たが、言はうとして別段何にも言はなかつた。

饑餓がやゝ滿たされるとぶらりと又た其處を出た。最早すつかり暮れ切つて居る。ふと振りかへつて見ると、子を背負つた人の影が表に出て、顔は此方に向ひてるらしい。彼は恐ろしいものにても襲はれたやうにぶるつとして足早やに歩き出した。また振りかへつて見る。影はまだ消えない。榮太郎は自分ながら自分が薄氣味惡るくなつた。て驅けるやうに灯のある方へ急いだ。がも一度振りかへつて見て、自分を怪しむ影が消えて居るのを知ると、俄に佗しい、たよりなさが犇と胸に迫つて來る。とぼ／＼した自分の影を、どうかこの漲つて居る暗の中から救ひ出したい。この小さい身體を暗に吸ひ込まれやしないか？といふやうな幽かな不安と恐怖が戰慄を呼んで、取り縋る人を求めてもするやうにあたりを見廻した。德利をさげた髮のそゝくれた女や、魚籠をさげた裸足の人などが、通りすがりざまに顔を覗き込んでゆく。それらの人足の絶え間を見計らつて、彼はやがて柔い波を打つ麥畑に身を潛めた。

頭を抱へて何事かを考へようとして居るうちに、いつか手の平を打つ顳顬の脈搏に聞き入つて暫時うつとりとなる。自づと眼が潤んで來た。瞼が絞つた露が冷たく頰に流れたのを感じると、泣かなければならぬ理由を發見したやうに――世の中に自分ほど可哀いさうな者はないといつたやうな、感情が、後から／＼と涙を湧かせた。淋しさ、情けなさ、切なさが追々と身に迫つて、胸を絞つてしん／＼と泣いた。

「死んでくれる！」

ふと、心の底で叫んだが、聲ない聲が耳に囁いだか、

「死んでくれる！」

二度まで其言が頭腦に閃めくと習慣の恐怖に累されて堪らなく戰慄して。

「死ぬ、死ぬ！」

續けてさう思つて見ると、もう泣く必要もないやうな氣がする。かすれ／＼な十五年の記臆は、彼にとつてさほど未練の殘る程のものではなかつた。靜かに顔をあげて見ると、瞬く星がきらりと。蟠つた胸を散らして、自分にも譯がわからぬ程氣が晴々とした。

自分が死んだ後の人々の驚愕を思ふと、目的のない復讐心が勇みたつ――どうしても死なゝければならぬやうな氣持になつた。けれども底には、もの哀れな、濕つぽい情緒が重く流れた。

風が行く、そよ／＼と風が行く。空虚になつた頭に

地を搖る遠い響きが電光のやうに傳はつた。彈かれたやうに起ちあがらうとしたが、關節の力が一度に拔けて肌にぞつと粟が生つ。再び腰を起してたわつく足を踏みしめて土手を驅け下りた。人が見て居ようが見て居まいが、あたりのものは最早目に入らぬ。頭腦は死の用意にのみ働いた。冷たい鐵道に頭を乘せて、手早く刺子の肩當てをとつて顏に蔽つた。もの凄い軋りが後頭部に烈しく響く――。

番人の女房は泣く兒を賺しながら、汚れた旗を持つて柵のところに出て來た。鐵鎖をひかうとしてふと線路を見遣つてぎよつとした。黑い影が横はつて居る。猶能く透して見ると人だ、慥に人だ。思ひ當つたやうに胸は早鐘をつく。我にもあらず躍り込んで、

「何だ 何だ！この馬鹿野郎！」

持ち合ふ旗で矢鱈につゝいた。

榮太郎はふつと飛びあがつて。失敗つたとばかり一目散に驅け出す、猶豫も與へず後追ふ女房の鬢づらかすめて列車は目まぐらしく驅けた。絕え〳〵の息つく間もあらせず、これに後れてはとばかり、滿身の力を籠めて榮太郎は身を躍らした。呀と思ふ間に黑い塊はばつと彈かれて四五間先の闇に倒と落ちた。

取り殘された女房は、暫く行手の闇を睨めて立つて居たがどこまでも、事なく汽車が進むので、安心と、不安との胸を抱いて、逃げるやうに小屋に驅け込んだ。

敗者

加藤菊子

私が結婚してから長い樣な氣がするが漸く半年。それで最早今日の樣な言論をした。否今日ばかりではない、殆毎日の樣に物爭ひはして居る。もとより下々の者の手前もかね、名譽と云ふ事を人一倍に考へる私とてさう目立つた爭動はせぬ、變り隨分と酷い振舞もする、自分ては餘りあるまじき事と思ひついても一時左樣思ふばかりて、又事に當つて直ぐ腹が立つ、立てまいと思つても腹の立つのが私の性分だ。

一躰私は空意張りをしたい性分で、人に負る事の大嫌いな、理が非ても勝ちさへすれば其れて氣が濟む。若し負けてもすると其人が恨めしく、呪はしく、什うかして復讐がし度い。だから姉てあらうが、父や母、乃至良人の樣な目上の者に對しても什うしても負け度くない。其くせ心は小さく、事に向つても立派な態度が取れぬ。稍もすると臆病だ、其の又臆病を氣がつくと人に笑はれはすまいかと矢張氣になつて煩悶する。左樣した風て私は小學から、女學校を經て來た。友人に對して抱いた心は皆僞つた情――飾つた言葉、學問も勉強も皆友と云ふ者に刺戟されてして來た。決して自分の修養の爲めては無い。唯人他に負けるのが口惜しい！と云ふに止まらぬ。

今の良人を自分から撰んだのも人に笑はれぬ、財産も名譽もある立派な辯護士、それてあつた。級中て私は一番富み、一番器量が良いとの評判てあつた故、猶ほの事高い處を望んだ。自分を戀した人も二三人はある、父が私の候補者に立てた者も三四人もあつたが、私は戀する人を捨てゝ候補者の中ての一番、財産と名譽のある辯護士を撰んだ。

私の理想としたのは何てあらう。私の理想は虛榮心の權化てある。立派な西洋館、華々しい服裝、舞踏服に肌を包むだ孔雀の誇らしい自分の姿を某名家の夜會場に夢見た。理想と云つても、良人の柔しい。愛ては無い。友の口にする。スヰートホームてもないスヰートホームなんて云ふ言葉は私には最も癪に觸つた。自分は生れるから死ぬ迄女王の樣な生活をするのだ、私は幼い時クレオパトラを呼むで其埃及土の絕世の妖姬に憧憬れた事もあつた。

あゝ私は斯うした蜃氣樓を畵いて嫁して來た。もとより失望に終つた、束縛、習慣、壓制、總て强いものが私の頭を壓えて私を自由にせぬ。良人は權威を以て私に迫つて來る。自分ては虛僞を嘲つた道德を以て女と云ふ名をあびせかけて私の此の身躰中を縛つて終ふ廿世紀の女子とは斯うしたものと信じて來た私の說をむちやむちやに破つてはてはふいと出て終ふ。私は口惜しくつて仕方がない、佛國の華々しい交際場裡を想像してそれを實現しやうと思つた其れを實は樂しく、空裡に泣く身となつた。

良人は多情の身てある。何のかのとて幾夜かをあける。私は此頃つくづくと良人の愛と云ふ事も考へ、スヰートホームとはどんなもの？スヰートホームを造る

には如何すればいゝか？なんと、云ふ事を不思議と考て來た。得やうと思つた物は得られず、矢鱈心の淋しさを、覺えて何物かて其れを慰めやうとしても、扨自分から進むでそれを得る勇氣と云ふものが私にはない此の樣に良人に自分の人格迄も蹂躙されて居るなら、立派に去つたらいゝではないかと折々傲慢心が囁くのであるが矢張私は弱いのだ、それが出來ぬ。さうして斯うして煩悶に捕はれて居る。

今日も男子が女子の自由を束縛したり、家の中に押し込めて自分は公務にかゝつけていゝ眞似をして居るそれが教育を受けた男子であるか？洋行もした貴君てはないか、西洋の事情にも通じて居られるのに餘ななさり方であると、そんな事から、果ては例の爭論。良人は男子の權力を説き、私は良人の慘酷を攻めた。然し私は斯うした爭ひはしても、心のどこかに自分の樣な美人を決して良人は捨てぬと云ふ自信もある。

だが寂莫はひしひしと身に迫つて來る。何だか孤島に流された樣な氣がして、非常な屈辱を覺える、愛と云ふもののない天地が淋しくなつて來た。すると例の復讐心が出て來て一日二日歸らない、どこか遠い處へ行つたら――？良人は歸つて來て何と云ふだらうどんな顏して怒るだらう。其の時自分が飛び出てさんざん笑つてやり度い。否、若し自分の居ないのを幸に我儘な振舞をされたら――と？私は考へて見るとそれも出來ぬ。

斯う云ふ時は誰か懐しい人を心に探すものだ。昔の知人――男子などの所へ行つたなら必ず歡迎してくれると思つても矢張私は弱いのであらう。其れが怖い。ふと心に浮んだのは岸本照子さんの事である。

照子さんは今雜司ケ谷の淋しい處に理想のホームとか云ふものを造つて居る。尋ねて見やうと私は思つた私が照子さんを尋ねると云ふ心を起したのは、自然の要求であるかも知れぬが、内心自分の出世を誇り度い爲め、照子さんの理想と云ふものをよく知つて居る自分は其の理想の實現とは必ず貧しい、詫しい田舍住居のやうなものであらうと思ふと、黃金の光を以て其の天上の夢に憧れて居る眼を奪つてやり度い。彼の落ちついた小惛らしい友の心を亂してやり度いと云ふ心もあつた。斯うした心を起すと淺間しい昔の女學校生活の頃の恨みが殘つて居る。一方から耻辱を受ければ、一方に於て其れを慰めるだけの償いを得たい！と頻りと渇いた者が水を求める樣に心がむづかゆくなつた。

照子さんと私とは其の性格がまるで異つて居た。私は照子さんを好敵手として戰つて居たので、其の癖、心の中では照子さんに負けて居た。照子さんには財産もない、名もない、勿論美人でもない、其の代り大なる才智と人を魅魔する怖ろしい力を以て、教師から、友人の總てを自分の者にして居た。それが又別に威張りもせず、衒ひもせず、媚びもせず、無口で、沈着で優しい態度を以て居て左樣して勢力を有して居たのである。私が種々な手段を以て人を我者にしやうと急つて居るとはまるで異つて居た。私も自然と自己の利益上照子さんとは親友のやうに見せかけねばならないので、心には厭はしい鬼のやうな思ひを抱いて居ながら人前ではいかにも親友と見せかけて居た。而して其の急かず急せらぬ落ち着いた態度が憎らしくつて、何だか其の前に出ると自分が弱いやうな、馬鹿なやうな氣がしてならなかつた。それと同時に私の敵愾心はいよいよ照子さんに焔えた。卒業の時も自分は人知れぬ疚しい行ひをして漸く照子さんの上になつたが、心は、勝利を叫ぶ事が出來なかつた。



＊　＊　＊　＊

私は矢張り友達は懷しく、久しく別れて居て見れば今如何して居るかと云ふ好奇心も起つて次の日雜司ケ谷の淋しい家を訪ねた。

雨上りの水が未だ乾かぬ田を前に、後は雜木林鬼子母神の森の遙に見えて、門には青木が垣になつて居る。急ごしらへの丸窓の竹が青々し

て、古びた茅屋根には不釣合に見える。

照子さんの結婚した事は私も知つて居る。常に理想とか、戀とか、詩とかを口にして居た友の生活の有樣を見てやらうと私は心を張つて訪れた。家の中は至つて靜かで、物音もせぬ。

『御免下さいまし。』

丸窓のある座敷から誰か出て來た。

『照子さんの御宅は此方ですか?』

『照子は私で御座います、さあ御這入り下さいまし。』

まさしく照子さん私はつと古い格子戸をくゞつた。何だか目を閉つて友の顔を見るのをなるべく堪えて、後一度に四邊の狀態を知りたい樣な子供心が出た。が障子側に座つた友と思はずも顔を合した。

『おやまあ、房子さん、お珍らしい、』

照子さんは餘りの意外に驚いたやうに唯力のある目を瞬いて居る。

『驚いたでせう。私、貴女を驚かしてあげやうと思つて、突然やつて來たのよ。』と私は强いて親しく言葉をかける。

『さう、さあ何卒。』

私は眞實、友の驚きの中に私の美、私の出世を羨ましてやり度かつたので、其目の中に私を羨むやうな色はありはせぬかと、其の態度ばかりに氣をつけて居たが、矢張友は昔に變らぬ。落ち着いた眼を動かすにも徒には動かさぬ、それかと云つて決して人を見下げた樣な振舞はせぬ、御世事のない心から出る言葉を以て私を奧へ通して呉れた。

私の指には二つも寶石が光つて居る。什うかして其の目を私の指に落し度い。私の襟にも流行の眞珠が輝いて居る。什うかして自分の胸に目を引き度い。私の着物は最も華美を盡して居る。此の茅屋にはふさはぬ姿である此の美しい自分の姿——其光で友の理想を破ることは出來なからうか——破り能ふたら自分は全くの此の友の勝利者である。友は今何をして居るか、聞けば筆て立つて居るとか。幼い時から友は文學を生命として居た、見れば大きな机と、小さな机が二つ並んで、簞笥もなければ、鏡臺もない座敷に本が一杯並べられた本箱、四角のまゝ摺られた紙が一面に散らしてある、心形の寫眞ばさみに暗い顔の西洋人が上を睨んで居る。丸窓に汚れたカーテンが絞られて、疊にはインクの跡が所々について居る。私は友の顔から室内を無遠慮に見廻した。

友は別に氣まりの惡い顏もせぬ。是が私等の樂園ですとても云つた顏をして私に茶を淹れて呉れる。被服の紐の色も褪せて自然に束ねた髮は亂れて顏にかゝり、稍痩せた頰は色白く、餘り美しいとは思はなかつた友の顏が今日は何だか美しい。輝いて見える。輝いて見えるのはつまるところ自分の心に後れが出たからであらう。

別に勝手をする人もないのであらう。手は荒れて、汚れた白い前掛が座敷の隅に投げられてある。殊に飾らぬ其姿が何だか私の目には清く、僞りのない情の籠つた言葉が常に聞きなれた諛ひの言葉と、異つて何となく嬉しい氣もしたが、又一方に云ふに言はれぬ嫉ましさを覺えた。

自分は虛榮に飽いたのだと思つた。

『貴女の御結婚なすつたのを聞いて、私飛んでも來て御祝ひ申し度いと思つたのよだけれど、御存じの中々の多忙でせう、客は毎日あるし、他出するなんて申すと矢張供の者を連れて行けとか、何のかのと申すものですからねえ、思ふやうに出られないのよ。どうせお話するのなら昔の女學校時代の若い氣になつて、少しでも氣樂にお話し度いと思つてねえ、それて今日わざと供を連れずに來たのよ。それに殆毎日のやうに會があつて、矢張私のやうなものでも出ないと皆樣の御機嫌が惡るかつたりして――、然し考へれば面白くつてよ。交際と云ふ事は廿世紀の女子の必要の事ですものね、貴女は斯うして毎日家にばかり筆を取つてゐらつしやるのでせう?少し如何です、名流の方々と御交際なすつちやあ、御紹介の勞は取つてよ。』

私は心にもない事を云つて友の顏を見た。

『ありがたう。私も御交際もしたいんですけれど矢張私の方の仕事も忙しいものですからねえ。』

『旦那樣は?御留守ねえ。』

私は思ひ出したやうに云ふ。

『エヽ、毎日此頃は雜誌の編輯て忙しくつて晝間は出て居ますの。』

『貴女何かお書きでせう?學校の頃の希望がすつかり達したんでせう?。』

『エヽまあ御庇樣でねえ唯是れからが大切ですの、修養ですわ、私ねえ、どんな貧に陷ちてもやる所迄進む覺悟ですの、倒れるのなら華々しく倒れますわ、一度筆て立つた以上は矢張私等の墓は文壇ですもの。私等は何をするにも此の墓場を築きつゝある覺悟てすわ私

にはどんな事をもする勇氣はあつてよ。素より藝術と愛と云ふものは隔れませんもの、私等は此の二つの物を抱いて、世の物質的文明と戰つて、最後に勝利を得る積りですの、何も覺悟よ。つまらない虛榮心にかられて低い理想の影を追ふ樣な人は眞實世の勝利を叫ぶ事は出來ないですものねえ。心の平和は决して物質でもなければ、名譽でもないわねえ、ホヽヽヽ私等は此の樣な貧しい生活はして居ますけれど是れでも金殿玉樓にもまさつて居るつもりよ。房子さん、此のお茶は澁いてせうけれど、是れでも天國の甘露と思つて飮んて頂戴。』

　私は此の言葉を聞いて全く照子さんに呑まれて居ると思つた、と同時に學校時代の復讐心がむらむらと起つて來る、それを凝乎と堪えて居ると身中の震へるやうになる。身分は心靈上何うしても照子さんには勝つ事が出來ぬと思ふと名譽とか黃金とか云ふものが全く人生を福する物ではないと思はれて來た。

　今迄それに左右されて居た自分がいかにも情無くなつて來る。此の友によつて其の敎を乞ひ度く、心の安心も得たい氣にもなつたが、未だ私の心は照子さんの膝下、跪く程尊い覺醒はない、殊に話すのに複數を用つて、良人なる人をも自分と同じやうに語る。自分にはそれさへ出來ぬ。唯私は心慰せに自分の家に自慢をして見たり、知りもせぬ交際社會の噂をして見たりしたのが何うも照子さんの心を奪ふ事が出來ぬ。一段上に座つて居て、私を瞰下して居るやうな感じがして私は遂々、默つて終つた。歸りがけに座を立つて車夫に持たせた壹圓の菓子折を出さうとすると、過つて傍にあつた御茶をこぼした。私は狼狽して一足下つて机の傍に散らばつた紙を六閤に摑むでギユギユと、拭くと雜布を取つて來た友は。

『あらまあ、貴女、そ、それはよして下さい。』

　もう私は其の紙をすつかり濡らして終つた。

「あら必要なの？」

『エヽ。まあ困るわ。』

　友は私の手から捥ぎ取るやうに其の濡れて字の全くにぢんで終つた紙を手に取つて恨めしさうに見て居る。

私濟まなかつたわねえ。」

『是は私等のパンの代ですもの。今晩猶ほ三四枚書いて持つて行くつて云つて居たのよ。困つたわ。』

『パンの代？。』

私は何だか勝利を得た氣がして、

「それなら此の罪を償へば許して下さるてせうパンの代を出せば。」

友照子さんは不思議な顔をして見て居たが。

「仕方がありませんわ」と殆ど失望の聲を發した。

私は急いて懐の財嚢を出して。

「是れて許して？。」

思ひきつて指にあたつた、札をつと友の前へさし出した。

友は何とも云はず私の目を見上げた。見る見る顔色は異つた。

「貴女！房子さん、あんまりてす、私いくら貧しくつても貴女からお金を頂く理由はありません。パンは私等の生命てすけれど。永久のパンとなるべきものは永久の生命となるんてす。永久の生命を唯お金子て買ふ事は出來ませんわ。」

私は一言も云はなくそれを又收めて。而して冷かな一禮を與へて歸つたが私は云ふに云はれぬ悶へと、失望を覺えた。

矢張り自分は照子さんにはいくら百萬の財産を以ても、女王たるべき冠を以ても勝つ行は出來ぬ。永久の生命をはたして自分は有して居るのてあらうか？。

私は全く虚榮に飽いて泣いた。

火事

永代美知代

襖一重置いた裏隣りの魚屋さんでは、お内儀さんも無い、やもめ暮しの癖に、何時も早仕舞ひの、若い親子二人差向ひて、酒も飲まず、ズーズーッと、さも甘さうな音をさせながら、お汁らしいので御飯が始まつた。

表では人の好い醤油屋さんが晩方の忙がし時を、氣を利かした積りて、水をくんだり、胡麻を煎つたり頻りと勝手元を手傳つて居る。と、

「お前又何しるだか、子供じやあんめえに！ホラ、こんなに眞黒にこがしちやつて、本當におろねえもんだ

よ、コレ彼方い早く退いて見たい退いて見たいと云ふにお前聞えねえかよ。

とか何とか引切り無く、随分とがつた聞きづらい調子で、お内儀さんから叱られ〳〵、それに一言云ひ返へすでも無く。

『奥さんの手前があるてねえか、考へて見たい。』とてればかりを繰り返し、こぜわし無げに、ごろ〳〵お味噌を擂つて居る。

其奥さんと呼ばれた此家の客人は中の間の机の前にしよんぼり坐つて、鬱金木綿の一つ身を、薄暗らい三部心の洋燈に、覚束無げに幾度と無く、透しては縫ひ透しては縫ひ、裏と表と両隣りの、物音を、聞くても無く聞かぬでも無く、若い身空に、殊には普通ならぬ躰で、斯うした漁村に居る事が、云ひ知らず佗しいやうな、はかないやうな気もして、心では頻りに東京の空を懸しく、良人の上を思ひ、遥い〳〵故郷の両親を可懐しんでこしかた行く末、然うして事をあれこれ思ひ耽つて居る。

やがて襖がスーと開いて、奥さんが振返へると、お内儀さんがお膳を運んで這入つて來た。

『どうも遅くなりまして、サ温いうちに何卒、柔い大根を貰つたもんですからね、貴女のお好きな風呂吹きを造へて見ましたが、おいしうあがれますか如何か。』と永らく東京に出て居たお内儀さんは、奇麗な言葉づかひで、今の今迄亭主といがみ合つて居た人とは、まるで別人のやう。

『まあ然う、どうも難有う、今直ぐ頂きますけ共、一寸と此處を一針だけ……』

『えゝえ御ゆつくり、オヤお襦袢で御座いますか、まあ本當に可愛らしい、オヤオヤひる迄お附けなすつて、御丁寧によくねえ。』

『だつてもほころびると困ると思つて。』

『然うで御座いますよ、子供のものは別してよくほころびるもので御座いましてね、ですが貴女、中々如何して然うは手が届きませんですからねえ、直ぐ後から困るとは知れて居て、それて私なんかついぞ附けた事御座いませんてすよ。』

『どうせ遊んでるもんですから……ねえ小母さん、身丈これ位で好いわねえ、一寸と見て頂戴、短かゝ無いてせうか。』

奥さんはすつくり出來上つたのを、ふうわりお内儀さんの前に差出した、而してお膳の前に坐つて、

『では頂きます。』と最う直ぐ箸を執る。

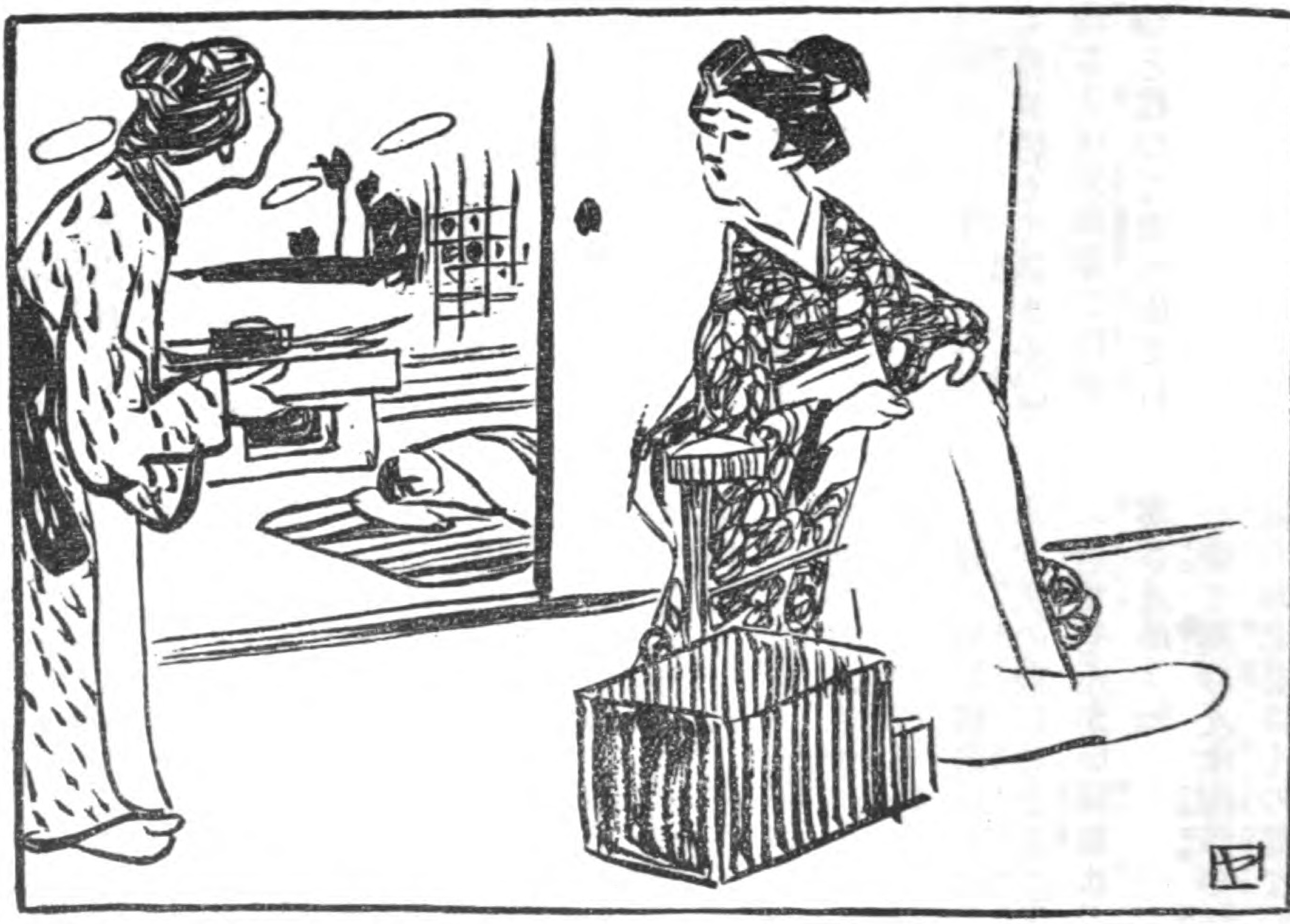
『サア〳〵何卒、オヤ最う出來上りましたのね、貴女は本當に精根でゐるらつしやるから、何でもお早う御座います、まあ可愛らしい、紅絹の襟をお掛けなすつて、赤ちやんの襟は何でも柔かいものが一等で御座いますからね、それに如何でせう、黄色い處へ紅いので、本當にうつりの好い事！』

云ひながら打返へし打返へし見入つて、

『短かゝないでせうかつて貴女、これ位な身丈なら充分で御座いますよ。一尺二寸も御座いますでせう。』

『え、三寸。』

『それだもの貴女、如何して



此處いらじや、一尺か、丁度じやいけないと云つて氣にする者が、精々一寸も上を切る位なもので、短いどころですか、三寸もありや充分で御座いますよ。』

『然うですかねえ、赤ん坊つて隨分小ちやなものね。』

『えゝえ貴女、産れたてはほんの斯うして、手の掌に乘けられる位で御座いますもの、ホホホホ小ちやいにも、何にも、そりや本當に小ちやなもので。』

打柄何處かで消魂しく女の騷ぐ聲！

『何でせう？』奥さんは早くも聞きつけて、じつと聞耳を立てる。

『何ですか。』

お内儀さんも一寸と耳を澄

して居たが、

『ナア船でも歸つて來たんでせう、鯛でも澤山有つたのかしら‥ナニ何でも御座いませんよ。』

『だつて小母さん、女の聲ですわ、アラ火事だつて！』

奧さんは最う顏色を變へて居る。

『え！』とお内儀さんも流石に浮き腰になつて、

『一寸とお前さん』と表を向き、

『戸外へ出て見たい、火事だつて呼ばつてるじやないか。』

と裏でも、

『汝早く行きて見ろ。』

『おう。』

息子の岩さんは威勢よく駈け出したが、間も無くあたふた露地を這入りながら、

『父、住吉さんが火事だど！』

『何住吉さんが！何だちて又‥‥』

『何だちてだか、俺行ぎて見たら幕さ燃えて甚えや。』

「そりやまあ！」

お内儀さんは周章てた態に、つと起つて表へ出て行つた。

『岩！岩！岩や。』

立て續けに呼つたが、ねつから返事が無いので、

『此野郎奴居やがらねえ、じや奧さん、俺ちつよくら駈け付けて來ますべい。』

『然う、御苦勞樣ねえ。』

住吉さんと云へば直ぐ傍、南隣りの藤四郎屋、三郎屋と、此二軒を置いて居るばかり、周圍に申譯丈けの松原はあるが、如何なる事かと、奧さんは起つて見たり居て見たり。

『小母さん！』

堪らずなつて呼んで見たが答へが無い、表へ出掛けて、庭の隅つこの薄暗がりまで覗いて見た、けれ共誰も居ない。

ヨッショ、ヨッショ、ドタドタドタ。戸外は船方共の駈け附ける音で、騷々しい事おびたゞしい

『周章てたつて仕事が無い、』

強て氣を落着けて部屋に歸つたが、何をするでも無く、机の前にしよんぼより。と、

『居ませんかい阿母さん、オヤ誰も無ない。奧さん、奧さんは？』

兼て奧さんは梅澤の姉さん〳〵と親しんで居る、其處のお老婆さんの聲なので。

『アラお老婆さん！』
いそ〳〵大急ぎて出迎えて、
『住吉さんが火事てすつて……』
『だから、私や氣を揉んて、お前さんが又周章て戸外へ出て、火事ても見ると大變だと思つて、此處いらじや御前さん、お腹にある時火事を見ると、子供に赤痣が出來るつて云ふんだよ、だから甚麽に急いだか。』とせつなそうな息ざし。
『アラ然うどうも難有う、よくねえ、サ、まあお上んなさいまし。』
『皆な出掛けたの子。』
『え丶然うてせう、居なくなつて……。』
『阿母さんもてすかい。』と火鉢の前に坐つて
『何しろ驚ろいたてせう。』
『え丶、姉さんは？』
『若し火の手が甚くなるといけないから、お前さんを家迄連れて來るつてね、然う云つてたんだけど、奴が如何にもおつかながつて、しがみ附いて、離さないものだから、代りに私を見さよこした譯てすのさ、だが好い鹽梅に大した事も無いらしい。』
『然うてすかどうも……祐ちやんも可愛相に驚いたてせう。』
『あ丶彼奴も子供の時、燒出しを喰つた覺えがありますからねえ。』お老婆さんは浸々當時のさまを思ひ出したやうに、云つて、そつと吐息をする。
以前學校時代、姉さんに誘はれて、一緒に此地へ來た事があつたが、其時は斯うした漁場ながら、大した吳服屋て、全盛に暮して居たものを、今は僅かに荒物をあきなつて、むきみやの袢天に、世帶くづした姉さんの痛々しさ。などと奥さんは心の中に思つて居る。
『何だ、あれんばかりの事に、いけ人騒がせな。』
『然うよ、ホンのボヤてねえか。』
斯うした荒つぽい事を云ひながら、一しきり船方共が引上げると、其後から直ぐ醬油屋夫婦も歸つて來た。
『如何てした？』と第一にお老婆さんが聲を掛ける。
『オヤまああなた、よく來て居て被下いました、私達や周章て丶出て行つて了つて……』
『然うさ女だてらに、火事だとさへ云や、家のがは何時ても斯うてげすからね、奥さん淋しかつたてせう。』

『えゝても最う鎭まりまして？』
『お堂が半分ばかり燒けて、それてもまあやつと消しました。』
『まあ〳〵早く鎭まつて結構、だが何うして又火事になつたらう。』
『お燈明に上げた蠟燭が幕さ燃えついたもんだて。』
『何だちて又、それが知れなかつたらうね。』
『それがさお老婆さん、太郎どんが市場の芝居を手傳ひに行きて、居ねえもんだて。』
『おえねえ事したてねえか、それぢや世話人共が承知しますめえ。』
『だから彼畜生奴、斯うして開けつ放して出歩きやがつて、何處さこじけやがつたか、おつ出して了へつて、皆なて云つてましてんか、ねえお前さん。』斯うお内儀さんが云ふと、
『何、然うばつかりてもねえ、西原屋の爺樣なんか、然う云ふばかりも行かねえ、此堂に居たつても、彼奴も喰へねえからちて、然う云つてたてねえか。』と醬油屋さん。
『ほんにお賽錢ちたつて僅かだからね、太郎どんも無理は無え。』

『太郎どんて番人ですか。』
先刻から默つて居た奥さんが訊いて見る。
『えゝまあ番人と云や番人て御座いますけ共ねえお老婆さん、別段賴んだ譯ても無く、一人て彼樣して彼處へ、這入つただすねえ。』
『あゝ病氣てね、まあ女にしると血の道と云つたやうな風て、蒼い顏をして元々他國者てあつたが、此土地へ流れて來て、貰つて歩いたりなんかした事もあるし お堂へこもつてお蔭てまあ、此頃じや彼の位な躰になつたんてすよ』。
『今ぢや用使ひに歩いたりなんぞして、俺達よりや、結局樂かもしれねえハッハッハッ』
『まさかお前さん、彼の年とつて、女房一人養ふ事も出來ねえて、彼樣してやうと云ふんだもの、可愛相な者にや違ひないさね。』
『而して幾つ位ですの。』
然うてすね、三十七八、四十にもなりますてせう。』
其晩は然うした事てお開きになつたが、翌日のお晝過ぎ、奥さんは昨夕のお禮旁々梅澤へ遊びに行つた。
店の間の火鉢にあたつて、姉さんと話し込んで居ると、急に戸外が騷がしくなつて、覗いて見る間も無く

ゾロ〳〵と女子供に取まかれた一群、眉を落して、頭髪は引詰めの樂屋髷、此間うちから市場てうつて居た、女芝居の一座とは一目てうなづかれる。

黄八丈の書生羽織や、獅子毛の肩掛に可成り風俗を作つて居るのもあれば、赤ん坊を脊負つて、子供の手を引いてぼろ〳〵のなりのもある。

丁度買物に來合せた娘つ兒は、黄八丈の羽織のを指差して、

「あれ見たい、彼が政岡になつたてすよ。」

「然うかい座頭と見える。」と姉さんは、のび上るやうにして其後姿を見入つたが、

「オヤ太郎どんが！」

「えどれ」

「ソレ彼の皮色のぼつたを着た、脊の高い……ね、見えたてせう。」

見ると如何にも顔色の蒼い四十男が一座の中に交つて居る。

「まだ誰も火事の事知らさないかしら。」

「歸つて見ておつたまげる事だつぺ」

「でも太郎どん儲つたと見えて、御覧なさい洒落てる事！」姉さんは面白相に笑つたが」

奥さんはじつと、其新らしい足袋、新らしい下駄と、こればかりが眼に立つ、それに見入るのであつた。

六月

山田くにえ

私が十七の六月。私の故郷、信濃の國の、和田峠の嶺つゞき、せんのうと云ふ蕨の名所がありますが、そこへ蕨折りに行つた日の事です。

其日はよく晴れて居て、風のない日でした。

私と妹と、友達の桃枝さんと、桃枝さんの弟の清志さんと云つて、其時十一の幼い人と合せて四人、人里遠き山の中の、綠の木、綠の草、ふりあふげば綠の天につゝまれて、少女心の安きまゝ、唄ひつ語りつ希望をにぎつて居るとも見える、これも綠の蕨を盛に折りました。

二十束ほど出來た時、おひる頃になりましたので、山の下を流れる川の、川邊にまで下つておべんとうをたべて、しばらく休んだ其時です、桃枝さんと妹とは魚を見出すと云つて、きれいな水を透し見乍ら、雜草を分けて川下の方へ下つてゆきます。

淸志さんはおなかゞ出來たのでねむくなつて來たと見えて、河邊の大きな木の枝のまたの所にのぼつたまゝ、罪のないねがほを大空に向けて居ります。

川の水がなめらかな石の間をくゞつて、腐ちた小枝の上を越へて、木の間をこぼるゝ日の光をうけた所はきらきらと、木の葉の蔭に成つた所は水晶の樣に美しく澄んで、ゆるく〱二間の巾を、限りも知らず流れてゆきます、双側に立ち並んだ大木の間に、何の鳥かしきりに鳴て、六日の日ざしは柔かに、山を河を鳥を人を知らがせてしまひました。

嗚呼此瞬間よ、天地萬物呼吸を同じうして、一つの大なる感情に融合し、一葉のゆらぎもよく萬象に響き一鳥の歌もなほ天地の「眞」にふれて、私は一切の恐怖の念をすら忘れて、ゆるく吐き出す呼吸のゆらびは、綠の山の裾をめぐつて、大空はるかに九天のとばりをあげて神の御前に通ふかとばかり、靜に美しい自然の中に目をねむりました。さわがない心、山奥の靜かさに住む靜かな心に、私は此川の岸なる老木の始めて靑い芽をふいた。其古への物語りをも聞きました。流れてやまぬ川の音の、此時此感情に觸れてゆく水に、やがて空と水との落ち合ふ際に、語らんとする聲をもきゝました。あゝ忘られない彼の日彼の時よ、信濃は私になつかしい國です。

氣まぐれ者

太田樂子

日光がもう暢然と霞んで、何處を見ても華やかな色彩が動いて居る。櫻花時分の時候は身體が溶けて了ふやうに快い。お隣の柳が垣越に軟かく淺綠に煙つて居るのを眺め乍ら、私は今剪つて來た椿を椽側で活けて

ゐた。
「お早う御座います、今日は如何樣て……」
と勝手の方て聲がすると、私は直ぐ、あゝ作さんだなと思つた。果して國が
「今日は八百屋さんは？」
と聞きに來る。用の物を命令て遣ると國は臺所へ行つたが、私も直ぐ後から花筒の水を取りに臺所へいつた。
「えゝ、もう上野は眞盛りてすよ、昨日なんか可成人が出ましたね」と作さんは底錆のある聲て國と櫻花の話なんかしながら、水仕口の腰障子の蔭から勞働に慣れた太い手が帳面をつけて居る。
「有難う存じます」
と云つて行かふとした時私の姿を見たので、鳥渡頭を下げたが、肩の圓く肥へた、がつしりした骨格の後姿は、やがて門を出ていつて了つた。
國は頻りと朝飯の後の茶碗や何かを洗つて居たが、何か考出したと云ふ態に、
「作さんも遂々落付いて了ひましてすね、氣紛れな人てしたつけが、でも感心によくあゝ働いて居ります」
「全くもう全然落付いて了つたね、何しろ既う二人の子のお父樣なんだから少しや考へなくつちやならないわ、彼の人は一體幾歲位なんだらう？」
「左樣て御座いますねえ、あれても三十四五位になるんて御座いませう」
「さうかしら」
と私は云捨て此方へ來て了つた。
國の云ふ通り作さんは事實氣紛れな人、否氣紛れな行爲をする人てある。赫黑い丸顏て眉が太く、些少下つた眦に笑ふと皺が出來る、肉厚の額に薄皺が見へるけれど何所か愛嬌を持つた顏て、骨格がいゝのに堅固に肥つて居る。お酒も煙草も餘り呑まず、孰ちかと云へば堅い方てあらう。中々の働き者ていつも夜晚くまて草鞋を脫がないさうだ。此邊界隈一圓にお華客が多いので、私など戶外へ出るとよく車を曳いたり天秤を擔いだりして廻つて居るのに出會す。
朝親父が神田の市場へ買出しにゆくと、作さんは一周り此邊の出入先を御用聞に廻るので、夫れがすむとお華客へ用の物を持つていつたり又野菜を車に積んで曳廻つたり、一日骨の休まる時が無いやうに働いて居る。親父は八百元といつて土地ては可成賣込んだ顏なので、生活なんかも有福だと云ふ事てあるが、仕上げ

た人だけに隨分八釜しやて口小言の絕へ間が無いと云ふ位、作さんは其一人娘へ養子に來たので八百元の實子では無いが、何でも緣つづきの者ださうだ。養子に來たのは何時頃だか知らぬ、私が此地へ來た時――夫れはもう十年になるが――には既う土地の人にも可成顏馴染になつて居た。

何しろ親父が餘り頑固なので、作さんの家は平素紛紏が絕へなかつた。親父と云ふのはかれこれ六十に手が屆くらしい人で、八百元の店先を通つたとき私も一二度ちらと見た事があるが、細長い面で鼻の隆い、何だか苦味のある顏だつた。賣殘りの品物を持つて歸ると、いつもガミ〱叱り付けるのだ相で、作さんはよく賴むやうに野菜を押附に來た。安く賣ると自分が足して親父の前を繕らうのだとか、いつも吾家へ來ては滾して居る。

作さんが氣紛れな行爲をするのも、畢竟は家の中の面倒なのに耐へられないからだらうけれど、作さんはよく家を飛出した。實際一度や二度じやなかつたのである、雖然丸の他人ではなし技倆者なり、怒つては見ても仍且作さんが居なくては親父も困つたに違いない。

夫れに其度に娘の心配といつたら無いので、でも度々飛出し乍ら引戻されて居た。近所の者は餘り幾度もなので「又か」と云つて誰も珍らしがらなくなつた位だけれど、夫れが爲に作さんの肩身が狹くなるやうな事もなかつたのである、つまり作さんは人に忌まれる樣な性質じや無いのだ。

八百元の娘と云ふ作さんの女房さんは、色こそ黑いけれど眼附と口元とに愛嬌のある、愛相の好い女だ。稀には晦日の勘定なんか取りに來る事もある。年よりは老けてぐつと世帶染みてるので、私が此地へ來たてにはよく低い島田などに結つて居たが餘り肖合しくなかつた。嚴しい親父と氣紛れな夫とを持つて小僧を一人使つて店の番をして居るが、私などが八百元の店の前通ると、女らしい笑顏して挨拶する、店は可成廣い割合に奥行の淺い狹い家の中で、帳面つけたり裁縫して居たりするのを見かける。「順和しさうじやありませんか」と餘程以前に誰だつたかゞ女房さんの事を云つた時に「否、どうして順和しかありませんよ」と作さんは笑つて居た。

確か何處にも花が全然なくなつて靑葉の生々した頃だつたと記憶へて居る。今からだともう七八年に成る

かも知れないが、何でも大阪に內國博覧會のあつた時なのてある。

晦日なので作さんは勘定を取りに來たが、掛取だけに常時の腹掛に草鞋の態てなくて小薩張した服裝をして居た、其頃ゐた鶴と云ふ女中が拂金を渡して、作さんか鞄から剰錢を出すのを見作ら、

「大分有りますね、どうです作さん一つ夫れて博覧會へてもいつたら？一緒に行きませうか」

と笑ひ作ら戯言云ふと

「さうですなあ、博覧會も可いてせうよ」

と笑つて居たが別段氣にも留めない風てあつた。

すると毎朝勝手口へ來る作さんの聲が夫れから暫くしないで居た。代りに作さんが飛出す度に店の手傳に



來る六さんといふ若い男が御用聞に來た。私は別に何とも氣が付かないで居たけれど、或朝の事、六さんが臺所の方で頻りと作さんのことを話してるらしいのて、

どうしたんだらうと思つて居ると、其うち鶴か用で私の處へ來たが、

「お孃樣、作さんは眞當に驚きましたわ」

と云出したが、その談話を聞いて私は驚いた。作さんは晦日に諸方の拂金を集めると、其金を持つて大阪の博覧會へいつて了つたのである、家では大騷ぎして探したが、漸く尋ね出して連れて歸らうとすると、その時作さんは大阪の在の農家へ養子には入つてゐた。未だ家へは歸らないが東京へは連戻したとかて、今度は一番酷く紛糾てゐるらしい

と云ふ。そして鶴は、

「私が云つたので偶然と氣が變つたので御座いますね、眞逆眞個に行つてしまふなんて、……假の戲談に云つたのでございますのに……」

と笑ひながら頻りと氣の毒がつて居た。

八百元の娘は其時もう二つになる子の母親だつた、大分、紛糾たらしいが夫れでも亦復る事になつて、二月計り經つと相不變御用聞に遣つて來た。誰も何とも云はないが、でも一語二語何か今度の事でも云ふと極まり惡さうに心持顏を赤くする。

夫れぎりもう飛出さなかつた、身分でも繫縛を脫けられないことゝ諦めたものか、こぼし乍らも精々と働いて居た。

それから三四年は經つてしまつた、すると確か一昨々年の事だつた、妻を失くしてから久しい間獨身で居た親父に後妻が出來たのである、後妻が出來てから猶家の中が不和らしかつたが、遂々別れて親父の方は後妻と一緒に四五軒先きへ荒物屋を出した。作さんの繼母となつた人を私は未だよく見ないけれど、普通の女房さんださうな。

「僅二つか三つ歳上の者をお母樣と云ふんですから呼難う御座んさあ」

と作さんは忌々しさうに云ふ。

新たな妻の愛に惹かれる親父と、不滿を抑へつけて居る養子との間は益々背いてゆく計りらしかつた、「繼母の云ふこと計り聞いてゝ仕樣がありやしないんです」といふやうなことも、幾度か私は耳にしたのである。

其内繼母の肚に出來たのは男の子であつた。繼母の產と幾月も違はないで作さんの子も又娘に生れた。

年をとつてからの子なので親父が自分の子を可愛がり方は一通りでない。家が別になつてるからいゝやうなものゝ、一緒だつたら到底治まるまいと思はれる。

今年はもう兩方の子とも三歲であらう、親父の方の子は兎角に弱いとかいふ事だ。日外も竹だかゞ「作さんは眞個に勉强家ですねえ、今にいゝてせう」と云ふを「何、自分の財產になるのだかどうだか判りやしませ ん。」

と云つてたが、國などは平常八百元の家のことを話しちや作さんは感心だと云つて居る。

實際この頃は眞個眞面目になつて了つたと見へて、來ても以前のやうな冗談口にも餘り利かず、愚痴なども滅多に云はなくなつた。稀に不滿らしい語氣が洩れ

ても、もう飛出すなんて心は全然消えて了つたらしい。

私が臺所で作さんの姿を見かけてから幾日か經つと、二三日續いて作さんの影が見へなかつた、代りに無口な小さい小僧が來る。

盛りだと聞いた櫻花も見にゆかないうちに、庭のも全然り散つてしまつた、梢に殘る蕚があかく、もう柔かい嫩葉が出て來た、山吹の花片が昨夜の雨に黄色く地面へ粘著いて居る朝のこと、國が街へ使にいつて歸つて來ると、

「作さんが二三日見えませんから八百元の店を通りがけに覗いて見ましたら、薄暗い奧の方に娘のやうでしたつけが、向ふむいて寢て居りますんですよ、病氣だと見へますのね。必と作さんも病人があるので來られないので御座いませう」

と作さんの來ない原因を獨りで承知した樣に云つて居たが、其翌日だかになると、作さんは御用聞に來た。

國が來なかつた譯を聞くと、女房さんが身籠て居たのが昨日産れたのだと云ふ事である。

「おやまあ、夫れはお芽出度う。私は又通つた時に寢てお出だつたから御病人かと思つて居ましたよ、さうですか、夫りやあお芽出度う御座いましたね」

と國が祝ふと、

「エヘ、……有難う……」

と云つて作さんは餘り嬉しくもなさ相な笑顔であつた。

新裝

尾島菊子

盆の賞與を當て込んで、主人の夏服に附屬品が一切、若い細君のセルにコートまで注文してやつた。某會社員南川春三は一昨年高等商業を出た秀才である。今の會社へは昨年春入つたのであるが、頭を抑える助役殿、何の學歴もない癖に、積み上げた經驗をかさに被せて、兎角に子供扱ひする。日頃からそれが忌々し

くつて、一度は何かて此報怨をしてやらうなどと考へてゐたか、家へ歸つて細君にそれを話すと、

「其樣短氣を起さないて我慢して下さいよ、何うせ職務となれば然う思ふやうにばかしも行かないてせうから。」

「萬一退かれても爲ようものなら、忽ち臺所に差響くと思つて、直ぐ斯う云ふ。

「けれども彼禿老爺實に癪に觸るからね。人を全然小僧のやうに心得てやがるんだ。」と活々した淸しい眼をパチ〳〵やる。

「ほゝゝ、そりや貴方若いからよ。後日だん〳〵出世なされば其樣人は皆引込んで了ひますわ。」

「其頃は元老で矢張り頭についてるのさ。」と投げ出したやうに云ふ。

「まあ若い中は修業だと思つて辛抱して下さいよ。誰ても皆一度は其樣時代があるんでせうから。」とハラ〳〵そして慰める。

「お前は直ぐ然う云ふけれど、毎日〳〵彼樣奴の傍てヘイ〳〵云つて、機械的に仕事をやつてるのかと思ふと、幾ら職業たつて餘り情ないぢやないか。加之に毎晩のやうに夜業までさせやがつて、自分こそ午頃からのこ〳〵出て來るから、夜の八時が九時にならうと何てもあるまいが、此方あ正直正當は丁と勤めてるんだからね、あゝ眞實に嫌になつて了ふ。」

ころりと仰向けになつて、さも不快さうに溜息を吐いた。細君は氣の毒らしく一寸良人の顏を見たが、此處は妻の役、何うても慰めて勵みをつけねばならぬと思つて、

「眞實にお察し爲ますわ。けれども其代り半期〳〵の賞與なども、他の方よりは割が好いつて云ふから、然う暴にならないで勤めて下さいよ。今こそ夫婦きりで費用も其樣てありませんけれどもだん〳〵子供ても出來て來ると、又小女の一人も使はなきやならないし、色々費りますからね、然うてせう?」と意味ありげにニッと笑つて、「私!然う思つて家で切々と働いてゐますの。」

春三は偶と細君の膨らんだお腹に目を止めた。

「然う〳〵、何時生れるんだつたつけな。」

と思ひ出したやうに云ふ。

「ほはゝゝ又忘れて……厭な方よ。」と笑ひ轉ける。

「眞實に何時さ?」

「十一月ぢやありませんか。」と少し紅くなつてお腹に

袂を當てる。

「然うか……」凝と考へ込んだ。

子供が出來ると云へば何となく嬉しい。今まで頭に往來してゐた禿老爺なんかすうつと何處かへ消えて、代りに可愛い嬰兒の顏が眼に浮ぶ。

「よし、働かう、活動の世の中だ、自暴自棄は薄志弱行の輩のする事だ。大にやる。」と力み返つて俄に起き直つた。細君は嬉しさうに莞爾して良人の手を握つた。其顏を見て春三は偶と、「子供が出來るのは果して幸福であるか否か」と云ふとを考へる。自分の身を削るやうな、發展の道を遮られるやうな心細い感じが起つた。



＊　＊　＊　＊　＊

會社の決算も濟んだ、總會も終る。各自に待ち搆へてゐる「賞與」も最う間がない。それ迄は春三も殊に忙しかつた。諦めながらも不平は矢張り不平として、若い血の漲る頭惱を刺激した。困憊と疲れ切つた躰に滿腔の不平を載せて、夜遲く歸るのであるが、偶には交際と云つて酒氣を帶びて來ることもある。然し細君は決してそれを咎めなかつた。妻あり子供があればこそ辛い勤めもして呉れる良人の心の中、それは到底家にゐて、やれ衣服が何うの、帶が如何のが流行るのと云つてる女風情の想像にも及ぶまい。あらゆる外界の刺激は皆妻の

優しい同情で慰められるのだもの、私だつて女だ、良人の僅つた一人の味方だ、閾を跨げば八方敵に圍まれてる最愛の良人！命にかけて大切な良人！あゝ何うして粗末に出來ようぞ。それのみか足らぬ私を何くれと慰勞つて下さる彼優しい、お心に對しても、私は身を粉にしても良人に捧げねばならぬ。と若い細君は誠に健氣なものであつた。

春三の方でもつく〴〵然う思つた。「えゝ退めて了へ」とまで思つた程の不平でも、家へ歸つて來ると、例の可愛い細君の媚ある一瞥に先づ鋒先を折られる、しな〴〵した優しい物腰で慰められると、何の事はない一日の疲勞も、玄關まで運んだ重い〴〵不滿も忽ち夢のやうに消えて了ふ。あゝ細君は實に自分の爲めには一種の興奮劑である、何時までも〴〵お互に斯う云ふ美しい平和な感情に醉うてゐたいものだ、女の色香は褪せ姿形は衰へても可い、彼媚と彼誠心とがあれば何の聊の不平など語るに足らぬ、僕は社會の大きな舞臺に立つて、後顧の憂ひなく活動も出來るのである、と思ふと、

「會社の不平なんかつまらない、口にするのは男の恥辱だと、猛々しく思ひ返した。

斯くて平和な家庭はいよ〴〵平和に、涼しい初夏の風は清く家の内外を吹き廻つてゐた。

いよ〴〵賞與が出て、豫期したよりも多かつたと見えて春三の顏には抑え切れぬ會心の笑みが溢れて、珍らしく午過ぎに歸つて來た。細君は待ち兼ねたと云ふ風で飛んで出ると、ポッケットを探つて「賞」と朱書した熨斗紙包を「それ」と渡す。一寸裏向けて見て、

「まあ此樣に澤山！」

美しい顏に愛嬌は溢れて、良人の後につきながら嬉然くする。

「此度は全躰に多かつたんだ、オヽ暑い。」

急いで洋服を脱ぐ。額から汗がタク〴〵流れる。

「眞氣に嬉しいこと。」と蹲踞んでヅボンを引張つてやると、足を伸して、

「女と云ふものは金さへ見せてゐりや喜んでるんだな。」と笑つてる。

「然うぢやありませんけれどねえ貴方、お誂へが今日出來て來ましたの、まあ見て下さいな。」と床の間から三つの箱を持つて來て蓋を脱る。アルパカの縞の洋服に、同じ品のコート、それに絹セルの單衣が整然とし

て現はれた。
「貴方、此樣に好く出來ましたよ、眞氣に此セルは思つたよりは好い柄てしたね。」
「うむ、是りや好い。」と春三は先づ洋服を引張り出して、「洒落てるなあ。」と自分で賞めてる。
「隨分ハイカラね。」
「お前のは尙ハイカラだ。」
二人は此樣事を云ひ合つてゐたが、直ぐに着て見る。
「貴方、似合つて？」
細君は早速後向いて見せる。
「待て〳〵、僕のから先きに見て吳れ！」
春三も姿見の前に立つて、一生懸命にネクタイを直してゐる。やがて向き直つて、
「イヨー素敵〳〵、中々好いよ、粹な細君だ。」と冷かす。
「貴方こそまあ氣取つてるわ。」と大得意。
何さま若い間の事である。二人は何時の間にか今日の賞與を懷中に納め、手を列ねて銀座街道を歩いてゐた。七月中旬の日光は強く煉瓦に照りつけて、途行く人の何れも活氣を帶びてゐる。財界に不景氣の聲は止まねど、流石は都會の一等地だけありて賑かなことだ。えゝと駈け過ぐる馬車、自働車、騷々しい電車の響きなど、いよ〳〵暑苦しく聞える。二人はぶら〳〵と步を運びながら、軒を並べた店頭の硝子戶に映る我新裝に思はず會心の笑みを浮べて顏見合はせた。
天賞堂の前へ來ると細君は偶と立停まつて見る。春三も傍へ寄つて來た。金時計て富士山を拵へてある。
「あれが一つあれば好いわね。」と見惚れて了つた。春三はニヤリと笑つて、
「懷と交換しようか。」と云ふ。
「眞逆。」と噴き出す。
「一寸した指環か何なら奢つてやるぜ。」
「然う！」最う夢中になつて？。
「欲しいのかへ？」
「えゝ、全く女の手に指環がないと淋しいのね。」
「僕は一向眞樣事を感じないがね。」
「だつて……」と甘へた嬌態をすると、
「よし、何うせ女は虛榮の化身だ。」
「斯う云ふてずん〳〵中へ入つて了つた。細君は怖々後についた。
もの丶三十分も經つと、細君の右の藥指にルビー

入の指環と、春三のネクタイにダイヤ？のピンがチカ〱光つて出て來た。

哀れ去年の秋から極寒の冬の霜凍る日も一日の欠勤なく、懷中の灰爐に冷たい手を溫めて、朝から晩まで忠實に勤め上げた大きな功勞は、瞬く隙に夫婦の身を飾る小さい石と化し去つた。

二人とも今身に纒うてゐる新調の服の代は、頓と氣附かぬらしい。で、殘り少なの「賞」を蟇口に捻ぢ込んで、角の洋食やで夕餉を濟まし、堪え難き一種の小さい誇りと滿足とに包まれて、灯ともし頃そよ〱する夕風に送られて家へ歸ると、洋服や奴、不在の間に丁と來て待つてゐる。

若い夫婦は青くなつて顏見合はせた。

姉

故　田中久子

一

電車を降りると、既う全然軒燈に火が入つて居た。工場歸りの女工が三四人盛んに喋り乍ら大きな洋傘を引ずつて行く背後から、私は急いで歩いて行つた。二三町行つて大きな溝へついて右へ曲り二つ目の角を折れると、其處はもう汚い、細い小路で暗い、溝板計りが白く浮いた如に見えて居る。一、二、三、四、五軒目が姉の家である、軒に下つた繩暖簾がゆら〱風に動いて、店の中には薄暗い洋燈が細く點つて居る。其暗い隅の方で子供を負つた背中を戸外の方に向け乍ら中腰に何かして居るのが姉さんであつた。

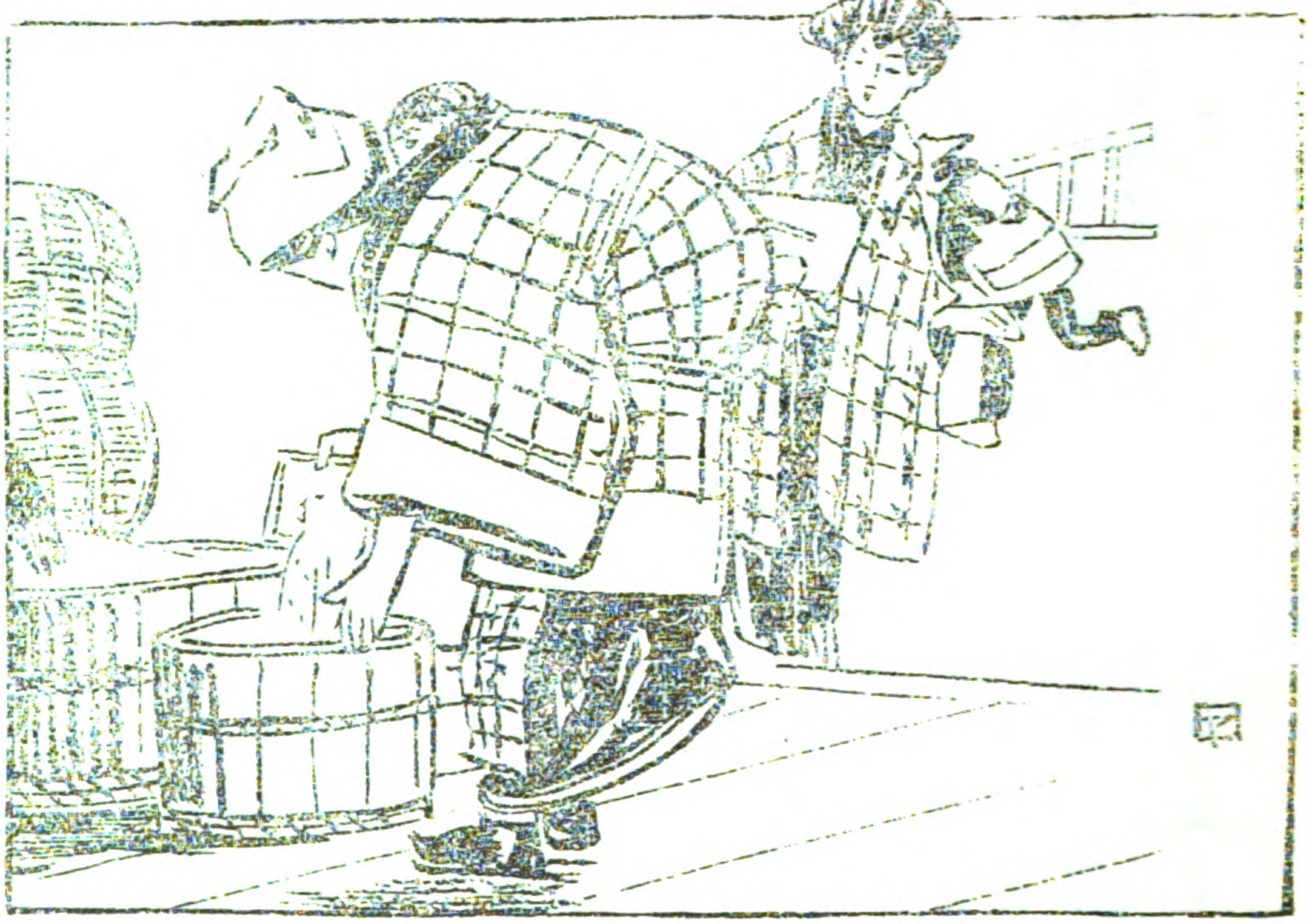
「姉樣。」と呼んで見たけれど、聞え無いかして依然先の儘精々と何かして居るので、見て居ると直ぐ足元の小判形の桶へお米を斗つて入れて居るのであつた。桝へ入れたお米を圓い棒でグイとこいて桶の中へざくりとあける。夫を手早く馴れ切つた風にするので二個の桶は直きに滿ちて了つた。其桶を二つ重ねた儘胸へ抱

え乍ら此方へ向いて出て來た時、私の居るのに氣が付いて喫驚した樣に立止まつた。

「まあ淸ちやん！」と直ぐ其桶を其儘足元へ置くと傍へ寄つて來て、もう來まいと思つて居たの早くても來るかと思つてたに。」と手を執る計りにする。

「えゝ、私も朝の心算て居たのでしたけれど‥‥。」と言ひ〳〵姉さんの後から隨いて上つた。「足袋が汚れるよ、裾を抓むで。」等と、一々回顧つては白い粉の着くのを氣にして吳れる。

店と奧との堺には、細かい硝子のはまつて居る格子障子が有つて一尺計り板の



間より高く成つて居るので、姉さんは其處から身體を延ばして火鉢の上の洋燈の心を出し乍ら、「一寸濟まないけど、直ぐ來るからと。」又店へ出て行つた。

部屋は六疊、南が少し緣に成つて居る丈けて、東は店西は高い半間の窓に成つて居る何時來ても暗い家だ。室の中には、煤ぼけた黑いお佛壇が壁に寄せられて有つて、其傍には脫ぎ捨の子供の衣服が丸めてあり、其上へ寐蚊帳の疊まれたのが置いてある。火鉢の傍には黑く煤けてカンの脫れた簞笥が一棹、一番下の抽斗丈け眞白に新らしい木が入つて居る、障子の穴は大きいから、小さいのから一々堪念に桔梗やら櫻やら、形狀に切

つた紙で塞がれてあつて、壁の高い所に鬼の念佛の繪が張つてある。是は夜泣のお呪咀だと言ふ、姉さんが上つて來た。ぐる〳〵に束ねた髮も背後へぐつたり下つて、涎を長く垂らしていぎたなく眠つて居る背の子の顏へ網の目の如に懸つて居る。そして紺しぼりの昆布の如に成つたのを短く着て、下から眞紅に肥えた足を二本不樣に出して居る姿。餘り構は無すぎる其姿に私は只忙然して居た。

「如何も働くと暑い事、」と憂さ想に襟元の後れ毛を撫で上げ乍ら、「先刻私の言つた聲聞え無かつて。」と私の姿を夫と無しにちらりと見る。

「あら知ませんでしたわ、何有。」「何有ねお父樣からお便りが有るかいつて言つたの。」「はあ此節は御丈夫よ、お手紙はちよい〳〵有りますの。」「然う」と言ふと調子を變えて、「如何も眞實に暑い。」と口を歪めて大げさな風をし乍ら小倉のくけ紐の結目を引いた。と、直ぐ手を背後へ廻すと、背の子はもう何の事も無く腋の下から膝へ移されて居た。姉さんは性急想に胸を思ふ樣肌けて脹り切つた大きな乳房を子供の顏一杯に押し付ける樣に口へ入れてやつた。子供は又直ぐと眠る。

「何だつてね、お邸が故郷へお退けに成るんだつてね。」と今度は鐵瓶を下した、灰の中を掻き廻し乍ら言つた。

「えゝ、矢張お小間使ひをして被居た方でね、お故國へお供する方も有るんですけど。」「何故行か無いの、淸、お淸樣は。」一寸上眼をして火を吹き乍らも、何處か私の顏色を探らうとする樣な風をする。そして姉さん自身に言つてる言葉に身が入つて居無いと言つた容好、

「お父樣が不可つて被仰るんだらう、もう僅た一人の後繼だものね。」「否然うぢや無いんですの、父さんが二三日中に上京するから、夫迄待てつて言ふ電報なんですから……」「お父樣が。」と顏を見て嫣乎したが「必然彼お話でせう、然うだよ、必然。」と一人で合點をし乍ら炭取を引寄せた。私は默つて傍を向いた。

散々炭取の中で炭の轉がる音をさせ乍ら、「如何して又叔母さんの所をやめて斯麽所へお來でなの、えお淸さん。」と子供を重相に右の手へ移した。私が默つて居ると、「食物だつてどうせ宜い物は上げられないし、家は此通り汚ないし、……そら斯麽に蚊が居るわね。」とピタッと自分の胸の上で眞紅に血を吸つて居る蚊を叩いた。「ね烈いんだよ、蚊が。」と軒を見上げて、

隣から彼麼に燻して來るんだもの皆家へ追い込まれ了う、房や。」と障子の硝子から店を覗いて、も一度優しく、「房や。」と呼ぶ。十三四歳の色の白い小僧が、手に擴げたまゝの古ぼけた昔の小說本らしいのを持つて障子を開けた。

「濟まないけどねえ、薪の燃えさしを一つ持つて來てお吳れな。」「え。」

緣の軒からは直ぐ眼前の隣の窓から出る白い煙が、漾々と入つて來る。蚊が私の腕へ止つて。耳の傍でブン〳〵鳴く、小僧の持つて來た薪を火へ埋め乍ら、「眞實に憎いつたら無い、毎晩いぶしをするもんだから却つて家ぢやあ蚊が多く成つて困つ了ふ。

小僧は聲を潛めて、「お主婦さん、お隣のはねえ本當の蚊いぶしてすよ、だから蚊が直ぐと死んぢまはあ、ねえ。」「あゝ。」小僧は其所へ置いた先刻の本を持つて店へ出て行く。「ほゝ其麼物が分るかい、三勝だらう。」「へえ。」「ほゝ面白い子。」と姉さんは嬉し相に笑つた。そしてパタ〳〵と自暴に團扇で煙をあほいだ。

それから姉さんは臺所へ立つて戸棚をガタ〳〵開ける音をさせて居たが、蒸てふかした薩摩芋を三本計り持つて來た。「斯麼物喰べるかしら。」と言ひ乍ら五德へ火箸を二本渡すと、其上へ載せかけて、「え、麼さうか。」と一寸私の顔を見る。「結構ですの。」と言ふと、「さう、ぢやあ三つあるから恰ど宜い。」とニコ〳〵し乍ら、三個を順よく並べて載せた。そしてギゴチ無さ相に片手に子供を抱いた儘、片手で蒲團を敷いて眠つて居る子を寐かすと蚊帳を冠せた。

「さ、漸つと樂に成つた。」と元の座へ座つて、お芋を彼方此方返し乍ら、「房や。」又呼ぶ。「房やお出でもう燒けたやうだよ、お淸さん一つお食りなさい。」

其處へ小僧が短い衣物で膝の出るのを氣にし乍ら、キチンと座つた。「厭に固く成つたね、さ僅た一つ。」「へえ。」と小僧は一退り下り乍らお叩頭して、姉さんの影で私には見え無い樣にする。三人とも一つ宛喰べた。

「漸つと蚊が居無く成つた樣だね。」と姉さんは隣の窓を見乍ら、「如何したら金物屋さんは、彼して徹宵いぶして居るんだらうね。」「旦那が大の蚊嫌いなんてよつて。」「さうかい、金滿家は異うもんだね。」

それからは取り止めも無い談話で十時が鳴ると、早いが寢ようと言ふ事に成つた。姉さんは小僧を相手にさつさと戸を下す、棚を片付ける、男子の樣にヅカヅ

力と働いて居た。

六疊の部屋一杯に蚊帳を釣つて一番隅に私、夫から子供――たつちやんと言ふ女の子――と次に姉さん、店近くには小僧が寢て却々窮屈だ。店も眞暗、奥も眞暗只姉さんの枕頭の縁へ小さな豆洋燈を照してある計りである。私は何だか寢られ無い儘に、偶と種々姉さんに就いて考えた。

二

姉さんの年齢は最う三十歳を五つか六つ出て居るかも知れ無い、續いて二人の男の子を脳膜炎で取られてから三番目に出來たのがたつちやんである。性來の大白痴て、頭部ばかり無闇に大きく身體が夫に釣合は無い。皮膚の色の濁つた肉付きの惡い乾びた如な脾弱な子て、五歳に成る今だに口も碌には利け無いとやらて何時もだまあつて居る。其癖氣に入ら無い事をすると突然ヒッヒと火の付く樣に泣き出す、そしたらもう何時迄ても泣き止まずに、グジリ〱と小聲に思ひ切り惡く泣きじやくつて居るといふ話てあつた。夫ても姉さんは又特別に此子を可愛がる。不幸に生れついた子、父親の無い子と言つてはいつも〱頰摺りして可愛がる。どんな忙しい時暑い時でも離した事無しに背中へピッタリ十文字に背負ひつけたまゝ、使走りから洗濯から何から何迄して廻る。たつちやんのお父樣が一昨年死んでから此方、姉さんは自分の身體よりも尙たつちやんの方を勞つてやると言ふ話である。

一躰私の家は水戸の在ては有名な舊家て祖父の時代から可成の財産も有つたらしい。此節は父樣の恩給丈て、たつぷり暮して行ける樣な家だのに、何故姉さんは斯麼家に嫁いたのかと、私は每々不思議に思つて居た。まだ家に居た時分よく緣て母さんと裁縫をし乍ら聞いて見た。雖然母さんは妙に姉さんの事と成ると一層難かしい厭な顏をなすつて、「皆緣なんだよ、緣は何とかつていろは加留多でもいふてせう。」と大抵此位で跡は何故か聽かして下さら無かつた。

ても、髯の白い優しい父樣は、時々お夕飯後等に陰て私に姉さんへ手紙を書けと被仰つた。「兄樣なんぞにも默つてるんだよ。」と言つて、私が敎えられた儘の文句を書き上げて了ふのを待つて御自分てそれを入れにお出掛なさる。そして其歸途には何か必然買つて來て下さるのて、母樣にも話さず賴まれるのを樂しみにして居た事もあつた。そんなだから家への出入も殆んど

無く、一昨年兄樣が亡く成つた時は一週間計り滯在したけれど、其前の二三年は一年に一度御年始旁々に來る計りて、其最つと前はてんて來た事は無かつたと思ふ。雖然私は何故か姉樣が戀しい。夜等時々思ひ出しては其寫眞を出して見る。夫は大きな髷を重さうに冠つて、少し頭部を傾げたおかあさんの樣なので、厚いふきを二枚重ねて手にお扇子を持つて居る。年は漸つと八歲か九歲位、踊のおさらいの時らしいので、傍には紋付の羽織を着た丸髷の人が立つて居た。此人は何人と誰かに訊いたら、安ちやんのお母樣と言つた事が有つたけれど私には今だに朦朧して其人が分らずに居る。

よく夫を見て東京の姉さんが戀しいと思つた事が有つた。恰ど四年以前私は東京の〇〇樣のお邸へお行儀見習の爲お小間使に上る事に成つた。夫から此方年に二度位宛は密つと逢ひに來て居たので有つたが、今度お邸がお國下りと成つてから、父樣が出て來るのを待つて居る間、神田の叔父樣の家よりも却つて此家の方が懷かしいので故々二三日逗めて貰ふ事にして來たのてあつた、何だか深い事情を知つて居る叔母樣は「其代り故鄉へは秘密だからね。」と笑ひ乍ら、今日私が來る時門迄送つて下すつたつけ。

三

翌日お晝飯の以前に其叔母樣から葉書が屆いた。

脂肪の多い鰤の切身を火鉢で燒き乍ら、其油が火に落ちてジー〳〵言ひ乍ら立ち登る白い煙に目をそばめて、姉さんは「何え。」ときよと〳〵し乍ら訊く。「否ねお母樣が今日上京から、四時頃迄に來ておくれといふだけなんてのす。」と表を返して姉さんの傍へ置いた。「お母さん？」と喫驚した顏て、子供を抱いただらしの無い膝を乘り出し乍ら其端書の裏表を一應返して見て、「父樣だつたら宜いに。」と小聲て、「必然母樣が出さないんだよ。」と、又沈着か無い風に火箸て切味を動かした。ジー〳〵と煙が低い軒を盛んに舞つて出る。姉さんは急に默り込んて了つた。お魚を返しては燒けたのをお皿へのせて又新らしいのを載せた。そして子供を一寸覗くと何時か眼を開いて居たので、「おやおや。」と頰摺りして、「いつ眼ん眼覺まして、えおた。」おたとは、たつちやんが自分て自分を呼ぶ言葉だ。何故かおたと言ふ。

おたさへ起きれば姉さんはもう大抵の事は措いて、

おた〳〵と夢中になつて了ふ。「おつぱいか。」と昨日の様に胸を押肌けたけれど、たつちやんは何の返辭もし無い。「ぢやあ何が宜かろ、さう〳〵鰹節で飯喰べよか、ねえ？」夫でもたつちやんは默つて居る。小さな子に似氣無い曇つた大きい眼をパチ〳〵さして、只母親の顏計りを視守つて居る。

　姉さんはもう夢中だ。確然膝へ抱いて、「魚が宜いかねえちよれが宜い、此魚ねえと。」片手で叉魚を弄るとたつちやんは突如、「おたやあ。」とけたゝましい聲でもうべそを作つて居る。姉は火箸を放り出して、泣かすまいと様に身體を左右へ振立作ら、「宜い子〳〵おたは宜い子、ねえ、おたは宜い子、自分の頰を子の頰へ付けて斯う言ふと、夫でも子は宜い鹽梅に泣き出しもし無かつた。がまだべそをかいて居る。「宜い子ね。宜い子、さあおたと何を喰べよう、カッカが宜いね、ねえ房やにカッカ〳〵をして貰つてね。」たつちやんは漸つと點頭をした。「ぢや房や、鰹節をカッカ〳〵してお呉れよ。」「へえ。」と小僧は臺所の障子から鰹節を搔く道具を持て入つて來て。そして火鉢の蔭で私に見え無い様にかき始める。夫が濟むと御飯に成つた。

　風の無い日の、低い軒にはまだ煙がまつはり着いてもや〳〵緩く動いて居るのへ、急にカッと日が照つた縁近くへ置かれた足の無いお膳で私だけは別、子供が飜して汚いからと言ふ姉さんの心づけである。姉さんはおたと小僧と三人低い箱の如なお膳で始めた。たつちやんが漸つと持つたお茶椀から御飯をぼろ〳〵と飜すと、姉さんと房やは慌てゝお箸を放り出して飜れたものを追いかける。小さなお膳に三人の頭部が突き合ふ迄に成つて、世の中に此三人きり外には何人も交へられない塊だ、と言つた風である。房が笑へば姉さんも笑つて、房の落した豆は姉さんが拾ふ。そしてたつちやんは房の口から嚙むだものを移して貰ふと言ふ有様、全たく固い一つの塊とより思はれ無い。

　姉さんは御飯を濟ますと、忙し相に火鉢の前で立膝で煙草を一二服とん〳〵とはたいて、直ぐたつちやんを昨日の様に十文字に負つた。依然昨日の儘の短い衣服夫でも髮だけは今朝私がとかして上げたので、油氣は無い乍らキチンとした櫛卷に成つて居る。そして臺所へ出て行つた。

　御飯の跡始末と見えて瀨戸物の音がする。今見ると南の方の縁からやつと一坪の空地が有つて、其先は直ぐ隣の窓に成つて居る。其羽目と此家の塀――と言つ

ても些の目隠だけて、下は腰を折れば潜れる位明いて居る——その間が一人辛つと通れる位の路に成つて居るので、バケツの音がしたと思ふと、行成房やが塀の下を潜つて入つて來た。膝ぎりの馬乘りのあいた筒袖を着て居る。バケツを下へ置いて暫時蹲むで何か見て居たが、「お主婦さん〳〵、朝顔が三十二本に成りましたよ。」と頓興に怒鳴つた。「やあ三十二本、隨分殖えたねえねえお主婦さん。」立上つて回顧いたが、姉さんは居ず、私の姿を見ると慌てゝ又蹲むで了つたそしてソ〳〵バケツの水を鉢へやつて、匆惶塀の下へ馳け拔けて行つて了つた。私は笑ひ乍ら行つて見ると、蔓の二三寸延びたのや、葉の三つ計り出たのや辛つと土を出た計りの二葉のやヅク〳〵、地面を埋めて眞青に生えて居る隅には、紫蘇が四五寸延びて居る。見て居る内いつか姉さんが背後に立つて居た。

「朝顏かい、碌な〻あ出來やし無いんだけど、毎年房やが丹精をするもんだからね……おや〳〵又殖えたやうだよ。」と近眼らしく椽から顔を伸し出す。「今ね小僧さんが三十二本に成つたつて言つてましたつけ。」

「三十二本……殖えたねえ、さうかいと感心し切つた樣な聲を出して、それから押入を開けた、中へ頭部を突つ込むで、「お清さん、濟ま無いけれど一寸洗濯を始めるからねえ、どうも汚れ物が溜つてるもんだから。」「え〻〳〵御緩くり。」

姉さんはおむつのやうなのを幾許も抱えて、「退屈したら此所ン中に書が有るから……ホ〻、斯麼物は讀むまいね。」と一冊古い草双紙を出して、一寸表紙を見せて直ぐ亦仕舞い込むだ。「否、拜見しますわ。」

「さう、ぢや出して御覧、眞實に濟ま無いけど……」

姉さんは臺所へ立つて行つた。

四

洗濯物を一々乾し終えてから姉樣は火鉢の傍へ來た背中のたつちやんを下すと小鼻の汗を汚れた袂で拭き乍ら、「今日は亦、何て暑いんだらう。」と言ひ〳〵戸外を見た。裏通の二階家に限られた空の一所にキラ〳〵した雲が漂よつて居る。

私も其方に眼をやり乍ら、「眞とにね、お洗濯なんぞすると餘計てせう。」と姉さんを見た。「あゝ。」と抱いて居るたつちやんを覗き込んて、「だけど汝が溫順だからね。」と言ふ。「眞とにお大抵ぢや無いわね。」と小聲て言つて、私は見かけの草双紙の頁を繰つた。歌川の畫い

た極彩色の若い男と女との繪が有つて、「田舍源氏」と書いた字がもう手摺れがして垢染みて居る。「面白かあるまいね、貴女なんぞにや。」「否。」と私は俯向いた儘應えた。それから暫時談が斷えると、私は心の中ではもじ〳〵し乍らも何故か談し出せ無いで只無意味に頁を繰つて居た。

「さうすると、愈々お清さんも定まるんだね。」と姉さんは不意につかぬ事を言ひ出したので、私が一寸慌てて顏を揚げると、「私も出來る事なら見いけれどね綿帽子を冠つて俥に搖られ乍ら行く所をさ。」と嫣乎する。私は思はずポッと成つて「まあ厭な姉さん。」と下を向くと、「だけど餘程前に氣を注け無いぢやね、私見たい事には成ら無いにしても……」と語尾がしんみりして居る。私は何とも返辭が出來無かつた。

「おかみさん。」と房やが障子の腰硝子から中を覗いて一通りの煎餅屋さんへ屆けて來ませうかね。」と頓興な顏をして居る。「然うだつたつけね、御苦勞だけどぢやあ……。」と店へ立つて行つてザク〳〵お米を計つて居たが、軈て其音が止むと房やはそゝくさ出て行つた。

三時少し廻つた時分、私は兎に角暇乞して出た。房やが急いで直して呉れた下駄を穿いて爪先をトンと地に突くと、送つて出て呉れた姉さんが、「談の模樣はどんなでも、も一度來て呉れるんだらうね。」と言ふ。「えゝ、是非も一度上りますわ。」「さうしとくれよ、もう身體が定つちまつちあさう滅多には來られ無いし。」と一寸語を切つて、「それにお父樣にも秘密で言傳したい事があるし。」

二三歩行き掛けるとたつちやんのけたゝましく泣く聲がして、續いて姉さんのあやす聲と、房やの「ばあ」と言ふ聲がした、私が何と無く懷かしく成つて偶と回顧いた時は、姉さんの白い顏がうす暗い店の奥に仄のり見えて、房やの角帶をちよつきり結むだ姿が入口の所に半分日を浴びて此方を見て居た。私は思はず嫣乎した。そして寂しい心を抱いて電車の音の賑やかな方へと俯向き乍ら行つた。



總評言

▲「新作家」全躰を總括して此處に一言を卷末に添へてみませう。

▲寄稿中最も多く集つたのは美文でした、最も少かつたのは脚本でした、美文は平素から多いのですから當然でせう、成蹟も美文が最も好いやうです、小説は數に於ては相當に集りましたけれど、殊に傑出したものは四五篇でした。

▲諸孃の中には自ら得意とする處が未だはつきりと分らない爲に、寧ろ勞多きものよりも、勞少きもので優勝の地位を占めやうと企てた方があるらしく、其證據には俳句が大變盛んに集りました。俳句は勞力少くして作り易いからでせう。而かも傑作は甚だ乏しうございました。

▲俳句に次いで多かつたのは和歌です、和歌は殆んど新派でした、而かも成蹟は上出來でした、今回のやうな方法で募ると和歌などの才のある人は直き知れます一首や二首では眞の詩才を發揮する事がむつかしいやうですけれど、十首以上になると大抵其人のよみ口の上手下手が判斷出來ます、大抵二十首宛來て居たのですが、つまらぬ作は削除しました。それにしも各の和歌を通覽するに女子は確かに和歌の才分を持つてゐることも知れますし、また勉强次第では和歌の名家ともなれるやうに思はれます、女子の感情のゆらぎが、和歌の形なり調なりに何處か合致するのでせう。

▲それにしても心細く思つたのは、新體詩の少いことでした、散文詩、口語詩の方は未だしも集つた方ですが、文語詩は甚だ少數でした、最も希望ある詩壇に手を着ける人の少いのは何う云ふ理由でせう、詩はむづかしいものと云ふ踏習があるからでせうか、準備智識が足りない所爲でせうか、何うもそれらも確に一つの原因でせう。感想は確に詩歌的、情緒的なのですが、皆其れを散文にするやうです、散文にしても差支はありませんが、詩にすれば更に情緒のゆらぎが、其まゝに傳へられるのです、猶詳しくは此處に云ふ餘地もありませんけれど、兎に角諸孃は今少し詩に對しても同情と興味を持たねばなりません。

▲脚本の作れないのは當然だと思ひます、此も心掛次第では出來ないことはないでせうが、先づ餘程困難なことでせう。

▲概して眞面目な作物の集つたのは何より編者の滿足するところてす。懸賞や名聲にばかり憧憬て輕佻浮薄な、根抵の無い、模倣ばかりて出來たやうな作の殆んど皆無てあつたのは欣ばしい現象てす。諸孃は眞面目な努力を一意其作物の上に注がれたればこそ、此の如く純潔な冊子が出來上がつたのてす。

▲日課表は作物と對照して其人の生活狀態の一般を知らしめやうと云ふ方針て、餘興的に募りましたが、極く少數の二三人を除いては皆之を添へてありました、最も仔細あつて紙上に出すことの出來なかつたのもありますけれど、大抵は揭出しました、多少の參照にはなつたらうと思ひます、猶ほ諸孃は極めて正直に書式を守られたのて、單調になつた嫌ひはありますけれど然う又突飛な生活をしてゐる人もありますまいから、之が僞らない實現てあらうと思ひます。

▲附錄として新進閨秀作家の近作を載せました、此れとて所謂大家てもなければ、現代知名の閨秀てもありません、これから文藝に進んて行かうと云ふ謂はゞ諸孃の上級生なんてす、だから以前からの本誌を御覽になつてゐる方は多くお馴染の顏ばかりてす、太田さん、山田さん、近くは水野仙子として多少一般に注意されてゐる服部さん、若い奥樣としては加藤（もとの高仲）さん、永代（もとの岡田）さんのお二人があります、尾島さんは新しく吾黨に加はつて文壇に顏を出さうと云ふ方、殊に一言を要すべきは故田中久子さんの遺稿てす、此前『河岸の家』の時に一寸言て置きました通り此の『姉』こそ作物に活きたる久子さんとの永劫のお別れ作てす、もう永遠に、然う全く永遠に久子さんの名を以て本誌上に其面影の現れる時はないのてす。

▲桃咲き、櫻咲き、菜の花咲き、連翹咲いて、三春の行樂あわたゞしく過ぎんとする頃『新作家』の編輯を終る、此冊子が諸孃の机の上にのぼる時は、落花既に草に埋れて、若葉の匂ひ空を籠め、綠すが〳〵しき暮春の天地に人の心も鎭まるてせう。讀みたまへ、而して味ひたまへ、何物かの暗示を諸孃の胸に得たまはゞ、その感情のさめやらぬうち、描きたまへ、歌ひたまへ、編者は更に第三增刊の爲に諸孃の勇氣ある試みと、華やかなる努力を請ふて已まないのてす（記者）

雜報

○櫻ばかりに壓せられた都の春の空も、花鎭めの頃の訪づれに、檜の紅名殘無く地に委して、人の心も落着いた心地がします。と共に、昨日までは、唯うつすりと煙つた樣な郊外の樹が、槐と云はず檜と云はず、はた銀杏なぞが、一夜のうちに新綠の衣をつけて香ぐはしき匂ひをあふすかの樣に思はれます、幾回の膏雨にそゝがれた郊原の草は日ましに肥え、苜蓿の花白く、紫雲英さては櫻草の紅に映じ、春はつくる樣にも思へません。

○櫻散り山吹衰へ、椿も元の陰鬱にかへると、躑躅の花が咲き出す、色は白も紫もあるが、多くは紅い、それも自桑(やけ)に紅く、火を吐く樣です、それと共に牡丹、藤など春の殿をして居て、大久保、日比谷、又向島龜戸のわたりに紫の深張傘の往來が盛んであります。新樹けぶる山の手の朝など、金魚賣りの聲や、苗賣りの聲が、若葉の生籬〳〵を縫つて流し廻つて居る、これも初夏の風物の趣を添えるのであります。

○月の四日から、靖國神社の祭禮がありました、折柄雨勝ちの天氣でしたが、例に依り煙花も颺がり、武者行列も出た。端午のお節句もこちらは新暦でもう濟みました、甍の波に泳いで居た鯉も取り入れられた。

○花咲いて散り、葉繭えて黑む、梅の實や櫻ん坊を見ると、早もこんなになつたかと思はれる、洵に感慨多き頃です、雨氣を含んだ空合に、新樹の森の奧では時鳥も啼くさうですが、それは聞かれないまでも、寄宿舍樓上蛙の聲に、故郷の卯の花垣を偲ぶ多感の方もありませう、既に更衣輕く家庭に働いて居る方もありませう。幸に健在なれ。

明治四十二年五月十二日印刷
明治四十二年五月十五日發行

本號限り

定價金貳拾錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十二番地 女子文壇社
電話(本局六〇七番)

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

明治四十二年五月十五日増刊
（毎月一回一日發行）

女子文壇

臨時増刊 新作家

（第五年第七號）

（株式會社秀英舍印刷）